

武蔵国分寺遺跡調査会年報Ⅱ

昭和51～53年度 寺地・僧寺々域確認調査

第1分冊

1984年3月

武蔵国分寺遺跡調査会
国分寺市教育委員会

序 文

武蔵国分寺跡の広域調査は、早いもので本年11月をもって満10年を迎えることになりました。この間迂遠曲折はありましたが、滝口宏調査団長を中心に進められています地道な調査・研究の積み重ねによって、調査会発足以前とは比較にならないほど武蔵国分寺の全容が明らかになってきております。これらの調査成果につきましては、「武蔵国分寺遺跡調査概報」あるいは「武蔵国分寺遺跡調査会年報」などを通じて、広く公にしてきたところであります。

本書は、現在も進行中の寺域確認調査の内、昭和51～53年度に実施された国分寺々城および寺地の調査成果をまとめたものでありますが、本書を通じて武蔵国分寺跡に対する理解を深められ、今後ともなお一層の御指導と御助言をいただければ幸いです。

終りに、永年にわたり発掘調査に御協力をいただいている地主の方々を初めとする多くの関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

昭和59年3月

調査会長 星 野 亮 勝

例 言

1. 本書は、東京都国分寺市西元町に所在する武蔵国分寺跡において昭和48年以来実施されている調査の内、昭和51～53年度に国庫補助事業として実施した寺地および僧寺々域確認調査の成果をまとめたものである。各年度毎の調査地を記すと下記のとおりである。

年度	調査地	目的	調査地番	土地所有者	調査担当調査員
51	28次	寺域確認	西元町2丁目1642	■■■■■	早川
	29次	〃	西元町3丁目2135-1	■■■■■	有吉・西脇
	30次	〃	西元町3丁目2106-1	国分寺市	〃 〃
	31次	〃	西元町3丁目2004-27	■■■■■	西脇・行田・浅野
	33次 B地区	〃	西元町1丁目1627	宗教法人国分寺	早川・上村
52	32次	〃	東元町3丁目2446-1	■■■■■	〃 〃
	33次 A地区	〃	西元町1丁目1627	宗教法人国分寺	〃 〃
	41次	〃	西元町2丁目2550-4	〃	〃 〃
	42次 A地区	〃	西元町2丁目2545-1	■■■■■	西脇・上村
	42次 B地区	個人宅造	西元町2丁目2545-1	〃	早川・上村・浅野
	43次	寺域確認	東元町3丁目2446-2	リオン株式会社	西脇
	44次	〃	西元町3丁目2088	■■■■■	早川・行田
	48次	個人宅造	西元町2丁目2545-10-13	■■■■■	早川・上村・行田
53	50次	〃	東元町4丁目1883-22・23	■■■■■	福田・浅野
	78次	〃	西元町3丁目1902-5	■■■■■	有吉
	86次	〃	西元町3丁目1921	■■■■■	上村

2. 本書は、「武蔵国分寺遺跡調査会年報Ⅱ」の第1分冊（本文編）にあたるが、既刊の第2分冊（図版編）に掲載できなかった第28・29・86次調査の資料も合わせて掲載した。
3. 遺構、遺物に関する凡例は第2分冊に準ずるが、本文中で述べる別表、図面、図版の各番号は、第1分冊と第2分冊を区別するため各々番号の頭に「Ⅰ」・「Ⅱ」を冠した。例えば、「図面Ⅰ-2」とあれば、第1分冊の図面2を指す。
4. 本書の執筆・編集は、滝口宏・永峯光一・大川清・坂詰秀一の監修のもとに、有吉重蔵・上村昌男・高林（旧姓高橋）和恵の各調査員が分担した。執筆分担は下記のとおりである。
- 有吉重蔵 第1章、第2章Ⅰ-4・Ⅱ-5、第3・4章
- 上村昌男 第2章Ⅰ-1～3・Ⅱ-1～4
- 高林和恵 別表1・2解説
5. 出土遺物の整理の内、拓本・実測・トレースは木村初江・草野夏美・田中浩身・原（旧姓小出）美雪・鈴木信子、写真撮影は小峰ミヨ子が主に分担し、その他の作業については下記に記す全員があたった。
6. 報告書作成の過程で次の方々に御教示・御協力を賜った。厚く御礼申し上げます。

岡崎完樹・河野一也・北原実徳・斉藤孝正・西脇俊郎・服部敬史・早川泉・福田健司・守屋雅史・山口辰一・山下守昭・雪田孝

7. 発掘調査ならびに整理作業に参加、協力いただいた方々は下記のとおりである。記して感謝の意を表したい。

発掘調査地土地所有者

■■■■・■■■■・■■■■・宗教法人国分寺・■■■■・■■■■・■■■■・■■■■
■■・■■■■・地主会・リオン株式会社

発掘

金子正典・河内公夫・岸本章・桐生直彦・剣持和夫・小堺俊一・高麗（旧姓小日向）正・清水隆博・成田昭・原伸一郎・南川交伸

整理

井田淑子・岡ミサオ・梅沢節子・鎌田育美・川岸みつ子・神田礼子・木村タエ子・小林幸江・斉藤さだ子・榎原優子・篠宮良重・須藤洋子・武田満江・竹之内晶子・竹俣美砂子・永沢昭子・中村順子・馬上久美子・山口啓子・若林雅子

本文目次

例 文
例 言

第1章 序 章

I 調査経過

- 1. 調査会設立後の経過…………… 1
- 2. 昭和51年度の調査…………… 1
- 3. 昭和52年度の調査…………… 4
- 4. 昭和53年度の調査…………… 5

II 遺跡の位置と環境…………… 7

第2章 寺地の調査

I 寺地北辺部

- 1. 第41次調査…………… 9
 - 検出遺構
 - 出土遺物
- 2. 第42次調査…………… 10
 - 検出遺構
 - 出土遺物
- 3. 第48次調査…………… 12
 - 検出遺構
 - 出土遺物
- 4. 小 結…………… 14

II 寺地南辺部

- 1. 第44次調査…………… 16
 - 検出遺構
 - 出土遺物
- 2. 第50次調査…………… 17
 - 検出遺構
 - 出土遺物
- 3. 第78次調査…………… 18
 - 検出遺構
 - 出土遺物
- 4. 第86次調査…………… 18
 - 検出遺構

出土遺物	
5. 小 結	19
第3章 僧寺々域の調査	
I 寺域南西・南東・北東隅部	
1. 第29次調査	20
検出遺構	
出土遺物	
2. 第31次調査	22
検出遺構	
出土遺物	
3. 第43次調査	22
検出遺構	
出土遺物	
4. 小 結	23
II 寺域東辺部	
1. 第32次調査	25
検出遺構	
出土遺物	
2. 小 結	25
III 寺域西辺部	
1. 第28次調査	26
検出遺構	
出土遺物	
2. 小 結	29
IV 寺域北辺部	
1. 第33次調査	31
検出遺構	
出土遺物	
2. 小 結	32
V 寺域南辺部	
1. 第30次調査	33
検出遺構	
出土遺物	
2. 小 結	34
第4章 ま と め	35

挿 図 目 次

第1図	調査位置図 (1/5000)	3
第2図	調査地標準層序	7

表 目 次

第1表	調査工程表	6
-----	-------------	---

別 表 目 次

別表1	検出遺構一覧	39
別表2	出土遺物一覧	43

図 面 目 次

図面1	第28次調査	遺構配置図, S D 23 溝跡実測図
図面2	第28次調査	遺構配置図, S K 163 土坑実測図
図面3	第29次調査	遺構配置図, S K 165・166 土坑実測図
図面4	第29次調査	S D 23 溝跡実測図
図面5	第86次調査	遺構配置図, S D 17 溝跡実測図
図面6	第28次調査	S B 39 掘立柱建物跡出土遺物
図面7	第28次調査	S B 39 掘立柱建物跡出土遺物
図面8	第28次調査	S B 39 掘立柱建物跡出土遺物
図面9	第29次調査	S B 39 掘立柱建物跡出土遺物
図面10	第28次調査	S B 39 掘立柱建物跡出土遺物
図面11	第28次調査	S B 39 掘立柱建物跡出土遺物
図面12	第28次調査	S B 39 掘立柱建物跡出土遺物
図面13	第28次調査	S B 39 掘立柱建物跡出土遺物
図面14	第28次調査	S D 23 溝跡出土遺物
図面15	第28次調査	S D 23 溝跡出土遺物
図面16	第28次調査	S D 23 溝跡出土遺物
図面17	第28次調査	S K 163 土坑出土遺物
図面18	第28次調査	S K 163 土坑出土遺物
図面19	第28次調査	表土出土遺物
図面20	第28次調査	表土出土遺物
図面21	第28次調査	表土出土遺物
図面22	第28次調査	表土出土遺物
図面23	第28次調査	表土出土遺物
図面24	第28次調査	表土出土遺物
図面25	第28次調査	表土出土遺物
図面26	第28次調査	表土出土遺物

目 次

図面27	第28次調査	第ⅡA層（灰茶褐色土）出土遺物
図面28	第28次調査	第ⅡA層（灰茶褐色土）出土遺物
図面29	第28次調査	第ⅡA層（灰茶褐色土）出土遺物
図面30	第28次調査	第ⅡA層（灰茶褐色土）出土遺物
図面31	第28次調査	第ⅡA層（灰茶褐色土）出土遺物
図面32	第28次調査	第ⅡA層（灰茶褐色土）出土遺物
図面33	第28次調査	第ⅡA層（灰茶褐色土）出土遺物
図面34	第28次調査	第ⅡA層（灰茶褐色土）出土遺物
図面35	第28次調査	第ⅡA層（灰茶褐色土）出土遺物
図面36	第28次調査	第ⅡA層（灰茶褐色土）出土遺物
図面37	第28次調査	第ⅡA層（灰茶褐色土）出土遺物
図面38	第28次調査	第ⅢA層（灰黒褐色土）・ⅣA層（黒褐色土）出土遺物
図面39	第28次調査	第ⅣA層（黒褐色土）出土遺物
図面40	第29次調査	S D 23 溝跡第1層出土遺物
図面41	第29次調査	S D 23 溝跡第1層出土遺物
図面42	第29次調査	S D 23 溝跡第1層出土遺物
図面43	第29次調査	S D 23 溝跡第1層出土遺物
図面44	第29次調査	S D 23 溝跡第1層出土遺物
図面45	第29次調査	S D 23 溝跡第1層出土遺物
図面46	第29次調査	S D 23 溝跡第1層出土遺物
図面47	第29次調査	S D 23 溝跡第1層出土遺物
図面48	第29次調査	S D 23 溝跡第2層出土遺物
図面49	第29次調査	S D 23 溝跡第2層出土遺物
図面50	第29次調査	S D 23 溝跡第4層出土遺物
図面51	第29次調査	表土出土遺物
図面52	第29次調査	表土出土遺物
図面53	第29次調査	表土出土遺物

図 版 目 次

図版 1	第28次調査	上 調査地全景（南から）
		下 調査地全景（北から）
図版 2	第28次調査	上 調査地全景（東から）
		下 S D 23 溝跡土層A～A'（南から）
図版 3	第28次調査	上 S B 39 掘立柱建物跡瓦積み部分（西から）
		中 S B 39 掘立柱建物跡埋甕（東から）
		下 S D 23 溝跡遺物出土状態（南から）
図版 4	第28次調査	上 S K 163 土坑全景（北から）
		下 S K 163 土坑土層断面D～D'（南から）
図版 5	第29次調査	上 調査地遠景（南から）

目 次

		下 S D 23 溝跡全景 (南から)
図版 6	第 29 次調査	上 S D 23 溝跡全景 (北から)
		下 S D 23 溝跡全景 (北東から)
図版 7	第 29 次調査	上 S D 23 溝跡土層断面 A ~ A' (南から)
		中 S D 23 溝跡土層断面 B ~ B' (北から)
		下 S K 166 土坑全景 (東から)
図版 8	第 86 次調査	上 S D 17 溝跡全景 (東から)
		下 S D 17 溝跡土層断面 A ~ A' (西から)
図版 9	第 28 次調査	S B 39 掘立柱建物跡出土遺物
図版 10	第 28 次調査	S B 39 掘立柱建物跡出土遺物
図版 11	第 28 次調査	S B 39 掘立柱建物跡出土遺物
図版 12	第 28 次調査	S B 39 掘立柱建物跡出土遺物
図版 13	第 28 次調査	S B 39 掘立柱建物跡出土遺物
図版 14	第 28 次調査	S B 39 掘立柱建物跡出土遺物
図版 15	第 28 次調査	S B 39 掘立柱建物跡出土遺物
図版 16	第 28 次調査	S D 23 溝跡出土遺物
図版 17	第 28 次調査	S D 23 溝跡出土遺物
図版 18	第 28 次調査	S K 163 土坑出土遺物
図版 19	第 28 次調査	S K 163 土坑出土遺物
図版 20	第 28 次調査	表土出土遺物
図版 21	第 28 次調査	表土出土遺物
図版 22	第 28 次調査	表土出土遺物
図版 23	第 28 次調査	表土出土遺物
図版 24	第 28 次調査	第 II A 層出土遺物
図版 25	第 28 次調査	第 II A 層出土遺物
図版 26	第 28 次調査	第 II A 層出土遺物
図版 27	第 28 次調査	第 II A 層出土遺物
図版 28	第 28 次調査	第 II A 層出土遺物
図版 29	第 28 次調査	第 II A 層出土遺物
図版 30	第 28 次調査	第 II A 層出土遺物
図版 31	第 28 次調査	第 III A 層・IV A 層出土遺物
図版 32	第 29 次調査	S D 23 溝跡出土遺物
図版 33	第 29 次調査	S D 23 溝跡出土遺物
図版 34	第 29 次調査	S D 23 溝跡出土遺物
図版 35	第 29 次調査	S D 23 溝跡出土遺物
図版 36	第 29 次調査	S D 23 溝跡出土遺物
図版 37	第 29 次調査	表土出土遺物
図版 38	第 28・29 次調査	墨書・文字瓦集成
図版 39	第 28 次調査	文字瓦集成

目 次

図版 40	第 28 次調査	文字瓦集成
図版 41	第 29 次調査	文字瓦集成

第1章 序 章

I 調 査 経 過

1. 調査会設立後の経過

武蔵国分寺遺跡調査会は、武蔵国分寺跡の保存・整備計画策定に要する基礎資料の充実を図るための広域調査と、保存・活用方法の研究を目的に設立されたが、当面の目的を武蔵国分寺々域の確定におき、調査計画の立案に当っては、滝口宏氏の想定された寺域⁽¹⁾の検証を計画の中心に据えながら発掘調査を進めることになった。

初年度（昭和49年度）は、寺地南辺の確認（第4・6・7次調査）、塔跡東隣接地および僧・尼寺中間地域の様相把握（第5・8次調査）を目的に調査を行ない、①寺地南辺溝が南・北に二条存在すること、②塔跡東隣接地に大型の掘立柱建物跡が存在すること、などの成果が得られた（滝口他1979）。

昭和50年度は、市公共下水道工事に伴う緊急調査（第12次調査）により僧寺々域北西隅部を明らかにしたものの、遺跡調査会設立の契機となった市立第四中学校の四月開校に伴って、附属施設（フェンス・体育館・プール等）の早期建設が市の当面する問題となり、これらの事前調査に着手したことや、市の文化財保護行政の強化に伴う緊急調査および立会い調査の急増による調査員の不足などの理由により、寺域確認調査は実施できずに終わってしまった。このため、寺域確認調査の再開に向けて、調査計画の再検討と調査員の増員がなされ、昭和51年度から調査は再開された。

2. 昭和51年度調査の概要

昭和51年度は、僧寺々域の確定を主目的に6ヶ所の確認調査を年度当初から予定したが、調査予定地の大部分が畑地であったことで、農作物の収穫時期の関係から大幅に遅れ1月から調査を始めることになった。調査は、第12次調査地において検出された僧寺々域北西隅の西辺溝（SD23）の追求から始めることにし、まず第28次調査（寺域西辺）を実施した。やや遅れて第30次調査（寺城南辺）を実施した。

第28次調査では、昭和49年の市立第四中学校の排水工事の際、断面調査された遺構が築地と判断されていたことから、寺域を画する遺構の再確認を目的とするものであった。この調査によって築地と判断された遺構は、東西に並列して検出された掘立柱建物跡、寺域西辺溝、その他の遺構を見誤ったものであることが明らかになり、改めて素掘り溝が寺域を画する遺構であることが

第1章 序 章

武蔵国分寺遺跡調査会組織

(昭和53年度当時)

会 長	星 野 亮 勝	国分寺市文化財保護審議会委員長
副 会 長	滝 口 宏	東京都文化財保護審議会委員
	森 田 茂	国分寺市教育委員会委員長
理 事	永 峯 光 一	東京都文化財保護審議会委員
	大 川 清	国土館大学教授
	坂 詰 秀 一	東京都文化財保護審議会委員
	塩 谷 信 雄	国分寺市長
	中 島 比古郎	国分寺市助役
	興 津 精 二	国分寺市教育委員会教育長
	飯 沼 壽 夫	東京都教育庁社会教育部文化課副主幹
	坂 本 喜 市	国分寺市社会教育委員会議長
	佐 藤 敏 也	国分寺市文化財保護審議会委員
	松 井 新 一	〃
	宇 野 信四郎	〃
	藤 間 恭 助	〃
監 事	浅 見 正 平	国分寺市社会教育委員
	青 木 一 美	東京都教育庁社会教育部文化課埋蔵文化財企画調査担当主査
事務局長	進 藤 文 夫	国分寺市教育委員会次長
事務局長 補 佐	清 祥一郎	東京都教育庁社会教育部文化課埋蔵文化財係長
	山 下 実	国分寺市教育委員会文化財課長
事務局長	安 田 暉	国分寺市教育委員会文化財課庶務係長
	廣 瀬 恒 雄	国分寺市教育委員会文化財課庶務係
	調 査 団	
団 長	滝 口 宏	東京都文化財保護審議会委員
副 団 長	永 峯 光 一	〃
	大 川 清	国土館大学教授
	坂 詰 秀 一	東京都文化財保護審議会委員
調 査 員	早 川 泉	東京都教育庁社会教育部文化課学芸員
	西 脇 俊 郎	〃
	有 吉 重 蔵	国分寺市教育委員会文化財課文化財保護係
	福 田 信 夫	〃
	上 村 昌 男	〃
	一 山 典	国学院大学大学院博士課程 (昭和51年度)
	池 上 悟	立正大学大学院修士課程 (〃)
	行 田 裕 美	(昭和52年度)
	浅 野 晴 樹	(〃)
	渡 辺 克 彦	(昭和53年度)
	藤 村 由香利	(〃)



第1図 調査位置図

第1章 序章

確認された。したがって以後の調査は、この素掘り溝の追求を前提に進められることになった。

一方、第30次調査において寺城南辺溝が検出されたことから、調査の終了とともに第29次調査（寺城南西隅）を2月15日から実施した。この地域は、昭和41年度の滝口宏氏の調査によって南西隅が確認されているが、再度確認を行った。この調査によって、寺城南西隅溝（SD 23）、竪穴住居跡などが検出され、隣接する市立第四中学校地遺構との関連が明らかにされた。この他、第31次調査（寺城南東隅）と第33次調査（寺城北辺）は3月末より調査に着手したものの、昭和52年度に継続され、第32次調査は同年度に繰り越された。

3. 昭和52年度調査の概要

昭和52年度以降は、寺地および尼寺々域の確定を主目的に調査を進める予定であったが、前年度の確認調査の大幅な遅れから、継続または繰り越しになった3ヶ所の調査から着手した。まず、第31・33（B）次調査を4月1日から継続調査し、やや遅れて第32・33（A）次調査を実施した。

第31次調査では、再調査により僧寺々城南東隅の正確な位置が判明した。第33次調査は、僧寺中軸線上の北辺地域の状況把握を目的とするものであったが、寺城北辺溝は検出されたものの、門跡に関連する遺構は検出されなかった。また、北辺溝に関して、中軸線の西側（第12～33次調査地B地区）と東側（第33次調査地A地区以東）ではその方位がやや異なることが判明した。

第33次調査の終了とともに、本年度に予定された4ヶ所の寺地確認調査に移行し、第42次A（寺地北辺確認）調査および第41次（寺地北辺確認）調査を、各々5月16日と5月23日から実施した。第42次調査地A地区では、第33次調査地で判明した僧寺々域北辺溝の中軸線より西側部分と同方位で伸びる素掘り溝（SD 42）が検出されたが、第41次調査地ではSD 42の西延長は検出されず、滝口宏氏想定寺地の規模について問題を提起することになった。

第41次調査の終了とともに、第42次B（寺地北辺確認）調査を7月13日から、やや遅れて第44次（寺地南辺確認）調査を実施した。第44次調査は、僧寺中軸線上南辺地域の状況把握を目的とするものであり、調査によって6条の素掘り溝が検出されている。これらの中で、SD 49は昭和41年度調査の際検出され、寺地南辺溝の曲折部と考えられたものであったが、新たに寺地南辺溝（SD 17）が検出されたことから、SD 17と混同して一条の溝とされていたことが判明した。また、既往の調査成果から築造時期がSD 17よりも遅れることが明らかになった。このことから、SD 17が寺地南辺を画する遺構であることが確定されたが、中軸線上は既に宅地化していることから門跡等の遺構は明らかにし得なかった。

本年度に予定された寺地確認調査は10月21日をもって終了したが、その後、昭和51年以来懸案となっていた僧寺々域北東隅地域の再調査について、地権者の発掘承諾が得られたことから、急に調査を実施することになり、2月13日より第43次調査に着手した。この調査で僧寺々域北東隅

の正確な位置が判明したことにより僧寺の四至が確定した。さらには寺域北辺溝と同方位で北東隅から東方へ伸びる寺地北辺溝（SD 63）が明らかになった。

この他、専用住宅建築に伴う緊急調査として第48・50次調査が実施された。

4. 昭和53年度調査の概要

前年度に引き続き寺地の確定を目的とする調査計画が立案された。ところが6月に始まった民間の開発に伴う第68次調査地（日東建設所有地）において、尼寺々域東辺溝と推察される大溝が検出されたことから、文化財保護上の取り扱いに関連して早急に尼寺々域を確定する必要性が生じた。このため調査計画が寺地の確認から尼寺々域確認へ全面的に変更された。したがって寺地に関する調査は、専用住宅建築に伴う緊急調査の第78・86次調査を実施したに止まった。

以上、昭和51～53年度調査の概要を述べたが、各年度別の調査の進行状況は第1表のとおりである。

註(1) 武蔵国分寺は僧・尼寺を含む東西8町、南北5町の区画と、僧・尼寺各々の区画が存在することが想定されている。このため当調査会では、便宜上前者を寺地、後者を寺域と仮称している。

年 度	調 査 地	位 置	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
昭和51年	28 次	寺西 域 辺										■	■	■
	29 次	寺南 域 西隅											■	■
	30 次	寺南 域 辺										■	■	
	31 次	寺南 域 東隅	■	■										
	33 次 B地区	寺北 域 辺	■	■										■
昭和52年	32 次	寺東 域 辺	■											
	33 次 A地区	寺北 域 辺	■											
	41 次	寺北 地 限			■									
	42 次 A地区	寺北 地 辺		■										
	42 次 B地区	"				■								
昭和53年	43 次	寺北 域 東隅											■	
	44 次	寺南 地 辺												
	48 次	寺北 地 辺												
	50 次	寺南 地 辺												
	78 次	"												
86 次	"												■	

■ 表土削除・遺構検出

□ 遺構調査

■ 写真撮影・実測

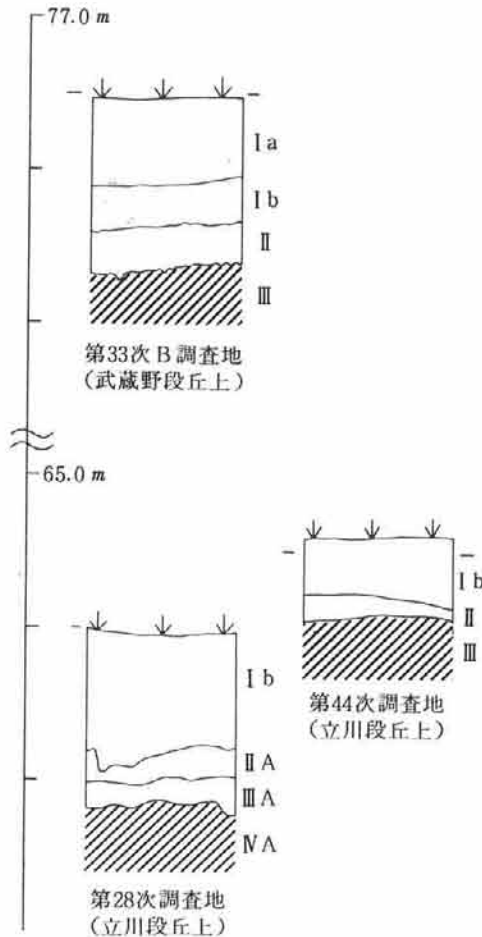
第1表 調査工程表

II 遺跡の位置と環境

遺跡は、国鉄中央線国分寺駅の南西0.8kmの国分寺市西元町1～4丁目を中心に所在する。

この付近は、古多摩川によって形成された段丘崖（国分寺崖線）が東西方向に横断しており、北側の武蔵野段丘（標高約77m）と、南側の立川段丘（標高65m）とに分離される。遺跡は两段丘にまたがって立地しており、中心部は低位の立川段丘上にある。

立川段丘は、南東方向へ緩やかな傾斜で続く安定した地形であるが、国分寺崖線下の各所にみられる湧水の水路に沿って、幅80～90mの浅い谷（黒鐘谷）が尼寺跡付近まで伸びており、僧寺講堂跡の後方では1m以上の段差が認められる。伽藍中枢部はこの黒鐘谷を避けてやや南寄りに占地している。このため講堂北西の低地部分は、永い間沼地と想定されていた。ところが昭和49年の市立第四中学校建設に伴う排水工事の際、この地域から多数の遺構の存在が確認され、さらには市公共下水道工事に伴う調査（第37次調査）によって排水用と考えられる小溝が検出されたことから（武蔵国分寺遺跡調査会1982）寺域内にとりこま



第2図 調査地標準層序

れた形の黒鐘谷は湧水に対する策が講じられ、積極的な活用が図られたことが推察される。また、これまで実施された分布調査によれば、遺物の散布範囲は東西2km、南北2kmに及んでおり、国分二寺の周囲に展開する住居群の限界を示すものと考えられる。

遺跡の層序は、立川・武蔵野两段丘上においては同様であるが、黒鐘谷に位置する第28次調査地付近では、湧水の影響を受けたためか他地域と異なる。3地域での標準的な層序は次のとおりである（第2図）。

武蔵野段丘上（第33次調査地）・立川段丘上（第44次調査地）

- Ia 層 盛土
- Ib 層 表土

第1章 序章

- Ⅱ 層 黒色土。細かいローム粒を含み、均一で粒子が荒い。
- Ⅲ 層 暗茶褐色土。いわゆるローム漸移層。この上面にて遺構の検出を行った。
- Ⅳ 層 ソフトローム

立川段丘上（第28次調査地）

- Ib 層 表土
- ⅡA 層 灰茶褐色土。鉄分を多く含み、遺物を多く包含する。
- ⅡA' 層 灰茶褐色土。粘性が強く、ボロボロしている。調査区の北側に認められる。
- ⅢA 層 黒褐色土。粘土微粒子を混じり、しまりがある。遺物を多く包含する。
- ⅣA 層 茶褐色土。粘性が強く、しまりがある。この上部付近にて遺構の検出を行った。

第2章 寺地の調査

I 寺地北辺部

第43次調査で検出された寺地北辺溝（SD63）については、第5章僧寺々域の調査で述べることにする。

1. 第41次調査

第42次調査地で検出された寺地北辺溝（SD42）の西延長を明らかにする目的で、昭和52年5月23日～6月9日まで調査を行った。調査面積は約88.4㎡である。

検出遺構

調査の結果、寺地北辺溝は確認されず、掘立柱建物跡1、竪穴住居跡1、土坑1が検出された。このうち竪穴住居跡は確認に止めた。

SB42（図面Ⅱ-1、図版Ⅱ-1）

桁行2間4.5m、梁行2間3.3mの東西棟掘立柱建物であり、建物の南北方向は僧寺中軸線より約1°西偏する。柱間寸法は桁行が7.2尺等間、梁行が4.6～6.6尺と不同である。

柱穴は、南側柱列が整っていて、長辺約0.6m、短辺0.3m、深さ0.3～0.5mの長方形である。また柱穴1-3は規模が非常に小さく円形を呈する。

SK184（図面Ⅱ-1、図版Ⅱ-1）

長軸1.73m、短軸1.0m、深さ0.25mの不整楕円形を呈する。

出土遺物

遺物は須恵器、緑釉陶器、瓦などがあり、コンテナ8箱の量が出土している。ここでは竪穴住居跡出土遺物について記述することとし、SK184、表土出土遺物（図面Ⅱ-17、図版Ⅱ-23）については別表Ⅱ-2に示した。

竪穴住居跡出土遺物（図面Ⅱ-17、図版Ⅱ-23）

遺物は全て確認面から出土した。

緑釉陶器

碗（17-3） 底径7.3cmで、高台部分は半月形を有する。内面に陰刻花文が施されている。

須恵器

甕（17-5） 体部内面部分を硯に転用した痕跡がある。

2. 第42次調査

第12次調査地（僧寺々域北西隅）以西の、寺地北辺の状況把握を目的に、昭和52年5月16日～9月26日まで調査を実施した。調査にあたっては、第12次調査地寄りをA地区、その西側をB地区とした。調査面積は合せて約61.4㎡である。なお、B地区では途中から専用住宅新築に伴う緊急調査を追加で実施している。

検出遺構

調査の結果、寺地北辺溝、竪穴住居跡1、土坑1が検出された。

SD42（図面Ⅱ-2、図版Ⅱ-2・4）

寺地北辺は、断面形が逆台形の素掘り溝であり、上面幅1.0～1.3m、底面幅0.6～1.1m、深さ0.2～0.3mを計る。延長8.8mを検出した。溝底面には、ローム土等による埋め込みは認められなかった。

SI136（図面Ⅱ-2・3、図版Ⅱ-3）

住居跡の平面形は東西約4.1m、南北3.4mの長方形であり、東壁中央南寄りにカマドを設けている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さは0.45～0.54mを計る。住居跡フク土中央部分に集中して赤褐色の焼土層が堆積している。住居の南北方向は僧寺中軸線より8°東偏する。

カマドは東西1.35m、南北0.8mの規模であり、壁外に0.7mほど台形状に掘り込み灰褐色粘土で構築している。両袖部分は瓦が補強材として使用されている。

床面は、黒色土にロームブロックを多量に含んだ土層で張り床がおこなわれている。同溝はカマド部分を除く全壁下に検出され、幅約0.25m、床面からの深さは0.1mを計る。小穴は住居跡内に5個検出された。南東隅寄りのもは貯蔵穴と考えられる。

SK222（図面Ⅱ-3）

長軸1.05m、短軸0.96m深さ約0.1mの円形を呈する。

出土遺物

遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦、鉄製品などがあり、コンテナ24箱の量が出土している。これらは主にSI136から出土したものである。ここではSI136出土遺物について記述することとし、表土出土遺物（図面Ⅱ-18、図版Ⅱ-24）については別表Ⅱ-2に示した。

SI136出土遺物（図面Ⅱ-18～22、図版Ⅱ-24～27）

土師器

坏・甕などがある。

坏（18-11・12） いずれも体部および底部を手持ちヘラ削りをおこない、体部に指頭痕を残す「南武蔵型坏」である。

甕（18-19・24～27） 「く」および「コ」字状口縁を有する「武蔵型甕」である。

須恵器

坏・埴・蓋などがある。

坏（18-1～10） 底部の成形は全て回転糸切りで再調整をおこなっているものはない。18-10は、底部外面（18-10a）と内面（18-10b）に糸切り痕を残す坏であり、円柱造りの可能性がある。口径<底径×2（南多摩窯跡群G37窯式相当）で器高が3.5cm前後のもの（18-5・10）、口径≒底径×2（南多摩窯跡群G59窯式相当）で器高が3.5cm前後のもの（18-1～3・8・9）、口径>底径×2（南多摩窯跡群G25窯式相当）で器高が3.6cmの小型のもの（18-4）と器高が5.0cmで大型のもの（18-6）など3類に分けられる。

埴（18-13・14） 口径15.8cmで口縁部分が内彎するもの（18-13）と、口径が18.4cmで口縁部分が外反する大型のもの（18-14）がある。

蓋（18-16） 径15.8cmで口唇部が外彎する。

灰釉陶器

浄瓶・蓋・埴などがある。

浄瓶（18-15） 注口の破片であり外面部分は刷毛塗りによって施釉されている。篠岡47号窯に相当するものと考えられる。

蓋（18-17） 口唇部の破片であり内外面に釉が付着している。

埴（18-18） 口径17.7cmと大型であり、断面四角形の小さい高台を有する。施釉は口縁内側より底部内面まで刷毛塗りがおこなわれる。篠岡47号窯に相当するものと考えられる。

瓦

鎧瓦、宇瓦、男瓦、女瓦などがある。

鎧瓦（19-2～5） いずれも無間弁で弁の形状が輪部線を有するもの（19-3～5）と、そうでないもの（19-2）に分けられる。19-3・4は裏面に縄目叩きがみられる。

宇瓦（19-1） 右行する偏行唐草文字瓦である。

男瓦（20-1～3、21-1～5） $I_2 - A_1$ 技法⁽¹⁾（21-2・4・5）と、 $I_3 - A_1$ 技法（20-2・3、21-1）とに分けられる。20-3は鎧瓦の瓦当部が欠失したもので、側面に糸切り分割痕が残る。21-3も同様の痕跡が残る。また20-1・2、21-2・4・5の凹面には判読不明の朱墨書がみとめられる。

女瓦（19-6～11、22-1～3） $I - B$ 技法（19-7）と、 $II_1 - A_1$ 技法（19-10・11、22-2・3）とに分けられる。19-7は凹面に粘土板合せ目痕が残る。

鉄製品

刀子、釘などがある。

刀子（18－22） 長さ7.4cmで刀部の大半が欠失している。

釘（18－23） 長さ5cm、径0.5cmの方形の断面で、先端部分が折れまがっている。

その他用途不明であるが長さ7.8cmの板状を呈するもの（18－20）、長さ3.3cm、径1.0cmの円筒状のもの（18－21）がある。

3. 第48次調査

寺地北辺部において専用住宅の建築が予定されたことにより、昭和52年6月4日～8月12日まで緊急調査を行った。調査面積は202㎡である。

検出遺構

調査の結果、寺地北辺溝を含む溝跡4、竪穴住居跡1、土坑5が検出された。

SD42（図面Ⅱ－4、図版Ⅱ－5・7）

寺地北辺は断面形が逆台形の素掘り溝であり、上面幅1.1～1.5m、底面幅0.5～1.1m、深さ0.3～0.5mを計る。長さ13.0mを検出した。

SD45・46、SK206と重複しており、新旧関係はSD42が古い。

S1135（図面Ⅱ－6、図版Ⅱ－5）

住居跡の平面形は東西5.1m、南北は調査区外のため不明であるが長方形と思われる。カマドは北壁部分には検出されないため、東壁に設けられていると思われる。住居の壁はほぼ垂直に立ち上がり高さは0.46～0.65mを計る。住居跡フク土中壁より赤褐色の焼土層が堆積している。住居の南北方向は僧寺中軸線より3°東偏する。

床面は黒色土にロームブロックが含まれた土層で張り床がおこなわれていて非常に固い。周溝は調査区内では全周し幅約0.3m、床面からの深さ0.1mを計る。小穴は住居跡内に3個検出される、また周溝部分に径0.1～0.3m前後、深さ0.2～0.3mの小型の小穴が15個検出された。

SD45（図面Ⅱ－4・5、図版Ⅱ－5・7）

断面形がU字状の素掘りの溝であり、上面幅0.6～1.05m、底面幅0.35～0.8m、深さ約0.2mを計る。長さ17.0mを検出した。

SK206と重複しており、新旧関係はSD45が古い。

SD46（図面Ⅱ－5、図版Ⅱ－5・7）

溝の断面形はU字状であり上面幅4.4m以上、底面幅約3.8m、深さ0.3～0.6mを計る。長さ約13.8mを検出した。溝内は粘土質で硬い土が堆積しており、底面に近づくにつれて硬度はましてくる。底面部分は幅約0.5m前後で、深さ0.1mの数本の溝が集合してなりたっておりローム層に酸化鉄が付着した状態でさらに硬質である。硬質部分を除去後径約0.3m、深さ約0.1m前後の小穴が多数検出された。

寺地北辺溝跡と重複しており、新旧関係はSD46が新しい。

SD50（図面Ⅱ-4、図版Ⅱ-5・7）

土坑が連続する形状の素掘り溝で断面形はU字状もしくは逆台形である。上面幅約0.8m前後、底面幅0.4m、深さは0.25～0.6mを計る。長さ11.2mを検出した。SK225と重複しており、新旧関係はSD50が新しい。

SK206（図面Ⅱ-6、図版Ⅱ-5・6）

長軸3.6m、短軸1.1m、深さ約0.2mの隅丸長方形を呈する。

SD42・45と重複しており、新旧関係は土坑が新しい。

SK207（図面Ⅱ-6、図版Ⅱ-5・6）

長軸2.4m、短軸0.8m、深さ約0.7mの長楕円形を呈する。SD50溝跡の南側延長部分に位置し同一の遺構と考えられる。

SK219（図面Ⅱ-6、図版Ⅱ-7）

直径0.95m、深さ0.1mの円形を呈する。

SK220（図面Ⅱ-6、図版Ⅱ-7）

長軸2.1m、短軸0.7m、深さ0.9mの長方形を呈する。

SK225（図面Ⅱ-4、図版Ⅱ-7）

長軸2.5m、短軸1.0m、深さ0.6mの長方形を呈する。

SD50溝跡と重複しており、新旧関係は土坑が古い。

出土遺物

遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦などがあり、コンテナ24箱ほどの量が出土している。ここではSD42・46、SI135出土遺物について記述することとし、SD45・表土出土遺物（図面Ⅱ-24・25、図版Ⅱ-28・29）については別表Ⅱ-2に示した。

SD42出土遺物（図面Ⅱ-23、図版Ⅱ-28）

須恵器

坏（23-1） 口径<底径×2（東金子窯跡群前内出1・2号窯に相当）で、底部糸切り後周辺部分回転ヘラ削りをおこなう。底部内面部分ほぼ全体に磨滅が認められることにより硯に転用した可能性がある。

SD46出土遺物（図面Ⅱ-23、図版Ⅱ-28）

須恵器

坏・皿・蓋・甕などがある。

坏（23-3～5） 底部の成形は全て回転糸切りで再調整をおこなっているものはない。口径<底径×2（南多摩窯跡群G37窯式に相当）で器高が3.4cmのもの（23-5）、口径>底径×

2（南多摩窯跡群G25窯式に相当）で器高が3.5cmのもの（23-3・4）がある。また、23-2は底部の破片であるが内外面に「本」の墨書がある。

皿（23-9） 底部の破片であるが内面に磨滅が認められることにより硯に転用した可能性がある。

蓋（23-6・7） 口径18.8cmで偏平化した宝珠形のつまみを有するもの（23-6）と、口径20.1cmでぼたん状のつまみを有するもの（23-7）とがある。

甕（28-8） 口縁部の破片であり鳥頭状の口縁を有する。

灰釉陶器

碗（23-10） 底径9.3cmで、高台部分は半月形を有する。

瓦

女瓦（24-13・14） いずれもⅡ₁-A₁技法のものである。

S I 135 出土遺物（図面Ⅱ-23、図版Ⅱ-28・39）

土師器

甕（23-17～19） 口縁部が「コ」字状を有する「武蔵型甕」（23-17・18）と、指頭痕を顕著に残す台付甕（23-19）とがある。

須恵器

坏（23-11） 底部回転糸切りで再調整をおこなわない。口径>底径×2（南多摩窯跡群G25窯式に相当）で器高は4.2cmとやや大型である。

皿（23-12） 半月形の高台を有し、底部内面中央に「○」、外面に「入」の墨書がある。

碗（23-15・16） 23-15は口径14.2cm、底径7.5cm、器高6.3cmと小型であり、高台部分は外に開き断面は半月形を有する。23-16は、口縁部の破片であり口径16.5cmでやや大型である。

灰釉陶器

碗（23-14） 口縁部の破片であり内外面施釉がおこなわれる。

4. 小 結

調査の結果、寺地北辺を画するSD42・63を検出することができた。SD42は、僧寺北辺西側（第12～33B調査地間）とほぼ同方位（南北方位に換算して6°27′西偏）で西方へ伸びるが第41次調査地では溝の延長が検出されず、寺地北辺の想定位置に問題を残していた。その直後に実施された公共下水道工事に伴う試掘調査においても、第41次調査地の東・西両側では検出されず、第48次調査地の僧寺中軸線西203.0m（僧寺北西隅西92m）で終わることが判明した。このことから、滝口宏氏想定寺地の中で、北、西両辺については再考の必要が生じ、今後の検討課題

第2章 寺地の調査

となった。またSD63は、僧寺々域北東隅（SD23）に接続し、僧寺中軸線東334.3m（僧寺北東隅東54.7m）地点まで検出されたが、この結果寺地北辺は約540m以上の規模であることが判明した。しかしながら、SD42と同様に築造時期を明らかにするにはいたらなかった。

註(1) 男瓦、女瓦の製作技法分類は、「武蔵国分寺遺跡調査概報V」（滝口他1981）に準じた。

Ⅱ 寺地南辺部

1. 第44次調査

僧寺々域中軸線と寺地南辺との交点部分の状況把握を目的に、昭和52年7月20日～10月21日まで調査を行った。調査面積は187.1㎡である。

検出遺構

調査の結果、寺地南辺を含む溝跡6、小穴多数を検出した。

SD17 (図面Ⅱ-8、図版Ⅱ-8)

寺地南辺は底面が二段掘りされた素掘り溝で、断面形は逆台形を呈する。上面幅1.75～2.4m、底面上段幅1.0～1.2m、深さ約0.9mを計り、長さ6.8mを検出した。底面南寄りの下段掘りこみは幅0.9～1.1m、深さ0.05～0.2mを計り、内部はローム・漸移層ブロックを主体とする土で埋め込まれている。溝上面に幅4.2mの硬質面が検出された。

SD54と重複しており、新旧関係は南辺溝が古い。

SD49 (図面Ⅱ-9、図版Ⅱ-9・10)

東西・南北両溝が検出されたが、昭和41年度の調査成果(滝口1966)から同一溝と考えられる。東西溝は断面形が、VまたはU字状を呈する素掘り溝で、上面幅2.4m、底面幅0.4m、深さ1.3mを計り、長さ6.8mを検出した。南北溝は断面形がV字状を呈し、上面幅2.0m、底面幅0.5m、深さ1.2mを計り、長さ3.5mを検出した。両溝とも一回以上の掘り直しが認められる。とくに第9層(粘性があり、硬質である)を境に上・下二時期に分けられる。なお、昭和41年度検出の溝曲折部は住宅下になることから、今次調査では明らかにし得なかった。

SD55と重複しており、新旧関係はSD49が古い。

SD53 (図面Ⅱ-7)

SD17とSD49の間に位置し、断面形が逆台形を呈する素掘り溝である。上面幅0.9m、底面幅0.6m、深さ約0.1mを計り、長さ約7.4mを検出した。新しい時期の溝と考えられる。

SD54 (図面Ⅱ-7、図版Ⅱ-11)

断面形がU字状を呈する素掘りの東西溝である。上面幅0.9～1.2m、底面幅0.4～0.7m、深さ約0.3mを計り、長さ8.6mを検出した。

SD55と重複しており、SD54が古い。

SD55 (図面Ⅱ-8、図版Ⅱ-10・11)

断面形がU字状を呈する素掘りの東西溝である。上面幅1.0m、底面幅0.4m、深さ0.3mを計り、長さ19.2mを検出した。

SD49、54、56と重複しており、新旧関係はSD55が新しい。

SD56（図面Ⅱ-7、図版Ⅱ-10）

断面形が逆台形を呈する素掘りの南北溝である。上面幅は1.0m、底面幅0.8m、深さ約0.1mを計り、長さ3.4mを検出した。

SD55と重複しており、新旧関係はSD56が古い。

小穴（図版Ⅱ-7）

小穴はSD17の周辺部分に集中して多数検出された。規模は径約0.5m前後、深さ約0.5～1.0mを計る。

出土遺物

遺物は土師器、須恵器、瓦などがあり、コンテナ9箱ほどの量が出土している。ここではSD17、SD49出土遺物について記述することとし、P-7・15・60、表土出土遺物（図面Ⅱ-26、図版Ⅱ-30）については別表Ⅱ-2に示した。

SD17 出土遺物（図面Ⅱ-26、図版Ⅱ-30）

瓦

宇瓦（26-14） 曲線顎の偏行唐草文字瓦で、顎部が接合面から剥離している。

SD49 出土遺物（図面Ⅱ-26、図版Ⅱ-30）

土師器

坏（26-6） 体部外面は粘土紐巻き上げ痕を残し、指頭により成形がおこなわれている。

瓦

宇瓦（26-9） 段顎のへら書き文字瓦である。

2. 第50次調査

寺地南辺部において専用住宅の建築が予定されたことにより、昭和52年6月28日～7月11日まで緊急調査を行った。調査面積は353㎡である。

検出遺構

調査の結果、寺地南辺溝を検出した。

SD18（図面Ⅱ-10、図版Ⅱ-12・13）

寺地南辺は断面形がU字状を呈する素掘り溝であり、上面幅1.3m、底面幅0.5m、深さ約0.5mを計り、長さ19.4mを検出した。

出土遺物

遺物は土師器、須恵器、瓦などがありコンテナ1箱ほどが出土した。全て小破片で図示できるものはない。

3. 第78次調査

寺地南辺部において専用住宅の建築が予定されたことから、緊急調査を昭和53年8月31日～9月21日まで行った。調査面積は34.1㎡である。

検出遺構

調査の結果、寺地南辺溝を含む溝跡2を検出した。

SD17（図面Ⅱ-11、図版Ⅱ-14）

寺地南辺は、北壁部分が調査区外に伸びており溝の全体は不明であるが、幅1.2m以上、底面幅0.6m以上、深さ0.6mを計り、長さ9.8mを検出した。底面はロームブロックを主体とする土で約0.15mほど埋め込まれている。

SD82（図面Ⅱ-11）

断面形が逆台形を呈する素掘りの東西溝で、上面幅1.6～2.5m、底面幅0.4～0.6m、深さ0.5mを計り、長さ約10.0mを検出した。新しい時期の溝と考えられる。

出土遺物

遺物は須恵器、瓦などがあり、コンテナ2箱ほどが出土した。全て小破片で図示できるものはない。

4. 第86次調査

第78次調査地の西隣接地において専用住宅の建築が予定されたことから、緊急調査を昭和54年1月22日～2月10日まで行った。調査面積は約72㎡である。

検出遺構

調査の結果、寺地南辺溝を含む溝跡2を検出した。

SD17（図面Ⅱ-5、図版Ⅱ-8）

寺地南辺は、断面形が逆台形を呈する素掘り溝で、上面幅2.1m、底面幅1.2m、深さ0.6mを計り、長さ12.8mを検出した。底面は部々的にテラス状になっており、内部はロームブロックを主体とする土で約0.1m前後埋め込まれている。

SD82（図面Ⅱ-5）

断面形がV字状であり上面幅2.0m、底面幅0.4m、確認面からの深さ0.6mの素掘り溝で、長さ約13.0mを検出した。新しい時期の溝と考えられる。

出土遺物

遺物は土師器、須恵器、瓦などがあり、コンテナ1箱ほどが出土した。全て小破片で図示できるものはない。

5. 小 結

調査の結果、寺地南辺を画するSD17と、その南に併存するSD18・49が検出されたことにより、両溝の実態が一層明確になった。

寺地南辺は、第44次調査地のSD17上面に住居跡床面と同様の硬質面が検出されたことから、中軸線上は通路となっていたことが推察される。寺地南辺の範囲は、昭和51年度市公共下水道工事に伴う調査（第24次調査）の成果を考え合わせると、中軸線の西10m地点～同東355.5m地点まで検出されたことになり、辺長は365.5m以上であることが明らかになった。

第44次調査地以西の状況は、未調査地域が広範囲に及ぶことから判然としないが、都道17号線の道路補修工事に伴う調査（第23次調査）の際検出されたSD12（幅1.5m、深さ0.7m）は、SD17の西延長線上に位置すること（僧寺金堂心南284m）や、溝の築造方法が類似することなどから、SD17と同一溝である可能性が高い（滝口他1978）。またSD12は、底部回転糸切り未調整の須恵器坏小破片を出土する竪穴住居を切って築造されていることから、築造時期の上限を9c前半代に置くことができる。仮にSD17と同一溝とした場合、近接する市立第四中学校検出遺構群（滝口他1981）の出現時期と符合し、寺地の拡張と合わせて寺地内の付属雑舎の整備が図られたとも考えられるが、一方では第6次調査地において溝底面から出土している土師器坏の年代（8c後半）と差が生じることになり、これらの検討が今後の課題として残された。

SD18・49は、溝の形状や、中軸線付近を境に「ハ」字形を呈することなどから、同一の機能を有するものと考えられるが、性格は不明である。しかしながら、昭和33年度および昭和41年度の調査成果によって、SD49が北折して僧寺々城南辺溝（SD23）を切っていることが明らかになっており（矢島恭介1958、滝口宏1967）、このことからSD17よりも築造時期が遅れることが推考される。

第3章 僧寺々域の調査

I 寺城南西・南東・北東隅部

1. 第29次調査

寺城南西隅の位置の再確認と、寺域に隣接する市立第四中学校検出遺構群との関連を明らかにする目的で、昭和52年2月15日～3月18日まで調査を実施した。調査面積は約200㎡である。

検出遺構

調査の結果、寺城南・西辺溝の交点（南西隅）、竪穴住居跡1、土坑2、小穴多数が検出された。このうち竪穴住居跡は確認に止めた。

SD 23（図面Ⅰ-3・4、図版Ⅰ-5～7）

寺城西辺は底面が二段掘りされた素掘り溝で、上端幅2.3～2.9m、底面上段幅約1.4m、深さ約0.9mを計り、長さ15.3mを検出した。底面中央の下段掘りこみは幅約0.9m、深さ0.1mを計り、内部はロームブロックを主体とする土で埋め込まれている。同南辺は上端幅2.0m、底面幅0.7～0.95m、深さ0.8～0.9mの素掘り溝で、長さ約9mを検出した。両溝は、外壁がほぼ直角、内壁が円味をもって交わるが、とくに南辺溝の外壁は交点の東3mの地点から底面幅が広くなり、底面のレベルも変わるなど相違がみられ、交点部分を意識して掘削りしているようである。また、両溝とも一回以上の掘り直しが認められ、溝の上層（第1・2層）には多量の遺物が包含されている。

SK165・166（図Ⅰ-3、図版Ⅰ-7）

SK165は不正長方形の平面形を有し、長さ2.2m、幅0.7mを計る。SD23を壊して構築している。SK166は一辺1.5mの隅丸方形の平面形を有する。いずれも深さは20～27cmと浅い。

出土遺物

遺物は土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦、円面硯などがあり、コンテナ112箱の量が出土した。これらは主にSD23の第1・2層から出土したものである。ここでは、SD23出土遺物について記述することとし、表土出土遺物（図面Ⅰ-51～53、図版Ⅰ-37）については別表Ⅱ-2に示した。

SD23出土遺物（図面Ⅰ-40～50、図版Ⅰ-32～36）

遺物の大部分が溝上層（第1・2層）から出土しており、溝廃絶時に一括投棄されたものと考えられる。

土師器

坏・甕などがある。

坏（40-1・2） いずれも内面黒色処理されており、40-1は体部（二段）および底部を手持ちヘラ削り、40-2は底部を回転ヘラ削りしている。

甕（48-1） 「コ」字状口縁を有する「武蔵型」のものである。

須恵器

坏・皿・埴・長頸壺・甕などがある。

坏（40-3～15・48-2～6） 底径×3 > 口径 > 底径×2（南多摩窯跡群G 5 窯式相当）で器高が4 cm前後のもの（40-3～6・8・9、48-4）と、器高が5 cm以上の大型のもの（40-9～15）、口径 > 底径×2（南多摩窯跡群G 25 窯式相当）で器高が4 cm前後のもの（40-7、48-2）、口径 < 底径×2（南多摩窯跡群G 37 窯式相当）で器高が4 cm前後のもの（48-3・5）など、3類に分けられる。

皿（44-1・2） 高台付のもの（41-2）と無高台のもの（41-1）がある。

埴（41-3～5、48-7） 高台付のもの（41-3～5）と無高台のもの（48-7）とがあり、41-5は口径17.7 cm、底径7.3 cm、器高7.1 cmと大型である。48-7は外面に線刻がある。

長頸壺（41-6） 口・頸部の破片で口縁端部が直立し少し尖る。

甕（41-7） 口縁部の破片で口縁端部が直立し少し尖る。

施釉陶器

縁釉埴（48-8） 底径約9 cmと大型であり、断面方形の低い高台を有する。

瓦

鏡瓦、宇瓦、男瓦、女瓦などがある。

鏡瓦（43-1～5） 3種4型式があり、43-5のみ杏葉形の連続する間弁を有する。43-1は裏面に縄目叩きが残存する。43-4は中房に菱形の蓮子1個を配するもので、同範瓦が新久・八坂前窯跡から出土している。

宇瓦（41-11、42-1～5、48-9） 7種8型式があり、41-3は脇区界線がある古式の均正唐草文字瓦で、41-4・5は41-3の後続型式である。41-10は均正唐草文字瓦で、新久窯跡から同範瓦が出土している。また、48-9は範型による施文後文様を指でなぞっている。

男瓦（43-6、44-1～3、48-11・12、49-1、50-1・2） I₂-A₁技法（43-6）と、I₃-A₁技法（44-3、50-2）とがある。43-6・44-1～3の凹面に「寺」の墨書および朱墨書がある。

女瓦（45-1～5、46-1～6、47-1・2、48-10、49-2） II₁-A₁技法（45

－4・5、47－1・2、49－2）と、Ⅱ₁－B技法（46－3）とがあり、凸面は前者が全て縄目叩き、後者が格子目叩きである。49－2は狭端面にも縄目叩きが残存する。

2. 第31次調査

既に滝口宏氏によって調査が実施されているが、寺城南東隅の位置の再確認を目的に昭和52年3月24日～5月6日まで調査を実施した。国史跡指定地内に位置し、調査面積は約60㎡である。

検出遺構

調査の結果、寺城南・東辺溝の交点（南東隅）、小穴多数が検出された。

SD 23（図面Ⅱ－12、図版Ⅱ－15）

寺城南辺は底面が二段掘りされた素掘り溝で、上端幅約2.4m、底面上段幅約1.7m、深さ約0.75mを計り、長さ7.0mを検出した。底面中央の下段掘りこみは幅1.1～1.5m、深さ約0.1mを計り、東辺までおよんでいる。内部はロームブロックを主体とする土で埋め込まれている。同東辺は上端幅2.4m、底面幅1.8～2.1m、深さ1.0mの素掘り溝で、長さ9.7mを検出した。両溝は、外壁がほぼ直角、内壁がやや円味をもって交わることや、一回以上の掘り直しが認められるなど、南西隅と検出状態が共通する。溝の内・外両壁に検出された小穴は、溝に伴うものも確認されたが、性格は不明である。

出土遺物

遺物は再調査であったことから非常に少なくコンテナ2.5箱ほどが出土した。図示できたものは第Ⅰ・Ⅱ層出土の須恵器B埴、埴（図面Ⅱ－17、図版Ⅱ－23）のみであり、別表Ⅱ－2に示した。

3. 第43次調査

甲野勇氏等によって調査が実施されているが、寺城北東隅の位置の確認、および寺地北辺溝との関連を明らかにする目的で、昭和53年2月13日～3月1日まで調査を実施した。調査にあたっては、寺城北東隅部分をA地区、寺地北辺溝東延長部分をB地区とした。調査面積は合せて約80㎡である。

検出遺構

調査の結果、寺城北・東辺溝の交点（北東隅）、寺地北辺溝、小穴多数が検出された。

SD 23（図面Ⅱ－13、図版Ⅱ－16）

寺城北辺は底面が二段掘りされた素掘り溝で、上端幅約2.6m、底面上段幅1.6m、深さ約0.8mを計り、長さ5.0mを検出した。底面外壁寄りの下段掘りこみは幅約1.3m、深さ約0.35mを計り、東辺中央のそれと連なる。

同東辺も底面が二段掘りされた素掘り溝で、上端幅約2.3m、底面上段幅約1.5m、深さ0.85mを計り、長さ4.8mを検出した。底面中央の北辺から連なる下段掘りこみは幅0.75～1.2m、深さ0.1mを計り、南方向に幅が狭くなる。また、下段掘りこみは上段底面を含めてローム土で埋め込まれている。

両溝は内・外両壁ともに円味をもって交わり、他の三隅の形状と異なる。1回以上の掘り直しが認められる。

SD 63 (図面Ⅱ-13、図版Ⅱ-16・17)

底面が二段掘りされた素掘り溝で、上端幅1.8～2.3m、底面上段幅1.25～1.8m、深さ0.2～0.35mを計り、北東隅から東方約88.0m(金堂心東334.3m)まで確認した。底面の外壁寄りの下段掘りこみは、幅0.8～1.5m、深さ0.3mを計り、内部はローム土で0.05mほど埋め込まれている。寺域北東隅との接続状態は、外壁が寺域北辺外壁と一致し、寺域北・東辺の接点部分に一致する。このため接続部分は幅が広がっている。

出土遺物

遺物はコンテナ1箱ほどの量が出土したが、全て小破片で図示できるものはない。

4. 小 結

僧寺々域は、昭和50年に市公共下水道工事に伴う調査(第12次調査)で北西隅が検出されており、残る三隅の再調査によって寺域を区画するSD 23の四至が全て明らかになった。四隅曲折部の形状は、溝の内・外壁がともに円味をもって曲折するもの(北東隅)と、溝の内壁が円く、外壁が直角に曲折するもの(北西・南西・南東隅)とがあり、違いが認められる。ことに後者では、曲折部の外壁が意識的に整えられていることがうかがえる。このような四隅の形状の違いが築造当初からあったのか、再調査による制約で判然としないが、既発掘部分外の断面観察によれば、少なくとも一回以上の掘り直しが認められることから、築造当初の四隅の形状も当然変化⁽ⁱ⁾したことが考えられる。

溝外壁で測定した金堂心から四隅溝までの距離と、四辺の各辺長は次のとおりである。

四隅の金堂心からの距離 () 内天平尺

北西隅 W 103.66 m (350 尺)、N 260.30 m (879.5 尺)

南西隅 W 110.98 m (375 尺)、S 105.97 m (358 尺)

南東隅 E 246.46 m (832.5 尺)、S 129.16 m (436.5 尺)

北東隅 E 279.64 m (944.5 尺)、N 298.23 m (1007.5 尺)

四辺の辺長 () 内天平尺

北辺 385.17 m (1301 尺)

第3章 僧寺々域の調査

西辺 366.34 m (1237.5 尺)

南辺 358.19 m (1210 尺)

東辺 428.68 m (1448 尺)

以上のことから、僧寺は3町半～4町の不整形の寺域を有するものであることが判明した。

註(1) 昭和57・58年度に調査された寺地北東・南東の各隅曲折部は、寺域三隅のそれと同じ形状であったが、調査の結果曲折部内壁の円味は後の掘り直しによるものであることが判明した。したがって、寺域のそれも掘り直しの可能性が考えられる。

Ⅱ 寺域東辺部

1. 第32次調査

寺域東辺地域は、立川段丘上の大部分が宅地化して調査が困難であることから、武蔵野段丘南端において寺域東辺を明らかにする目的で、昭和52年4月8日～4月27日まで調査を実施した。調査面積は約38㎡である。

検出遺構

調査の結果、寺域東辺溝のみが検出された。

SD 23 (図面Ⅱ-12、図版Ⅱ-18)

底面が二段掘りの素掘り溝で、上端幅1.7～2.3m、底面上段幅1.5m、深さ0.7～1.0mを計り、長さ5.0mを検出した。底面中央の下段掘りこみは幅約1.0m、深さ0.1mを計り、内部は上段底面も含めてローム土(第5・6層)で埋め込まれている。一回以上の掘り直しが認められ、上層(第1層)に硬質面(SX3)が認められた。

出土遺物

遺物は、縄文土器・土師器・瓦などがあり、コンテナ6箱ほどの量が出土した。これらは全て小破片で、図示できたものは表土出土の瓦1点のみである。

表土出土遺物(図面Ⅱ-17、図版Ⅱ-23)

女瓦(17-6) 狭端・右側端面に縄目叩きを止めるⅡ₁-A₁技法のものである。

2. 小 結

調査の結果、武蔵野段丘上端において東辺溝(SD 23)を検出できたことは、東辺溝の位置の確定に新たな資料を加えることになった。また立川段丘上では、昭和52年度市公共水道工事に伴う調査(第35次調査)によって、国分寺崖線下寄りの位置で東辺溝の一部が検出されており、これらから寺域東辺溝の方位は、両段丘に差異は認められず、おおむね4°33'ほど西偏することが明らかになった。

Ⅲ 寺 域 西 辺 部

1. 第28次調査

昭和49年の市立第四中学校建設に伴う排水工事の際、講堂後方の推定沼地地域において断面調査された遺構が、僧寺々域西辺を画する築地跡と判断されていたことから、既往の調査で検出されている素掘り溝が、果して寺域を画する遺構なのかどうか再検討を余儀なくされていた。このため、築地と判断された遺構の実態を明らかにする目的で、昭和52年1月7日～3月5日まで調査を実施した。調査面積は、約200㎡である。

検出遺構

調査の結果、寺域西辺を含む溝跡2、掘立柱建物跡1、土坑1などが検出された。本調査地は先述したように黒鐘谷に位置することから遺構確認面（ⅣA層上部）まで深さ1.2mを計り、遺構の保存状態は良好であった。

SD 23（図面Ⅰ-1、図版Ⅰ-1～3）

上端幅2.5～2.9m、底面幅1.2～1.3m、深さ1.25～1.6mの素掘り溝である。底面は、暗灰色土（酸化鉄を含み、粘質でブロック状）を10cmほどの厚さに埋め込んでいる。二回以上の掘り直しが認められ（第5～6・7層、第6・7～8層の境）、溝の西壁寄り上層（6層）には多量の遺物が包含されていた。

SD 39（図面Ⅰ-1、図版Ⅰ-2上）

SB 39の南側に位置する上面幅3.1～4.75m、底面幅3.6m、深さ1.3mの東西素掘り溝である。長さ約7mを検出した。一部の断面調査に止めたため、性格は不明である。内部からは多量の鉄滓、炭化物等が出土している。

SB 39（図面Ⅰ-1・2、図版Ⅰ-1～3）

SD 23の西側に隣接して検出された東西2間2.8m、南北4間7.8mの南北棟掘立柱建物であり、低い土壇状遺構上にある。1回の建替えが認められ、A（古）期、B（新）期とする。

A期建物跡は、一辺0.6～0.9m、深さ0.6～0.75mの不整長方形ないしは方形の柱穴であり、柱穴2-1・3-1に柱痕跡が確認された。これ以外は全て、柱抜き取り穴を伴っており、内部は黄褐色粘土が多量に混入する。ことに柱穴3-2には黄褐色粘土の他に、須恵器大甕の破片が混入する。

B期建物跡は、A期建物とはほぼ同位置・同規模で建替えられている。一辺0.5～1.0m、深さ0.25～0.4mの不整長方形ないしは方形の柱穴であり、柱穴1-2・1-3に柱痕跡が確認されたが、これ以外は不明である。柱穴埋土は黄褐色粘土を多量に混入している。また柱穴1-3は瓦積みを壊して構築されている。

土壇状遺構は、ⅣA（茶褐色土）上層に黄褐色粘土を5～15cm貼った低い土壇状高まりで、上面（黄褐色粘土上面：2次床と仮称）と、下面（Ⅳ層上：1次床と仮称）とに分かれ、土壇北辺寄りに瓦積みと大型土坑（SK 163）、柱穴3-2B期抜き取り穴に接する須恵器大甕を伴っている。

瓦積みは、SK 163に接する部分（長さ5.3m）を女瓦を主体に男瓦・宇瓦などを用いておおむね5枚ほど積み重ねている。須恵器大甕は、径0.8m、深さ0.4mの円形土坑に据えつけられており、上半部はA期建物の柱穴3-2抜き取り穴によって壊されている。また土壇状遺構東・西・南部分のⅣA上層中からフイゴ羽口片・鉄滓・炭などの鍛冶関係遺物が出土しており、SB 39下層に鍛冶関係の遺構の存在が推察される。

SK 163（図面Ⅰ-1・2、図版Ⅰ-4）

土壇状遺構瓦積みに接して位置する。長辺約5.55m、短辺約3.3m、深さ約0.9mの不整長方形であり、中央に長辺5m、1.8mの長方形掘りこみがある。長方形掘りこみ東辺側の瓦積みに接する部分は、ほぼ平坦で、瓦積み上面までの高さは30～35cmほどである。

出土遺物

遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、風字硯、瓦、フイゴ羽口、鉄製品など、コンテナ196箱ほどの量が出土した。中でも瓦が総量の大部分を占め、主としてSD 23上層・SB 39土壇状遺構から多く出土した。ここでは、SD 23・SB 39・SK 163・第ⅣA層出土遺物について記述することとし、表土・第ⅡA層・第ⅢA層出土遺物については別表Ⅰ-2に示した。

SD 23 出土遺物（図面Ⅰ-14～16、図版Ⅰ-16・17）

溝の西側（SB 39）から、流れ込んだ状態で第6・7層を中心に出土した。とくにSB 39との接合関係が2例認められた。

土師器

坏（15-6） 体部下半および底部を手持ちへら削りする「南武蔵型」の坏である。

須恵器

坏・壺・蓋などがある。

坏（14-1～3、15-1・7） 口径<底径×2（南多摩窯跡群G 37窯式相当）で器高が3～4cmのもの（14-1～3）、口径>底径×2（南多摩窯跡群G 25窯式相当）で器高が4cm前後のもの（15-7）、底径×3>口径>底径×2（南多摩窯跡群G 5窯式相当）で器高が5cm前後のもの（15-1）など、3類に分けられる。

壺（15-8・9） 高台付のもの（15-9）と無高台のもの（15-8）があり、15-8の底部は回転糸切り後周縁をへら削り調整している。

蓋（15-10） 扁平化した擬宝珠状のつまみを有する。

灰釉陶器

皿（15-2） 断面三日月形の高台を有するもので、内面のみ刷毛塗りによる施釉を行っている。K 90 窯式に相当するものと考えられる。

瓦

鏡瓦・宇瓦・男瓦・女瓦などがある。

鏡瓦（15-3） 蓮弁は剣先状の輪郭線の内部が高く盛り上る形状のもので、間弁はなく、同範瓦が新久窯跡から出土している。

宇瓦（14-4、15-11） いずれも右行する偏行唐草文字瓦である。14-4は同範瓦が南比企窯跡群（泉井）より出土している。15-11は凹面に「比企」のヘラ書き文字があり、同範瓦が高岡廃寺跡から出土している。

男瓦（16-1・2） I_3-A_1 技法のもので、16-1はSB 39土壇状遺構1次床上面出土と接合関係にある。16-2は凹面に「寺」の朱墨書がある。

女瓦（14-5、15-4・5、16-3～5、24-1） 凸面が平行叩き目のもの（14-5）以外は、郡名文字瓦である。中でも24-1は、凸面に「比企」の文字が墨書されている。

SB 39 出土遺物（図面I-6～13、図版I-9～15）

SB 39は、IV A層（1次床）に黄褐色粘土を貼った（2次床）低い土壇状遺構上にあり、この土壇状遺構中から多量の瓦が出土した。これらの中には、SK 163最下層（6層）と接合関係がみられるものがある。また特筆すべきものとして円形土坑内に据えつけられた須恵器大甕がある。

須恵器

図示できたものは、蓋、大甕のみである。

蓋（6-1・2） 擬宝珠状のつまみを有するもので、口縁端部がやや直立し先端が尖る。

大甕（6-4） 口径56.7cm、胴部最大幅81.0cm、器高93.9cmを計り、ほぼ完形である。

灰釉陶器

壺（6-3） 三日月形の高台を有するもので、内面のみ刷毛塗りによる施釉を行っている。K 90 窯式に相当するものと考えられる。

瓦

宇瓦・男瓦・女瓦などがある。

宇瓦（6-5・6、7-1・2） 4種4型式がある。6-5は凸面に正格子の叩きを有する三重弧文字瓦で、施文方法は範型を使用する。6-6は文様左隅に「父瓦作」と判読される文字を配する特異文字瓦である。7-1・2はいずれも左行する偏行唐草文字瓦で、7-1の女瓦部凹・凸面には「豊」の押印文字がある。

男瓦（8-1～3） I_2-A_1 技法（8-1・2）と、 I_3-A_1 技法（8-3）とがあり、8-3の凹・凸両面には各々「大家」のヘラ書き文字、「寺」の朱墨書がある。

女瓦（8-4、9-1・2、10-1・2、11-1～3、12-1・2、13-1・2、32-2、36-2）Ⅱ₁-A₁技法（10-1）と、Ⅱ₁-B技法（9-1、10-2、13-1、32-2）とがあり、12-1・2もⅡ₁-B技法の可能性はある。11-2は土壇状遺構1次床上面とSK 163最下層（第6層）の接合資料である。

SK163 出土遺物（図面Ⅰ-17・18、図版Ⅰ-18・19）

須恵器

坏（17-1） 口径<底径×2で、南多摩窯跡群G 37 窯式に相当する。

瓦

女瓦（17-2・3、18-1・2）Ⅱ₁-B技法のもの（18-2）がある。17-2は広端左側部分を隅切りしている。

第ⅣA層出土遺物（図面Ⅰ-25・38、図版Ⅰ-21・31）

遺構の検出はⅣA上層部分で行ったが、SB 39下では鍛冶遺構の存佐が予想されることから、この部分のⅣA上層は整地層の可能性が高い。したがってⅣA層出土遺物は鍛冶遺構に伴うものと考えられる。図示できたものは須恵器坏、宇瓦のみである。

須恵器

坏（38-3） 口径15.3 cm、器高3.4 cmを計り、底部は全面回転ヘラ削りを施す。東金子窯跡群前内出2'窯式に相当する。

瓦

宇瓦（38-7） 施文方法が範型による三重弧文字宇瓦である。

2. 小 結

調査の結果、築地と判断された遺構はSD 23、SB 39、SK 163の各遺構を同一の遺構と判断したことによる誤認であることが判明し、寺域を区画する遺構が素掘り溝（SD 23）であることが改めて確認された。

新たに検出された遺構は、検出状況や出土遺物の接合関係から大略3期に分けられる。

第Ⅰ期

SB 39下層に推定される鍛冶関係遺構と、方位が僧寺中軸線と一致するSD 23が併存する。該期はⅣA上層およびSD 23第8層出土遺物から、8c後半～9c中頃の年代が考えられる。

第Ⅱ期

小2期に分けられる。Ⅱ-1期は鍛冶関係遺構を整地し、僧寺中軸線から6°東偏するSB 39Aが造営される。SB 39Aは、柱穴3-2、SK 163の断面観察から当初は整地層上を床とし（1次床）、SK 163および瓦積み、須恵器大甕を併設するものであったが、後に黄褐色粘土を用いて

床を改造している（2次床）ことが判明した。SD 23はSB 39 A造営時に1回目の掘り直しが考えられる。

Ⅱ-2期は、SB 39 Aと同位置、同規模でSB 39 Bが造営される。須恵器大甕はA期（柱抜き取り穴）に壊されるが、SK 163、瓦積みは、引き続き併存する。

Ⅱ-1・2期は、SB 39 1・2次床上面およびSD 23第6・7層出土遺物から、9c中頃～10c中頃の年代が考えられる。

第Ⅲ期

SB 39 Bが廃絶し、SD 23のみとなる。SD 23は、SB 39 B廃絶時前後に2回目の掘り直しが行われている。該期は10c中頃以降の年代が考えられる。

このような変遷をたどるSB 39の性格については判然としないが、瓦積みが護岸的な機能を果たしていることから、SK 163は水溜めの可能性があり、さらに須恵器大甕の存在は、SB 39が水に関連した施設であったことをうかがわせる。

Ⅳ 寺域北辺部

1. 第33次調査

僧寺中軸線と北辺との交点部分の状況把握を目的に、昭和52年3月22日～5月10日まで調査を実施した。調査にあたっては、ほぼ中軸線上に位置する薬師堂を挟んで東側をA地区、西側をB地区とした。調査面積は、A・B両地区合わせて214.5㎡である。

検出遺構

調査の結果、北辺溝、土坑1、集石跡1などが検出された。土坑・集石跡は縄文時代のものである。

SD 23 (図面Ⅱ-14・15、図版Ⅱ-19～21)

底面が二段掘りの素掘り溝で、上端幅2.1～3.1m、底面上段幅1.2～1.6m、深さ0.5～1.0mを計り、延長14mを検出した。底面北壁寄りに下段掘りこみがあり、幅約0.8m、深さ0.1～0.2mを計る。内部はロームブロックを主体とする土で埋め込まれている。また、A地区では上層部に幅1.5mの硬質面(SX3)が検出されたが、性格は不明である。

SK 170 (図面Ⅱ-15)

径約0.9m、深さ0.24mの不整円形の土坑である。

SS 20 (図面Ⅱ-15、図版Ⅱ-21)

長軸1.3m、短軸1.0mの楕円形土坑の内部中央に径40cmの石を据え、上面にスタンプ状石器を含む、径10cm大の礫を配している。礫の大半は焼けている。

出土遺物

遺物は、須恵器、土師器、瓦、鉄製品、縄文土器・石器などがあり、コンテナ91箱ほどの量が出土している。これらの大半は瓦が占めており、昭和になって掘られたと思われるA地区の瓦溜めから出土した。

SD 23 (SX 3) 出土遺物 (図面Ⅱ-27、図版Ⅱ-31)

須恵器

坏(27-1・2) 口径≒底径×2(南多摩窯跡群G59窯式相当)のもの(27-1)と、口径≒底径×3(同G14窯式相当)のもの(27-2)とがある。

表土(瓦ダメ) 出土遺物 (図面Ⅱ-27～34、図版Ⅱ-31～36・40・41)

瓦

宇瓦、男瓦、女瓦などがある。

宇瓦(27-3～5) 2種3型式がある。27-3・4は三重弧文字宇瓦、27-5は均正の蓮華文字宇瓦である。

男瓦（27-6～10、28-1～4、33-8・9） I₂-A₁技法（27-6・9、28-2、29-3）、I₃-A₁技法（27-7・8・10、28-4）、I₃-B技法（29-1）など、3類に分けられる。これらの中には、側端面に分割時の糸切り痕を止めるもの（27-6・8）や、凹面に「寺」の朱墨書がみられるもの（29-3）などがある。

女瓦（29-2、30-1・2、31-1・2、32-1～4、33-1～7） I-B技法（32-1）、II₁-A₁技法（30-1・2、31-1・2、32-2～4、33-4、34-1・3～6）、II₂-B(?)技法（33-5）などがある。II₁-A₁技法では、凹面に「寺」の朱墨書、および「七」・「大」・「干」などの模骨文字が記される例が多くみられる。また、II₂-B(?)技法の33-5は、東国に類例が少ない特殊な技法の女瓦であり、上総出土のものに、胎土、焼成、手法などが著しく共通する⁽¹⁾。今のところ武蔵国分寺からはこれを含め2点が出土している。

鉄製品

釘（27-11～13） 折曲頭形の角釘である。

2. 小 結

調査の結果寺域北辺溝を検出できたことは、第12次調査地（寺域北西隅）～第43次調査地（寺域北東隅）間における北辺溝の位置確定に新たな資料を加えることになった。調査によって得られた寺域北辺の方位は、中軸線西側（第12～33B調査地間）と同東側（第33A～43次調査地間）で、各々7°45'・5°01'西偏（南北方位に換算）し、2°ほど異なることが判明した。

註(1) この種の瓦は、千葉県所在の大椎廃寺跡・光善寺廃寺跡（大川 1957）・木下別所廃寺跡（滝口他 1978・1979）、曾谷ノ窪瓦窯跡（滝口他 1980）、神奈川県所在の影向寺跡（影向寺文化財調査委員会 1982）などから出土しており、これらと著しく共通する。武蔵国分寺の2点は現代の瓦溜めと表土から出土しており、遺構に伴うものはない。したがってこの種の瓦が武蔵国分寺で使用された可能性は非常に薄いと考えられる。

V 寺域南辺部

1. 第30次調査

寺地南辺の位置を明らかにする目的で、昭和52年1月20日～2月14日まで調査を実施した。調査地は国史跡指定地内に位置し、調査面積は約78㎡である。

検出遺構

調査の結果、寺地南辺溝、小穴多数が検出された。

SD 23 (図面Ⅱ-16、図版Ⅱ-22)

上端幅約3m、底面幅1.3～1.55m、深さ1.1～1.2mの素掘り溝で、底面はロームブロックを主体とする土で5～10cm埋め込まれている。一回以上の掘り直しが認められる。溝北壁寄り上層に幅0.5～0.8mの硬質面(SX3)が認められ、上面には多量の土器が投棄されていた。

出土遺物

遺物は、土師器、須恵器、甕(転用硯)、瓦、砥石などがあり、コンテナ7箱ほどの量が出土した。これらは主にSD23上層(A層)から出土したものである。ここではSD23出土遺物について記述することとし、表土出土遺物(図面Ⅱ-36)は別表Ⅱ-2に示した。

SD 23 出土遺物 (図面Ⅱ-35・36、図版Ⅱ-37・38)

土師器

坏・碗・甕などがある。

坏(35-20) 推定口径10.3cm、器高3.2cmを計り、須恵器Bの焼成に近い。

碗(36-2) 内面を黒色処理する口径16.0cm、器高5.8cmの大型品である。体部下半および底部を手持ちヘラ削りする。

甕(36-3) 口縁部が厚味を増して外反するもので、胴部上半は縦ヘラ削りする。

須恵器

坏・皿・甕がある。

坏(35-1～19、36-4) 底径×3>口径×底径×2で、南多摩窯跡群G5窯式相当のもの(35-1～5・7・10・11)と、同G14窯式相当のもの(35-6・14)とがある。その他は全て須恵器Bの土器で、G14窯式以降の所産と考えられる。この中で35-17・18は厚手の底部を有する土師質の土器である。

皿(36-1) 高台付皿であり、口縁端部が強く外反する。南多摩窯跡群G5窯式相当のものである。

甕(36-5) 外面に平行の叩き目を止める体部小破片の転用硯である。

瓦

鍔瓦・女瓦などがある。

鍔瓦（36－11・12） 2種2型式がある。36－11は無間弁の八葉蓮華文鍔瓦である。36－12は、無間弁の六葉蓮華文鍔瓦と考えられ、瓦当裏面に縄目叩きを止める。

女瓦（36－10・13） いずれもⅡ₁-A₁技法のものである。

砥石

砥石（36－6） 大型品で石質は凝灰岩である。

2. 小 結

調査の結果、寺地南辺溝（SD 23）を検出できたことは、第29次調査地（寺城南西隅）～第31次調査地（寺城南東隅）間における南辺溝の位置の確定に新たな資料を加えることになった。調査によって得られた寺城南辺の方位は、第29次調査地（寺城南西隅）～第30次調査地間が2°40′東偏（南北方位に換算）し、第30次調査地～第31次調査地間が4°24′東偏（南北方位に換算）する。このことから、中軸線を境に東・西両側では南辺溝の方位が多少異なることが推察される。

第4章 ま と め

武蔵国分寺跡は、滝口宏氏によって東西8町、南北5町の寺地内に、僧・尼両寺域が計画的に配置されたことが想定されている。

昭和51～53年度にかけて実施された寺域確認調査は、この想定寺地・僧寺々域を究明しようとするものであった。調査の詳細は既述したとおりであるが、以下調査の成果について概括しておきたい。

寺地は、北辺を画するSD 42・63と、南辺を画するSD 17が想定どおり検出された。これによって、寺地の南北は僧寺中軸線上のSD 17からSD 23（僧寺々域北辺）まで552mほどであることが明らかになった。一方寺地の東・西は、今日まで各々の区画遺構が未検出であり、想定域を出ないものであったが、この内寺地西辺については、第48次調査地内で寺地北辺西側を画するSD 42が終わることが確認されたことで、想定寺地西辺の存在が疑問視されるに至った。したがって、寺地西辺を画する遺構の究明が今後の課題となった。これについては、昭和53年度に僧・尼両寺中間地域において南北道路跡（SF 1）が検出されたことで手掛りの一端がつかめており、⁽¹⁾今後の調査で明らかにされるものと考えられる。

また、寺地南辺（SD 17）は、周辺の調査成果からその築造時期を一応9C前半代に置くことが想定された。これによって、従来同一時期と理解されている僧・尼両寺域と寺地の設置時期に時間差があることが明らかになり、一方では、溝の設置時期と寺地内に位置する市立第四中学校検出遺構群の出現時期とが符号することから、寺地の設置（拡張）と併せて寺地内の計画的な整備が行われた可能性が類推される。

僧寺々域は、昭和49年の市立第四中学校建設に伴う排水工事の際、講堂跡北西地点で断面調査された遺構が築地と判断されていたことで、この遺構の解明が重要課題であった。これについては、調査の結果、寺域西辺溝の西側に隣接して造営された掘立柱建物等を見誤ったものであることが明らかにされ、素掘り溝をもって寺域の区画遺構とする従来の見解が正しいことを裏付ける形となった。

以後実施された調査の結果、寺域の北・西・南・東の各辺は、各々385.17・366.34・358.19・428.68mであることが明らかになり、これによって僧寺々域の規模が確定した。

また、講堂跡北西地域は周囲より一段低くなっており、従来から沼地と推定された場所であったが、大型土坑・須恵器大甕を伴う掘立柱建物の検出は、この低地（黒鐘谷）が治水対策によって積極的に活用されたことを物語っているものと言えよう。

寺域を画するSD 23は、どの調査地においても一回以上の掘り直しが認められたが、その時期

第4章 まとめ

を明らかにするにはいたらなかった。しかしながら、溝の築造方法について、底面を二段掘りする例が多いことや、底面をロームブロックを主体とする土で15 cmほど埋め込むこと、などの特徴が明らかになったことは、武蔵国分寺の調査で数多く検出される素掘り溝の性格究明に一つの手掛りを与えることになった。

以上述べたように、昭和51～53年度調査では僧寺々域が判明するなど、武蔵国分寺の解明にとって貴重な成果を得ることができた。と同時に、新たに提示された検討課題も少なくない。今後の調査の進展に期待したい。

註(1) 僧・尼両寺中間地に位置する第68次調査地において尼寺々域東辺溝とともに検出されたSD 76・83は、僧寺中軸線から $8^{\circ}40'$ ほど東偏して南北に並走するもので、同様の遺構が南延長線上に位置する府中市東芝エンジニアリング府中営業所内でも検出されている(府中市遺跡調査会1980)。これらの遺構は、竪穴住居や掘立柱建物などが重複しない空白地になっていることから、東・西に側溝(各々SD 83・76)を伴う幅(溝心心)11.5～12 mの道路跡(SF 1)と考えられる。さらに、第48次調査地検出のSD 50も、位置・溝の形状などからSF 1の東側溝の一部に当るものと考えられる。これらからSF 1は、僧・尼両寺中間地域を縦断するように第48次調査地から東芝エンジニアリング府中営業所内まで約740 m検出されたことになり、寺地西辺を画する遺構として有力視される。

引用・参考文献

- 愛知県陶磁資料館 1983 『シンポジウム「平安時代の土器・陶器—各地域の諸様相と今後の課題—」の記録』
愛知県陶磁資料館研究紀要2
- 大川清 1957 「上総光善寺廃寺」 『古代』第24号 早稲田大学考古学会
- 小川良祐他 1974 『前内出窯址発掘調査報告書』 埼玉県遺跡調査会報告第24集 埼玉県遺跡調査会
- 坂詰秀一 1971 『武蔵新久窯跡』 雄山閣
- 坂詰秀一他 1980 「特集 武蔵国分と国分寺」 『文化財の保護』第12号 東京都教育委員会
“ 1981 『武蔵・八坂前窯跡—第Ⅱ次調査概報』 立正大学考古学研究室
- 高橋一夫他 1978 『高岡寺院跡発掘調査報告書』 高岡寺院跡発掘調査会
“ 1982 『埼玉県古代寺院跡調査報告』 埼玉県史編さん室
- 滝口宏 1966 『武蔵国分寺図譜』 国分寺市教育委員会
“ 1968 「武蔵国分寺址調査私見」 『日本歴史考古学論叢2』
- 滝口宏他 1978 『木下別所廃寺跡第1次発掘調査概報』 千葉県教育委員会・木下別所廃寺跡調査会
“ 1979 『木下別所廃寺跡第2次発掘調査概報』 千葉県教育委員会・木下別所廃寺跡調査会
“ 1980 『曾谷ノ窪瓦窯跡発掘調査概報』 千葉県教育委員会・曾谷ノ窪瓦窯跡調査会
- 東京都国分寺市 1975 『震災対策基礎調査報告書（地形・地質・地盤編）』
- 植崎彰一・斎藤孝正 1981 「猿投窯編年の再検討について」 『シンポジウム「平安時代の土器・陶器」発表
要旨』 愛知県陶磁資料館
- 服部敬史・福田健司 1979 「南多摩窯址群出土の須恵器とその編年」 『神奈川考古』第6号 神奈川考古同
人会
“ 1981 「南多摩窯址群における須恵器編年再考」 『神奈川考古』第12号 神奈川考古
同人会
- 服部敬史 1982 「南武蔵における古代末期の土器様相」 『東京考古』第1号 東京考古談話会
- 服部敬史他 1983 「シンポジウム奈良・平安時代土器の諸問題」 『神奈川考古』第14号 神奈川考古同人会
- 府中市遺跡調査会 1980 『武蔵国府の調査Ⅻ』 府中市教育委員会
- 武蔵国分寺遺跡調査団 1979 『武蔵国分寺遺跡調査会年報1979—武蔵国分寺跡—』 武蔵国分寺遺跡調査会・
国分寺市教育委員会
“ 1978 『都道17号線道路補修および歩道設置工事に伴う発掘調査報告』 武蔵国分寺
遺跡調査会・東京都北多摩北部建設事務所
“ 1981 『武蔵国分寺遺跡調査概報Ⅴ』 武蔵国分寺遺跡調査会・国分寺市教育委員会
“ 1982 a 『武蔵国分寺遺跡調査概報Ⅵ』 武蔵国分寺遺跡調査会・国分寺市教育委員会
“ 1982 b 『武蔵国分寺遺跡調査概報Ⅶ』 武蔵国分寺遺跡調査会・国分寺市教育委員会
- 矢島恭介 1959 「武蔵国分寺跡発掘調査概要（昭和三十三年度）」 『考古学雑誌』第44巻 第33号
- 影向寺文化財調査委員会 1982 『川崎市高津区野川影向寺文化財総合調査報告書』 川崎市教育委員会

別表 1

検出遺構一覽

調査地	図面図版	遺構番号	内容	
第28次調査	図面 2 図版 1～3	SB 39	位置 方向 規模 柱間寸法 柱穴の形状 柱穴の深さ 備考	N 76.58 m, W 118.44 m。 南北棟。N-5°30'-E。 桁行4間7.8m×梁行2間2.8m。 桁行1-1～1-3(2.1m), 1-3～1-5(1.8m)等間。 梁行1.4m等間。 長方形。 A期63～75cm。B期26～42cm。 A・Bの2時期を確認。古い方をA期、新しい方をB期とする。A期には土壇状遺構・埋甕・SK163土坑が同時存在したと考えられる。SK163土坑東縁に南北5.3mの瓦積みがある。使用されている瓦は女瓦を主体とした宇瓦・男瓦等である。いずれも凸面を上にし、5枚を積み重ねる。埋甕は東側桁行掘形3-2の北に接して、0.4m土壇状遺構を掘り込み、須恵器大甕を埋め込む。A期抜き取りを行った時点で上部が壊れ柱穴3-2中に混入する。柱穴2-1・3-1にA期の柱痕跡、1-2・1-3にB期の柱痕跡を確認。
	図面 1 図版 1～3	SD 23	位置 上端幅 底面幅 深さ 形状 硬質面の有無 備考	N 72.0～90.0 m, W 110.5 m。 2.46～2.93 m。 1.18～1.3 m。 1.25～1.59 m。 逆台形。 なし。 底面は二段掘りで、ロームブロックを主体とする土で人為的に埋められている。 僧寺々域西辺溝。
	図面 1	SD 39	位置 上端幅 底面幅 深さ 形状 硬質面の有無 備考	N 71.9 m, W 113.7～120.6 m。 3.12～4.75 m。 3.6 m。 1.3 m。 逆台形。 なし。 西側一部の確認を行う。覆土に多量の鉄滓・炭化物等を含む。
	図面 2 図版 4	SK 163	形状 規模 備考	不整長方形。 長軸5.55m×短軸3.27m, 深さ0.9m。 土壇状遺構と共にSB 39 A期に伴う。

調査地区	図面版	遺構番号	内 容	
第29次調査	図面4 図版5～7	SD 23	位置 上端幅 底面幅 深さ 形態 硬質面の有無 備考	S 118.2～134.1 m, W 102.2～111.9 m。 2.03～2.92 m。 0.8～1.4 m。 64～100 cm。 U字状。 なし。 底面は二段掘りで、ロームブロックを主体とする土で人為的に埋められている。 僧寺々城南西溝。
	図面3	SI 122	位置 方向 平面形・規模 カマド 壁 ピット 周溝 床 備考	S 121 m, W 117.5 m。 N-2°-W。 方形?南北(1.4 m)×東西2.1 m。 西壁? 不明。 なし。 不明。 床面のみ残存。
	図面3	SK 165	形状 規模 備考	不整長方形。 長さ2.2 m×幅0.7 m, 深さ0.27 m。 SD 23 溝跡よりも新しい。
	図面3 図版7	SK 166	形状 規模 備考	隅丸方形。 長さ7.2 m×幅6.7 m。
第86次調査	図面5 図版8	SD 17	位置 上端幅 底面幅 深さ 形態 硬質面の有無 備考	S 305.6 m, E 227.2～240.1 m。 2.1 m。 0.8 m。 40～61 cm。 逆台形。 なし。 寺地南辺北溝。
	図面5	SD 82	位置 上端幅 底面幅 深さ 形態 硬質面の有無 備考	S 307.4～400.6 m, E 227～239.8 m。 1.6～2.0 m。 0.3～0.6 m。 42～58 cm。 U字状。 なし。 近世の溝跡である。

別表 2

出土遺物一覽

第 28 次 調 査 出 土 遺 物

S B 39 掘立柱建物跡 土器一覽

図面 図版	種別 器形	出土 位置	法 量	器形の特 徴	成・整形の特 徴	備 考
6-1 図版 9	須一蓋	2次床 上面	17.0 4.3	平偏化した宝珠形つまみを有する天井部より口縁部にかけて内彎する。口唇部はやや外方へ開く。	粘土紐巻き上げ後ロクロ整形。天井部を回転ヘラ削り。つまみ、口縁部を横ナデ。	完形品。内面に朱墨附着。転用硯。海綿骨針含む。
6-2 図版 9	須一蓋	1次床 上面	20.7 6.3	宝珠形つまみを有する天井部より内彎して外上方へ開く。口唇部は内傾する。	粘土紐巻き上げ後ロクロ整形。天井部を回転ヘラ削り。つまみ、口縁部を横ナデ。	口縁部の一部欠失。
6-3 図版 9	灰釉一壺	2次床 中	18.2 5.2 7.6	三日月形の高台を有する底部より口縁部下まで内彎し、口唇部は強く外彎する。	ロクロ整形。底部全面を回転ヘラ削りし、高台部を横ナデ。口縁部横ナデ。施釉は内面のみ刷毛塗り。	1/3 残存。底部に「一」のヘラ記号。釉は黄緑色。
6-4 図版 9	須一甕	埋 甕	56.7 93.9 胴 幅 81.0	く字状に開く口縁部から肩部にかけて強く張り、胴上部に最大径がある。底部は砲弾形をなす。	叩きは頸部を除く外面全体に施される。全内面アテ具痕有り。接合箇所は丁寧にナデを行う。頸部外面に4条の波状文が施される。	大型甕。自然釉附着。

S B 39 掘立柱建物跡 宇瓦一覽

図面 図版	出土 位置	寸 法				内 区		外 区				脇 区		文様 長さ	全長	備 考
		上弦 弧幅	下弦 弧幅	弧深	厚さ	厚さ	文様	上		下		幅	文様			
		厚さ	文様	厚さ	文様											
6-5 図版 10	1次床 上面 2次床 中	27.8	27.4	3.8	3.55		G					4.9		0.45	33.2	頸F ₁ -b。文様は范型+ナデ。布目21×21。
6-6 図版 11	瓦積み	25.6	26.2	2.7	5.3	4.2	O			1.1	a	5.1	a	0.2	18.4	頸F ₂ -a。文様面左端に「父」・「園」の文字。黒色スコリア状物質・海綿骨針含む。一部自然釉附着。布目18×12。
7-2 図版 12	瓦積み	24.9	23.4	4.2	5.2	3.7	HK	0.4	a	1.0	a	4.85	a	0.2	29.1	頸G ₁ -a。海綿骨針含む。一部自然釉附着。布目19×20。
7-1 図版 13	1次床 上面	24.9	25.6	3.6	6.25	4.9	HK	0.6	a	0.75	a	6.6	a	0.3	31.4	頸G ₂ -a。海綿骨針・黒色スコリア状物質含む。凹凸両面に「豊」の押印。布目18×18。

S B 39 掘立柱建物跡 男瓦一覽

図面 図版	出土 位置	寸 法				成・整形の特 徴							備 考		
		狭端	広端	全長	厚さ	凹 面		凸 面		端 面					
		素 材	布 目	特 徴	叩 き	特 徴	特 徴								
8-1	1次床 上面 2次床 中		11.7	34.0	1.5	粘土紐	18×21	粘土紐接合部分を一部指ナデ。広端・右側端縁をヘラ削り。		板状工具による回転ナデ後、縦方向に指ナデ。広端・左側端縁を幅広くヘラ削り。		左側端を指ナデ。広端は指ナデ後ヘラ削り。	広端隅落し。布合せ目Sa。海綿骨針・黒色スコリア状物質含む。		
8-2 図版 9	1次床 上面		8.5	30.0	1.7	粘土紐	21×25	左右両側端縁を幅広くヘラ削り。		全面を板状工具による回転ナデ。		広端・左側端をヘラ削り。右側端をナデ。	広端隅落し。布合せ目。黒色スコリア状物質含む。		

図面 図版	出土 位置	寸法				成・整形の特徴							備考
		狭端	広端	全長	厚さ	凹面			凸面		端面		
						素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴		
8-3	1次床 上面		15.8	30.0	1.2	粘土紐	28×26	広端・左側端縁を幅広くへら削り。	縄目L	全面を板状工具による回転ナデ。広端縁を部分的にへら削り。	広端・右側端をへら削り。	凸面に「大家」のへら書き。赤色スコリア状物質含む。	

S B 39 掘立柱建物跡 女瓦一覽

8-4	1次床 上面			32.0	2.5	粘土板	21×24	右側端・狭端縁を幅広くへら削り。	縄目L	無調整。	狭端は指ナデ。右側端は指ナデ後へら削り。	凹面に「父」の押印。海綿骨針・黒色スコリア状物質含む。
9-1 図版10	1次床 上面	16.3	18.4	41.5	2.9	粘土板	18×21	狭端付近をへらナデ。左右両側端縁をへら削り。	縄目L 7本	無調整。 叩き締めA ₁ 。	全面をへら削り。	凹面に「豊」のへら書き。海綿骨針・赤色スコリア状物質・黒色スコリア状物質含む。
9-2 図版11	1次床 上面	26.1	10.45	31.6 37.9		粘土板	21×21	全端縁を幅広くへら削り。	縄目L	無調整。 叩き締めA ₁ 。	全面をへら削り。	凹面に布はころび有り。凹面中央に「父」のへら書き。
10-1 図版12	1次床 上面	22.8	23.6	37.6	1.7	粘土板	18×19	全端縁をへら削り。	縄目L 10本	無調整。 叩き締めB。	左側端を指ナデ後へら削り。他の3端は指ナデ。	凹面に「+」のへら書き。
10-2	1次床 上面 2次床 上面	24.0	27.3	36.0	1.5	粘土板	21×23	全端縁を幅狭くへら削り。	縄目L 8本	無調整。 叩き締めA ₁ 。	狭端をへら削り。他の3端は指ナデ。	広端面にワラ状圧痕。海綿骨針含む。
11-1 図版13	1次床 上面	14.9	26.0	35.0	2.1	粘土紐	18×15	部分的に指ナデ。狭端縁を幅狭く、他の3端縁は幅広くへら削り。	正格子	無調整。	左側端は指ナデ後へら削り。他の3端は指ナデ。	凸面に「父」の押印。赤色スコリア状物質含む。
11-2 図版14	1次床 上面 SK163 最下層	24.6	11.3	31.9	1.5		23×21	全端縁を幅広くへら削り。	斜格子	無調整。 叩き締めA ₂ 。	全面をへら削り。	凸面に「多」の押印。黒色スコリア状物質含む。一部自然釉付着。
11-3	1次床 上面		13.1	13.2	2.1	粘土板	18×18	左側端・広端縁を幅広くへら削り。	縄目L	無調整。	広端をへら削り。	凹面に「棟」の押印。赤色スコリア状物質含む。
12-1	1次床 上面	25.2	18.6	37.1	2.2	粘土板	24×21	広端を除く3端縁をへら削り。	正格子	無調整。 叩き締めA ₁ またはA ₂ 。	全面をへら削り。	海綿骨針・少量の黒色スコリア状物質含む。一部自然釉付着。
12-2 図版14	埋壘上	26.0	28.9	38.4	2.1	粘土板	30×27	全端縁を幅狭くへら削り。	正格子	狭端縁をへら削り。 叩き締めA ₁ 。	全面をへら削り。 自然釉付着。海綿骨針含む。	凹面に「入瓦」のへら書き。右側端縁に布末端。
13-1 図版15	1次床 上面	25.4	12.5	39.3	2.25	粘土板	21×22	広端縁を幅狭く、他の3端縁は幅広くへら削り。	正格子 (粗)	叩き締めB後両側端補足の叩き。	全面をへら削り。	凹面に「口窓」のへら書き及び布末端。海綿骨針含む。
13-2 図版15	1次床 上面	28.1	21.2	39.1	2.7		31×26	一部を指ナデ。広端・狭端縁幅広くへら削り。	正格子 (粗)	板目叩き後正格子叩き(叩き締めA ₁)。	全面をへら削り。	凹面に「父」のへら書き及び布継ぎ目。海綿骨針・黒色スコリア状物質含む。

S D 23 溝跡 土器一覽

図面 図版	種別 器形	出土 位置	法量	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
14-1 図版16	須A-坏	1層 2層 3層	11.45 4.0 6.3	やや上げ底の底部より内彎気味に立ち上る。体部上半から口縁部にむかって直線的に開く。	ロクロ整形。底部回転糸切り。体部及び口縁部内外面を横ナデ。	体部の3/4欠失。黒色スコリア状物質含む。
14-2 図版16	須A-坏	6層 7層	11.7 3.2 6.5	厚手の底部より僅かに内彎気味に立ち上り、口唇部は肥厚する。	粘土紐巻き上げ後ロクロ整形。底部回転糸切り。体部及び口縁部内外面を横ナデ。	体部の1/3欠失。黒色スコリア状物質含む。
14-3 図版16	須A-坏	8層	12.6 3.3 7.6	やや上げ底。体部は内彎気味で、口縁部は僅かに外反する。	粘土紐巻き上げ後ロクロ整形。底部回転糸切り。体部及び口縁部内外面を横ナデ。	完形。口縁部内面にカーボン付着。内外面に火澤痕。黒色スコリア状物質含む。
15-1 図版16	須A-坏	6層	15.3 5.3 5.8	薄手で平らな底部より直線的に外上方へ開き、口唇部はやや肥厚する。	ロクロ整形。底部回転糸切り。体部下半から口縁部内外面にかけて横ナデ。	体部の1/3欠失。
15-2	灰-皿	6層	13.3 2.8 6.2	やや内彎気味に立ち上り、口縁部はやや外反する。断面三日月形の高台を有する。	ロクロ整形。付高台。施釉は内面のみ刷毛塗り。	釉は黄緑色。
15-6 図版17	土-坏	覆土	11.9 3.0 7.4	偏平な底部よりやや直線的に外上方へ開く。口唇部剝落が著しい。	底部及び体部下半を手持ちヘラ削り。内面から口縁部外面にかけて横ナデ。	1/3残存。赤色スコリア状物質含む。
15-7 図版17	須A-坏	覆土	12.3 3.85 5.4	厚手の底部より体部にかけて内彎し、口縁部は僅かに外反する。	粘土紐巻き上げ後ロクロ整形。底部回転糸切り。体部及び口縁部内外面を横ナデ。	口縁部の1/2を欠失。火ぶくれ有り。海綿骨針・赤色スコリア状物質含む。
15-8 図版17	須-坏	覆土	— 4.7 7.6	やや上げ底の底部より体部にかけて内彎する。底部内面ロクロ痕顕著。	ロクロ整形。底部回転糸切り後周縁を回転ヘラ削り。体部下位を指ナデ。	口縁部欠失。一部自然釉付着。
15-9	須-塊	覆土	— — 8.0	やや内彎気味に立ち上る。断面長方形の高台を有する。	ロクロ整形後回転糸切り。付高台。体部下半はかるいナデ。	底部破片。
15-10	須-蓋	覆土 7層	23.3 5.1	つぶれた宝珠形をつまみを有する天井部より内彎して外下方へ開き、口唇部はやや外傾する。	粘土紐巻き上げ後ロクロ整形。回転糸切り後天井部の周縁を回転ヘラ削り。口唇部内外面を横ナデ。	口縁部の2/3欠失。海綿骨針含む。

S D 23 溝跡 鏡瓦一覽

図面 図版	出土 位置	直径	内 区					外 区					全長	備考	
			中房 径	蓮子数	弁区 径	弁幅	弁数	幅	内 縁		外 縁				
									幅	文様	幅	高			文様
15-3 図版16	6層	18.1	5.0	1+4	14.8	4.3	T6	1.0 ? 1.5	0.3	A a	1.45	1.25	A a	16.6	凹面に細板圧痕。瓦当接合部分指ナデ。范型内区のみ。

S D 23 溝跡 宇瓦一覽

図面 図版	出土 位置	寸法				内区		外区				脇区		文様 深さ	全長	備考
		上弦 弧幅	下弦 弧幅	弧深	厚さ	厚さ	文様	上		下		幅	文様			
								厚さ	文様	厚さ	文様					
14-4 図版16	2層 3層	25.4	14.8	3.6	7.6	4.65	HK	0.6	a	1.25	a	8.0	a	0.8	37.4	顎G ₂ -a。海綿骨針・黒色スコリア状物質含む。女瓦凸面格子目叩き。布目19×22。
15-11 図版17	覆土	29.9	28.1	5.75	5.6	4.5	HK			1.1	a			0.25	40.4	顎G ₁ -a。瓦当右端に笄キズ。凹面に「比企」のヘラ書き。女瓦凸面格子目叩き。布目16×16。

S D 23 溝跡 男瓦一覽

図面 図版	出土 位置	寸法				成・整形の特徴							備考
		狭端	広端	全長	厚さ	凹面		凸面		端面			
						素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴		
16-1	覆土 SB39 1次床 上面		16.85	20.6	1.7	粘土紐	21×24	一部指ナデ。狭端を除く3端縁を幅広くヘラ削り。	縄目	全面板状工具による回転ナデ。広端縁を幅広くヘラ削り。	狭端を除く3端をヘラ削り。	少量の海綿骨針・黒色スコリア状物質含む。	
16-2 図版17	覆土	7.0	20.5	38.1	1.7		32×25	狭端縁無調整。他の3端縁をヘラ削り。	縄目L	全面を板状工具による回転ナデ後縦方向のナデ。左右両側端縁は幅狭く、広端縁は幅広くヘラ削り。	広端はヘラ削り。左右両側端は指ナデ。狭端は無調整。	凹面に「寺」の朱墨書及び布合せ目。少量のスコリア状物質含む。	

S D 23 溝跡 女瓦一覽

14-5	3層			16.9	2.0			全面を横方向のナデ。左側端縁をヘラ削り。	平行叩き	無調整。	広端・左側端を指ナデ。	海綿骨針含む。
15-4	6層			11.1	2.8	粘土板		部分的に指ナデ。広端縁を幅広くヘラ削り。	斜格子	無調整。	広端を無調整。	凹面2ヶ所に「荏」の押印。凸面に「荏」の押型。
15-5	6層			14.2	3.0	粘土紐	22×24	部分的に指ナデ。右側端縁ヘラ削り。	斜格子	無調整。	右側端をヘラ削り。	凹面に「荏」の押印。少量の黒色スコリア状物質含む。
16-3	覆土			9.0	2.0	粘土板		部分的に指ナデ。	正格子			凸面に「榛」の押型。
16-4	覆土		11.3	11.6	2.0	粘土板	24×24	広端縁を僅かにナデる。	縄目L 11本		広端を指ナデ。右側端は無調整。	凹面に「大里」の押型。右側端面に朱附着。海綿骨針・黒色スコリア状物質含む。
16-5	覆土				2.3		23×30	全面を横方向にヘラナデ。	縄目L			凹面に「豊」の押印。

SK 163土坑 土器一覽

図面 図版	種別 器形	出土 位置	法量	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
17-1 図版18	須A一坏	覆土	12.0 4.15 7.1	厚手の底部より体部にかけて内彎し、口縁部はやや外反する。	粘土紐巻き上げ後ロクロ整形。底部回転糸切り。体部内外面・口縁部を横ナデ。	1/2弱残存。内外面にスス附着。赤色スコリア状物質含む。

SK 163土坑 女瓦一覽

図面 図版	出土 位置	寸法				成・整形の特徴						備考
		狭端	広端	全長	厚さ	凹面			凸面		端面	
						素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴	
17-2 図版18	覆土	23.5		30.8	2.2		21×18	狭端・左右両側端縁を幅狭くヘラ削り。	縄目L 9本	無調整。 叩き締めA ₄ 。	全面をヘラ削り。	隅切瓦。凹面広端縁に布継ぎ目。海綿骨針含む。
17-3 図版18	西側傾斜面	25.0	15.0	38.0	1.9			全面を縦方向のナデ。全端縁を幅広くヘラ削り。	正格子 (密)	無調整。 叩き締めA ₄ 。	全面をヘラ削り。	凸面に「加上」の逆字押型。海綿骨針含む。
18-1 図版19	西側傾斜面	16.0	28.5	38.1	2.2	粘土板	18×17	全端縁を幅広くヘラ削り。	縄目L 10本 (長単位)	無調整。 叩き締めA ₁ 。	全面をヘラ削り。	広端面にワラ状圧痕。
18-2 図版19	覆土	23.1	19.2	39.3	1.65	粘土板	21×18	全端縁を幅広くヘラ削り。狭端縁に凸型痕。	縄目L 10本	無調整。 叩き締めB。	全面をヘラ削り。	狭端面にワラ状圧痕。凸面に棒状圧痕。黒色スコリア状物質含む。一部自然釉付着。

表土 土器・硯一覽

図面 図版	種別 器形	出土 位置	法量	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
19-1	須A一坏		11.8 5.0 5.7	厚手の底部より口縁部にかけて僅かに内彎する。内外面ロクロ痕顕著。	粘土紐巻き上げ後ロクロ整形。底部回転糸切り。内外面横ナデ。	1/3欠失。黒色スコリア状物質含む。
19-2	須B一坏		14.7 4.35 6.1	厚手の底部より直立して立ち上り、体部は僅かに内彎気味に外傾する。口縁端部はやや外反する。	ロクロ整形後底部回転糸切り。体部下半は横ナデ。	口縁部の大部分を欠失。赤色スコリア状物質含む。
19-3	須B一坏		11.1 4.7 4.6	厚手の底部より直立気味に立ち上り、内彎気味に開く。器面剥落が著しい。	ロクロ整形。	1/2残存。赤色スコリア状物質含む。
19-4	須B一坏		13.8 4.2 6.05	厚手の底部より直立気味に立ち上り、体部は直線気味に外傾する。口縁部はやや外反する。	ロクロ整形。底部回転糸切り。口縁部内外面を横ナデ。	口縁部の大部分を欠失。赤色スコリア状物質含む。
19-5	土一坏		11.7 2.7 5.35	底部より口縁部にかけて内彎し、口縁部はやや直線的に外傾する。口縁端部は肥厚する。	底部回転糸切り。体部内外面を横ナデ。	1/2強残存。カララケ。

図面 図版	種別 器形	出土 位置	法量	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
19-6	土一坏		8.5 2.2 5.9	底部より直上して立上り、口縁部は外反する。	底部回転糸切り。内外面を横ナデ。	カワラケ。
19-7 図版20	土一高坏	表土 II A層	24.95	高坏の脚部。外面は六角形に面取りされる。	縦方向六角形にへら削りした脚部に坏部が付く。	脚部のみ残存。細砂を含み、乳赤褐色を呈する。
19-8	須一蓋		16.6 3.9	平偏化した宝珠形つまみを有する天井部より体部にかけて内彎する。口縁部は内傾し、口縁部断面三角形。	ロクロ整形。天井部は回転糸切り後周縁を回転へら削り。	口縁部の1/3欠失。口縁部歪む。
19-9	須一長頸壺		器12.0 底8.2 胴15.5	厚めの底部から胴部にかけて強く内彎し、胴上半に最大径を有する。	粘土紐巻き上げ後ロクロ整形。体部下半及び底部全面を回転へら削り。付高台部を横ナデ。	肩部・口頸部欠失。自然釉付着。
19-10 図版20	灰一長頸壺		器21.35 底8.1 胴15.2	卵型の胴部からやや外反する口縁部を有する。胴中央部に最大径を有する。底部は断面台形状の付高台。	粘土紐巻き上げ後ロクロ整形。	口縁部及び体部の1/3欠失。釉は黄緑色。
19-11	須一風字硯		長さ7.6 幅9.9 厚み2.2	研面の一部残存。周縁部を欠失。裏面周縁をへら削り。		

表土 鎧瓦 一覽

図面 図版	出土 位置	直径	内 区					外 区					全長	備 考	
			中房 径	蓮子数	弁区 径	弁幅	弁数	幅	内 縁		外 縁				
									幅	文様	幅	高			文様
20-1 図版20		20.2	5.2	4	16.0	5.4	S 6	1.7	-	-	-	0.85	B a	自然釉付着。瓦当面に範ズレが認められる。黒色スコリア状物質含む。	
20-2 図版20		15.8	3.65	特殊文様	10.7	3.0	T 5	3.3	1.0	A a	2.3		A a	瓦当裏面全面指ナデ。黒色スコリア状物質含む。	
20-3 図版20		20.7	5.9	1+4	14.8	3.6	T 6	2.8	1.1	A a	1.7	1.05	A a	蓮子に範キズ有り。瓦当裏面は指ナデ。少量の黒色スコリア状物質含む。	

表土 字瓦 一覽

図面 図版	出土 位置	寸 法				内 区			外 区				脇 区		文様 深さ	全長	備 考
		上弦 弧幅	下弦 弧幅	弧深	厚さ	厚さ	文様	上		下		幅	文様				
								厚さ	文様	厚さ	文様						
20-4		10.7	11.55		4.3		3 G					3.6		0.7	5.9	頸 F ₂ -b。文様范型+ナデ。海綿骨針含む。瓦当凸面格子目叩き。	
20-5		16.3	28.5		3.8	2.4	KK	0.85	b		b	3.3	a	0.2	11.8	頸 G ₁ -b。女瓦部凸面縄目叩き。少量の黒色スコリア状物質含む。布目21×21。	

図面 図版	出土 位置	寸法				内区		外区				脇区		文様 深さ	全長	備考
		上弦 弧幅	下弦 弧幅	弧深	厚さ	厚さ	文様	上		下		幅	文様			
								厚さ	文様	厚さ	文様					
20-6 図版20		9.3	11.85		6.3	3.1	KK	1.65	a	1.6	a	-	-	0.4	12.2	顎F ₂ -a。瓦当左端范割れ有り。女瓦部凸面縄目叩き。布目24×19。
20-7		4.2	7.2		4.5	3.1	HK	0.7		0.8		2.75	a	0.4	11.4	顎F ₁ -a。女瓦部凸面格子目叩き。自然釉付着。布目21×18。

表土 男瓦 一覧

図面 図版	出土 位置	寸法				成・整形の特徴							備考	
		狭端	広端	全長	厚さ	凹面			凸面		端面			
						素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴			
20-8					1.9	粘土紐	25×24					板状工具による回転ナデ。		凸面に「捺」の押印。海绵骨針・少量の黒色スコリア状物質含む。
20-9					1.7	粘土紐	21×17					縦方向のナデ。		凸面に「豊」の押印。海绵骨針・少量の黒色スコリア状物質含む。
21-1 図版21	表土 ⅡA層	10.0	16.9	37.4	1.45	粘土紐 10本	21×23	一部指ナデ。狭端を除く3端縁をへら削り。				全面縦方向のナデ。狭端を除く3端縁をへら削り。	全面をへら削り。	凹面に「豊」のへら書き。自然釉付着。
21-2 図版20		10.1	20.7	36.4	1.65	粘土紐 9本	26×19	狭端を除く3端縁を幅広くへら削り。				全面板状工具による回転ナデ。	全面をへら削り。	広端隅落し。凹面に布合せ目及び「大」のへら書き。凸面「中」の押印。黒色スコリア状物質含む。

表土 女瓦 一覧

22-1 図版21	表土 ⅡA層			4.2	2.8	粘土紐	20×16	広端・右側端縁を幅広く、狭端縁は幅狭くへら削り。	縄目L 6本	無調整。 叩き締めB。	全面をへら削り。	凹面に「中」の押印。赤色スコリア状物質含む。
22-2		9.1	16.9	36.8	2.4	粘土板	19×17	全端縁を幅広くへら削り。	縄目L 10本 (長単位)	無調整。 叩き締めA ₂ 。	右側端はへら削り。他の3端はナデ。	狭端面にワラ状圧痕。少量の海绵骨針・黒色スコリア状物質含む。
23-1 図版23	表土 ⅡA層	7.8	26.3	37.4	1.9	粘土板	18×21	狭端縁無調整。他の3端縁を幅広くへら削り。	正格子	無調整。 叩き締めA ₂ 。	全面をへら削り。	広端面にワラ状圧痕。凹面1ヶ所、凸面2ヶ所に「捺」の押印及び凸面1ヶ所に同へら書き。海绵骨針含む。自然釉付着。
23-2 図版22		6.5	27.2	31.6	1.8	粘土板	20×13	狭端・左右両側端縁を幅広くへら削り。	正格子 (密)	無調整。 叩き締めA ₄ 。	全面をへら削り。	広端面にワラ状圧痕。「田」の押印。海绵骨針・少量の黒色スコリア状物質含む。
24-1 図版23	表土 SD 23 1層	26.5	20.5	40.4	3.3	粘土板	15×22	狭端を除く3端縁を幅広くへら削り。広端縁に凸型痕。	正格子 (粗)	左側端縁は一部幅広くへら削り。叩き締めA ₁ 。	広端を除く3端は無調整。	凸面に「比企」の墨書。海绵骨針・黒色スコリア状物質含む。

図面 図版	出土 位置	寸法				成・整形の特徴						備考	
		狭端	広端	全長	厚さ	凹面			凸面		端面		
						素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴		
24-2 図版21				12.8	2.1			全面へら状工具 で横方向にナデ。		細板連結部分を 縦方向にへら削 り。	広端・左側端 (2面)をへら削 り。	凸面に布目痕。	
24-3					2.1	粘土板	18×21			縄目L 10本	全面を欠失。	凹面に「埤」の 押印。海綿骨針 含む。	
24-4					2.05	粘土板	24×21	右側端縁を幅狭 くへら削り。		縄目L 8本	無調整。	右側端は無調整。	凸面に「豊」の 押印。黒色スコ リア状物質含む。
24-5				9.8	2.1	粘土板	32×26	左側端縁を幅広 くへら削り。		縄目L 7本		左側端をナデ。	凹面に「播」の 押印。海綿骨針 含む。
24-6					2.0		22×15			正格子			凹面に「荏」の 押印。
25-1 図版22		24.0		24.0	2.05	粘土板	22×18	広端(欠失)を除 く3端縁を幅広 くへら削り。		縄目L 8本	無調整。	広端を除く3端 をへら削り。	凹面に「高」の へら書き及び不 明圧痕。狭端面 にワラ状圧痕。
25-2 図版21	表土 II A層 IV A層	24.5		27.0	2.45	粘土板	20×21	狭端・左右両側 端縁を幅広くへ ら削り。		正格子	無調整。 叩き締めA ₄ 。	全面をへら削り。	隅切瓦。凹面に 「椀」のへら書 き。海綿骨針含 む。
25-3			11.0	33.0	2.5		17×19	部分的に指ナデ。 広端・左側端縁 を幅狭くへら削 り。		縄目L 8本	無調整。	広端・左側端を へら削り。	凹面に「那中」 のへら書き。
25-4					2.45		21×18			正格子			凹面に「豊」の へら書き。赤色 スコリア状物質 含む。
25-5					1.8		14×18			縄目L 10本			凹面に「水」の へら書き。
25-6					1.7	粘土板	21×14	狭端縁をへら削 り。		縄目L 7本		狭端を指ナデ。	凹面に「那中」 のへら書き。
25-7				14.4	2.4		12×16	左側端縁を幅狭 くへら削り。		縄目L 11本			凹面に「山」の 指書き。
26-1					2.55		17×17			縄目L 10本			凹面に「入瓦」 の押印。海綿骨 針・黒色スコリ ア状物質含む。
26-2					1.4		16×22			正格子			凸面に「高」の 押型。海綿骨針・ 黒色スコリア状 物質含む。
26-3				9.8	1.9		26×27			縄目L 13本			凹面に「玉」の 逆字模骨文字。

図面 図版	出土 位置	寸法				成・整形の特徴							備考
						凹面			凸面		端面		
		狭端	広端	全長	厚さ	素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴		
26-4				35.5	2.3	粘土板	21×18	右側端(欠失)を除く3端縁をへら削り。	正格子	無調整。	右側端を除く3端をへら削り。	凹面2ヶ所に「×」の押印。	
26-5	表採				2.1	粘土板	24×15	部分的にナデ。広端縁を幅広くへら削り。	斜格子	無調整。	広端は指ナデ。	凹面「口部廣万呂」、広端面「白方」のへら書き。海綿骨針含む。	

表土 埴一覽

図面 図版	出土 位置	寸法			表裏	側面	備考
		長辺	短辺	厚さ			
26-6		19.4	12.4	6.4	全面をへら削り。	全面をへら削り。	側面に「父」の押印。海綿骨針含む。
26-7 図版22		18.3	17.5	6.7	全面をへら削り。	全面をへら削り。	側面に「埴」の押印。赤色スコリア状物質含む。
26-8		9.1	7.6	6.15	剝落が著しい。	布目痕有り。	海綿骨針含む。

表土 鉄製品一覽

図面 図版	種別	出土位置	寸法	備考
19-12	鉄釘		長さ 6.4 厚み 0.45	
19-13	鉄釘		長さ 5.2 厚み 0.7	
19-14 図版20	刀子		長さ 10.2 刀幅 0.9 鋒厚 0.35	茎部一部を欠失。幅0.65、厚み0.3。
19-15	鉄釘		長さ 10.2 厚み 0.5	

第ⅡA層 土器・フイゴ一覽

図面 図版	種別 器形	出土 位置	法量	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
27-1 図版24	土-坏		16.4 3.65 6.5	底部より体部にかけて直線気味に外傾し、口縁部はやや外反する。	底部は一方に手持ちヘラ削り。体部横方向に手持ちヘラ削り。口縁部及び内面をナデ。	ほぼ完形。底部外面に「法」の墨書。
27-2	須B-坏		— 1.8 4.9	厚手の底部より直線的に立ち上る。	底部回転糸切り。	底部破片。底部外面に「撲」又は「携」と思われる墨書。
27-3 図版24	須A-坏		12.0 3.4 6.2	上げ底の底部より体部にかけて内彎し、口縁部はやや外反する。	粘土紐巻き上げ後ロクロ整形。底部回転糸切り。体部から口縁部内外面にかけて横ナデ。	ほぼ完形。一部自然釉附着。
27-4	須A-坏		12.6 3.7 5.3	体部はやや内彎し、口縁部は肥厚して外反する。全体に薄手。	ロクロ整形後底部回転糸切り。口縁部及び内面を横ナデ。	黒色スコリア状物質含む。
27-5 図版24	須A-坏		13.0 4.2 5.3	上げ底の底部より体部にかけて内彎し、口縁部は肥厚して外反する。	粘土紐巻き上げ後ロクロ整形。底部回転糸切り。体部及び口縁部内外面を横ナデ。	底部の1/2欠失。内面スス附着。外面に朱墨附着。少量の赤色スコリア状物質含む。
27-6	須-蓋		16.45 3.95 —	つぶれた宝珠形をつまみを有する天井部より内彎し外下方へ開く。口唇部断面三角形を呈する。	ロクロ整形。天井部回転ヘラ削り。口縁部・つまみ・天井部を横ナデ。	1/2残存。転用硯。赤色スコリア状物質含む。
27-7	須-甕		26.2 10.7 —	体部上半はやや内彎する。口縁部は外反し、口縁端部断面三角形を呈する。	ロクロ整形。	破片。極く少量の黒色スコリア状物質含む。
27-8	フイゴ 羽口		長さ4.8 径7.3			

第ⅡA層 宇瓦一覽

図面 図版	出土 位置	寸法				内区		外区				脇区		文様 深さ	全長	備考
		上弦 弧幅	下弦 弧幅	弧深	厚さ	厚さ	文様	上		下		幅	全長			
								厚さ	文様	厚さ	文様					
27-9 図版24		19.25	13.2		6.45	4.9	HK	0.7	a	0.9	a			0.4 0.9	39.6	頸G ₁ -a。瓦当面右端に筈キズ。凹面に「三」のヘラ書き。狭端面にワラ状庄痕。布目14×19。
27-10					3.9	3.55	HK	0.4	a					0.55	4.2	頸形態不明。黒色スコリア状物質含む。

第ⅡA層 男瓦一覽

図面 図版	出土 位置	寸法				成・整形の特徴						備考
		狭端	広端	全長	厚さ	凹面			凸面		端面	
						素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴	
27-11 図版24			9.4	26.4	1.55	粘土紐 (横)	26×25	広端縁を幅広く、 左右両側端縁を 幅狭くへら削り。		全面縦方向の指 ナデ。広端縁幅 広くへら削り。	全面をへら削り。 凹面に布継ぎ痕。 凸面に「父」の 押印。海綿骨針・ 黒色スコリア状物 質含む。	
28-1		3.8	16.9	36.5	1.4		21×19	広端縁付近を指 ナデ。	縄目	全面板状工具に よる回転ナデ。 広端縁へら削り。	全面をへら削り。 凹面に「埴」の 押印。黒色スコ リア状物質含む。	
28-2 図版25			24.3	20.35	1.7	粘土紐	22×16	部分的に指ナデ。 狭端を除く3端 縁を幅広くへら 削り。	斜格子 (粗)	格子目叩き後縦 方向の指ナデ。	狭端を除く3端 をへら削り。狭 端は欠失。	やや大型。広端 隅落し。一部自 然釉附着。
28-3					2.0	粘土紐 (横)	21×23	右側端縁を幅狭 くへら削り。		全面縦方向のナ デ。	右側端をへら削 り。	凸面に「白方瓦」 の押印。多量の 海綿骨針含む。

第ⅡA層 女瓦一覽

28-4 図版25				17.0	2.5	粘土板	19×20	左右両側端縁を 幅広くへら削り。	正格子 (密)	無調整。	左右両側端へら 削り。	熨斗瓦。少量の 黒色スコリア状 物質含む。
29-1 図版25				34.6	2.6	粘土板	24×17	全端縁を幅広く へら削り。	斜格子	無調整。	全面をへら削り。	凹面に不明圧痕。 凸面に「苳」の 押型。
29-2		9.7	19.5	39.5	1.75	粘土板	17×15	広端・狭端縁を 幅広く、左右両 側端縁を幅狭く へら削り。	斜格子 (密)	無調整。 叩き締めA ₁ 。	全面をへら削り。	黒色スコリア状 物質含む。
30-1		24.4	19.1	33.9	2.3		18×15	全端縁を幅広く へら削り。	正格子	無調整。 叩き締めA ₁ 。	全面をへら削り。	狭端面に「父」 の押印。海綿骨 針・黒色スコリ ア状物質含む。
30-2 図版26	ⅡA層 ⅢA層	25.2	26.7	36.5	1.4	粘土紐	18×16	全端縁を部分的 に幅広くへら削 り。	斜格子 (粗)	無調整。	全面をへら削り。	凹面に「父瓦」 の押印。海綿骨 針・黒色スコリ ア状物質含む。
31-1 図版26		19.2	18.4	39.1	2.3	粘土板	21×20	広端・狭端縁は 幅広く、左右両 側端縁は幅狭く へら削り。	正格子 (粗)	無調整。 板目叩き後正格 子叩き、叩き締 めB。	広端を除く3端 へら削り。	広端面にワラ状 圧痕。多量の海 綿骨針含む。
31-2 図版27		25.3	29.0	42.3	2.6		21×13	狭端縁を幅狭く、 左右両側端縁を 幅広くへら削り。	正格子 (粗)	無調整。 叩き締めA ₂ 。	全面をへら削り。	広端面にワラ状 圧痕。海綿骨針・ 黒色スコリア状 物質含む。
32-1 図版27		19.5	13.2	40.7	3.05	粘土板	20×18	左側端(欠失) を除く3端縁を 幅広くへら削り。	斜格子	叩き締めA ₂ 。 狭端縁を幅広く へら削り。	広端をへら削り。 狭端・右側端ナ デ。	海綿骨針含む。
32-2 図版28	ⅡA層 SB39 2次床 中	26.7	10.4	37.7	1.95	粘土板	17×17	全面を粗く指ナ デ。全端縁を幅 狭くへら削り。	正格子	無調整。 叩き締めB。	広端を除く3端 をへら削り。	広端面にワラ状 圧痕。海綿骨針 含む。凹面に自 然釉附着。

図面 図版	出土 位置	寸法				成・整形の特徴							備考
		狭端	広端	全長	厚さ	凹面			凸面		端面		
						素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴		
33-1				25.5	1.95	粘土板		全面を粗く横ナデ。狭端を除く3端縁を幅広くヘラ削り。	斜格子	無調整。	狭端を除く3端をナデ。	凹面に「父」の押印。広端面にワラ状圧痕。海綿骨針含む。	
33-2 図版28	ⅡA層 表土	26.9	36.9	2.7	粘土板		左右両側端縁をヘラ削りした後広端縁を縦方向、狭端側を横方向にヘラナデ。広端側を幅広くヘラ削り。	正格子 (粗)	無調整。 叩き締めA ₂ 。	左右両側端をヘラ削り。	凸面広端縁に整型台の圧痕。		
33-3				10.6	2.1		21×14	左側端縁を幅広くヘラ削り。	正格子		左側端ナデ。	凹面に「男」のヘラ書き。海綿骨針・少量の黒色スコリア状物質含む。	
33-4		5.35		13.3	2.0		29×30	狭端・左側端縁を幅狭くヘラ削り。	斜格子	無調整。	狭端・左側端をヘラ削り。	凹面に「榛」のヘラ書き。赤色スコリア状物質含む。	
34-1	ⅡA層 表土	16.4		31.0	1.9	粘土板	21×20	広端(欠失)を除く3端縁を幅広くヘラ削り。	縄目L 13本	左右両側端縁をヘラ削り。 叩き締めB。	広端を除く3端をヘラ削り。	凹面に「久」のヘラ書き。狭端面にワラ状圧痕。赤色スコリア状物質含む。	
34-2 図版29		23.85	27.2	37.7	2.7		21×22	全端縁を幅広くヘラ削り。	縄目L 8本	広端縁を指ナデ。 叩き締めA ₁ に類似。	狭端ヘラ削り。 他の3端指ナデ。	凹面に「入」のヘラ書き。広端隅落し。黒色スコリア状物質含む。	
35-1 図版29		11.5	24.2	34.4	2.3	粘土板	19×17	全端縁を幅広くヘラ削り。	縄目L 10本	無調整。 叩き締めA ₁ 。	全面をヘラ削り。	広端・狭端面にワラ状圧痕。	
35-2		23.3	23.5	37.3	2.1	粘土板	15×19	全端縁を幅広くヘラ削り。	縄目L 9本 (長単位)	無調整。 叩き締めA ₄ 。	全面をヘラ削り。	ほぼ完形。狭端面にワラ状圧痕。海綿骨針含む。	
36-1 図版30		9.7	29.45	37.7	2.35	粘土板	22×25	全端縁を幅広くヘラ削り。	縄目L 9本 (長単位)	無調整。 叩き締めA ₁ 。	全面をヘラ削り。	凹面に「父」の押印。狭端面にワラ状圧痕。海綿骨針含む。	
36-2 図版30	ⅡA層 SB39 2次床 上面	24.0	28.9	39.5	2.1	粘土板	18×21	全端縁を幅狭くヘラ削り。	縄目L 5本	左側端縁を幅狭くヘラ削り。	全面をヘラ削り。	ほぼ完形。凹面に不明押印及び布継ぎ目4ヶ所有り。	
37-1		24.8	15.9	36.6	1.6	粘土板	19×17	狭端を除く3端縁をヘラ削り。	縄目L 7本	無調整。 叩き締めA ₁ 。	全面をヘラ削り。	広端隅落し。黒色スコリア状物質含む。	
37-2		22.5		17.1	1.85	粘土紐	16×16	広端(欠失)を除く3端縁をヘラ削り。	縄目L 10本	狭端縁をヘラ削り。 叩き締めA ₁ 。	広端を除く3端をナデ。	凹面に「入瓦」の押印。少量の黒色スコリア状物質含む。	
37-3 図版25				16.4	2.1	粘土紐 (縦)	14×17		縄目L 7本			少量の黒色スコリア状物質含む。	
37-4				19.4	2.1			全面を横方向にナデ。左側端縁を幅広くヘラ削り。	平行叩き		左側端を指ナデ。	海綿骨針含む。	

第ⅢA・ⅣA層 土器 一覽

図面 図版	種別 器形	出土 位置	法量	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
38-1 図版31	土一坏	ⅢA層	11.7 3.4 6.9	底部より体部にかけて僅かに内彎し、口縁部は直線的に開く。	底部を不定方向、体部を横方向に手持ちへら削り。口縁部を横ナデ。	1/5を欠失。全面磨減が著しい。
38-2 図版31	須A一坏	ⅢA層	12.2 4.3 6.6	底部内面中央窪む。体部はやや内彎し、口縁部は直線的に開く。底部糸切り失敗の痕跡。	粘土紐巻き上げ後ロクロ整形。体部下半及び口縁部内外面を横ナデ。	内面に火禿。極く少量の黒色スコリア状物質含む。
38-3 図版31	須A一坏	ⅣA層	15.3 3.4 10.1	平偏な底部より口縁部にかけて直線的に外傾する。	ロクロ整形。底部全面を回転へら削り。体部内外面及び口縁部を横ナデ。	1/3残存。口縁部にスス付着。黒色スコリア状物質・海綿骨針含む。
38-4	須A一坏	ⅢA層	12.4 3.9 6.4	内面底部中央窪む。底部はやや上げ底気味。体部は僅かに内彎し、口縁部は僅かに外反する。	粘土紐巻き上げ後ロクロ整形。底部回転糸切り。体部及び口縁部内外面を横ナデ。	2/3弱欠失。海綿骨針・黒色スコリア状物質含む。
38-5 図版31	須一蓋	ⅢA層	12.8 2.7	ボタン状のつまみを有する天井部はやや窪み、体部は直線的に外下方へ開く。口縁端部は断面三角形。	ロクロ整形。回転糸切り後周縁を回転へら削り。天井部・口縁部を横ナデ。	1/3残存。
38-6	土一甕	ⅢA層	3.2 9.6	薄い底部より直線的に大きく外傾する。	底部・体部下半は縦方向、立ち上り部分横方向に手持ちへら削り。内面はへらナデ。	底部破片。

第ⅢA・ⅣA層 宇瓦 一覽

図面 図版	出土 位置	寸法				内区		外区				脇区		文様 深さ	全長	備考
		上弦 弧幅	下弦 弧幅	弧深	厚さ	厚さ	文様	上		下		幅	文様			
								厚さ	文様	厚さ	文様					
38-7 図版31	ⅣA層	16.6	18.7		3.5	3.5	3G					3.05	a	0.65	20.9	顎F ₁ -a。范型ナナデ。少量の海綿骨針含む。布目21×18。
38-8 図版31	ⅢA層	22.9		9.25			HK					7.4	a	0.45	35.6	顎部分欠失。自然釉付着。凹面中央に「玉尔太」のへら書き。布目21×17。

第ⅢA層 女瓦 一覽

図面 図版	出土 位置	寸法				成・整形の特徴							備考
		狭端	広端	全長	厚さ	凹面			凸面		端面		
						素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴		
39-1	ⅡA層 ⅢA層	23.2	19.4	36.8	2.3	粘土板	21×24	全端縁を幅広くへら削り。	縄目L 10本	狭端縁を幅狭くナデる。 叩き締めA ₂ 。	広端(不明)を除く3端をへら削り。	凹面に布合せ目?凸面に「捺」の逆字押印。狭端面ワラ状圧痕顕著。海綿骨針含む。	
39-2	ⅡA層 ⅢA層	15.35	25.95	39.0	2.15	粘土板	19×20	部分的に指ナデ。狭端(無調整)を除く3端縁を幅広くへら削り。	縄目L 9本	無調整。 叩き締めB。	全面をへら削り。	狭端大きく隅落し。黒色スコリア状物質含む。一部自然釉付着。	

第 29 次 調 査 出 土 遺 物

SD23溝跡 土 器 一 覧

図 面 図 版	種 別 器 形	出 土 位 置	法 量	器 形 の 特 徴	成 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
40 - 1	土 - 坏	1 層	11.0 3.6 4.3	厚手の底部より体部にかけて内彎し、口縁部は外反する。	ロクロ整形。口縁部横ナデ。体部は2段に手持ちヘラ削り。底部は手持ちヘラ削り。	1/4 弱残存。内面黒色処理。
40 - 2 図版 32	土 - 坏	1 層 2 層	14.4 4.7 6.35	底部よりやや内彎気味に立ち上り、体部より口縁部にかけて直線的に開く。	ロクロ整形。底部全面及び体部下半回転ヘラ削り。内面は横位・斜位のヘラ磨き。外面は粗くヘラ磨き。	口縁部の一部を欠失。内面黒色処理。
40 - 3	須B-坏	1 層	12.8 4.0 5.0	上げ底の底部より直線気味に立ち上り、口縁部は僅かに外反する。	ロクロ整形。底部回転糸切り。口縁部内外面及び体部を横ナデ。	1/3 弱残存。赤色スコリア状物質含む。スス付着。
40 - 4 図版 32	須A-坏	1 層	13.0 3.65 5.3	薄手の底部より体部にかけてやや内彎し、口縁部は肥厚して外反する。全体に器肉が薄い。	ロクロ整形。底部回転糸切り。口縁部内外面及び体部下半を横ナデ。	2/3 残存。黒色スコリア状物質含む。内面に重ね焼き痕。
40 - 5	須A-坏	1 層	12.4 3.6 4.95	やや上げ底の底部より体部にかけてやや内彎し、口縁部は肥厚して外反する。	粘土紐巻き上げ後ロクロ整形。底部回転糸切り。口縁部内外面及び体部は横ナデ。	1/3 残存。
40 - 6	須A-坏	1 層	13.2 4.0 4.65	上げ底の底部より体部にかけて僅かに内彎し、口縁部は強く外反する。	ロクロ整形。底部回転糸切り。口縁部内外面及び体部を横ナデ。	1/2 強残存。赤色スコリア状物質含む。
40 - 7	須A-坏	1 層	12.25 3.75 5.55	上げ底の底部より体部にかけて内彎し、口縁部は肥厚して外反する。全体に器肉が薄い。	ロクロ整形。底部回転糸切り。口縁部内外面及び体部下半を横ナデ。	1/2 欠失。海綿骨針・赤色スコリア状物質含む。
40 - 8 図版 32	須A-坏	1 層	12.9 4.1 5.15	体部は僅かに内彎して立ち上り、口縁部は外反する。	粘土紐巻き上げ後ロクロ整形。底部回転糸切り。口縁部及び体部下半を横ナデ。	完形。 ✓
40 - 9	須A-坏	1 層	13.8 4.2 5.6	上げ底の底部より直線気味に立ち上り、口縁部は外反する。ロクロ痕顕著。	粘土紐巻き上げ後ロクロ整形。底部回転糸切り。口縁部内外面及び体部下半を横ナデ。	1/2 弱残存。黒色スコリア状物質含む。
40 - 10 図版 32	須A-坏	1 層	13.4 5.15 6.2	上げ底の底部より体部にかけて内彎し、口縁部は肥厚して外反する。	ロクロ整形。底部回転糸切り。口縁部横ナデ。体部下半ナデ。	1/2 残存。黒色スコリア状物質含む。
40 - 11 図版 32	須A-坏	1 層	12.85 5.45 5.6	上げ底の底部より体部にかけて内彎し、口縁部は肥厚して外反する。	ロクロ整形。底部回転糸切り。口縁部内外面及び体部を横ナデ。	1/3 欠失。黒色スコリア状物質含む。
40 - 12 図版 32	須A-坏	1 層 表 土	13.4 5.25 5.85	底部より体部にかけてやや内彎し、口縁部はやや外反する。	ロクロ整形。底部回転糸切り。口縁部内外面及び体部外面を横ナデ。	1/2 強残存。黒色スコリア状物質含む。
40 - 13 図版 32	須A-坏	1 層	14.95 5.8 5.9	やや上げ底の底部より直線気味に立ち上る。口縁部は肥厚する。全体的に歪む。	ロクロ整形。底部回転糸切り。口縁部内外面及び体部外面を横ナデ。	1/2 強残存。黒色スコリア状物質含む。
40 - 14	須A-坏	1 層	14.4 5.25 6.0	体部は僅かに内彎し、口縁部は肥厚して外反する。	粘土紐巻き上げ後ロクロ整形。底部回転糸切り。口縁部内外面及び体部外面を横ナデ。	1/3 残存。底部に「一」のヘラ書き。赤色スコリア状物質含む。

図面 図版	種別 器形	出土 位置	法量	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
40-15	須B-坏	1層	13.8 5.85 6.4	底部より直線気味に立ち上り、体部は僅かに内彎する。口縁部は僅かに肥厚する。	ロクロ整形。底部回転糸切り。底部周縁端から口縁部にかけて横ナデ。	1/3残存。多量の赤色スコリア状物質含む。
41-1	須A-皿	1層	14.3 2.8 6.25	上げ底の底部より僅かに内彎し、口縁部は外反する。	ロクロ整形。底部回転糸切り。口縁部内外面及び体部下半を横ナデ。	1/3残存。黒色スコリア状物質含む。
41-2 図版32	須A-皿	1層	14.8 3.1 5.8	断面半月形の高台を有する。厚めの底部よりやや内彎気味に開き、口縁部は強く外反する。	粘土紐巻き上げ後ロクロ整形。口縁部内外面・付高台部を横ナデ。	1/3残存。
41-3	須A-碗	1層	— 4.4 5.5	ロクロ痕顕著。体部は直線的に外傾する。断面三角形の高台を有する。	ロクロ整形。底部回転糸切り後付高台。付高台部を横ナデ。	底部破片。
41-4	須A-碗	1層	15.1 7.45 6.6	断面台形の高台を有する厚手の底部より体部はやや内彎し、口縁部は肥厚して外反する。	ロクロ整形。底部回転糸切り後付高台。高台部から体部下端にかけて横ナデ。口縁部横ナデ。指頭痕有り。	1/3強残存。
41-5 図版32	須A-碗	1層	17.7 7.3 7.1	断面長方形の高台を有する底部より内彎し、口縁部はやや外反する。体部上半にロクロ痕顕著。	粘土紐巻き上げ後ロクロ整形。底部回転糸切り。口縁部内外面及び体部・高台部を横ナデ。	ほぼ完形。一部自然釉付着。
41-6	須-長頸瓶	1層	13.15 9.5 —	頸部はやや直立気味で、口縁部は緩く外反する。口縁端部は上下に肥厚する。	粘土紐巻き上げ後ロクロ整形。口縁部内外面を横ナデ。	口頸部破片。
41-7	須-壺	1層	22.6 6.6 —	頸部は外反し、口唇部は上下に肥厚する。	粘土紐巻き上げ後ロクロ整形。口頸部内外面を丁寧にナデる。	口頸部破片。
48-1 図版36	土-壺	1層 2層	21.15 28.4 3.4	最大径は胴部上位にある。小さな底部より直線的に立ち上る。口縁部は僅かにコ字状に近い。全体に器肉が薄い。	粘土紐輪積み。外面胴部下半から底部にかけて縦方向、胴部下半は横方向のヘラ削り。口縁部は横ナデ。内面横方向のヘラナデ。底部ヘラ削り。	1/3欠失。少量の赤色スコリア状物質含む。
48-2 図版36	須A-坏	2層	11.8 3.75 5.1	上げ底の底部よりやや内彎して立ち上る。口縁部は僅かに外反する。	ロクロ整形。底部回転糸切り。口縁部内外面及び体部外面を横ナデ。	完形。黒色スコリア状物質含む。
48-3 図版36	須A-坏	2層	12.55 3.85 6.35	やや上げ底の底部より口縁部にかけて内彎する。	粘土紐巻き上げ後ロクロ整形。底部回転糸切り。口縁部内外面及び体部外面を横ナデ。	完形。底部内外面に墨痕。赤色スコリア状物質含む。
48-4 図版36	須A-坏	2層	13.5 3.6 5.7	上げ底の底部より体部から口縁部にかけて直線的に開く。口縁部は肥厚する。	ロクロ整形。底部回転糸切り。口縁部内外面及び体部下端横ナデ。	口縁部1/2欠失。黒色スコリア状物質含む。外面に火漉。
48-5	須A-坏	2層	12.5 3.95 6.45	底部より体部にかけて僅かに内彎し、口縁部は肥厚して外反する。	粘土紐巻き上げ後ロクロ整形。底部回転糸切り。口縁部内外面及び体部下半を横ナデ。	口縁部一部欠失。
48-6	須A-坏	2層	— 2.5 4.85	やや上げ底の底部より直線気味に立ち上る。	ロクロ整形。底部回転糸切り。	底部破片。黒色スコリア状物質含む。底部外面に「丁」の墨書。
48-7 図版36	須A-坏	2層	14.65 6.2 7.4	底部より体部にかけて内彎し、口縁部は直線的に開く。	ロクロ整形。底部回転糸切り。口縁部内外面及び体部下端を横ナデ。	完形。赤色スコリア状物質含む。外面に「+」の刻書。

図面 図版	種別 器形	出土 位置	法量	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
48-8 図版36	緑釉一塊	2層	— 3.8 8.95	断面正方形の高台を有する底部より 体部にかけて内彎する。	ロクロ整形。底部回転ヘラ削り後付 高台。高台部分横ナデ。体部外面及 び底部内面丁寧な磨き。	底・体部破片。釉は淡黄 緑色。

S D23溝跡 鏡瓦一覽

図面 図版	出土 位置	直径	内 区					外 区					全長	備 考	
			中 房 径	蓮子数	弁区 径	弁幅	弁数	幅	内 緑		外 緑				
				幅	文様	幅	高	文様							
43-1 図版33	1層	19.1	5.3	1+4	15.2	4.3	T6	1.9	0.6	A a	0.8	0.4	A a	7.75	瓦当裏面縄目叩き(L、13本)。男瓦接合部分指ナデ。瓦当面自然釉付着。
43-2	1層	17.2	5.5	1+4	12.2	2.9	T6	2.85	1.0	A a	1.9	0.75	A a	2.1	瓦当裏面全面指頭痕。瓦当面自然釉付着。
43-3 図版34	1層	18.5	5.75	1	12.6	2.8	T6	2.7	1.0	A a	1.7	1.0	A a	6.9	男瓦接合部分指ナデ。瓦当裏面指頭痕。
43-4 図版34	1層	19.4	4.8	1	18.0	4.1	T6	2.7	1.2	A a	1.5	1.25	A a	4.2	瓦当裏面指ナデ。少量の黒色スコリア状物質含む。
43-5 図版34	1層	19.6	3.8		14.6	4.9	T6	1.2				0.4	A a	2.2	瓦当裏面ナデ。全面に自然釉付着。

S D23溝跡 字瓦一覽

図面 図版	出土 位置	寸 法				内 区			外 区				脇 区		文様 深さ	全長	備 考
		上弦 弧幅	下弦 弧幅	弧深	厚さ	厚さ	文様	上		下		幅	文様				
		厚さ	文様	厚さ	文様	幅	文様	幅	文様								
41-8	1層	5.7	5.3		4.9	3.0	KK	0.4	a	1.5	a			0.4	6.1	顎F ₂ -b。瓦当凸面縄目叩き(L、17本)。少量の黒色スコリア状物質含む。布目30×30。	
41-9	1層	10.6			5.25	2.9	O	1.05	d	2.5	d	4.6	d	0.2	9.9	顎F ₂ -c。瓦当及び凸面縄目叩き。海綿骨針・黒色スコリア状物質含む。布目18×24。	
41-10	1層	5.9	5.3		6.05	2.1	KK	1.75	f	2.1	f	5.7		0.3	10.0	顎F ₂ -a。瓦当凸面縄目叩き(L、9本)。瓦当裏面指ナデ。瓦当面にワラ状圧痕。一部自然釉付着。布目24×25。	
41-11 図版33	1層	28.5	29.5	4.25	4.9	3.8	H	0.6	a	0.6	a	5.0	a	0.2	17.6	顎F ₂ -b。瓦当凸面縄目叩き(L、11本)。瓦当裏面女瓦部側端面指ナデ。全体に自然釉付着。布目33×27。	
42-1 図版32	1層	11.5	12.4		5.7	2.0	H	2.3	a	1.4	a	4.2	a	0.3	6.6	顎F ₂ -c。瓦当凸面縄目叩き(L、11本)。瓦当裏面指ナデ。海綿骨針・少量のスコリア状物質含む。布目31×33。	

図面 図版	出土 位置	寸 法				内 区		外 区				脇 区		文様 深さ	全長	備 考
		上弦 弧幅	下弦 弧幅	弧深	厚さ	厚さ	文様	上		下		幅	文様			
								厚さ	文様	厚さ	文様					
42-2 図版32	1層	10.9	11.8		3.8	2.35	H	0.8	a	0.7	a	4.4	a	0.4	10.8	顎F ₂ -a。瓦当凸面縄目叩き(L、10本)。瓦当裏面指ナデ。海綿骨針・黒色スコリア状物質含む。布目17×21。
42-3 図版32	1層	12.3	14.55		5.6	2.85	KK	1.4	b	1.4	b	4.7	b	0.25	12.7	顎G ₂ -b。瓦当凸面縄目叩き(L、10本)。布目42×39。
42-4 図版32	1層	15.85	14.7		6.0	3.0	KK	1.3	a	1.7	a	5.0	a	0.3	20.1	顎G ₁ -c。唐草文左2～3単位目に范キズ。瓦当凸面縄目叩き(L、10本)。瓦当面に自然釉附着。布目32×24。
42-5 図版33	1層	24.6	24.5		5.9	2.85	KK	1.3	a	1.8	a	6.2	a	0.4	18.3	顎G ₁ -c。唐草文左2～3単位目に范キズ。凹面布継ぎ目。瓦当凸面縄目叩き(L、11本)。布目20×20。
48-9	2層	14.6	14.9		3.75	2.6	KK	0.2	a	1.0	a	2.85	a	0.3	6.5	顎F ₁ -c。瓦当裏面指ナデ。瓦当凸面縄目叩き(L、18本)。范で押圧後、文様をヘラで書きなぞる。全面に自然釉附着。

S D23溝跡 男 瓦 一 覧

図面 図版	出土 位置	寸 法				成 ・ 整 形 の 特 徴							備 考
		狭端	広端	全長	厚さ	凹 面			凸 面		端 面		
						素 材	布 目	特 徴	叩 き	特 徴	特 徴		
43-6	1層		13.4	26.7	1.55	粘土紐	25×31	広端縁を幅広く、左右両側端縁を幅狭くヘラ削り。	縄目	全面を縦ナデ。広端縁を幅広く、左右両側端縁を幅狭くヘラ削り。	狭端(欠失)を除く3端をヘラ削り。	凹面に布合せ目S b、「寺」の朱墨書、「大」のヘラ書き。広端大きく隅落とし。	
44-1 図版34	1層	16.3		24.25	1.4	粘土紐		左側端縁を幅広く、右側端縁幅狭くヘラ削り。全面縦方向に丁寧な指ナデ。	縄目	全面を横ナデ。左右両側端縁を幅狭くヘラ削り。	狭端をナデ。左右両側端をヘラ削り。	狭端面にワラ状圧痕。凹面に「寺」の墨書。	
44-2	1層	10.2		31.5	1.5	粘土紐	23×25	粘土紐接合部分指ナデ。	縄目L 9本	全面を板状工具による回転ナデ。	左右両側端をヘラ削り。狭端ナデ。	凹面に布合せ目Z b、「寺」と思われる朱墨書。	
44-3 図版34	1層	9.6	20.8	42.0	1.8	粘土紐 13本	16×20	全端縁を幅広くヘラ削り。粘土紐接合部分指ナデ。		全面を板状工具による回転ナデ。広端縁幅広くヘラ削り。	全面をヘラ削り。	凹面に布合せ目S b、「寺」の朱墨書。	
45-1	1層			7.9	1.6		18×19					凹面に「大」のヘラ書き。	
48-11	2層		10.4	12.6	1.65	粘土紐	23×28	広端縁を幅広くヘラ削り。	縄目	広端縁を幅広くヘラ削り。	広端をヘラ削り。	凸面に「上」のヘラ書き。	
48-12	2層			13.4	1.45	粘土紐	23×22		縄目L	全面を縦ナデ。		凸面に「父」の押印。	
49-1	2層	10.3		32.4	1.7	粘土紐	19×21	無調整。	縄目L	全面を板状工具による回転ナデ。	狭端を指ナデ。左右両側端をヘラ削り。		

図面 図版	出土 位置	寸法				成・整形の特徴							備考
						凹面			凸面		端面		
		狭端	広端	全長	厚さ	素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴	特徴	
50-1	1層 4層		9.8	21.4	1.3	粘土紐	23×27	粘土紐接合部分指ナデ。左右両側端縁を幅狭くへら削り。		全面をへら状工具による縦ナデ。左右両側端縁を幅狭くへら削り。	広端・左右両側端をへら削り。	凸面に「豊」の押印。	
50-2 図版37	4層	8.9	21.8	39.1	1.5	粘土紐	22×21	広端縁幅広く、左右両側端縁幅狭くへら削り。	縄目L 広端縁幅広く、左右両側端縁を幅狭くへら削り。	全面を板状工具による回転ナデ。	狭端指ナデ。他の3端はへら削り。	凹面に細板圧痕。凸面に「又」のへら書き。	

SD 23 溝跡 女瓦 一覽

45-2	1層	9.9		10.1	1.6		20×23	広端・右側端縁を幅広くへら削り。	縄目L 7本	左側端縁をへら削り。	広端・右側端をへら削り。	凹面に布末端b。海綿骨針・黒色スコリア状物質含む。
45-3	1層		16.0	14.4	2.75	粘土板	27×21	広端・左側端縁を幅狭くへら削り。	縄目L 9本	無調整。	広端・左側端をへら削り。	凹面に判読不明のへら書き。
45-4 図版35	1層	16.95	19.0	39.7	2.2	粘土紐	21×15	左側端(欠失)を除く3端縁を幅広くへら削り。	縄目L 9本	右側端を除く3端縁を幅広くへら削り。叩き締めB。	全面をへら削り。	凹面右側端縁に整形台の圧痕。「+」のへら書き。
45-5	1層	23.15		33.3	0.9	粘土紐?	17×21	無調整。	縄目L 11本	無調整。叩き締めB。	広端(欠失)を除く3端を指ナデ。	凹面に「上」の逆字模骨文字。
46-1	1層		15.6	21.6	2.8	粘土板	17×19	広端・右側端縁を幅広くへら削り。	正格子(密)	無調整。	広端・右側端をへら削り。	凸面に「豊」の押印。広端面にワラ状圧痕。
46-2	1層			16.65	1.75	粘土板		左側端縁を幅広く指ナデ。	正格子(密)	無調整。	左側端をへら削り。	側端面に「U」の押印。
46-3 図版34	1層		8.4	16.6	2.25	粘土板	22×25	広端縁を幅狭く、右側端縁を幅広くへら削り。	斜格子	無調整。	広端・右側端をへら削り。	凹面に布末端a。広端小さく隅落し。海綿骨針含む。
46-4	1層 表土		15.0	25.0	2.0	粘土板	18×24	広端縁を幅広く、左側端縁を幅狭くへら削り。	正格子	無調整。	広端・左側端をへら削り。	広端面にワラ状圧痕。凹面に「父」の押印。
46-5	1層 表土		17.1	27.6	2.5	粘土紐	15×22	広端・左側端縁を幅広くへら削り。	斜格子	無調整。	広端・左側端をへら削り。	
46-6	1層			10.6	2.0		17×21		正格子			凹面に「父」の押印。
47-1 図版35	1層 表土	24.2	28.0	38.4	1.5	粘土紐?	23×19	無調整。	縄目L 7本	無調整。叩き締めB。	広端をへら削り。他の3端ナデ(凸面にも及ぶ)。広端面にワラ状圧痕。	凹面に「上」の逆字模骨文字。凸面に棒状圧痕。
47-2	1層 2層 表土	24.3	7.2	37.65	1.4	粘土紐?	20×23	無調整。	縄目L 10本	無調整。叩き締めB。	全面をナデ(凸面にも及ぶ)。広端・狭端にワラ状圧痕。	凹面に「上」の逆字模骨文字。凸面棒状圧痕。

図面 図版	出土 位置	寸法				成・整形の特徴							備考
						凹面			凸面		端面		
		狭端	広端	全長	厚さ	素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴		
48-10	2層 SK166 覆土	11.6		23.65	1.8	粘土板	17×18	広端・左側端縁を幅広くへら削り。	縄目L 11本	無調整。	広端をナデ後へら削り。左側端はへら削り。	凹面に「前」の押印。海綿骨針・黒色スコリア状物質含む。	
49-2 図版36	1層 2層	23.9	26.4	36.85	2.05	粘土紐	18×19	広端縁を幅広く、狭端・左右両側端縁を幅狭くへら削り。	縄目L 9本 へら削り。叩き締めB。 左側端縁補足叩き。	左側端を除く3端縁を幅狭くへら削り。	広端をへら削り。他の3端はナデ後へら削り。狭端に縄目残存。	黒色スコリア状物質含む。	

表土 土器・硯 一覧

図面 図版	種別 器形	出土 位置	法量	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
51-1	土一坏		11.8 3.15	底部より口縁部にかけて直線的に開き、外面粘土紐接合痕顕著。	粘土紐巻き上げ。底部へら削り後付高台。高台接着部分横ナデ。内面丁寧なへら磨き。	1/5残存。少量のスコリア状物質含む。内面黒色処理。
51-2	須一門面 硯		4.8 14.5	台脚部は硯面部に向って内彎し、裾部はやや広がる。外面に斜格子のへら書き、透し孔有り。	ロクロ整形。	台脚部破片。

表土 鏡瓦 一覧

図面 図版	出土 位置	直径	内区					外区					全長	備考	
			中房 径	蓮子数	弁区 径	弁幅	弁数	幅	内縁		外縁				
									幅	文様	幅	高			文様
51-3		17.2	5.6	4		5.0	○6						3.3	男瓦接合部分指ナデ。瓦当裏面縄目叩き(L、12本)。黒色スコリア状物質含む。	
51-4			3.6	1+4	12.0	4.3	T2			a			2.55	瓦当裏面指ナデ。	
51-5			8.25	1+6			T3						4.4	瓦当裏面全面へらナデ。	
51-6		18.3	5.1	1+4	15.0	4.1	T6		0.5	Aa	0.3 1.5	0.2	Aa	3.2	瓦当面下半外区外縁無し。瓦当裏面指ナデ。黒色スコリア状物質含む。全体的に自然釉付着。
51-7 図版37		19.05	2.7		14.1	5.0	T6	3.0	0.85	a	2.2	1.6	Aa	3.2	瓦当裏面縄目叩き(L、15本)。一部自然釉付着。

表土 宇 瓦 一 覧

図 面 図 版	出 土 位 置	寸 法				内 区		外 区				脇 区		文 様 深 さ	全 長	備 考
		上弦 弧 幅	下弦 弧 幅	弧 深	厚 さ	厚 さ	文 様	上		下		幅	文 様			
								厚 さ	文 様	厚 さ	文 様					
51-8		8.3			2.9	1.7	KK	1.2	b			2.5		0.1	9.6	顎欠失。凸面に丹附着。
51-9 図版37	表土 SD23 1層	21.4	23.0		4.9	2.6	KK	0.25		2.05	b	3.7	a	0.2	5.4	顎G ₂ -a。顎部分のみ残存。瓦当凸面縄目叩き。少量の黒色スコリア状物質含む。
51-10 図版37		7.9	13.75		6.4	3.0	KK	1.5	a	1.9	a	4.0	a	0.4	9.7	顎F ₂ -b。瓦当面左端范割れ進行のため界線をへら書き。女瓦部凸面縄目叩き(L、10本)。少量の黒色スコリア状物質含む。一部自然釉附着。
51-11 図版37		11.1	9.0		5.2	3.55	HK	0.45	a	0.8	a	5.4	a	0.25	14.95	顎F ₂ -a。海綿骨針含む。自然釉附着。
51-12 図版37		6.2	1.2		5.2	2.4	KK	0.85	a	1.9	a			0.15	9.9	顎F ₂ -a。瓦当凸面縄目叩き。黒色スコリア状物質含む。
51-13		10.7	12.2		5.5	2.85	KK	0.8	a	1.7	a	3.7	f	0.3	6.3	顎F ₁ -c。自然釉附着。
51-14		12.0	13.05		4.35	3.0	KK			1.2	a	3.5	f	0.25	17.0	顎F ₂ -a。瓦当凸面縄目叩き、棒状圧痕。
52-1		7.5	11.4		4.9	3.1	KK	0.8	a	1.0	a	4.3	a	0.1	10.9	顎F ₂ -c。瓦当凸面縄目叩き(L、8本)。女瓦部側端面指ナデ。黒色スコリア状物質含む。
52-2		13.2	10.4		5.1	3.4	KK	0.7	a	1.0	a	3.5	a	0.2	6.5	
52-3		9.2	7.2		4.7	2.4	KK	1.5	a			3.4	f	0.2	8.1	顎G ₂ -a。瓦当凸面縄目叩き。黒色スコリア状物質含む。自然釉附着。
52-4		9.95			5.7	5.7	H							0.1	5.7	顎F ₂ -a。凹面棒状圧痕。黒色スコリア状物質含む。自然釉附着。
52-5		5.9	6.4		3.7	2.2	H	0.9	a	0.8	a					顎G ₂ -b。少量の海綿骨針含む。
52-6 図版37		12.55	15.0		3.9	2.5	H	0.7	a	0.75	a			0.3	12.3	顎F ₂ -a。瓦当凸面縄目叩き。女瓦部側端面指ナデ。海綿骨針含む。自然釉附着。
52-7 図版37		14.6	13.6		5.2	3.35	H	0.95	a	0.95	a	4.3	a	0.1	10.5	顎F ₁ -a。瓦当凸面縄目叩き。黒色スコリア状物質含む。自然釉附着。

図面 図版	出土 位置	寸法				内区		外区				脇区		文様 深さ	全長	備考
		上弦 弧幅	下弦 弧幅	弧深	厚さ	厚さ	文様	上		下		幅	文様			
								厚さ	文様	厚さ	文様					
52-8 図版37		10.4	13.2		3.8	3.8	KK?					3.3	a	0.2	9.5	顎F ₁ -c。瓦当凸面繩目 叩き。海綿骨針・赤色スコ リア状物質含む。
52-9 図版37		11.8	7.8		4.0	2.5	O	0.4	a		a	2.7	a	0.3	10.2	顎F ₂ -c。瓦当凸面繩目 叩き。女瓦部側端面ナデ。 海綿骨針含む。
52-10		7.0	5.75		5.3	3.0		1.75	a	0.65	a	2.7	a	0.1	13.0	顎F ₂ -c。瓦当及び凸面 繩目叩き。女瓦部側端面ナ デ。自然釉付着。
52-11		12.9	13.1		3.7	2.5		1.2	a			4.4	a	0.2	4.9	瓦当凸面繩目叩き。自然釉 付着。

表土 男 瓦 一 覧

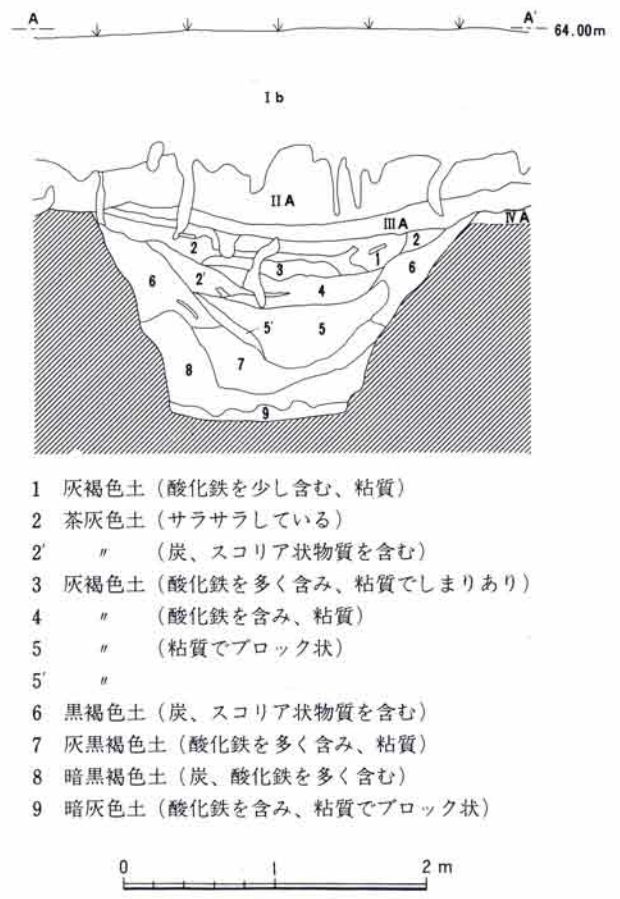
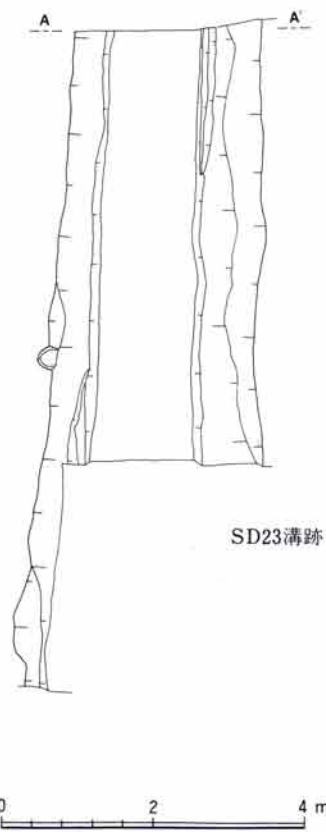
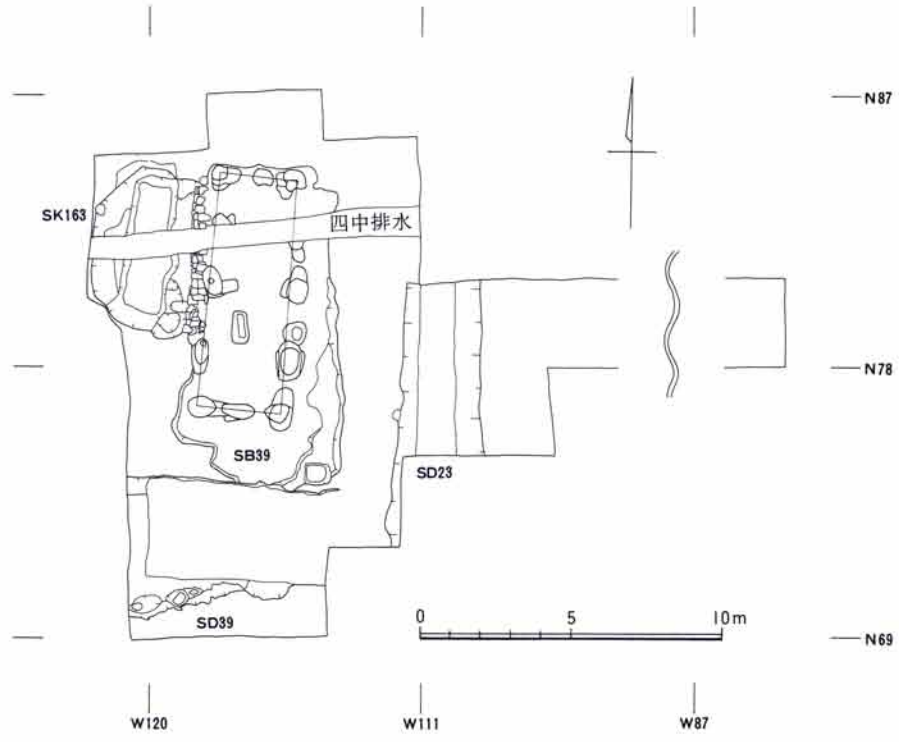
図面 図版	出土 位置	寸法				成・整形の特徴							備考
		狭端	広端	全長	厚さ	凹面			凸面		端面		
						素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴		
53-1	表土 SD23 1層	4.9		19.0	1.55	粘土紐	19×19	左右両側端縁を 幅広くへら削り。		全面回転ナデ。	左右両側端をへ ら削り。	狭端隅落し。狭 端ワラ状圧痕。	
53-2	表土 SD23 1層		11.8	21.65	1.4	粘土紐		全面縦方向に指 ナデ。広端・右 側端縁を幅広く へら削り。		全面縦方向に指 ナデ。広端・左 側端縁を幅狭く へら削り。	広端・左側端を へら削り。	凹面に「寺」の 朱墨書。海綿骨 針・黒色スコ リア状物質含む。	
53-3				19.2	1.5	粘土紐	24×25		縄目L	全面横方向に指 ナデ。		凸面に「安」の 押印。	
53-4				6.3	1.5		24×21					凸面に「口」部 「」のへら書き。	
53-5				4.7	1.3				縄目			凸面に「経」 のへら書き。	

表土 女 瓦 一 覧

53-6				12.15	2.6	粘土紐	18×21	右側端縁を幅狭 くへら削り。	縄目L 10本	右側端縁を幅狭 くへら削り。	右側端をへら削 り。	凹面に「松」の 指書き。
53-7				7.7	2.0		24×23		縄目L 8本			凹面「壬」のへ ら書き。赤色ス コリア状物質含 む。
53-8				10.0	2.2		22×19		縄目L 8本			凹面に「个」の 模骨文字。

図面 図版	出土 位置	寸法				成・整形の特徴						備考
						凹面			凸面		端面	
		狭端	広端	全長	厚さ	素材	布目	特徴	叩き	特徴	特徴	
53-9		18.8		16.8	2.0	粘土板	22×17	狭端縁を幅広く、 左側端縁を幅狭く へら削り。	縄目L 8本	無調整。	狭端・左側端を へら削り。	狭端面に「那瓦」 の押印。ワラ状 圧痕。海綿骨針 含む。
53-10				11.8	2.25			部分的に指ナデ。	縄目L 9本			凸面に「父」の 押印。海綿骨針 含む。

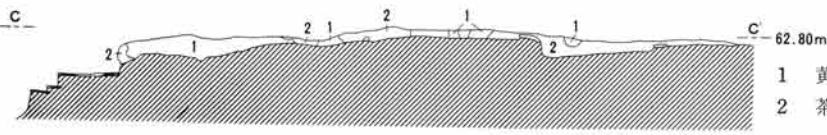
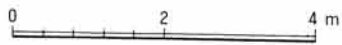
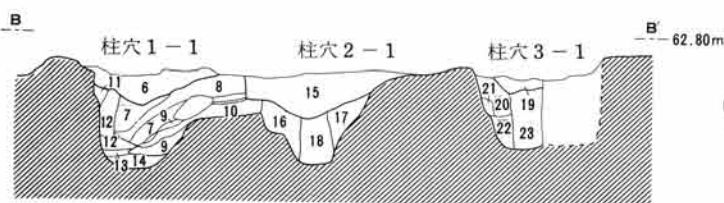
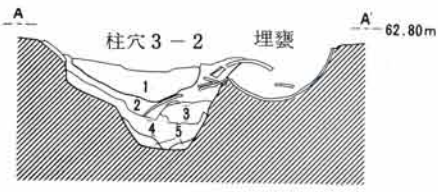
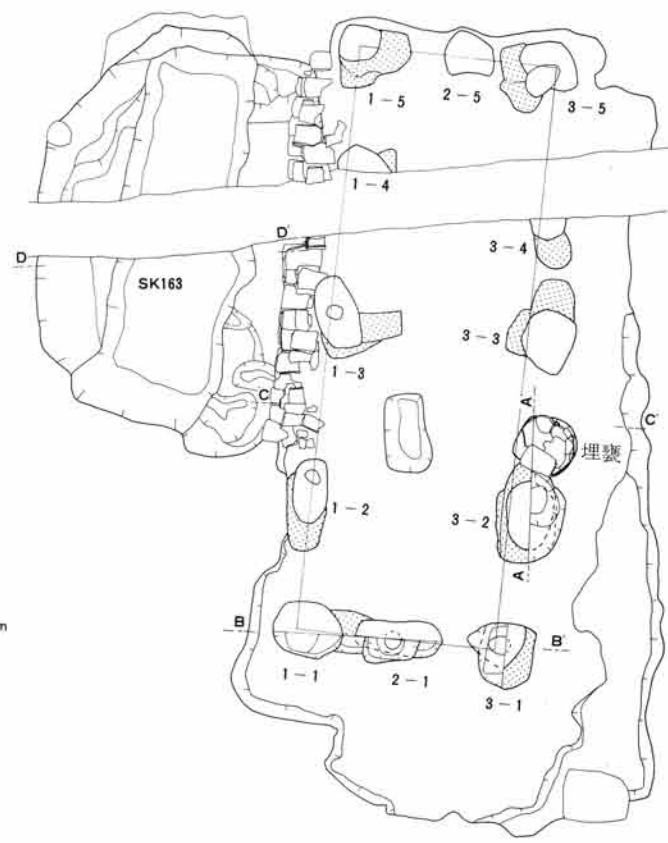
図 面



- 1 灰褐色土（酸化鉄を少し含む、粘質）
- 2 茶灰色土（サラサラしている）
- 2' "（炭、スコリア状物質を含む）
- 3 灰褐色土（酸化鉄を多く含む、粘質でしまりあり）
- 4 "（酸化鉄を含み、粘質）
- 5 "（粘質でブロック状）
- 5' "
- 6 黒褐色土（炭、スコリア状物質を含む）
- 7 灰黒褐色土（酸化鉄を多く含む、粘質）
- 8 暗黒褐色土（炭、酸化鉄を多く含む）
- 9 暗灰色土（酸化鉄を含み、粘質でブロック状）

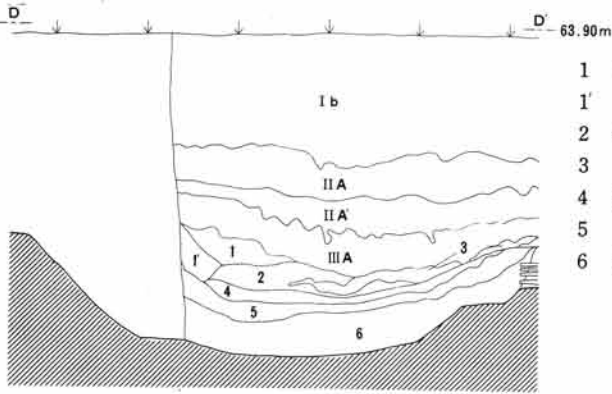
図面1 第28次調査 遺構配置図、SD23溝跡実測図

- 柱穴 3-2
 - 1 灰褐色土 } B期
 - 2 " } A期抜き穴
 - 3 黒灰色土 } A期抜き穴
 - 4 黄褐色粘土 } A期埋土
 - 5 黒茶褐色土 } B期
- 柱穴 1-1
 - 6 明茶褐色土 } A期埋土
 - 7 茶褐色土 } A期抜き穴
 - 8 灰黒褐色土 } A期抜き穴
 - 9 黄褐色粘土 } A期埋土
 - 10 灰黒褐色土 } A期埋土
 - 11 茶褐色土 } A期埋土
 - 12 灰黒褐色土 } A期埋土
 - 12' " } A期埋土
 - 13 茶褐色土 } A期埋土
 - 14 灰黒褐色土 } A期埋土
- 柱穴 2-1
 - 15 黄褐色粘土 } B期
 - 16 灰黒褐色土 } A期埋土
 - 17 灰褐色土 } A期埋土
 - 18 " } A期柱痕
- 柱穴 3-1
 - 19 明茶褐色土 } B期
 - 20 灰黒褐色土 } A期埋土
 - 21 暗黒褐色土 } A期埋土
 - 22 灰黒褐色土 } A期埋土
 - 23 " } A期柱痕



- 1 黄褐色粘土
- 2 茶褐色土 (粘土粒を含む)

SB39掘立柱建物跡

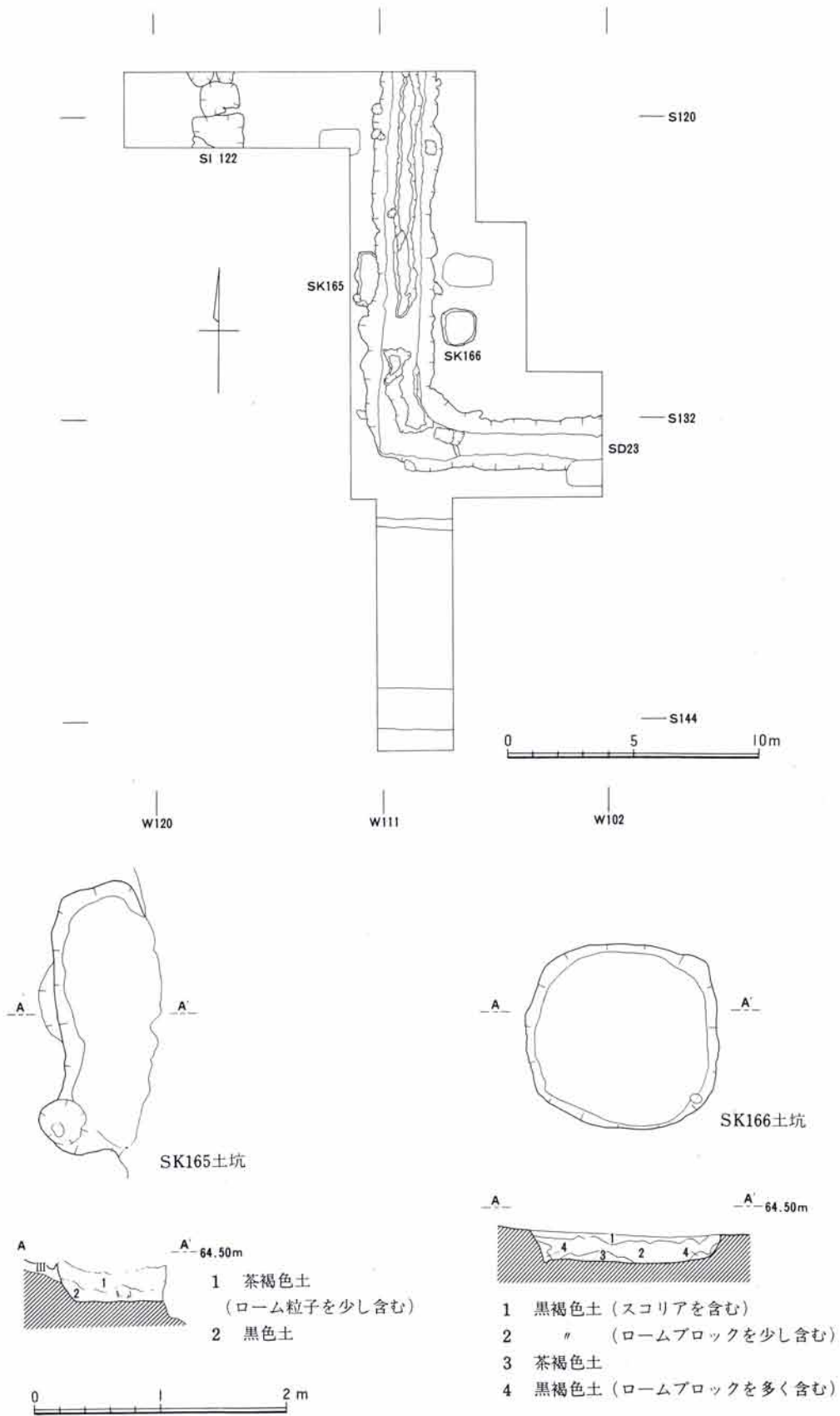


- 1 灰褐色土 (炭、酸化鉄を少し含む)
- 1' " (しまりあり)
- 2 黒灰色土 (酸化鉄を多く含む)
- 3 " (粘土および焼土ブロック)
- 4 茶灰色土 (酸化鉄、炭、粘土粒子を含む。粘質)
- 5 " (酸化鉄を多く含む、粘質でブロック状)
- 6 黒灰色土 (酸化鉄、炭を含む。粘質)

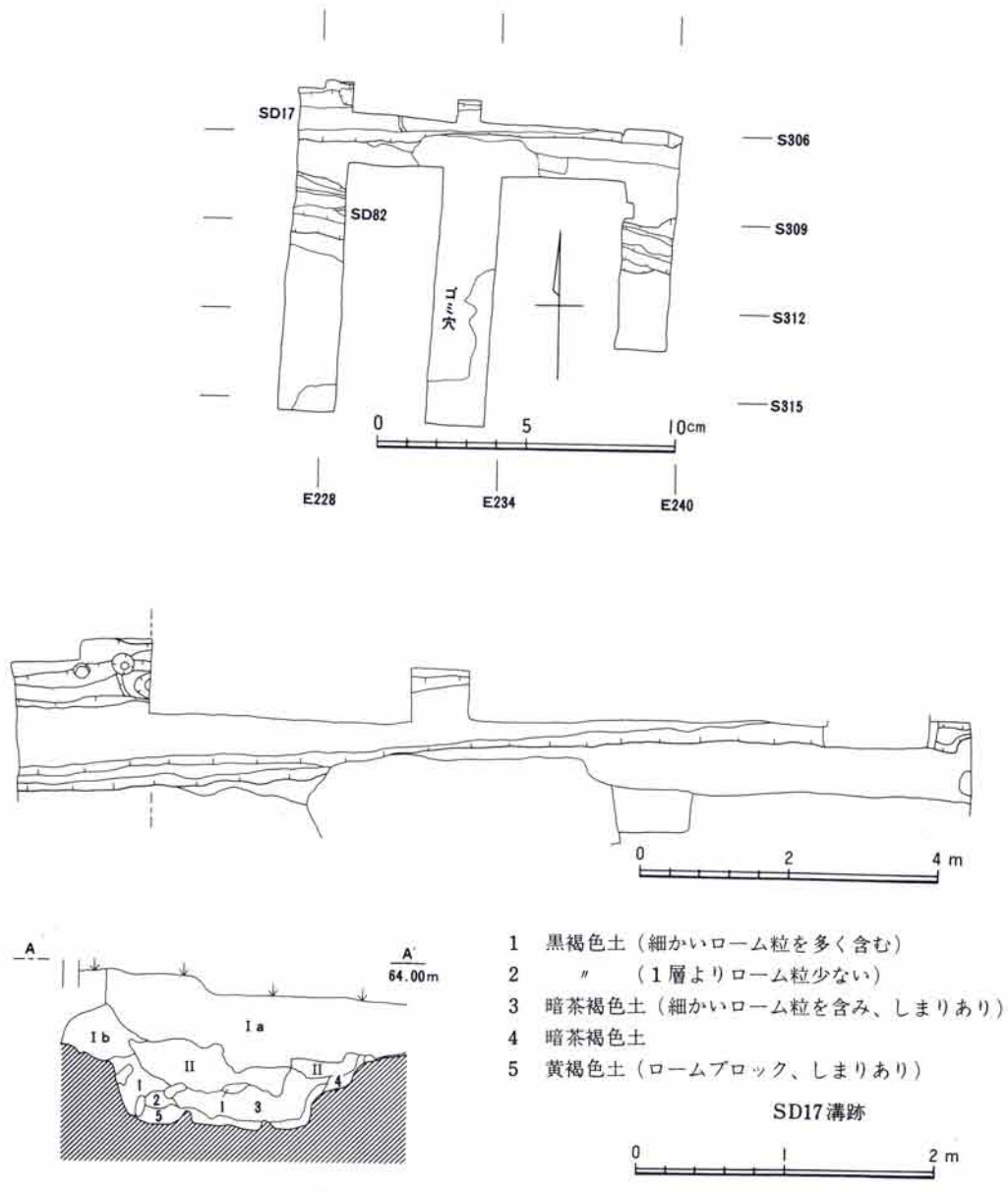
SK163土坑



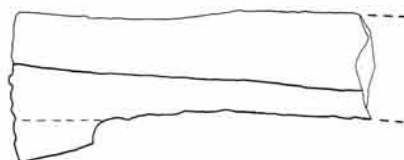
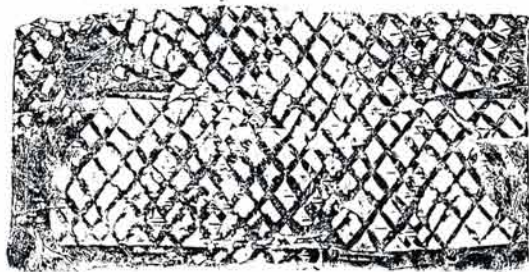
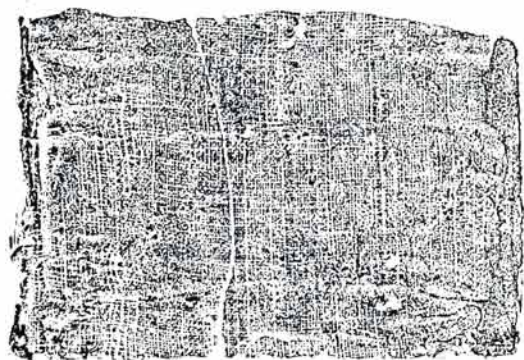
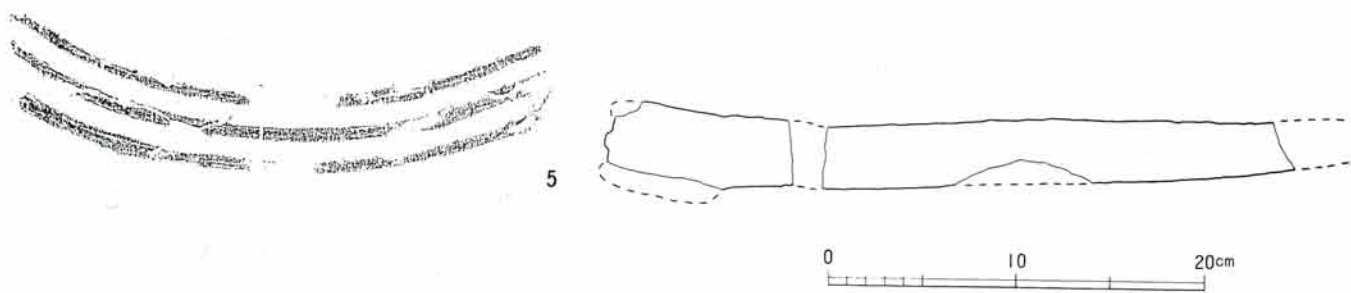
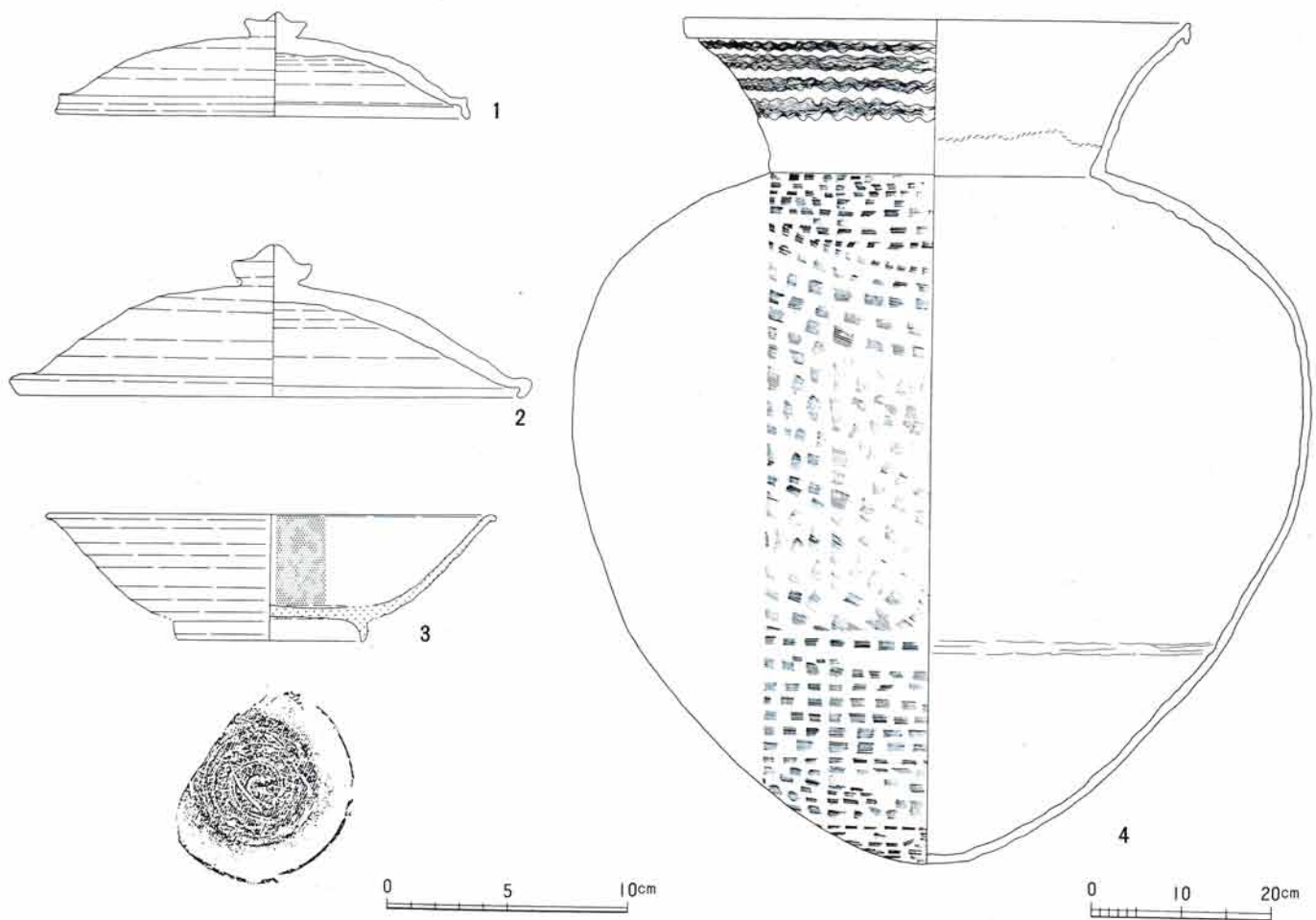
図面 2 第28次調査 SB39掘立柱建物跡、SK163土坑実測図



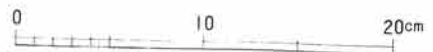
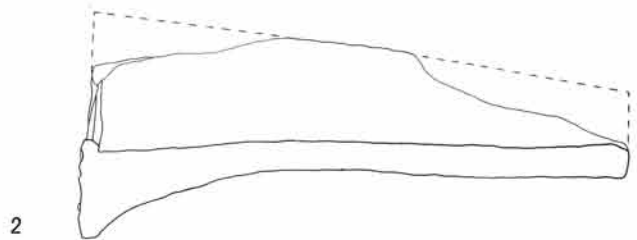
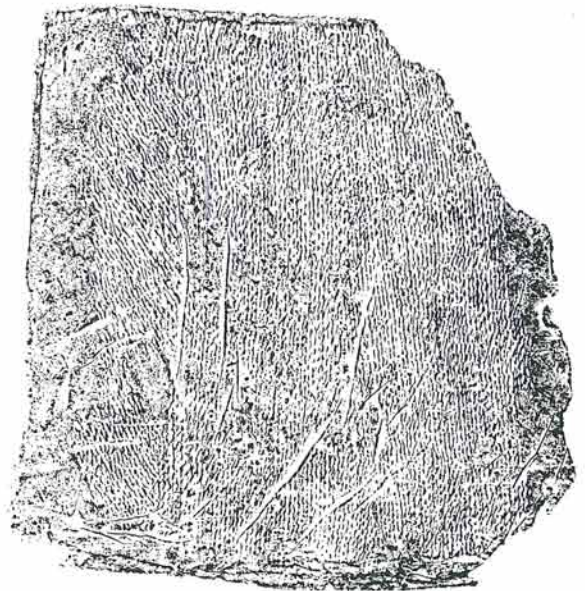
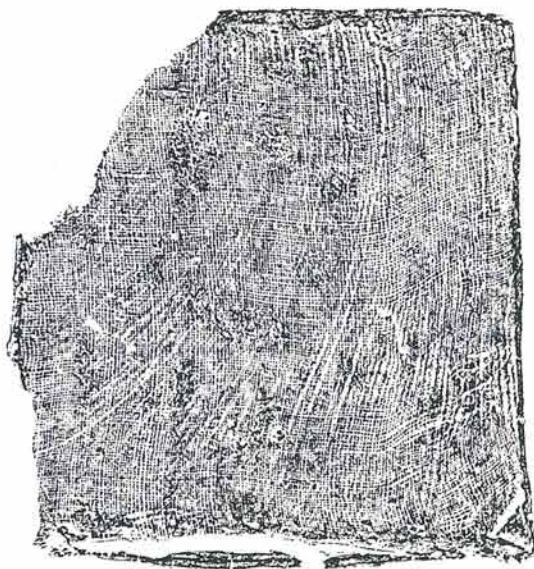
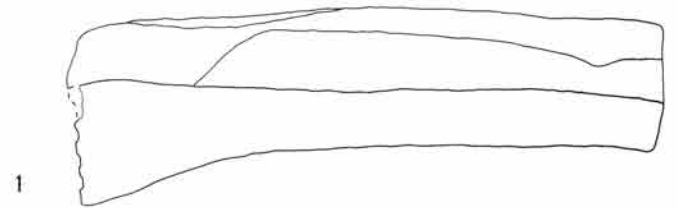
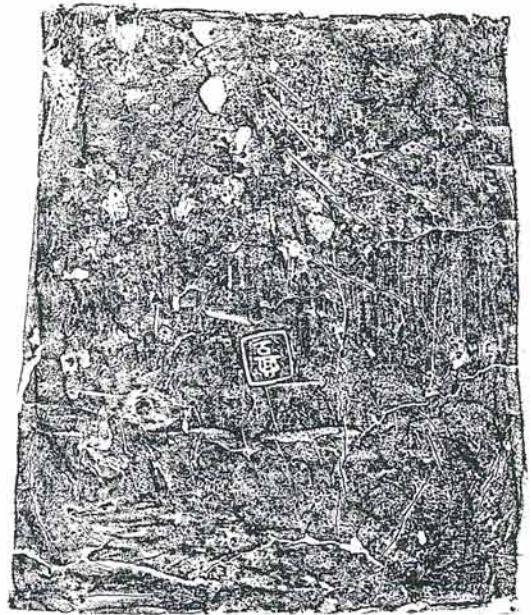
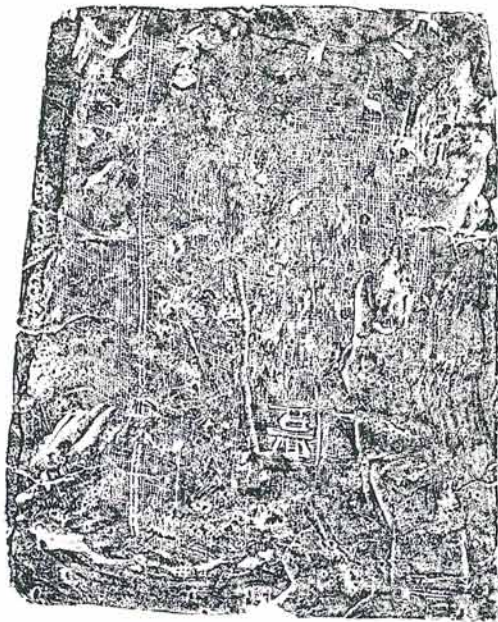
図面3 第29次調査 遺構配置図、SK165・166土坑実測図



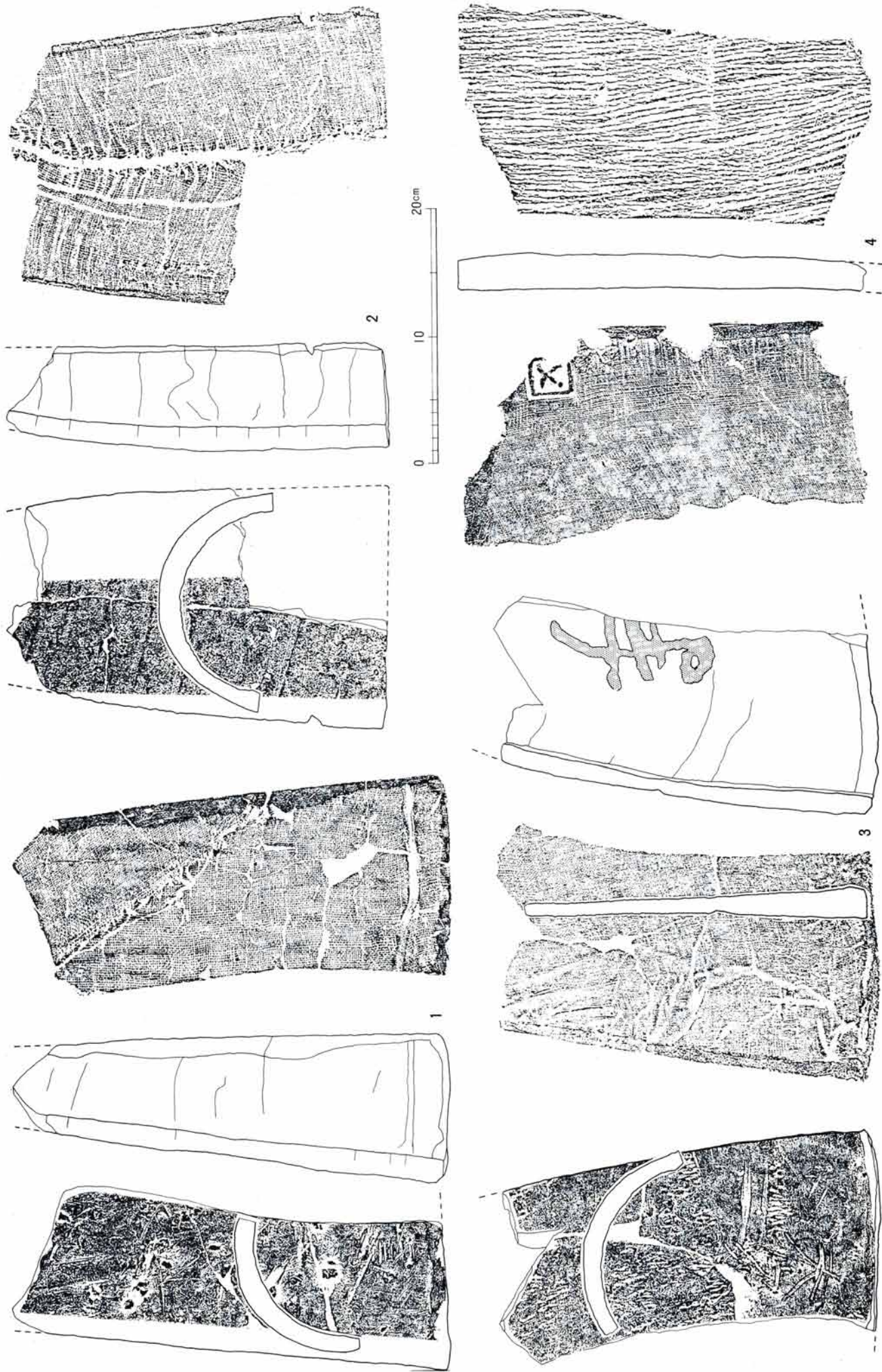
図面5 第86次調査 遺構配置図、SD17溝跡実測図



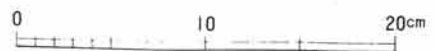
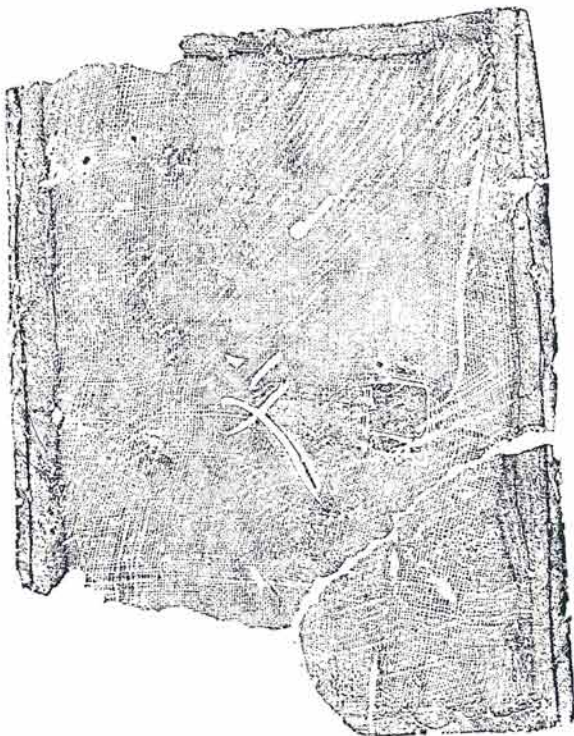
図面6 第28次調査 SB39掘立柱建物跡出土遺物



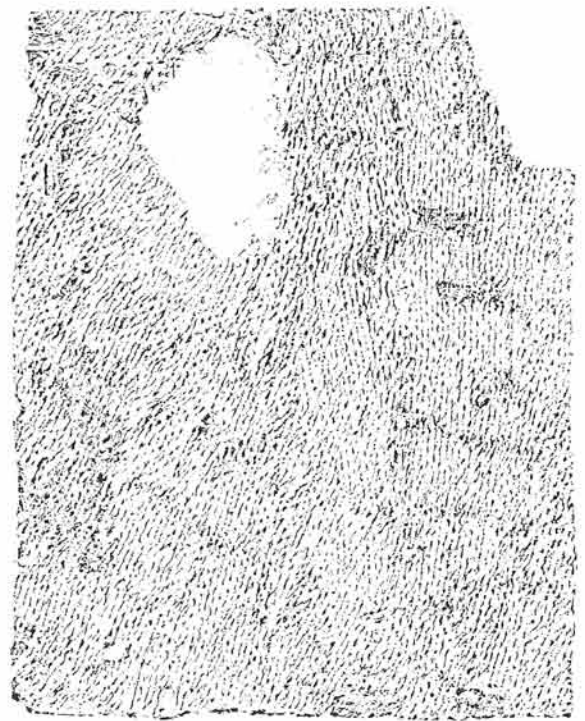
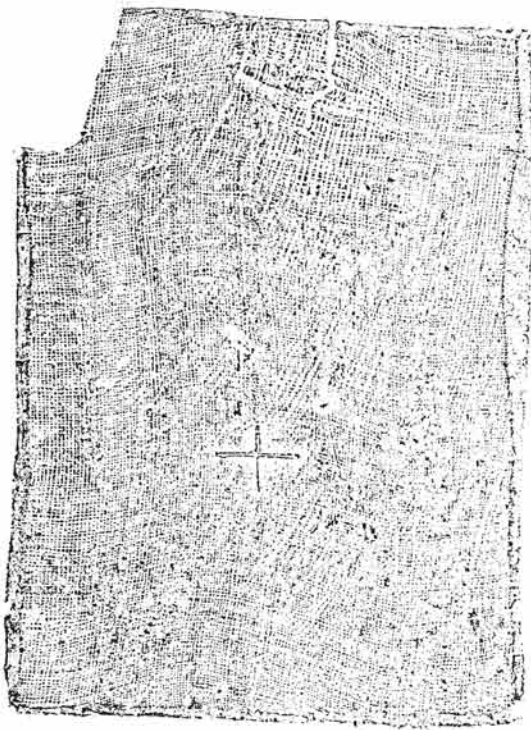
図面7 第28次調査 SB39掘立柱建物跡出土遺物



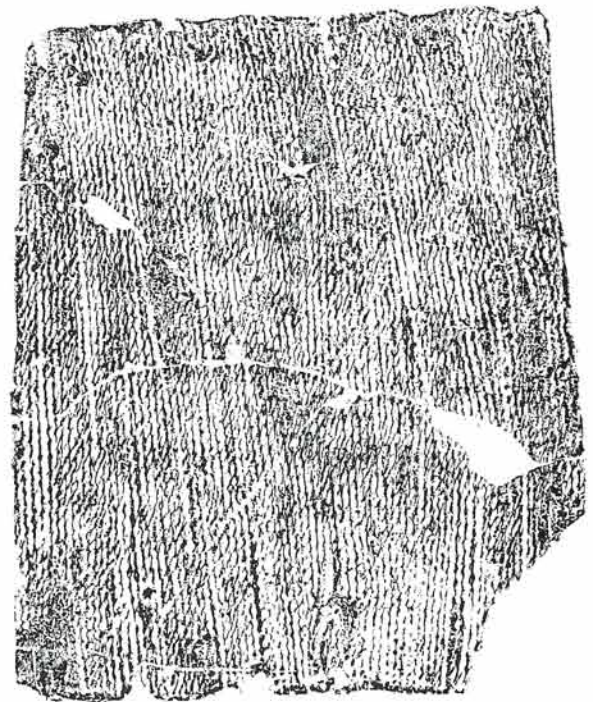
図面 8 第28次調査 SB39掘立柱建物跡出土遺物



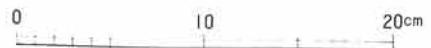
図面 9 第28次調査 SB39掘立柱建物跡出土遺物



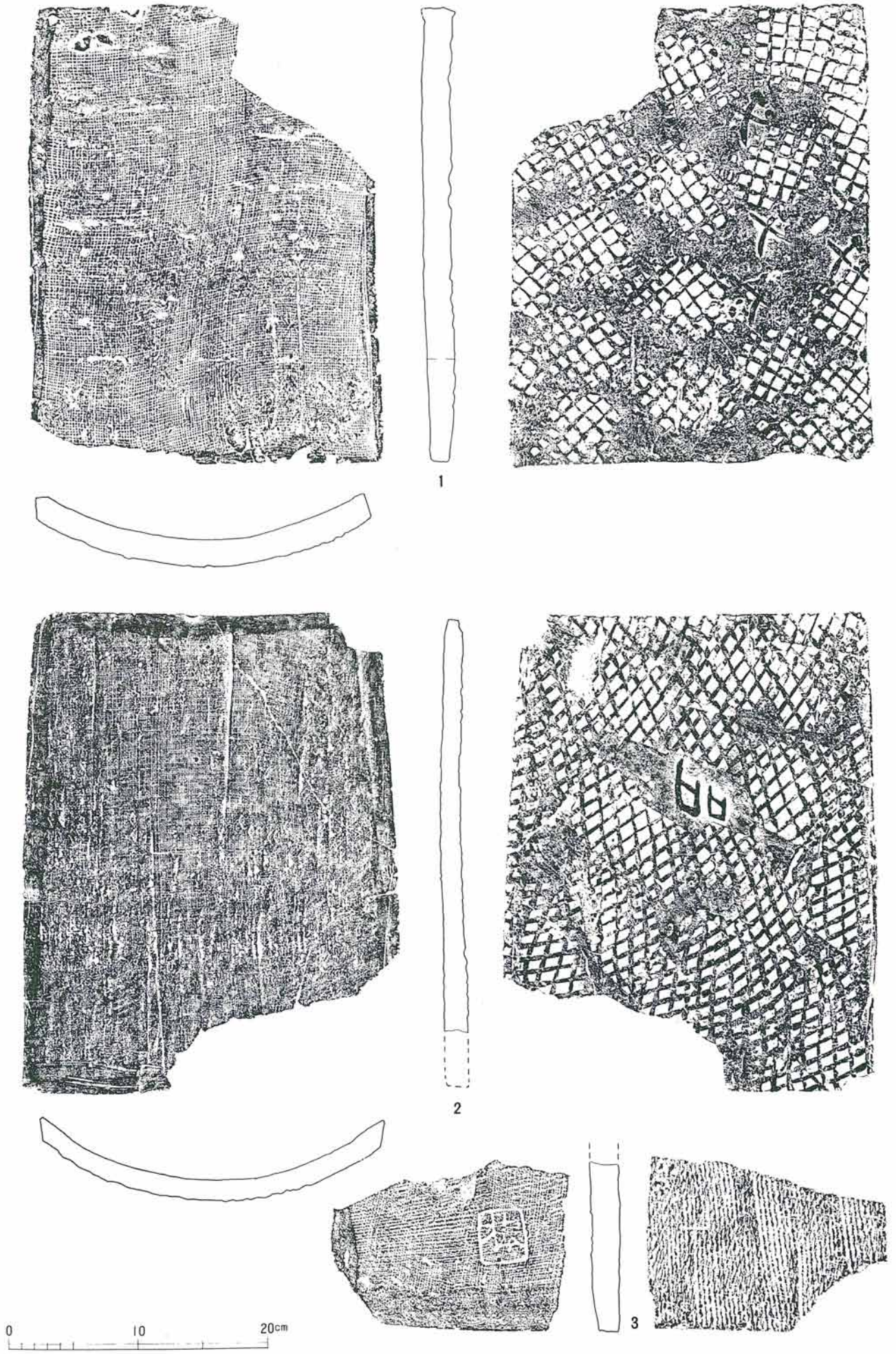
1



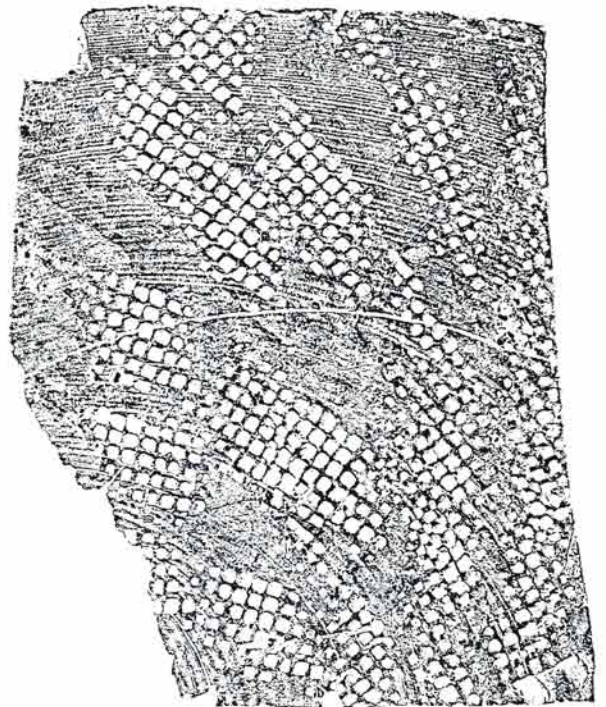
2



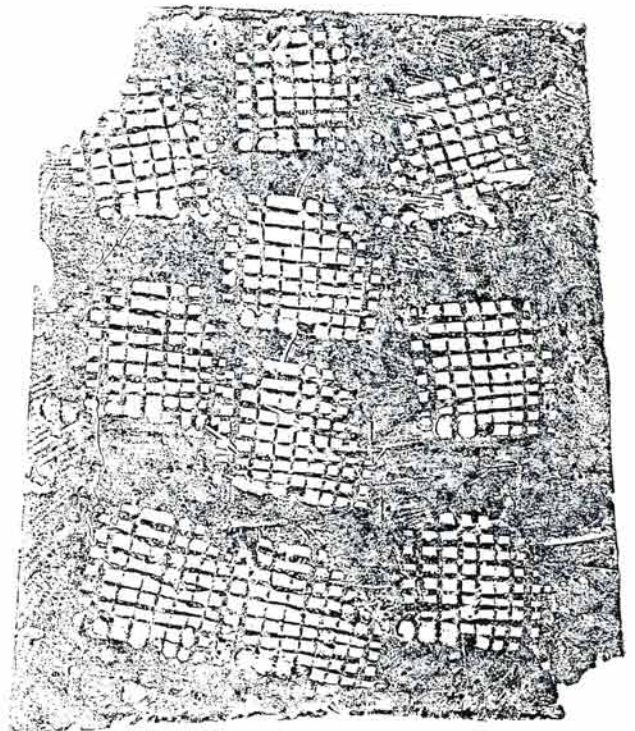
図面10 第28次調査 SB39掘立柱建物跡出土遺物



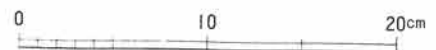
図面11 第28次調査 SB39掘立柱建物跡出土遺物



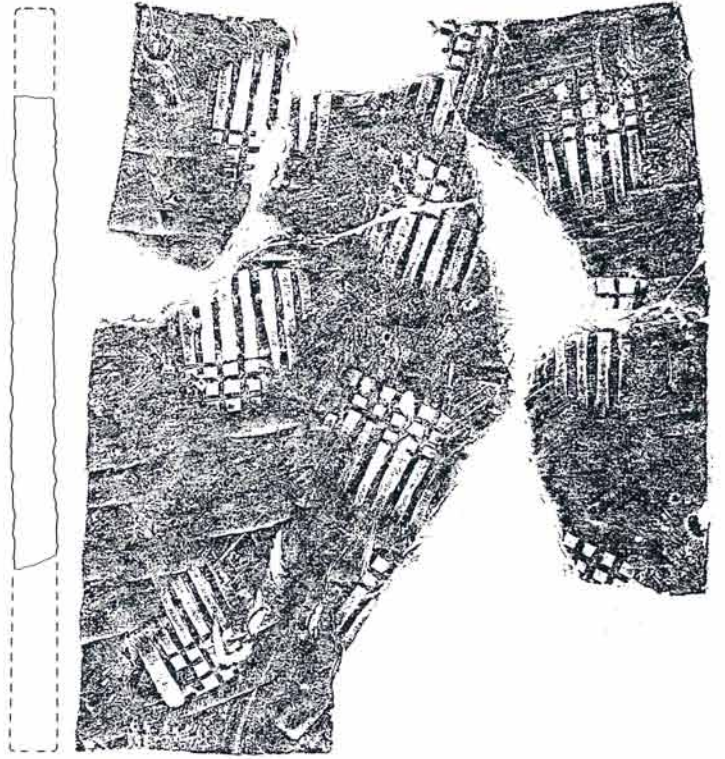
1



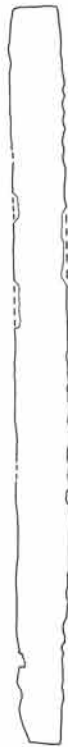
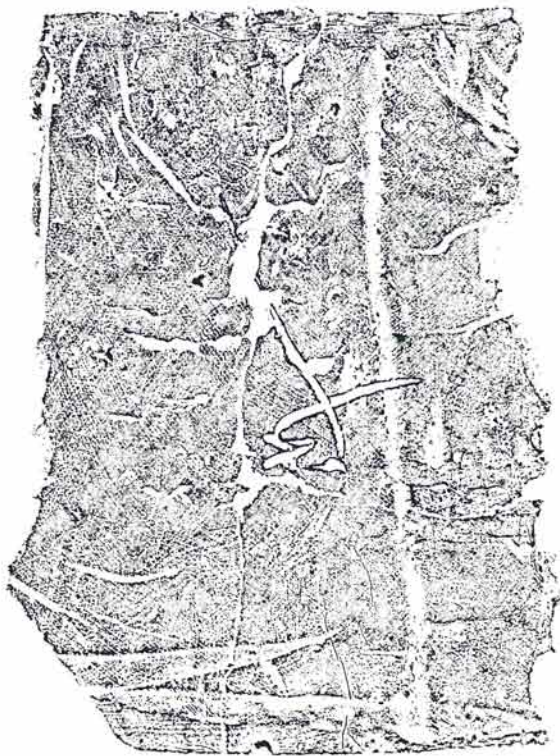
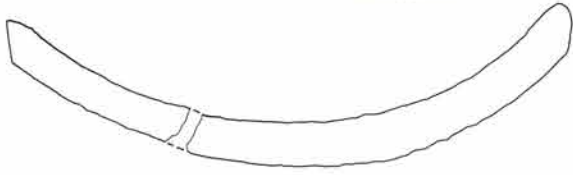
2



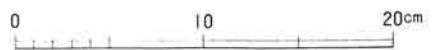
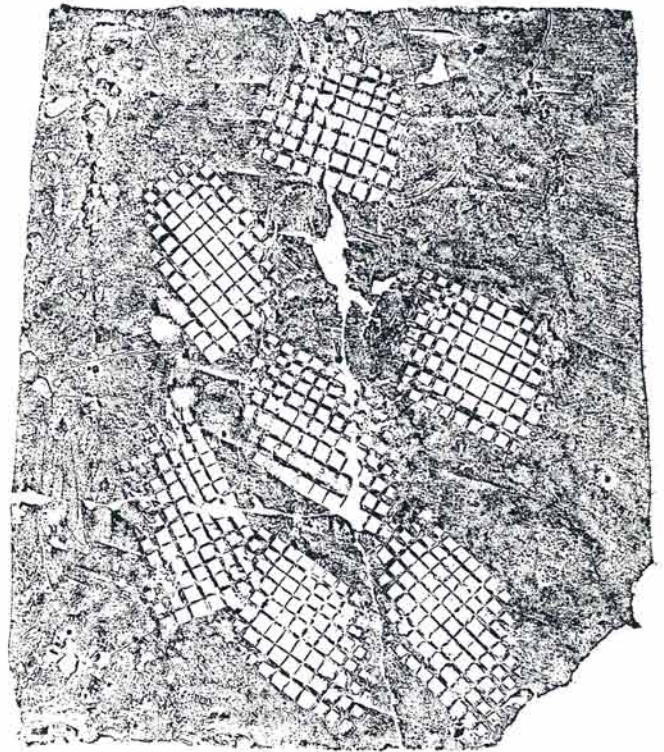
図面12 第28次調査 SB39掘立柱建物跡出土遺物



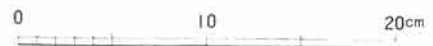
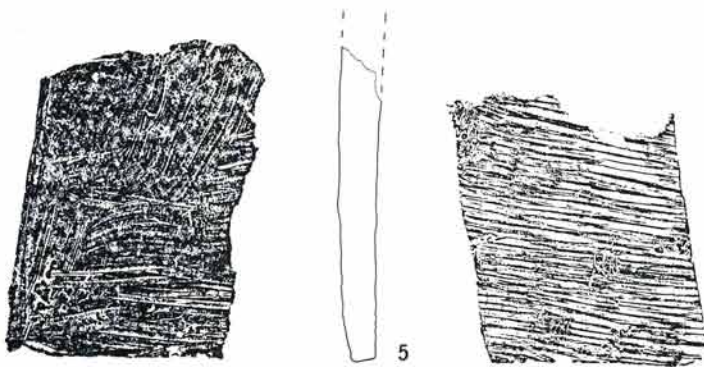
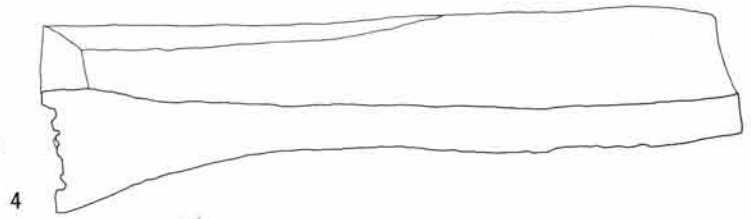
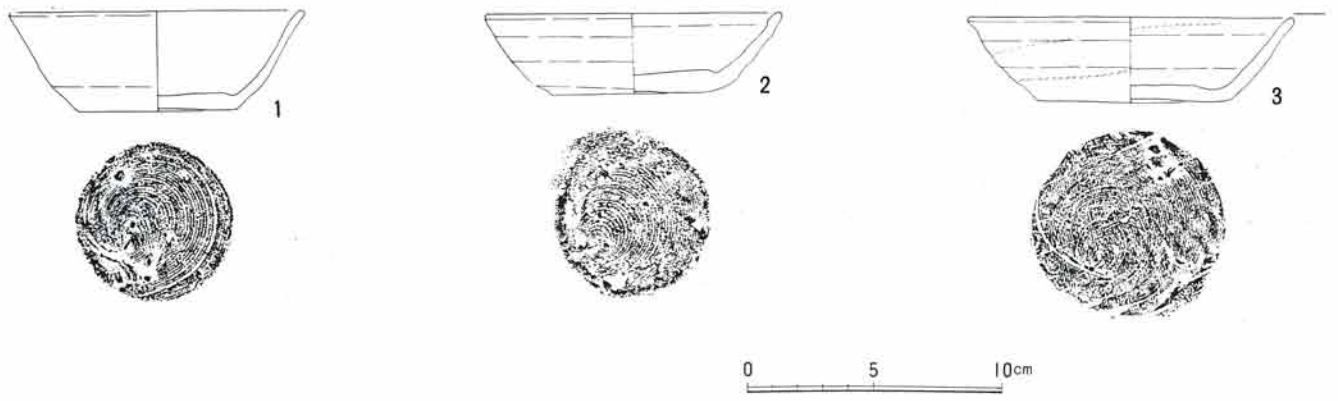
1



2

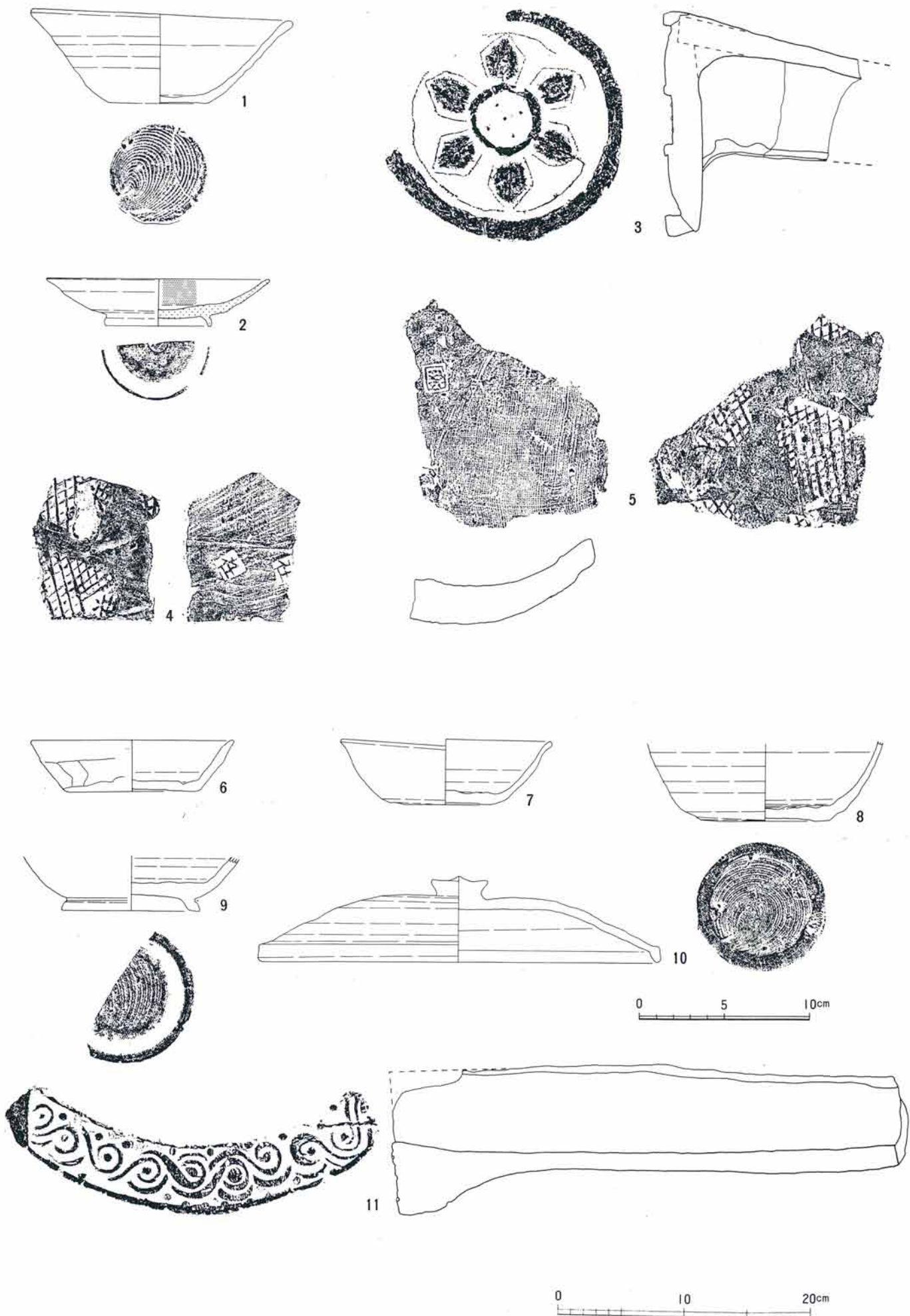


図面13 第28次調査 SB39掘立柱建物跡出土遺物



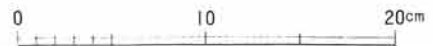
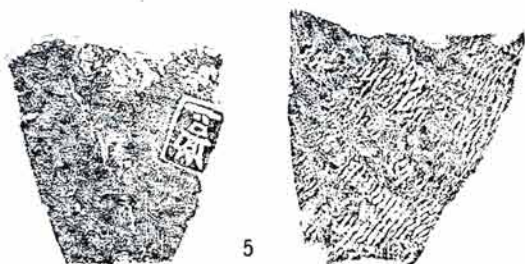
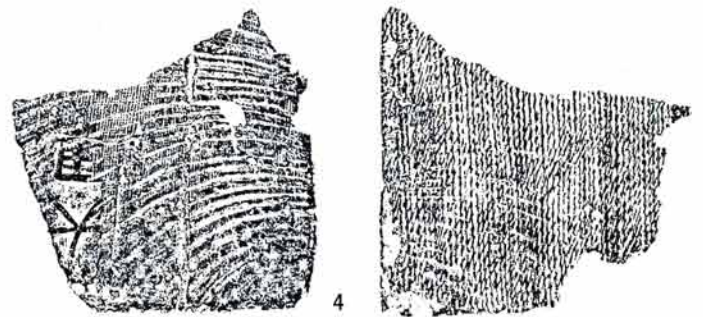
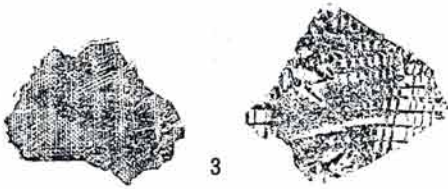
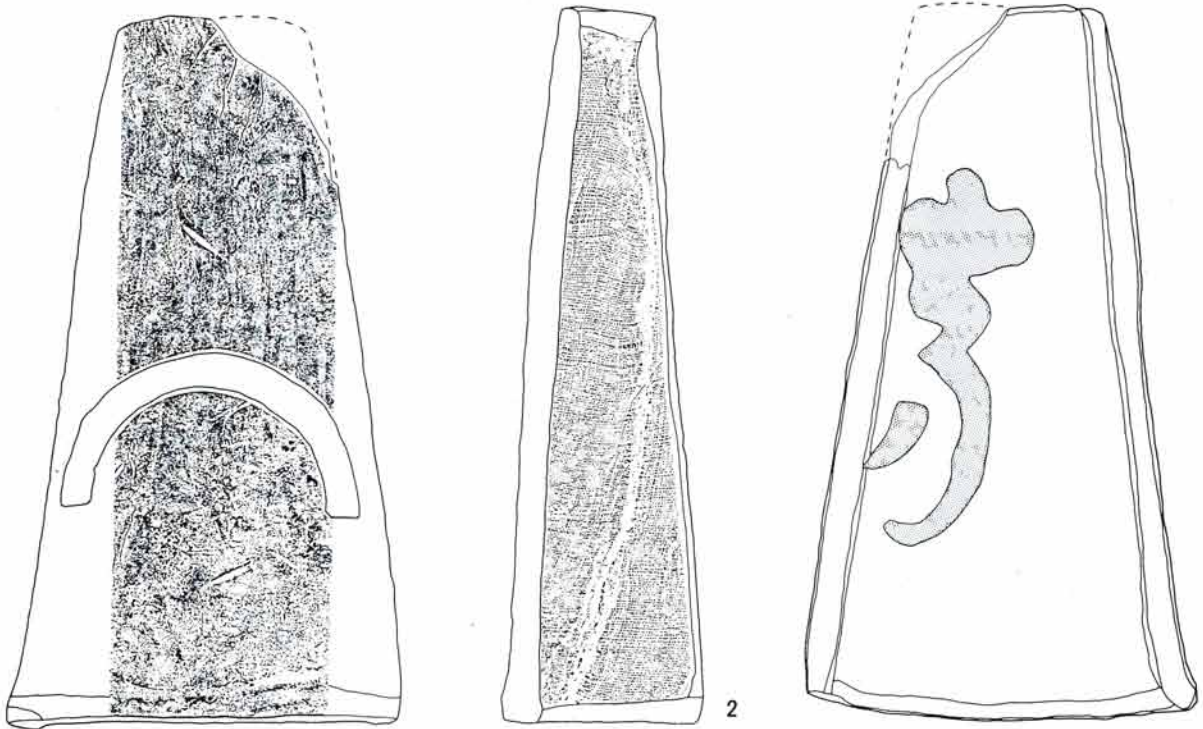
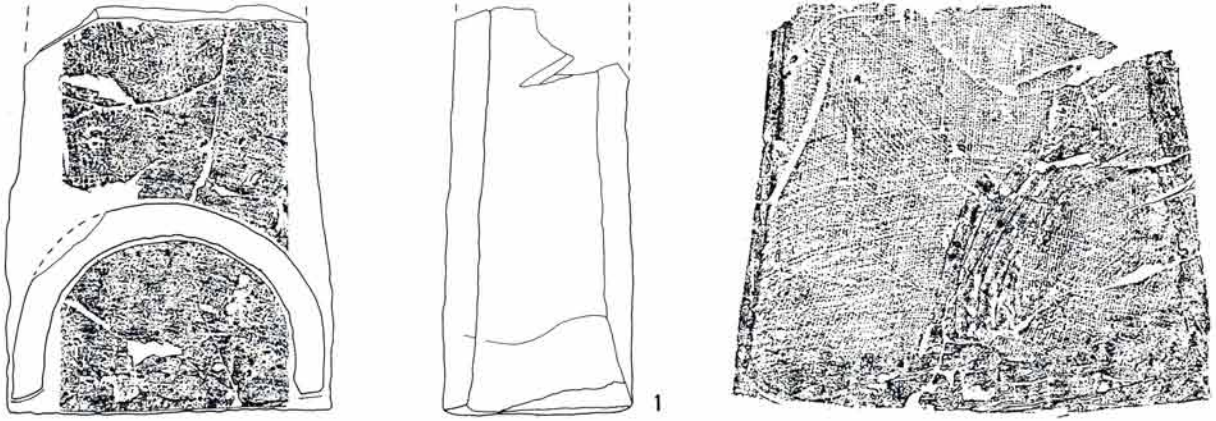
図面14 第28次調査 SD23溝跡、出土遺物

1第1層、2第7層、3第8層、4第2層、5第3層

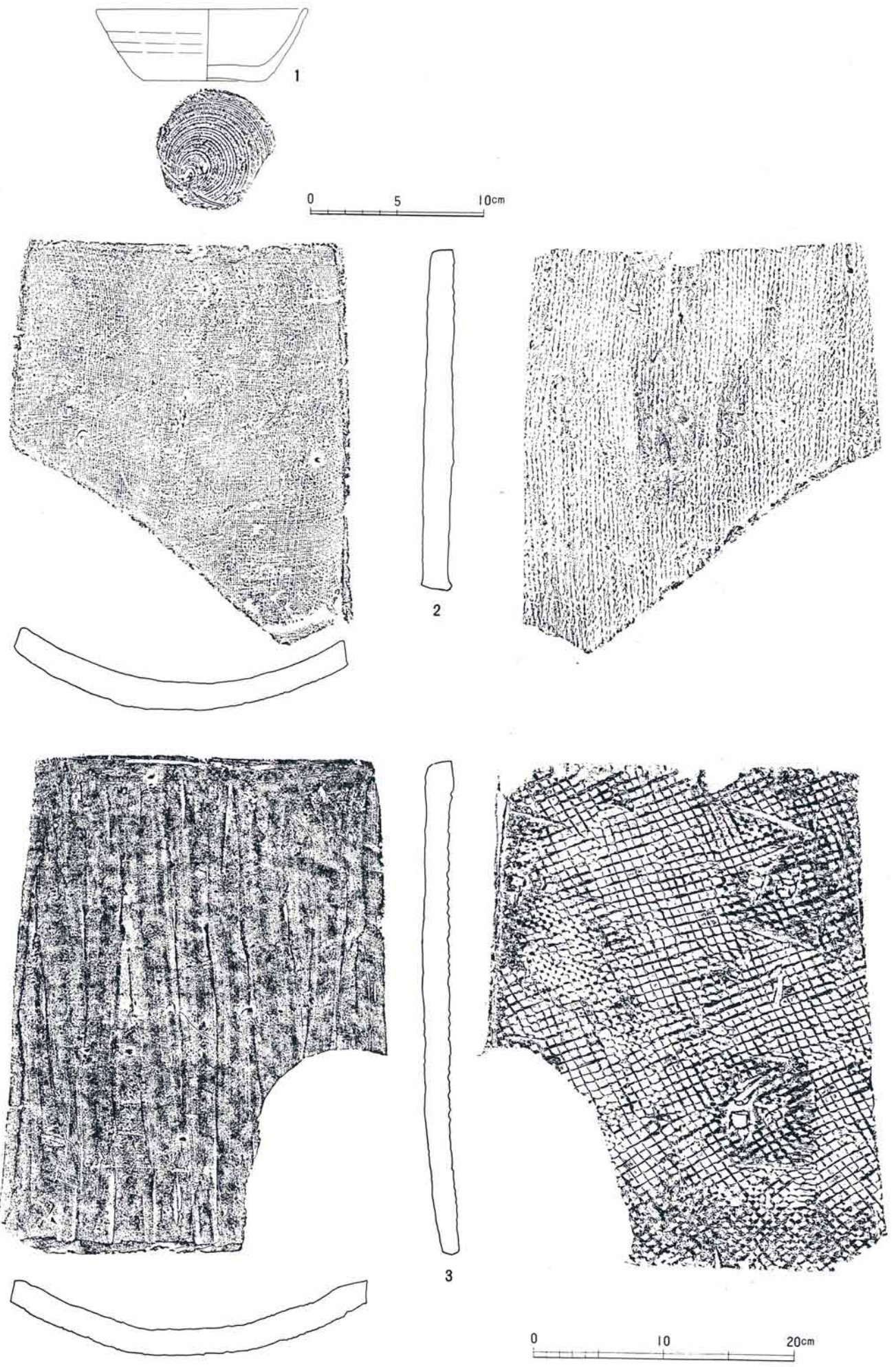


図面15 第28次調査 SD23溝跡出土遺物

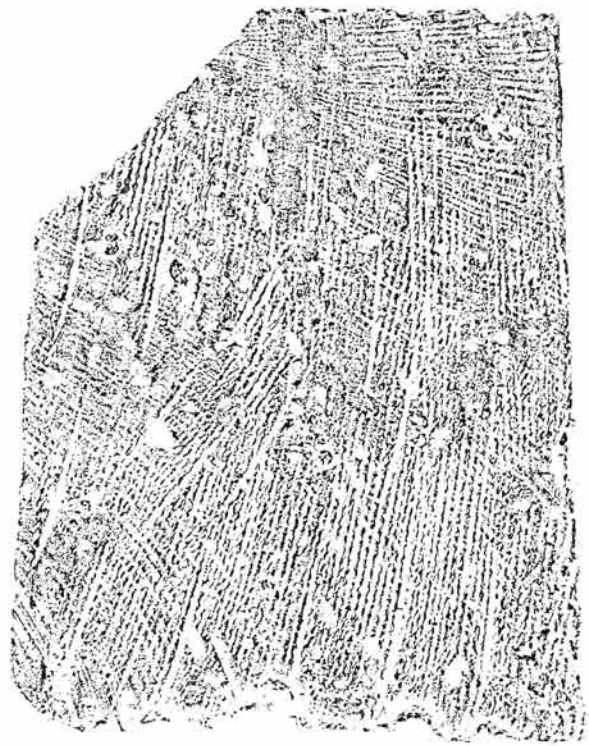
1~5 第6層、6~11 覆土



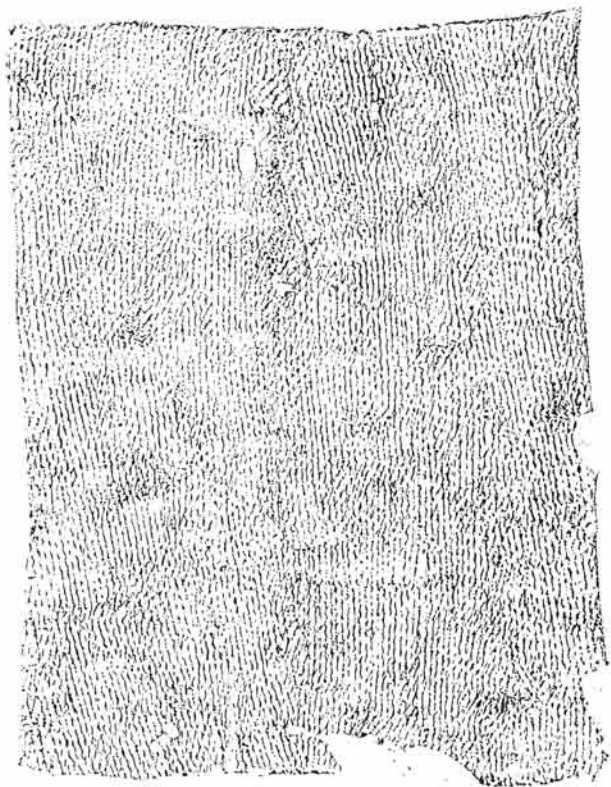
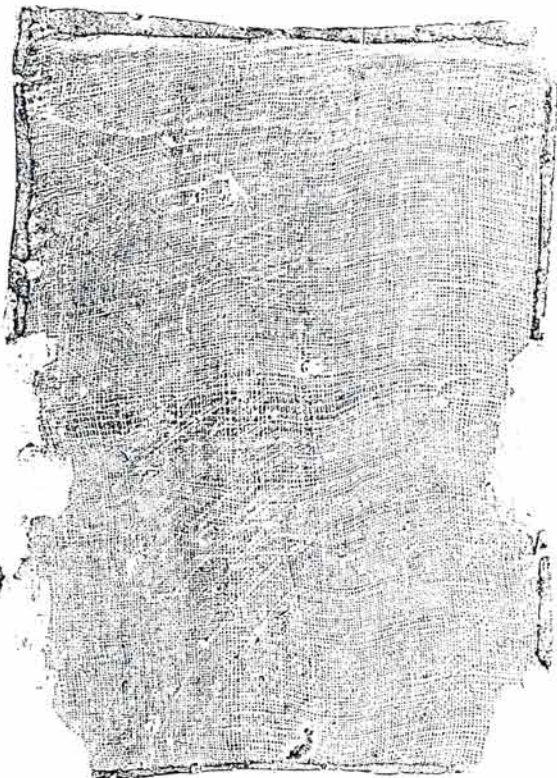
図面16 第28次調査 SD23溝跡出土遺物



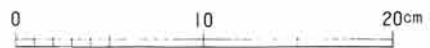
図面17 第28次調査 SK163土坑出土遺物



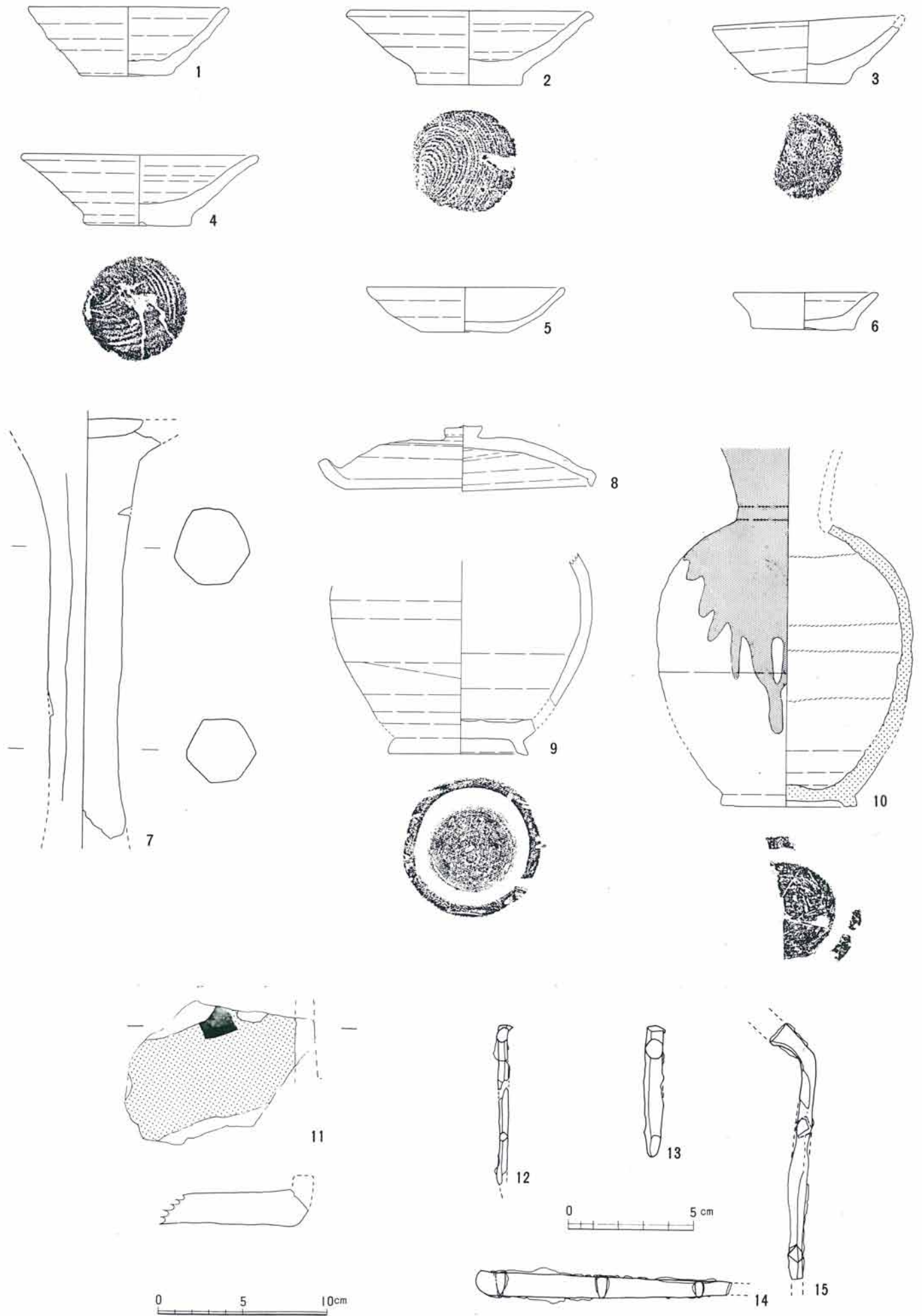
1



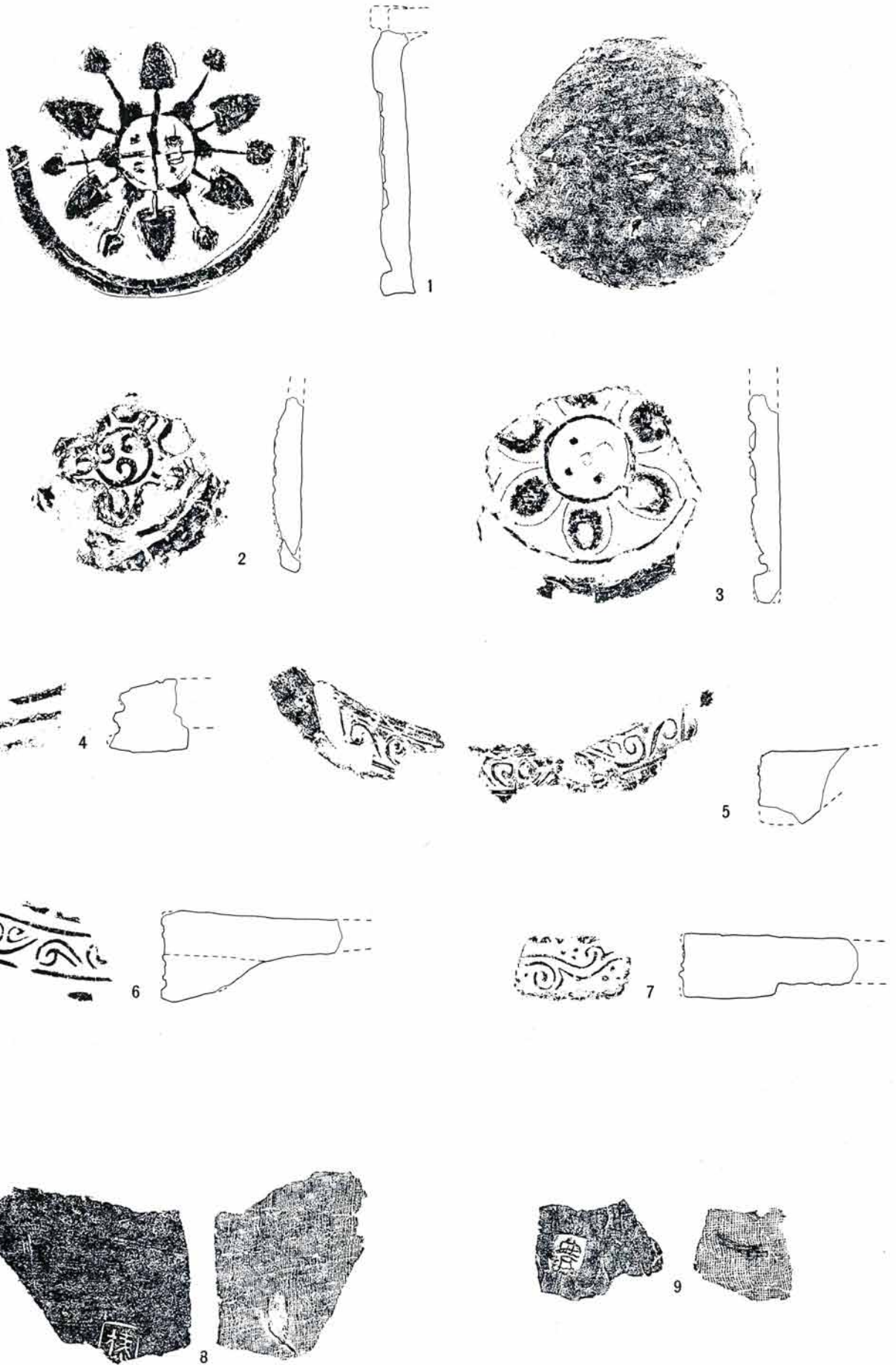
2



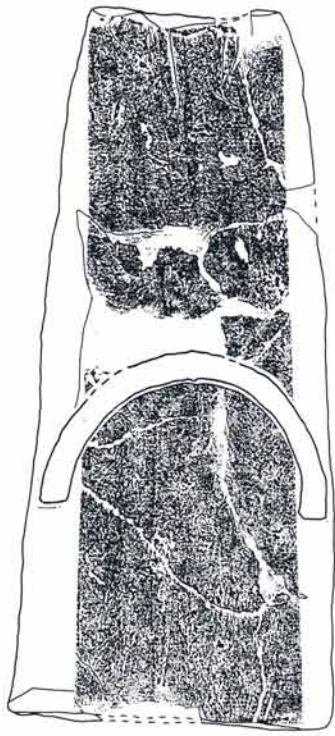
図面18 第28次調査 SK163土坑出土遺物



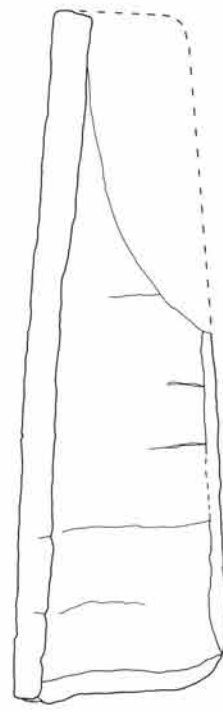
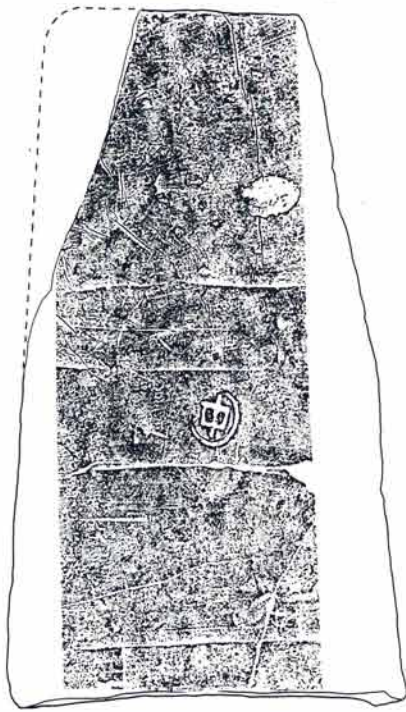
図面19 第28次調査 表土出土遺物



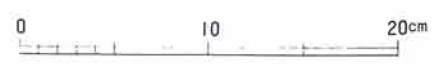
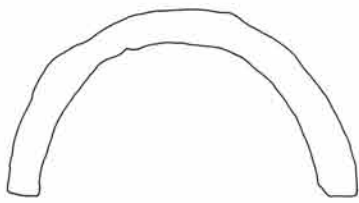
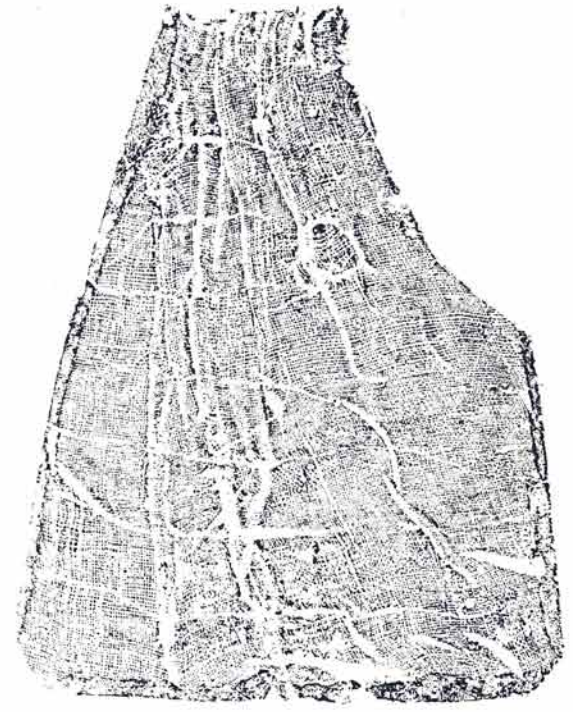
図面20 第28次調査 表土出土遺物



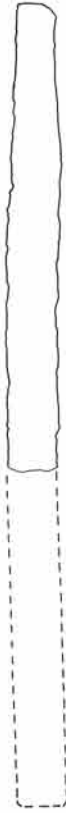
1



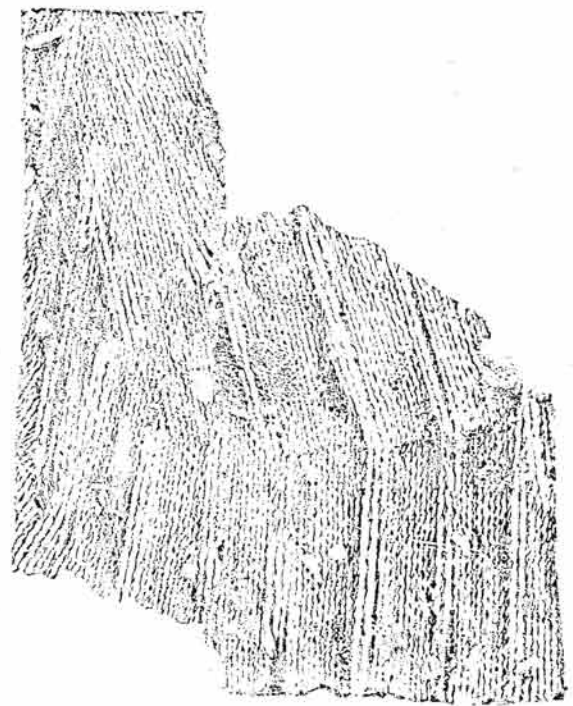
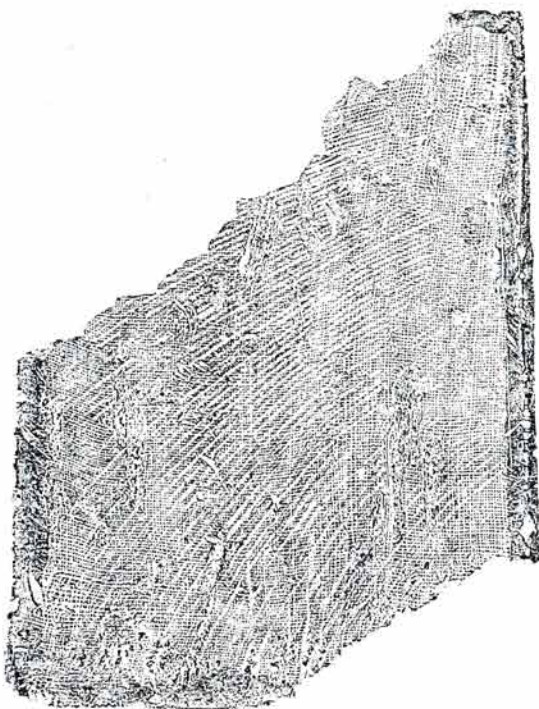
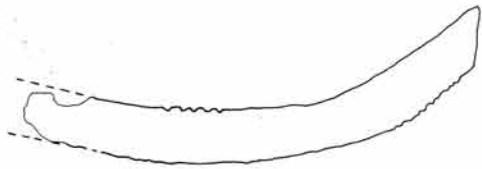
2



図面21 第28次調査 表土出土遺物



1

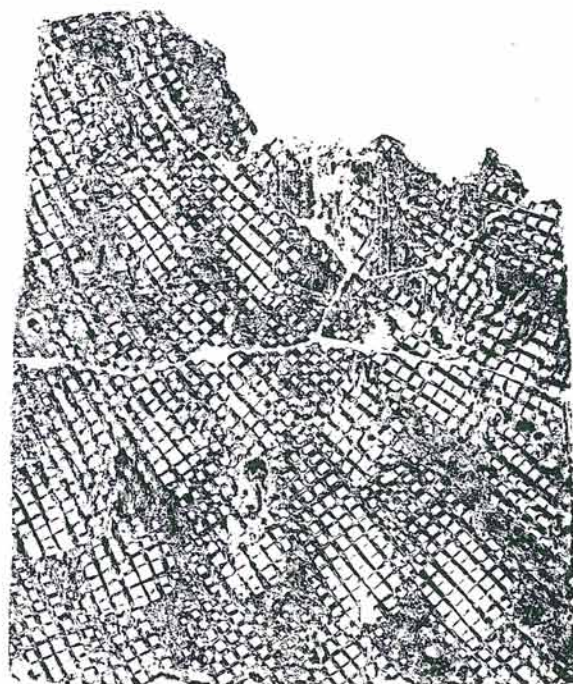
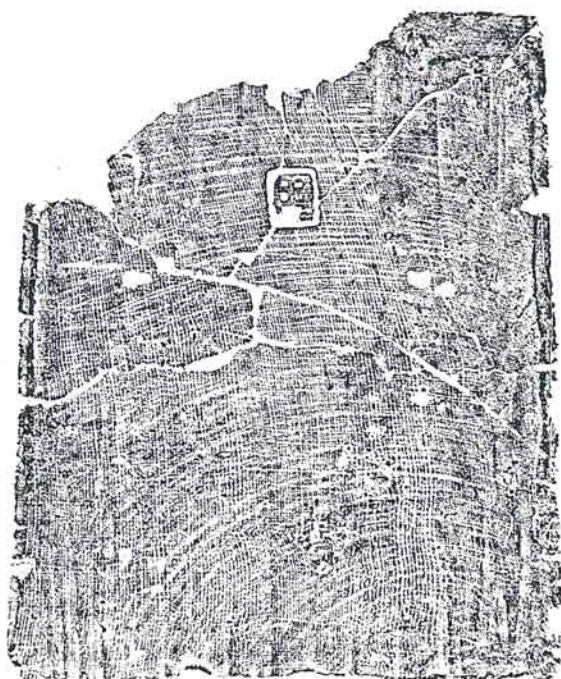
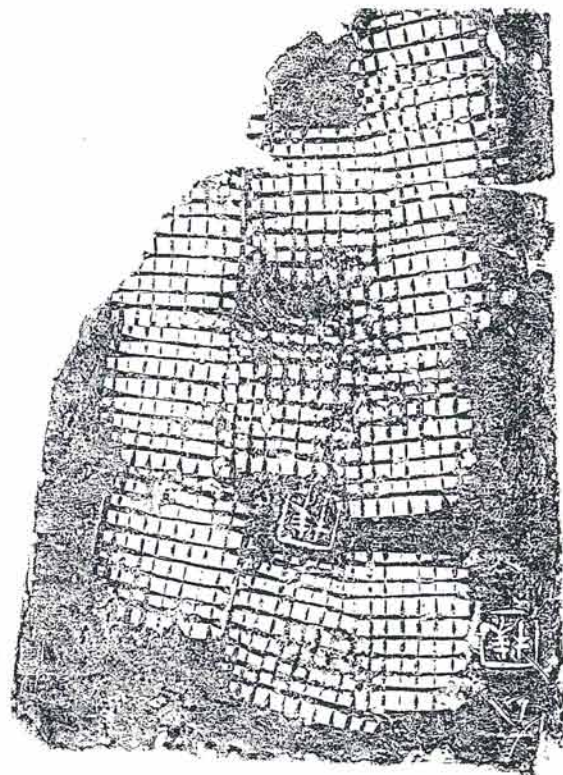
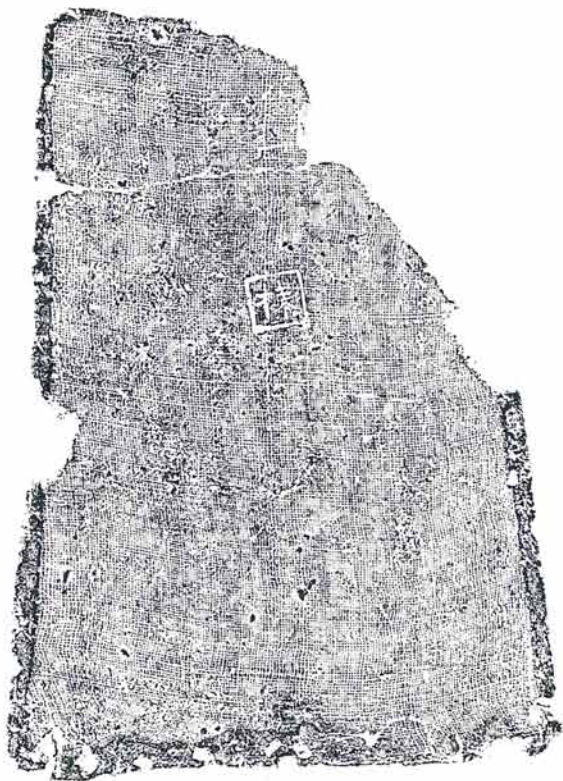


2



0 10 20cm

図面22 第28次調査 表土出土遺物

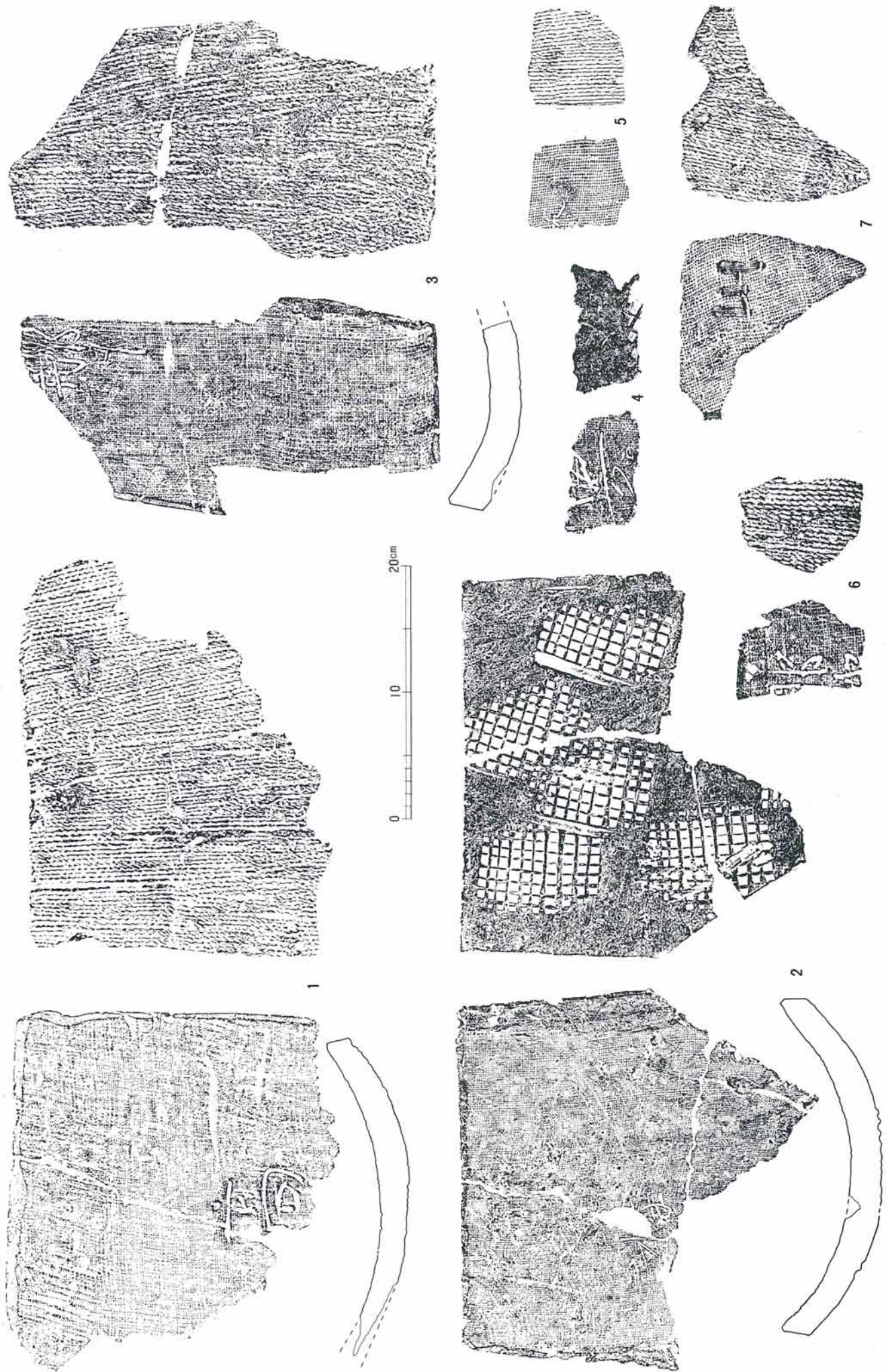


0 10 20cm

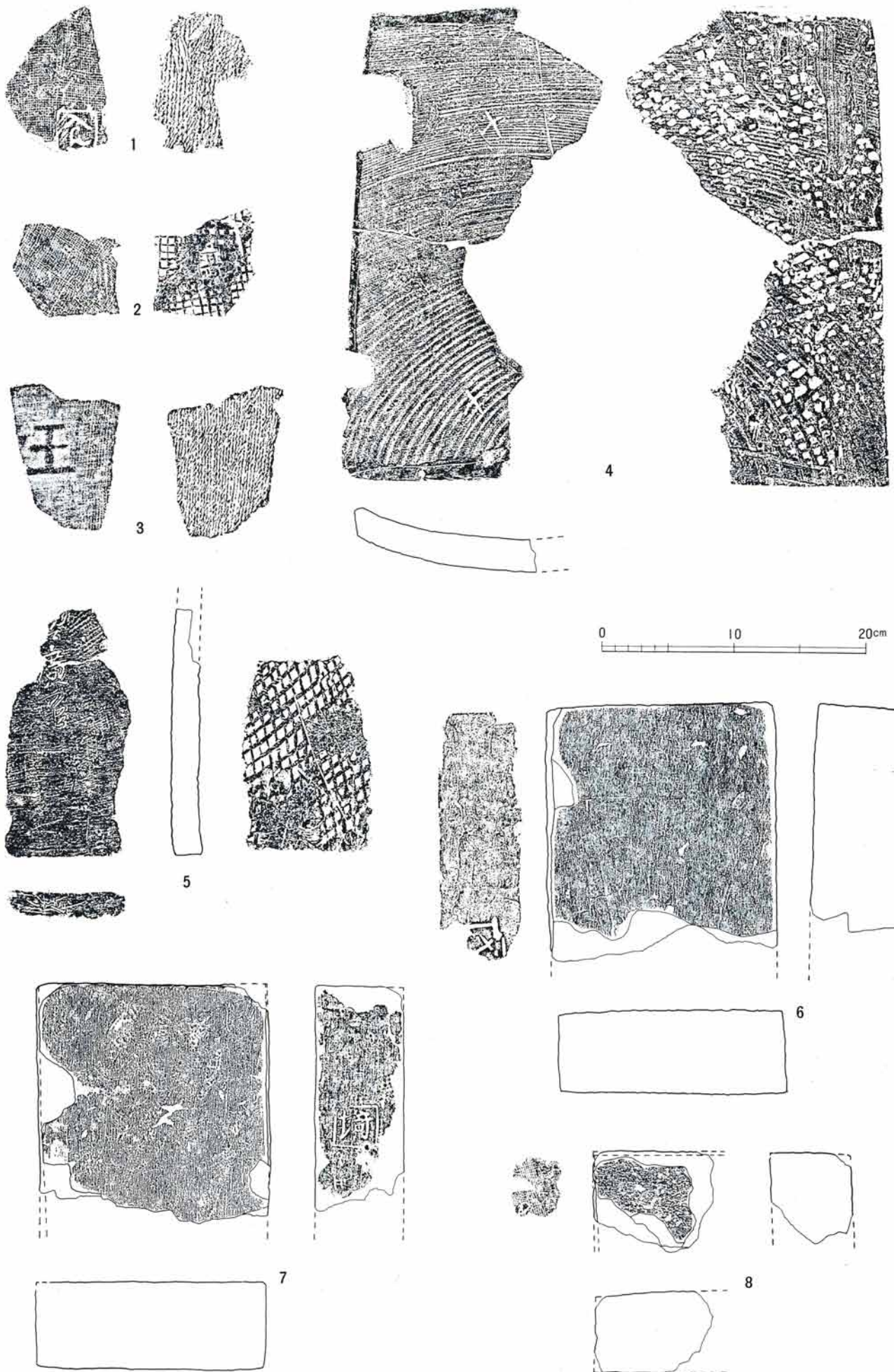
図面23 第28次調査 表土出土遺物



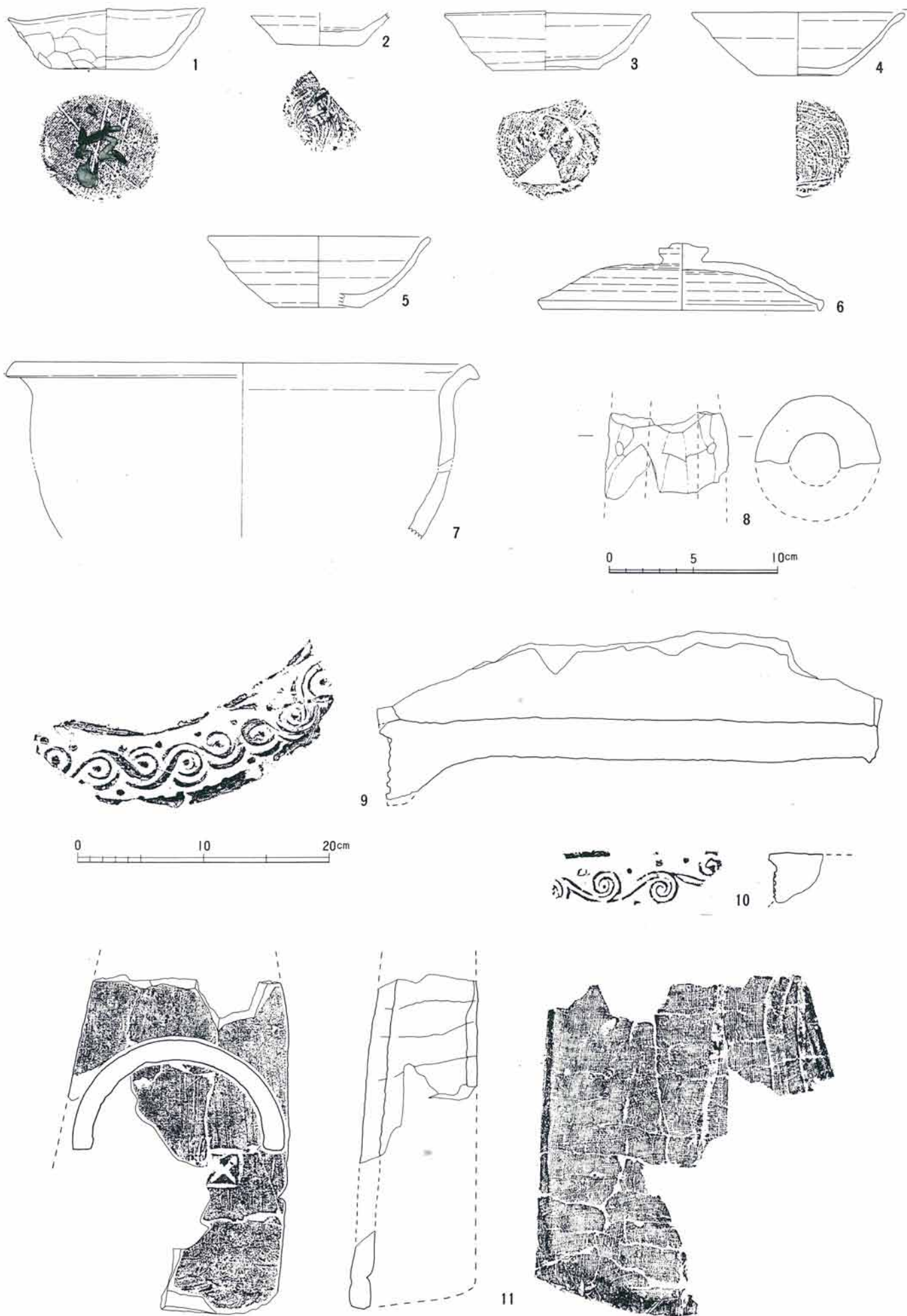
図面24 第28次調査 表土出土遺物



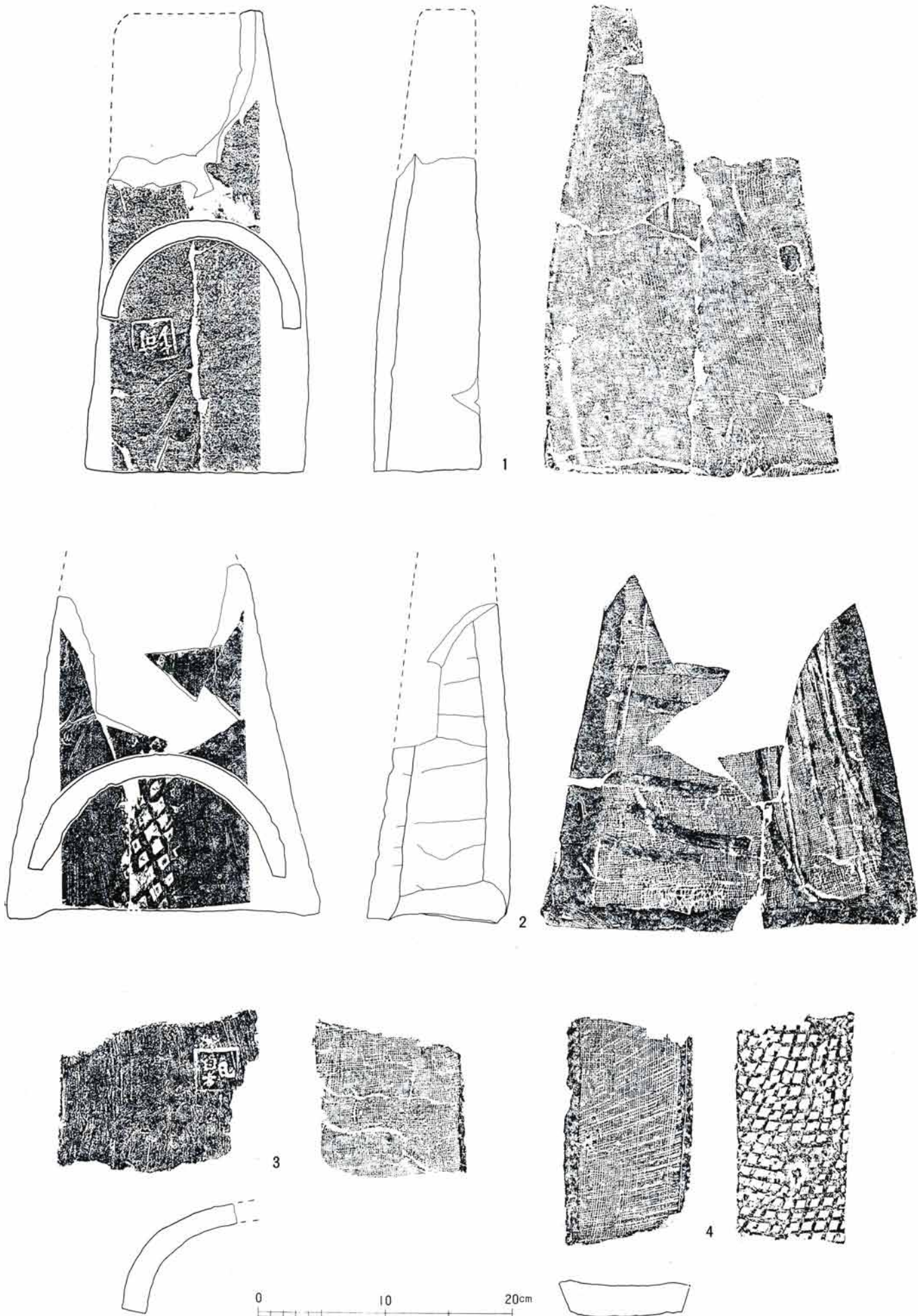
図面25 第28次調査 表土出土遺物



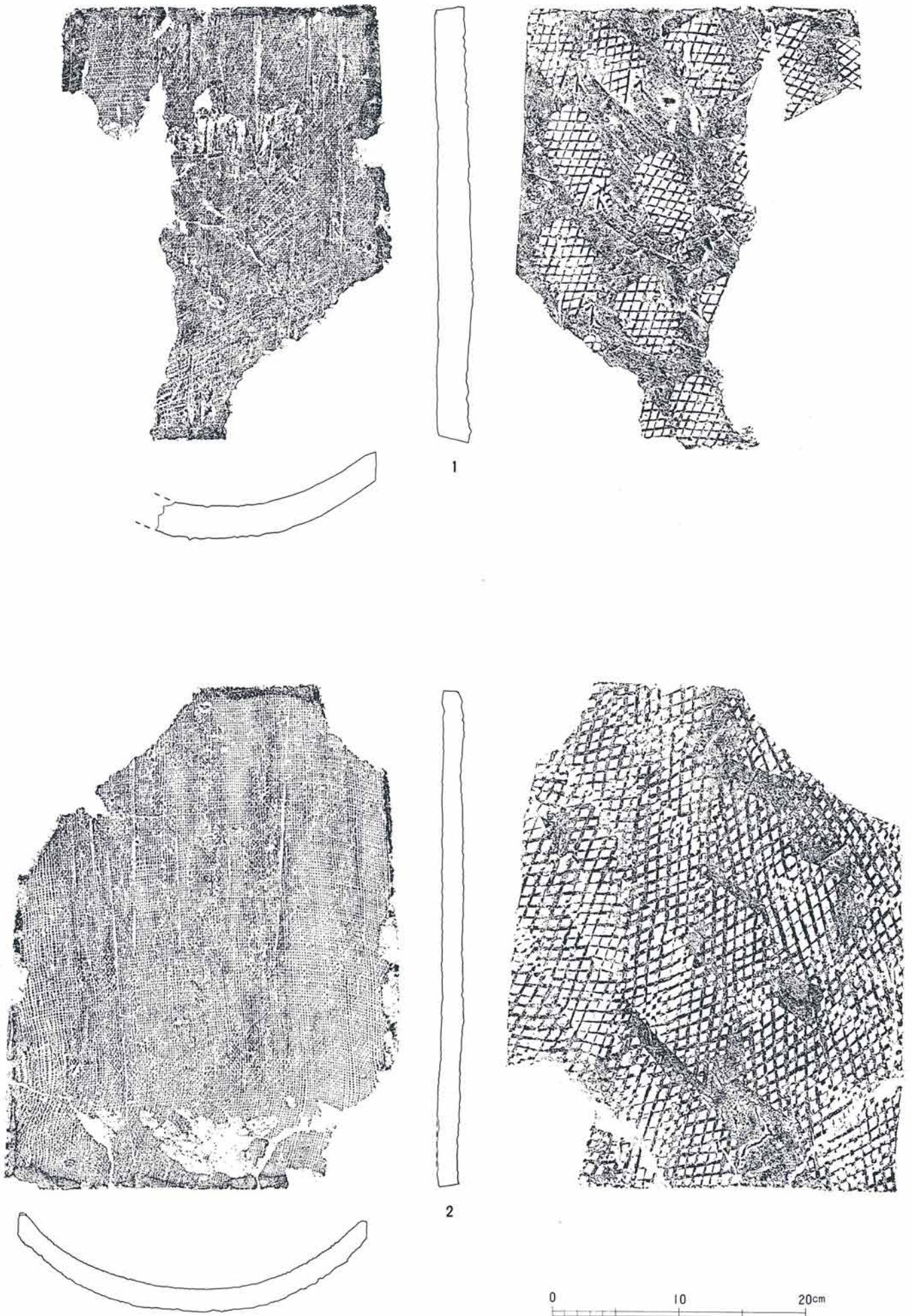
図面26 第28次調査 表土出土遺物



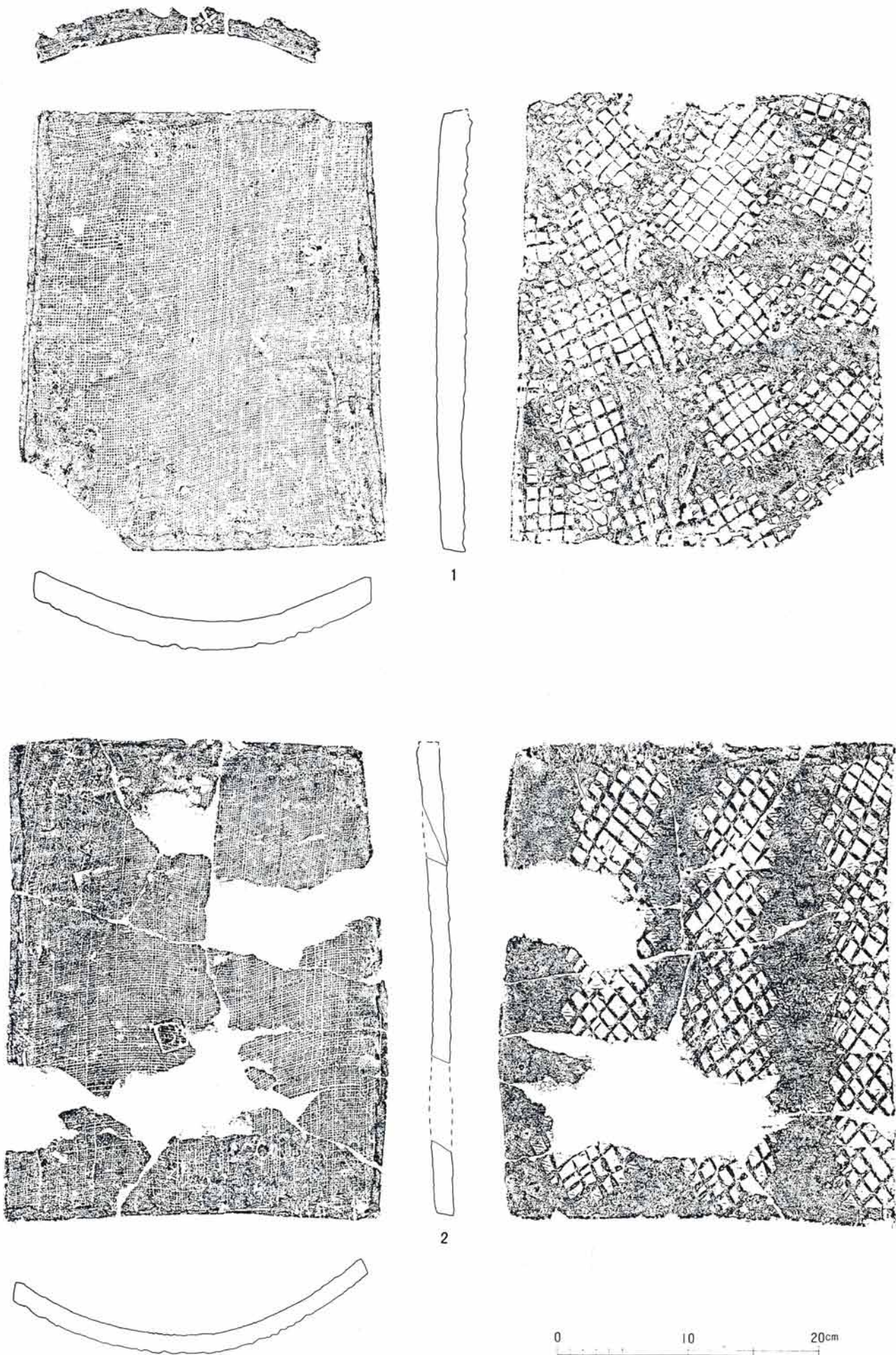
図面27 第28次調査 第II A層（灰茶褐色土）出土遺物



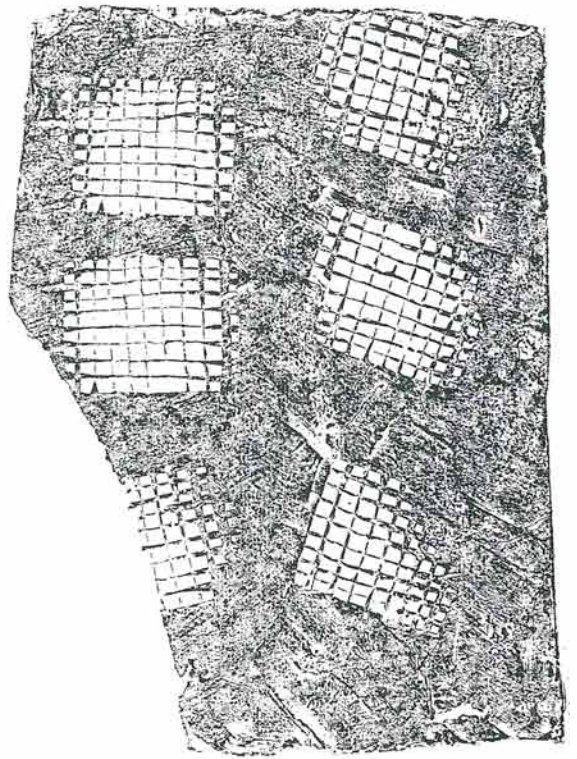
図面28 第28次調査 第II A層 (灰茶褐色土) 出土遺物



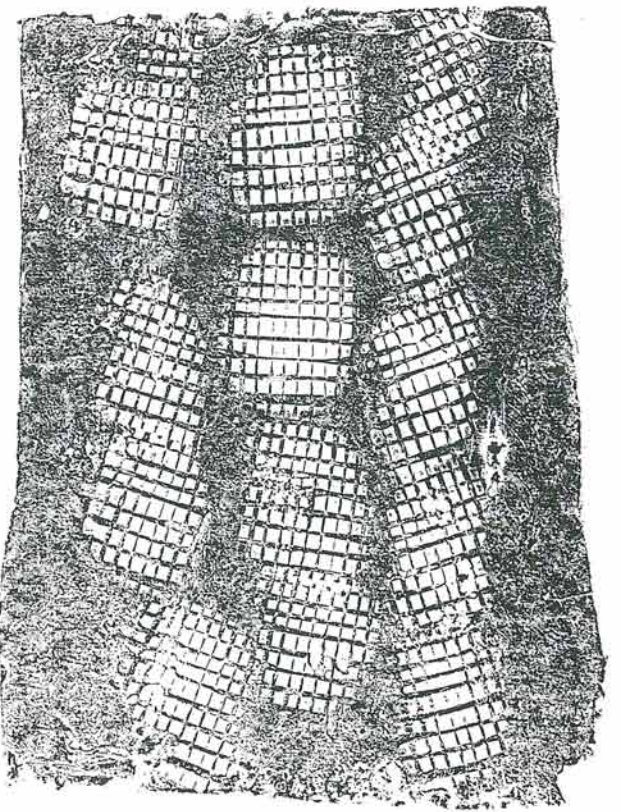
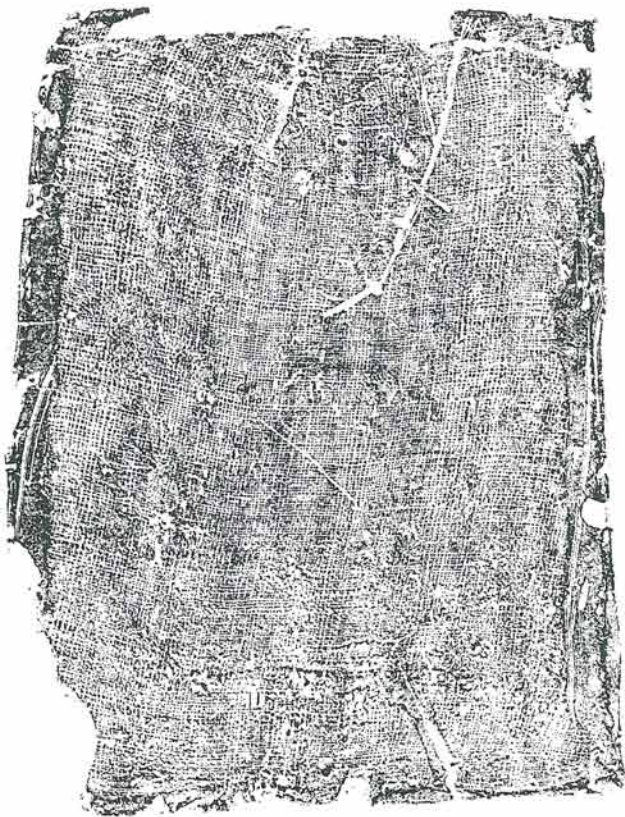
図面29 第28次調査 第IIA層（灰茶褐色土）出土遺物



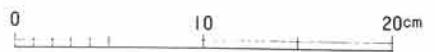
図面30 第28次調査 第II A層(灰茶褐色土)出土遺物



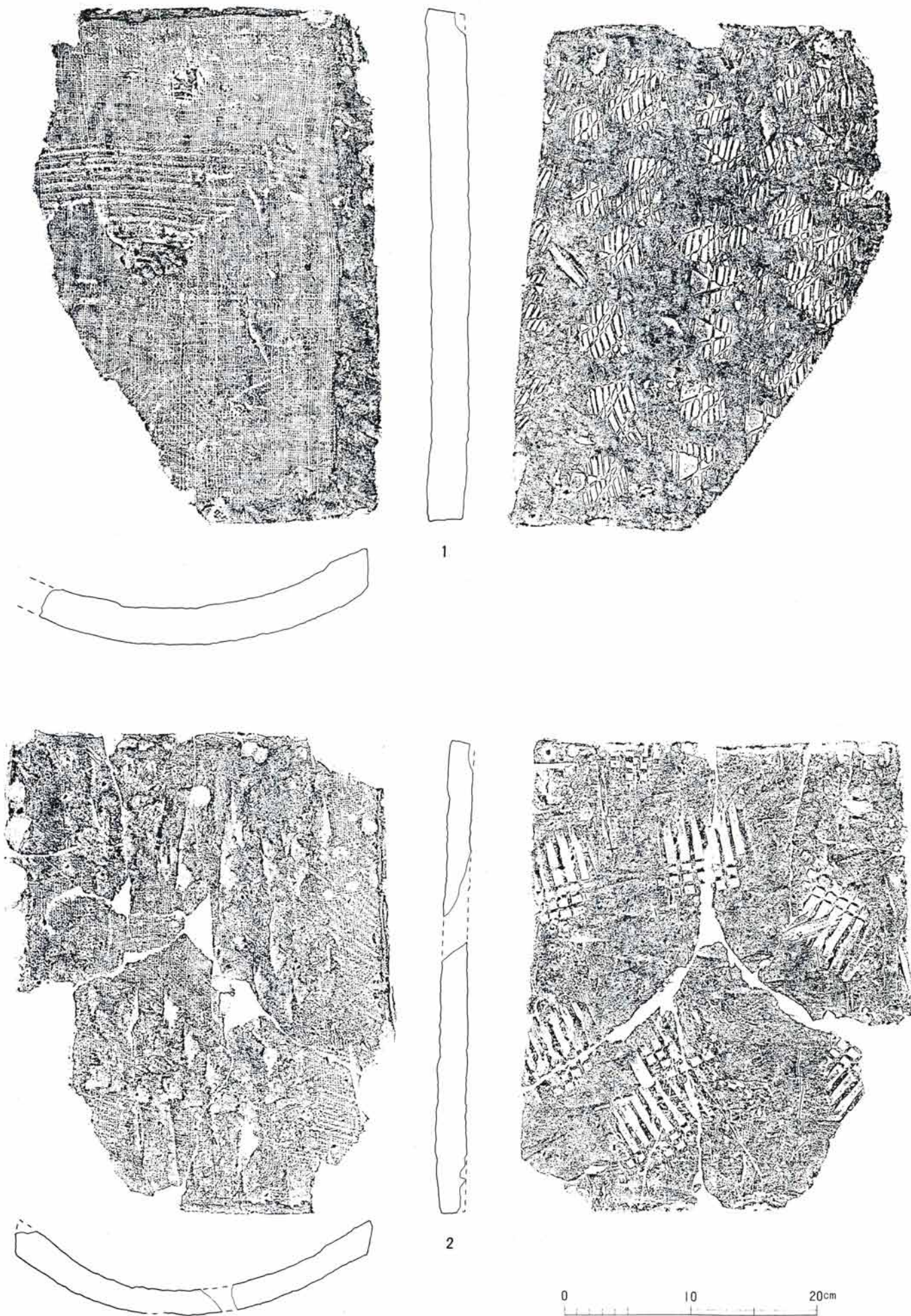
1



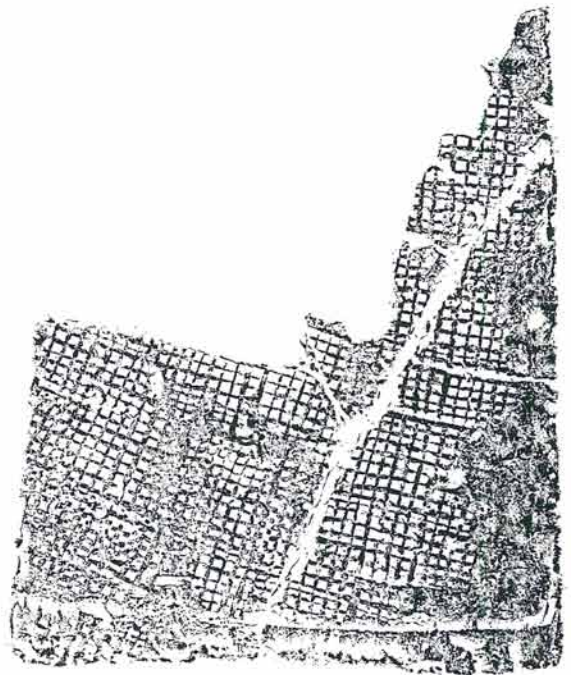
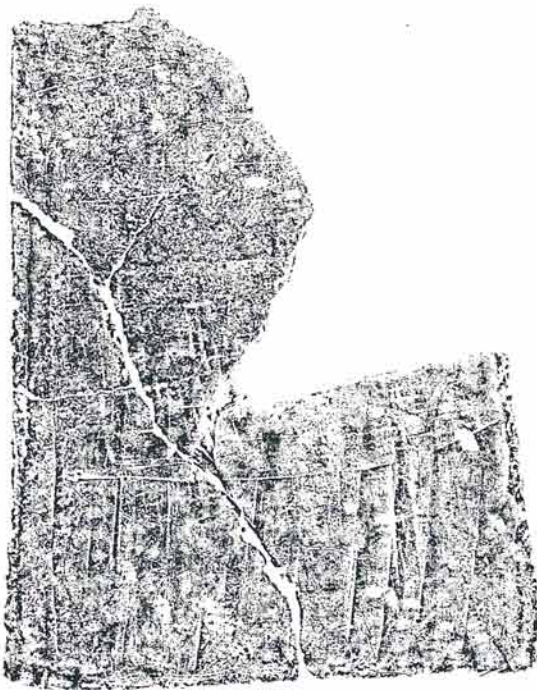
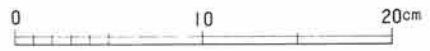
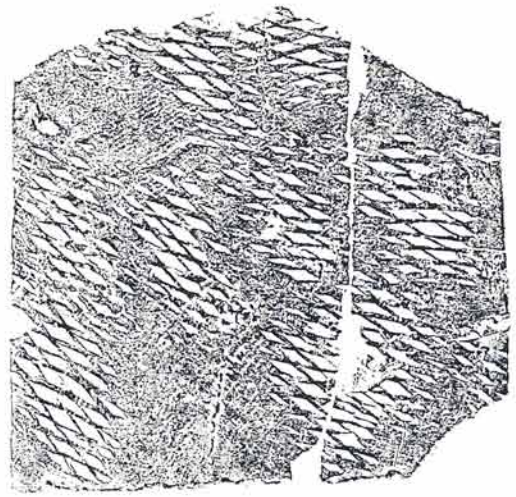
2



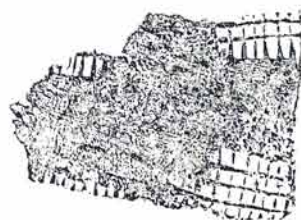
図面31 第28次調査 第II A層（灰茶褐色土）出土遺物



図面32 第28次調査 第IIA層（灰茶褐色土）出土遺物



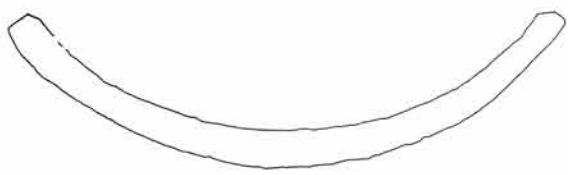
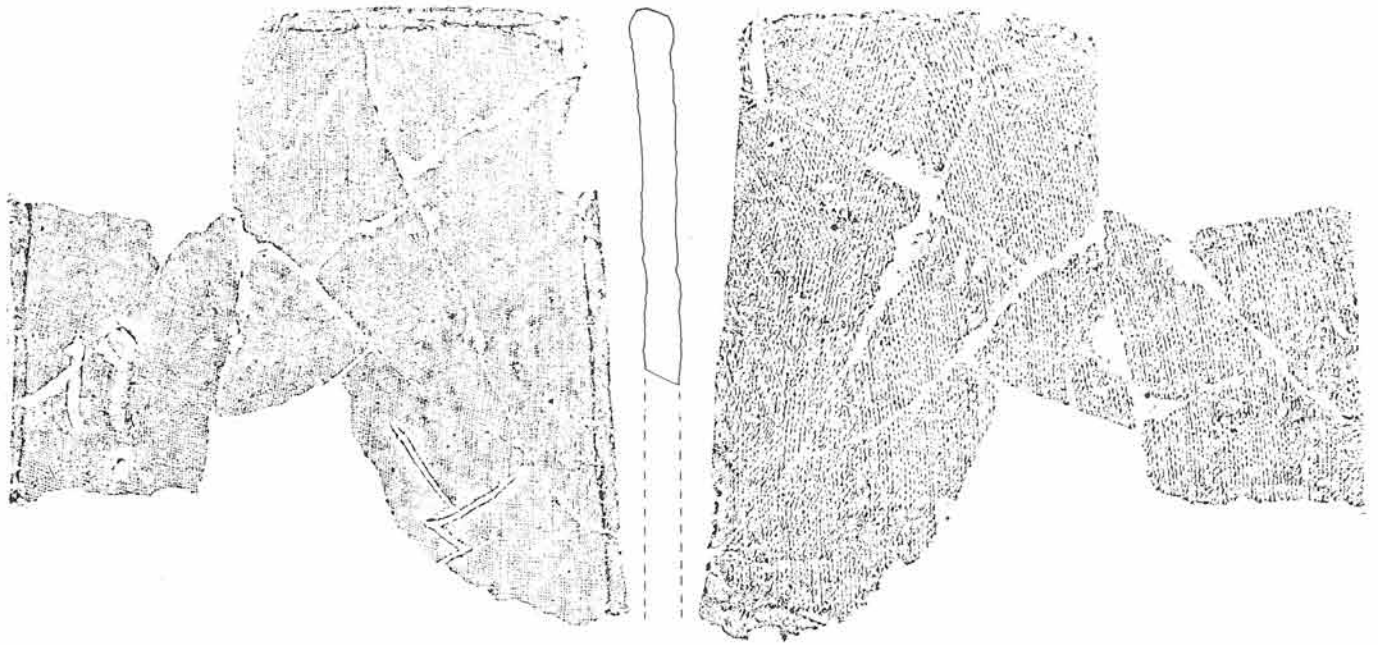
3



4



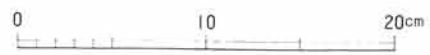
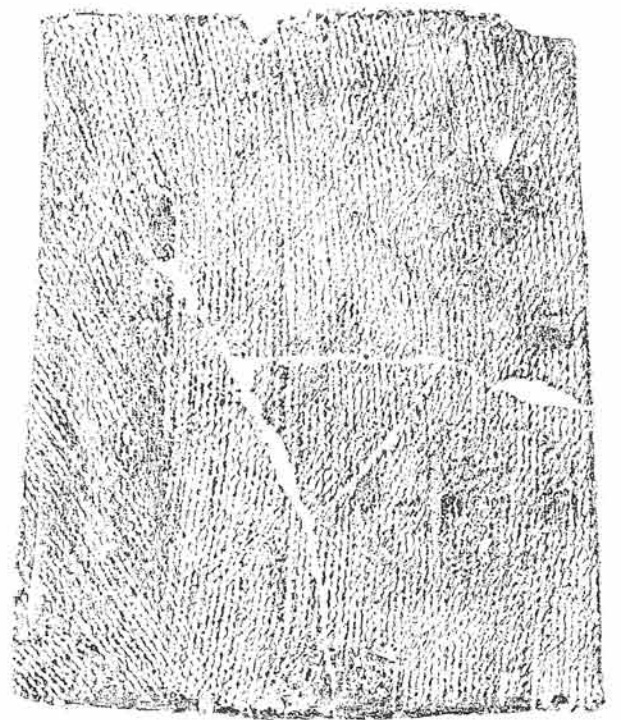
図面33 第28次調査 第II A層（灰茶褐色土）出土遺物



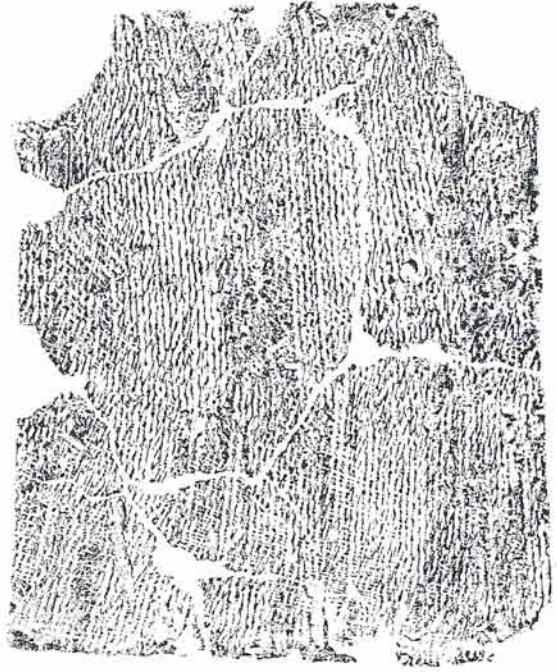
1



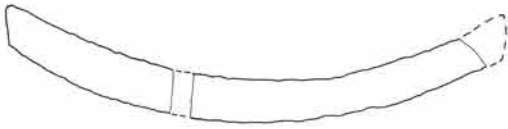
2



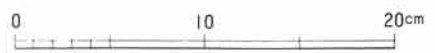
図面34 第28次調査 第IIA層（灰茶褐色土）出土遺物



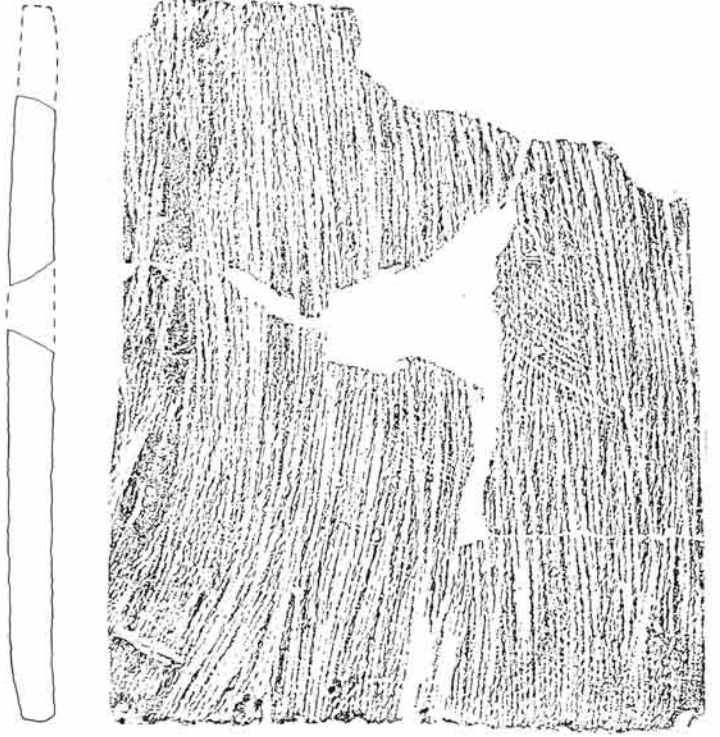
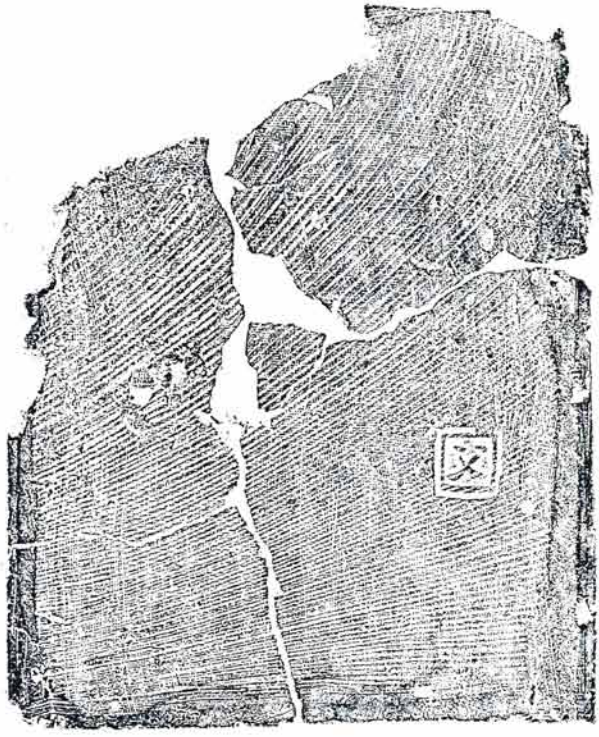
1



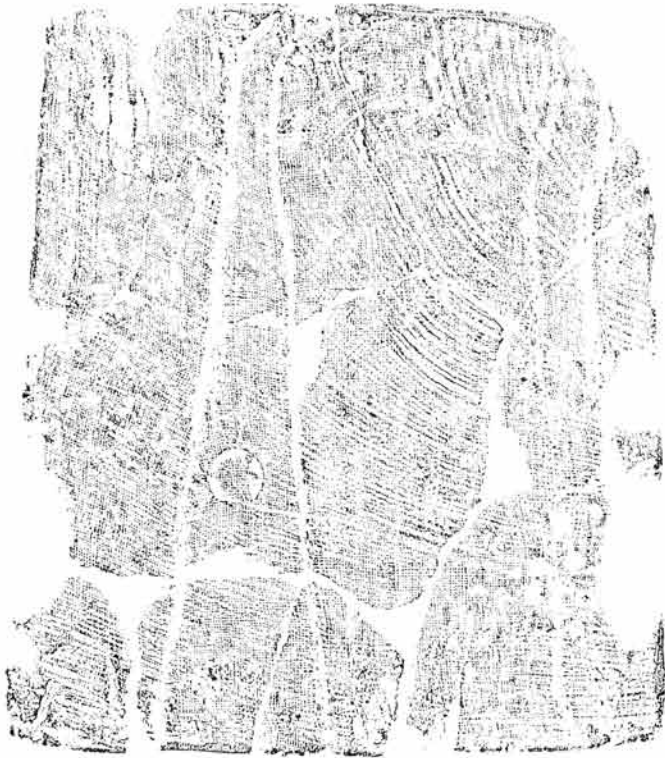
2



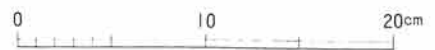
図面35 第28次調査 第II A層 (灰茶褐色土) 出土遺物



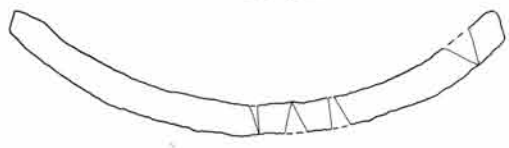
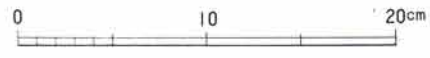
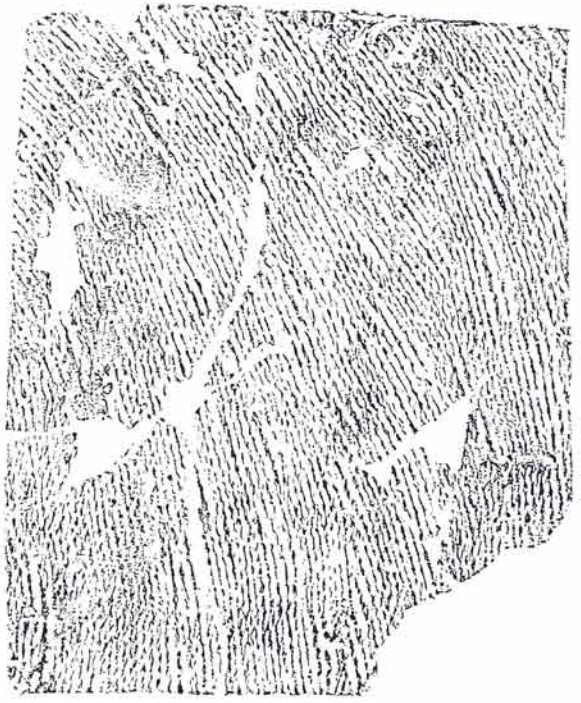
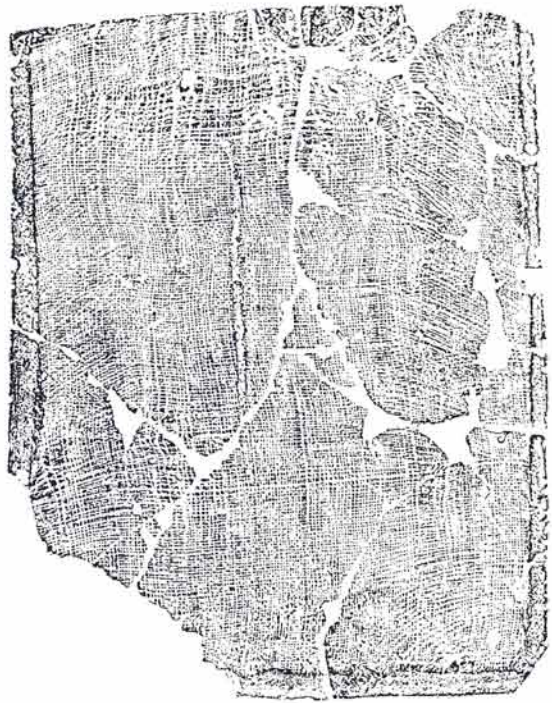
1



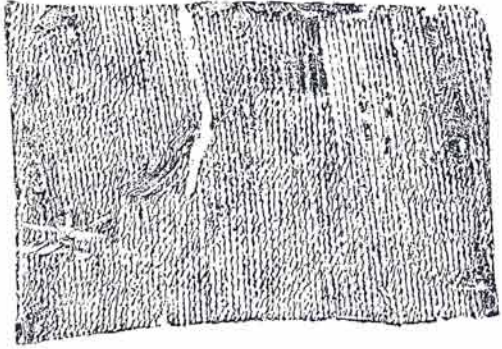
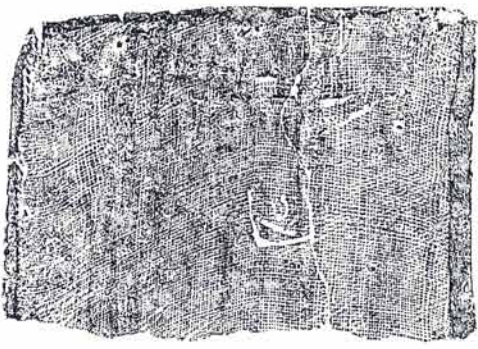
2



図面36 第28次調査 第IIA層（灰茶褐色土）出土遺物



1



2



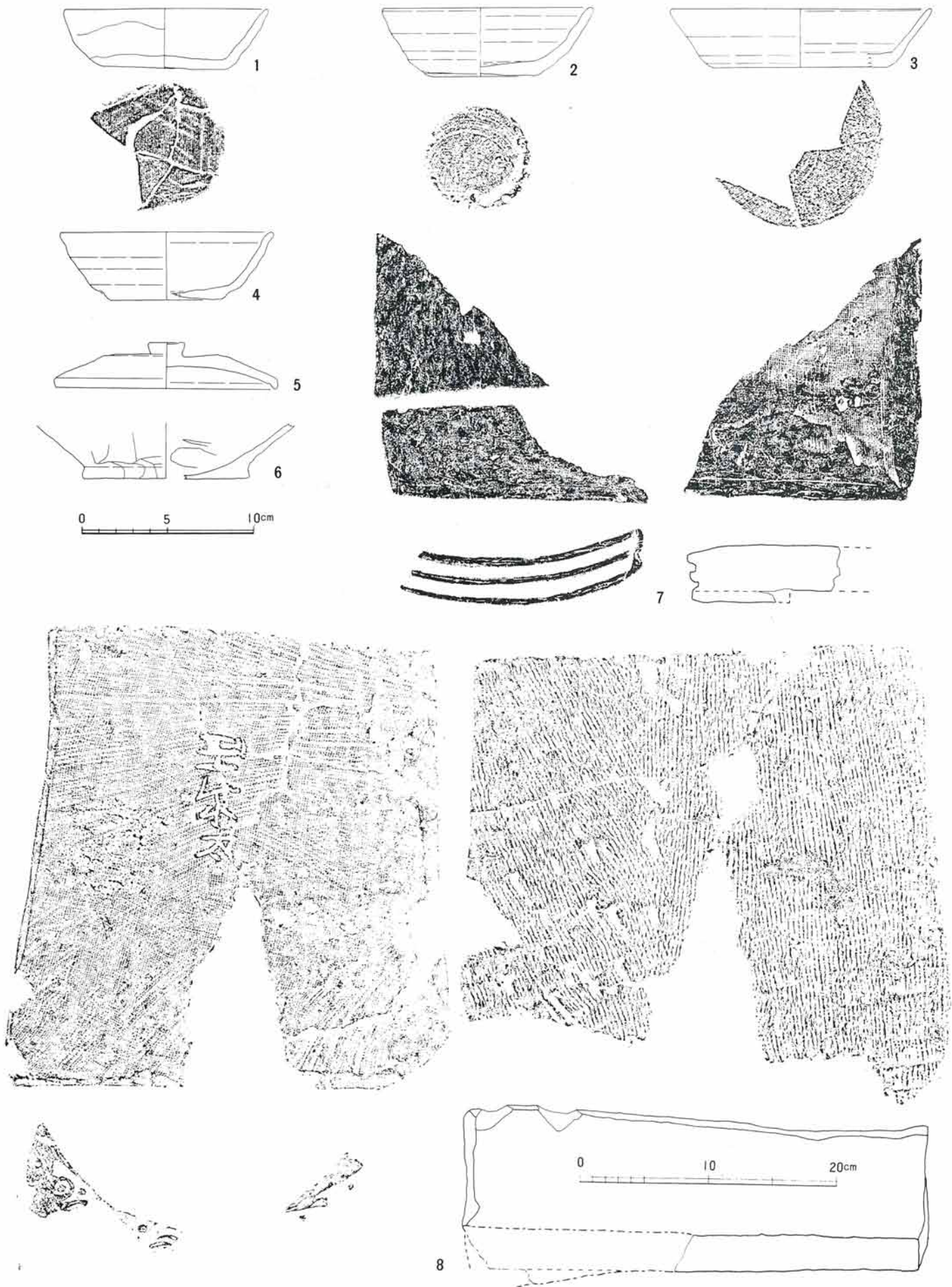
3



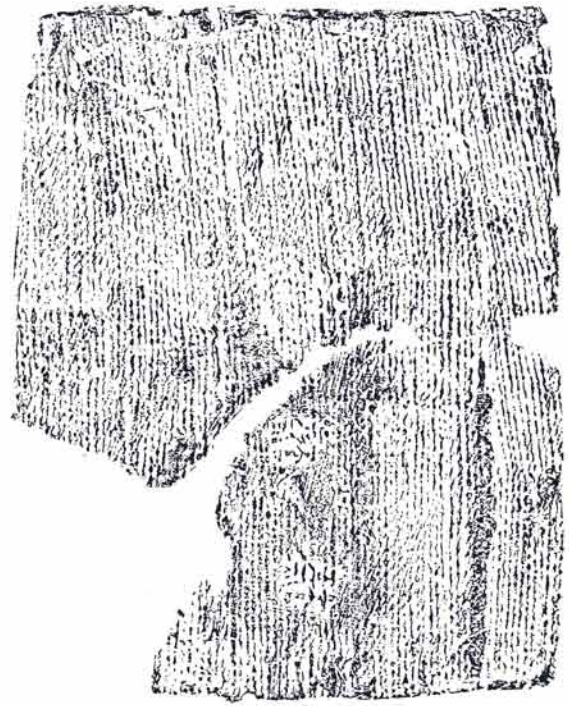
4



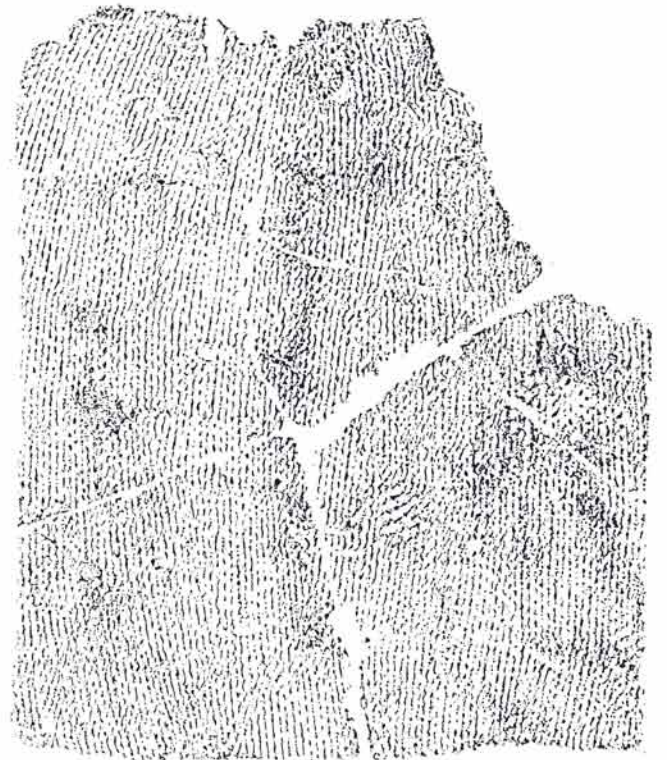
図面37 第28次調査 第IIA層 (灰茶褐色土) 出土遺物



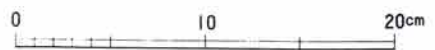
図面38 第28次調査 第ⅢA層（灰黒褐色土）・ⅣA層（黒褐色土）出土遺物
 1・2・4・5・6・8第ⅢA層、3・7第ⅥA層



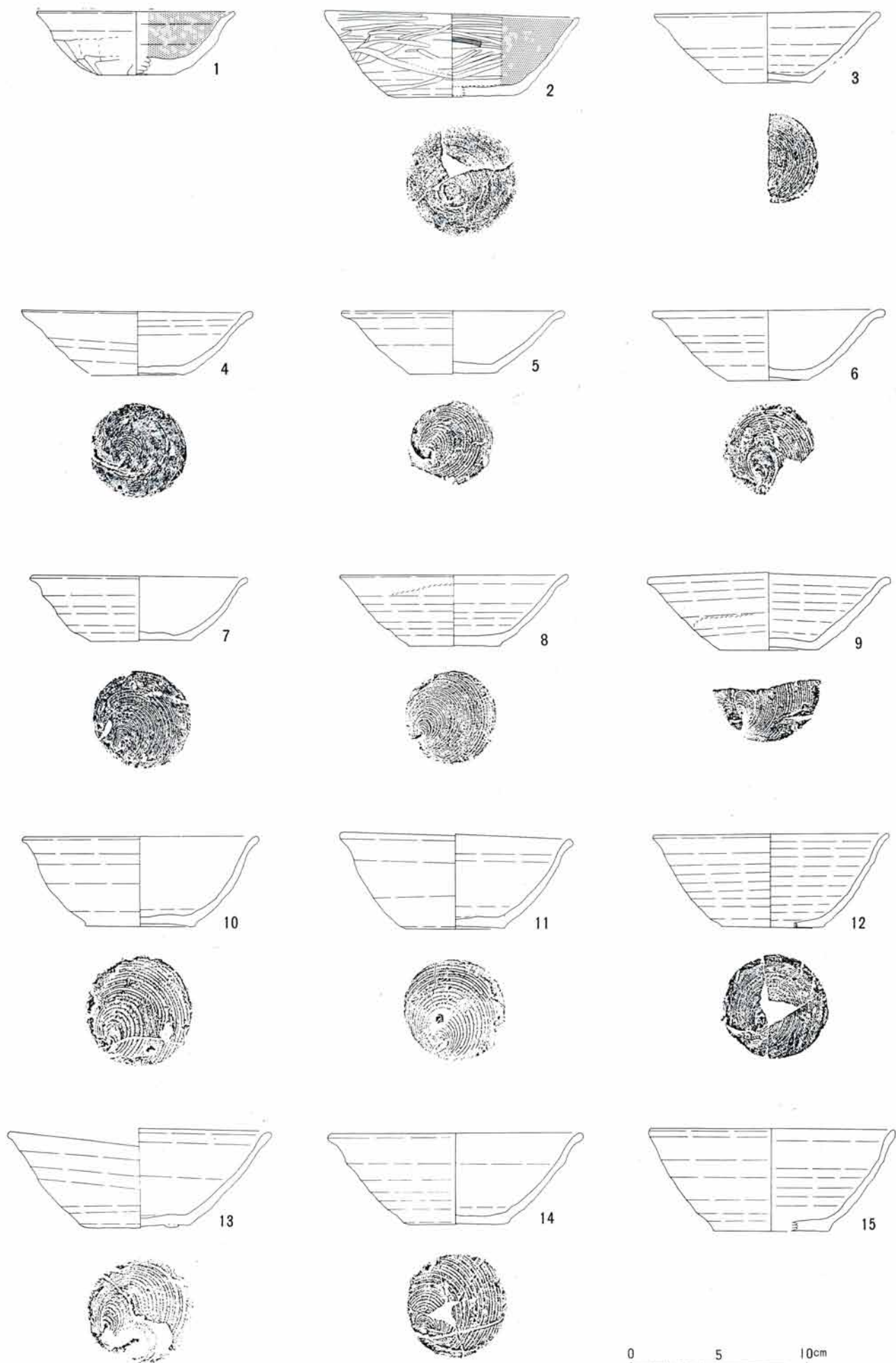
1



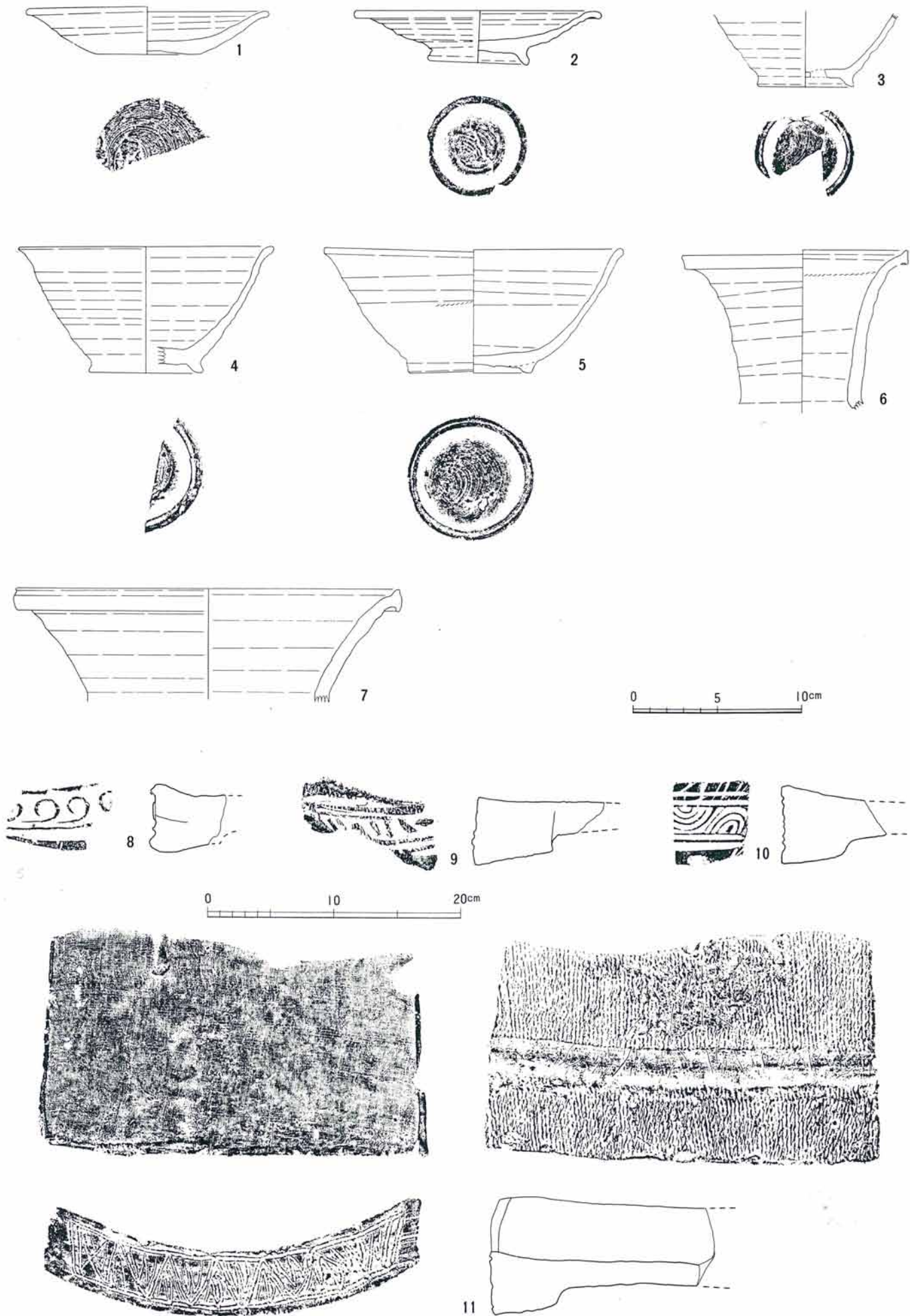
2



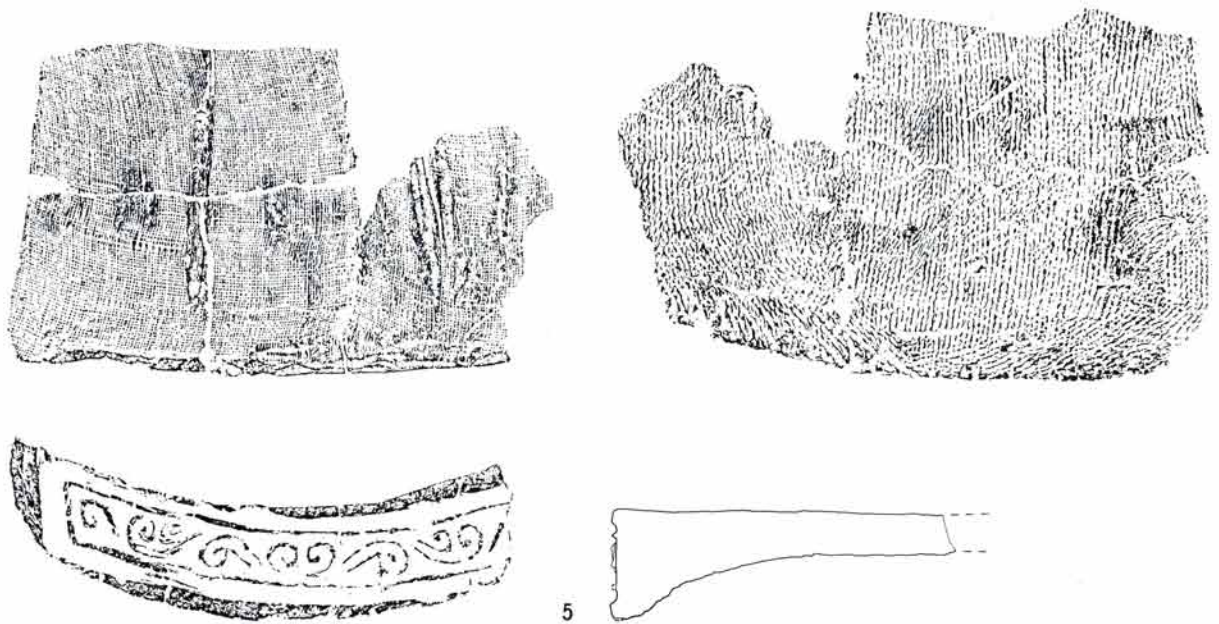
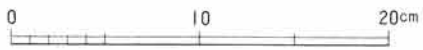
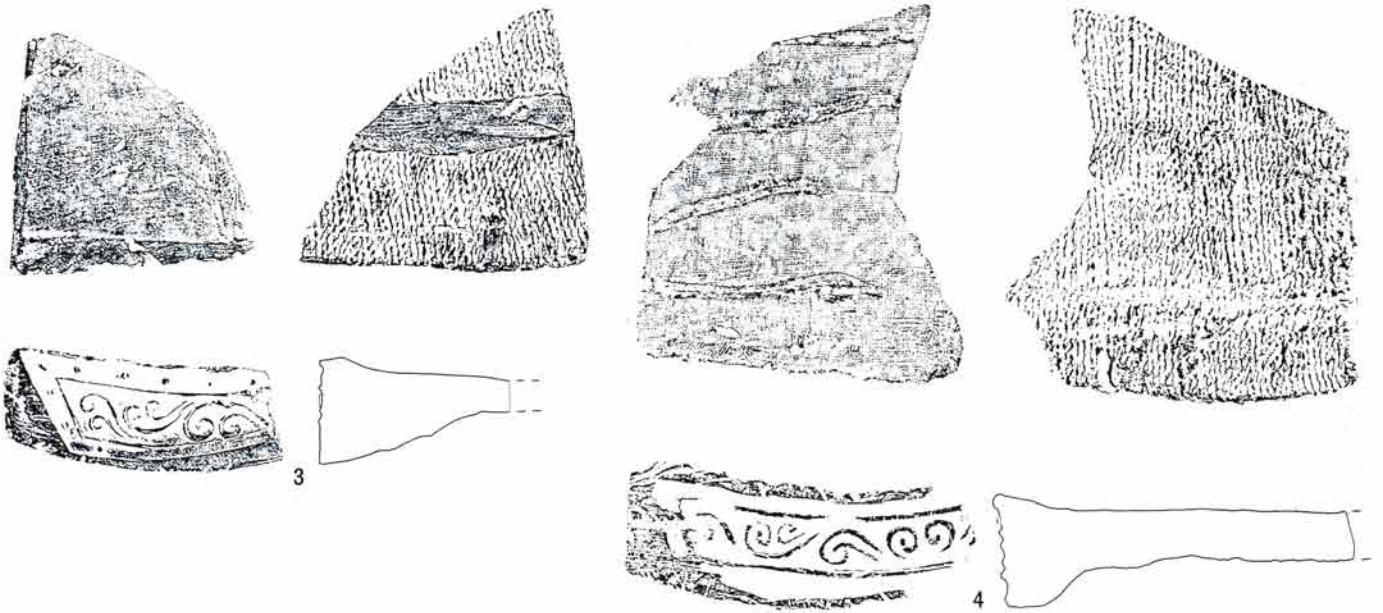
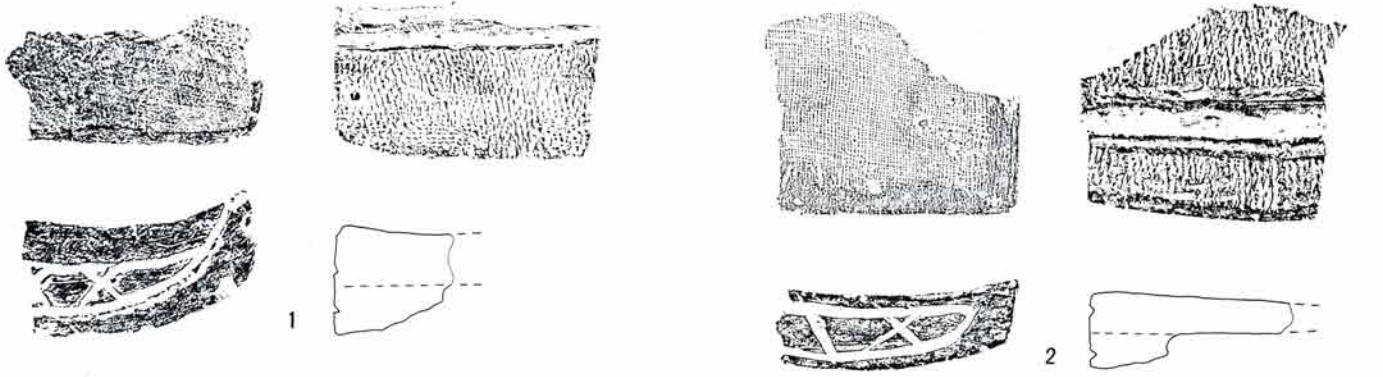
図面39 第28次調査 第VIA層（黒褐色土）出土遺物



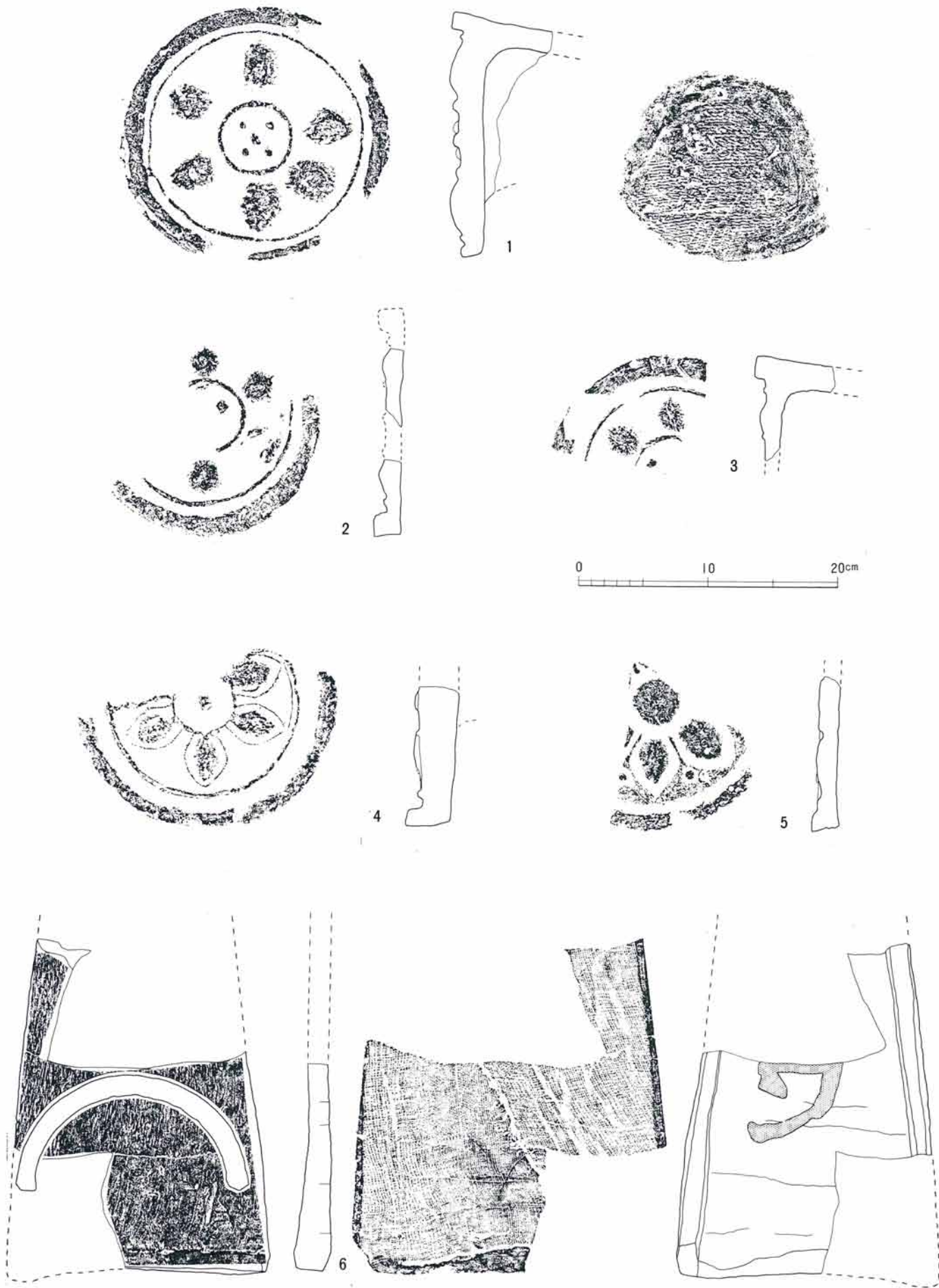
図面40 第29次調査 SD23溝跡第1層出土遺物



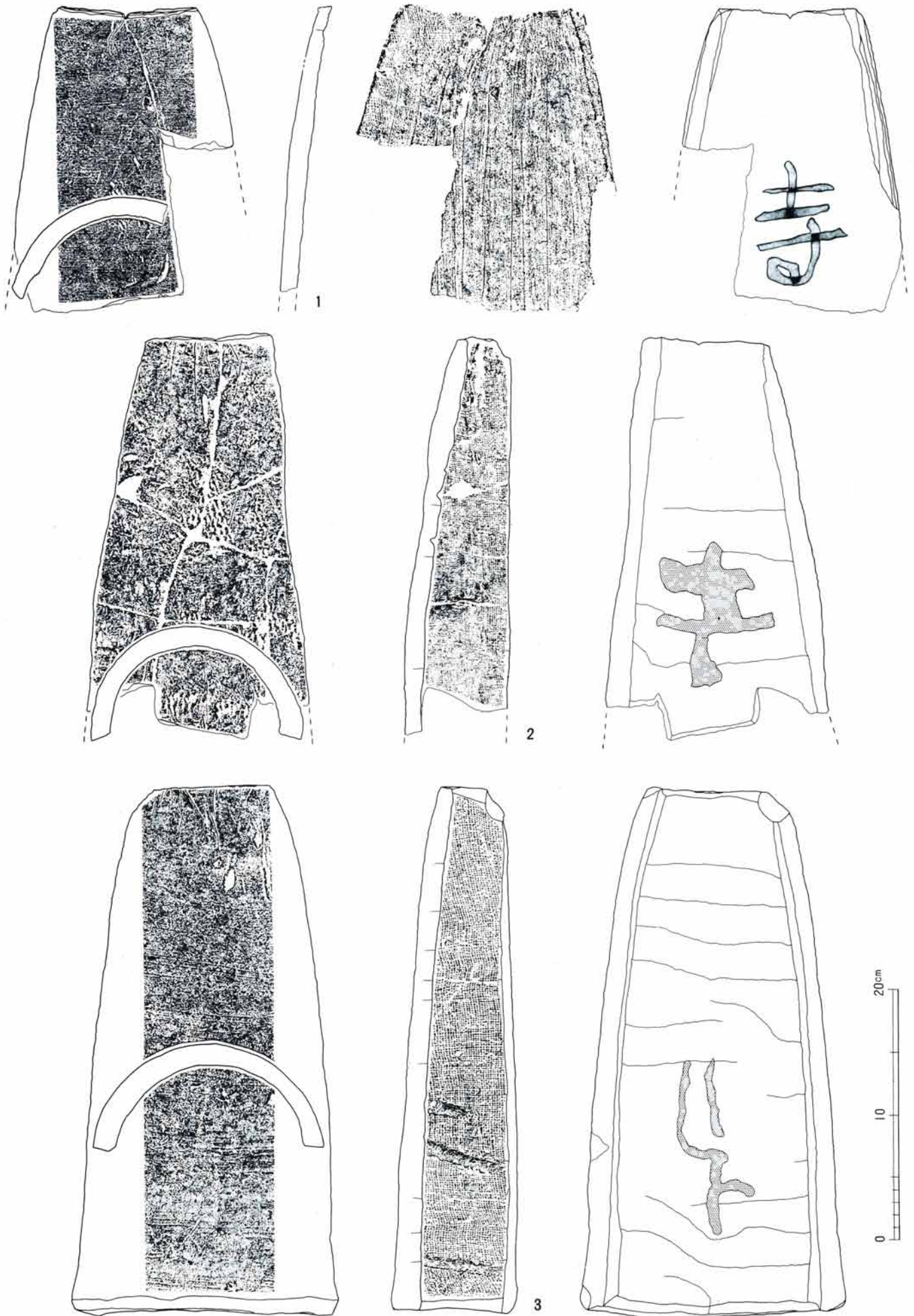
図面41 第29次調査 SD23溝跡第1層出土遺物



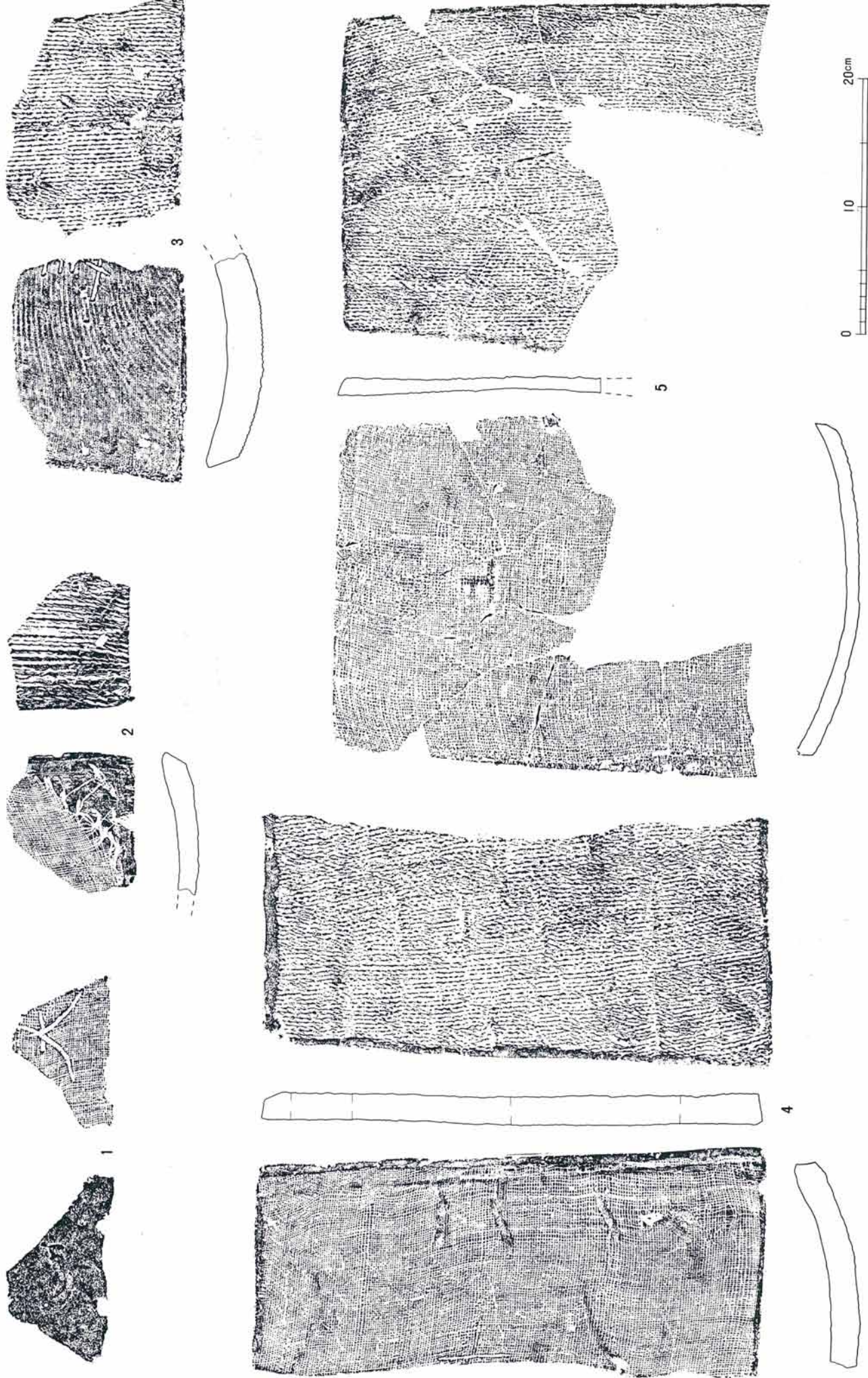
図面42 第29次調査 SD23溝跡第1層出土遺物



図面43 第29次調査 SD23溝跡第1層出土遺物



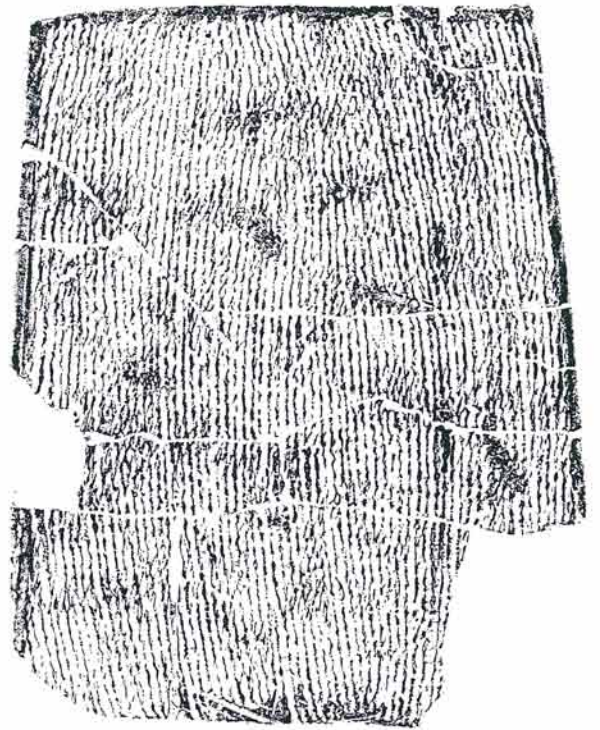
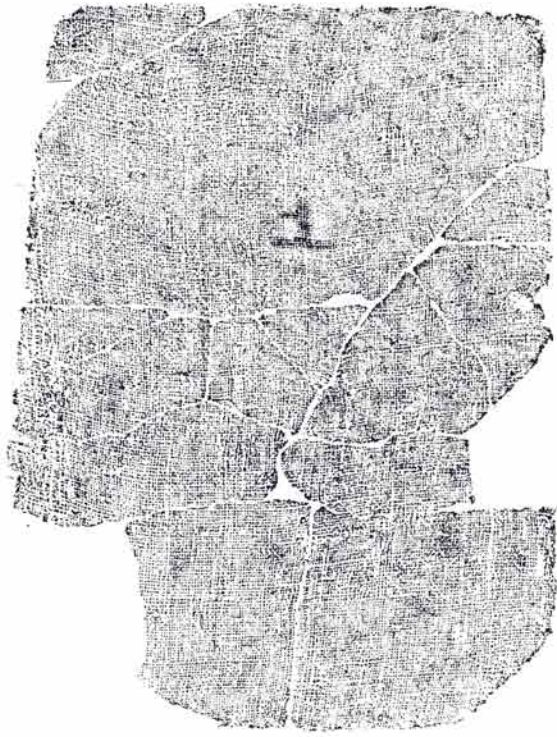
図面44 第29次調査 SD23溝跡第1層出土遺物



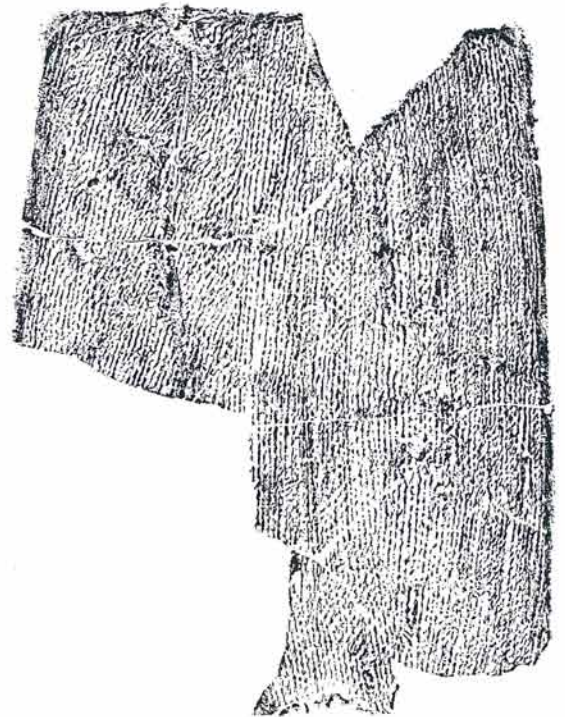
図面45 第29次調査 SD23溝跡第1層出土遺物



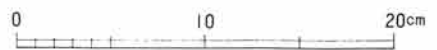
図面46 第29次調査 SD23溝跡第1層出土遺物



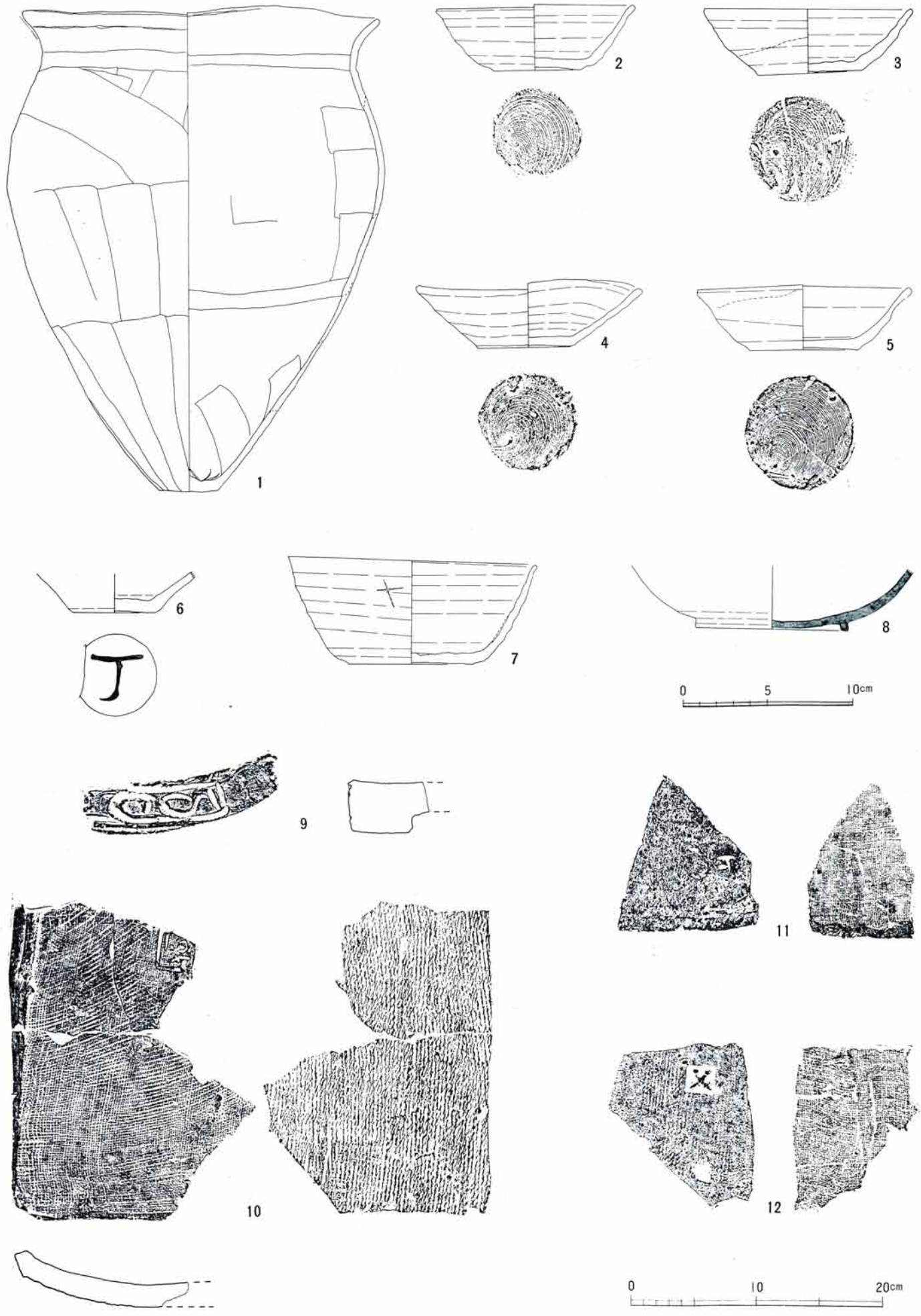
1



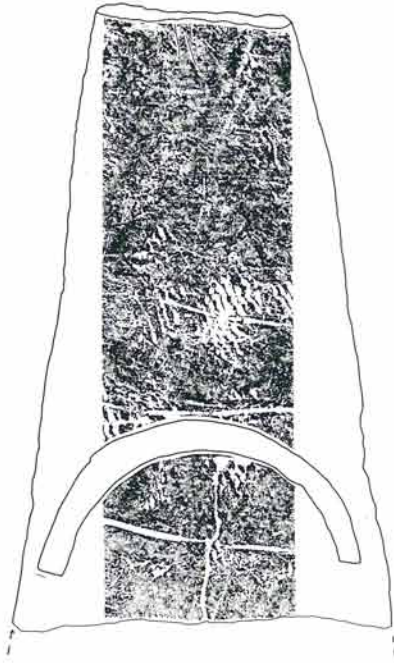
2



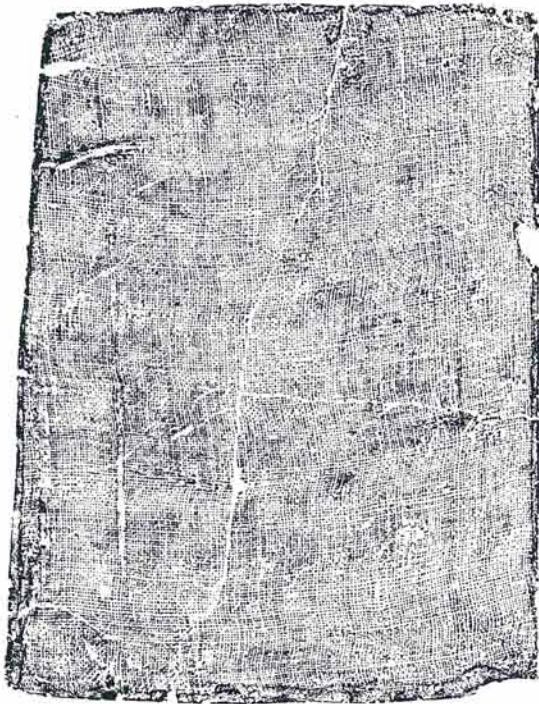
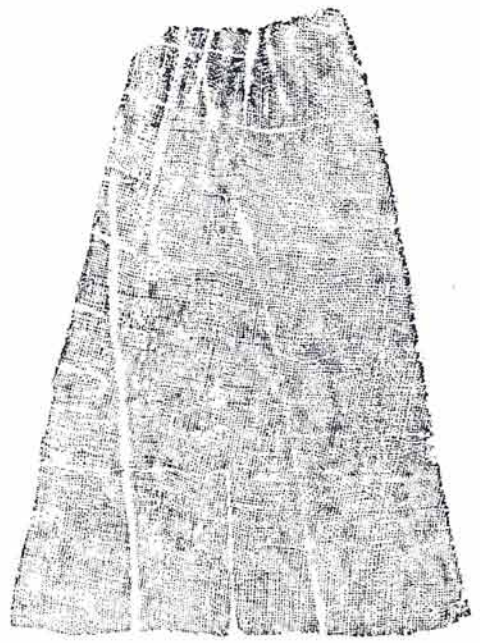
図面47 第29次調査 SD23溝跡第1層出土遺物



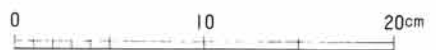
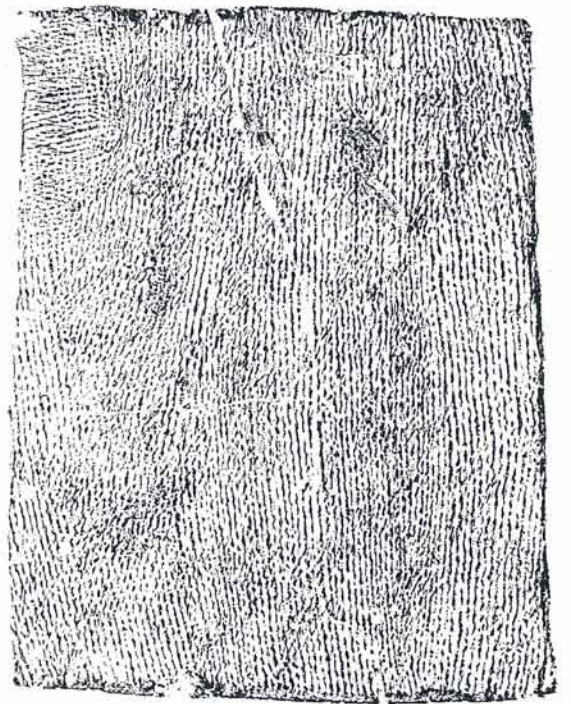
図面48 第29次調査 SD23溝跡第2層出土遺物



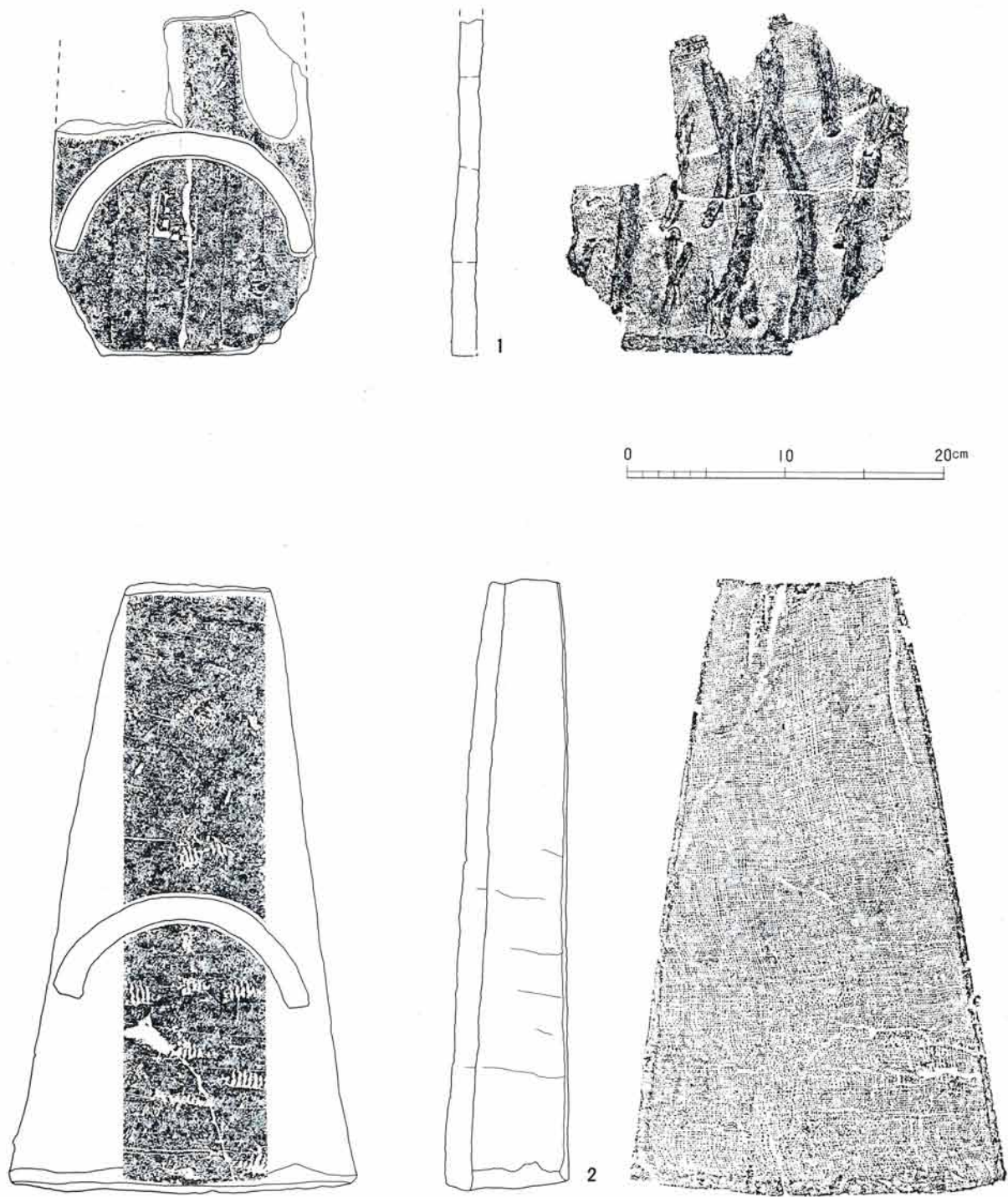
1



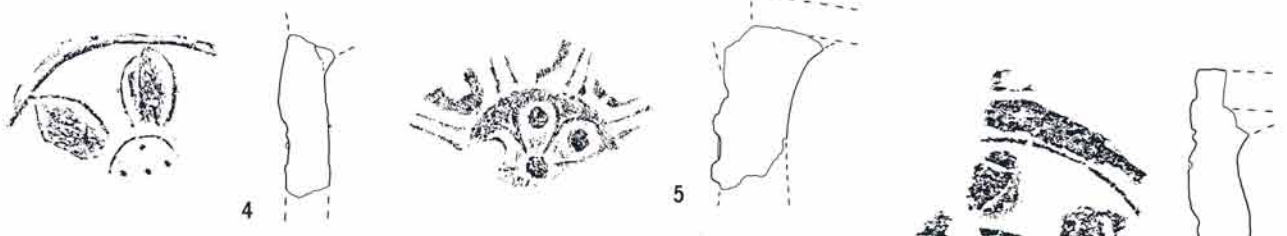
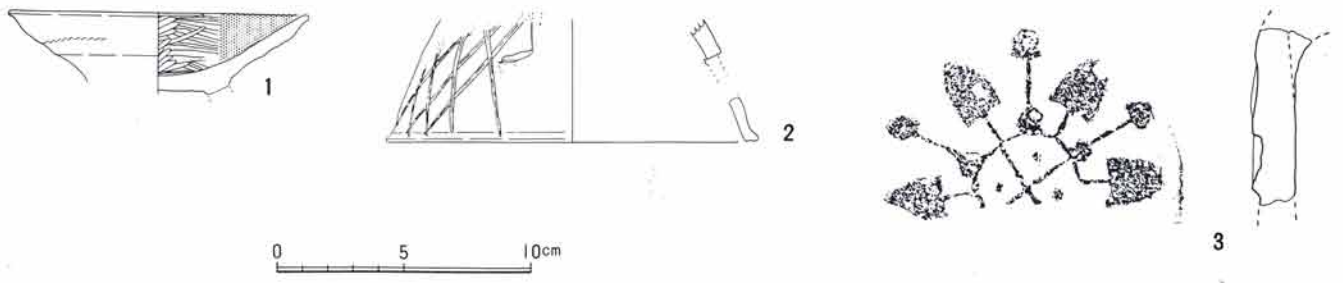
2



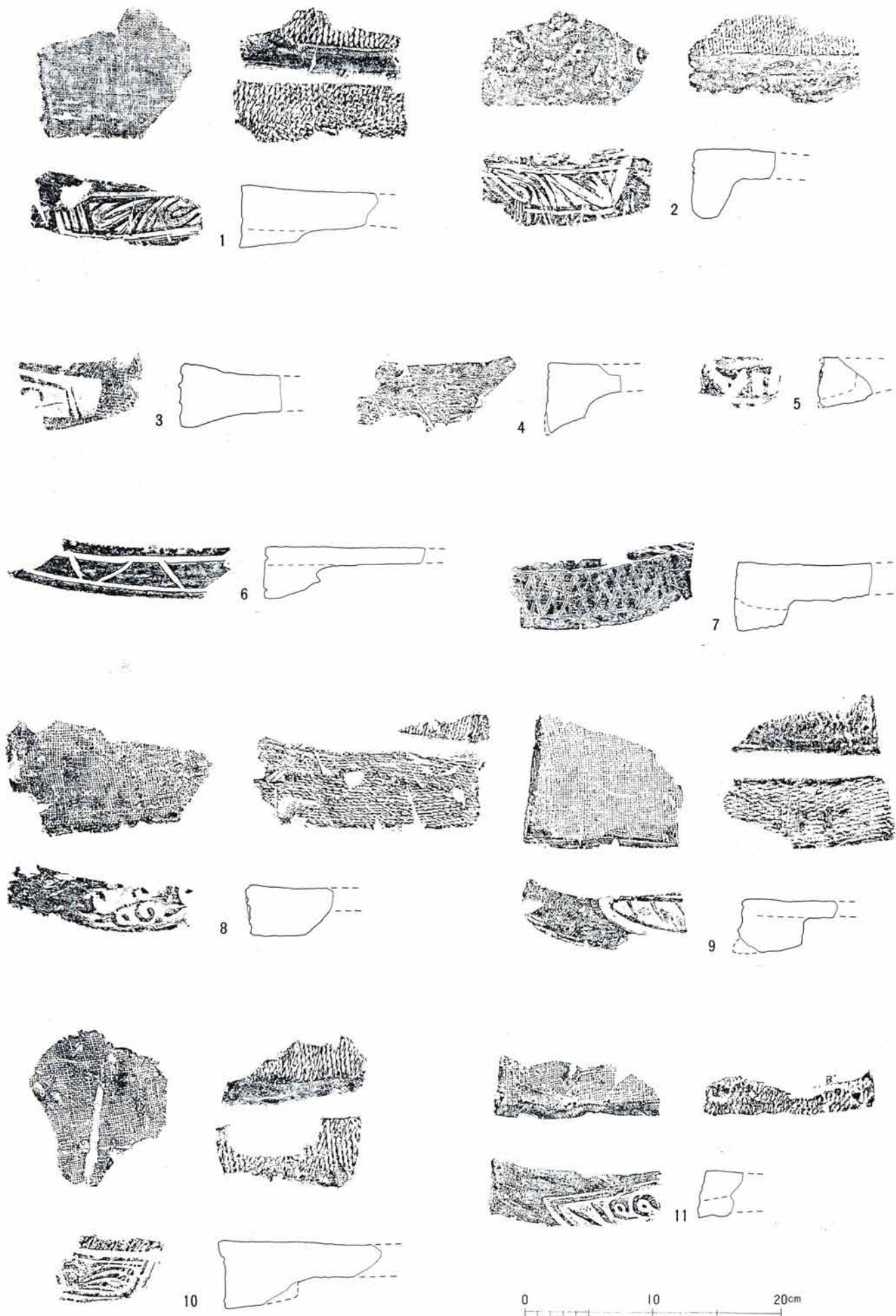
図面49 第29次調査 SD23溝跡第2層出土遺物



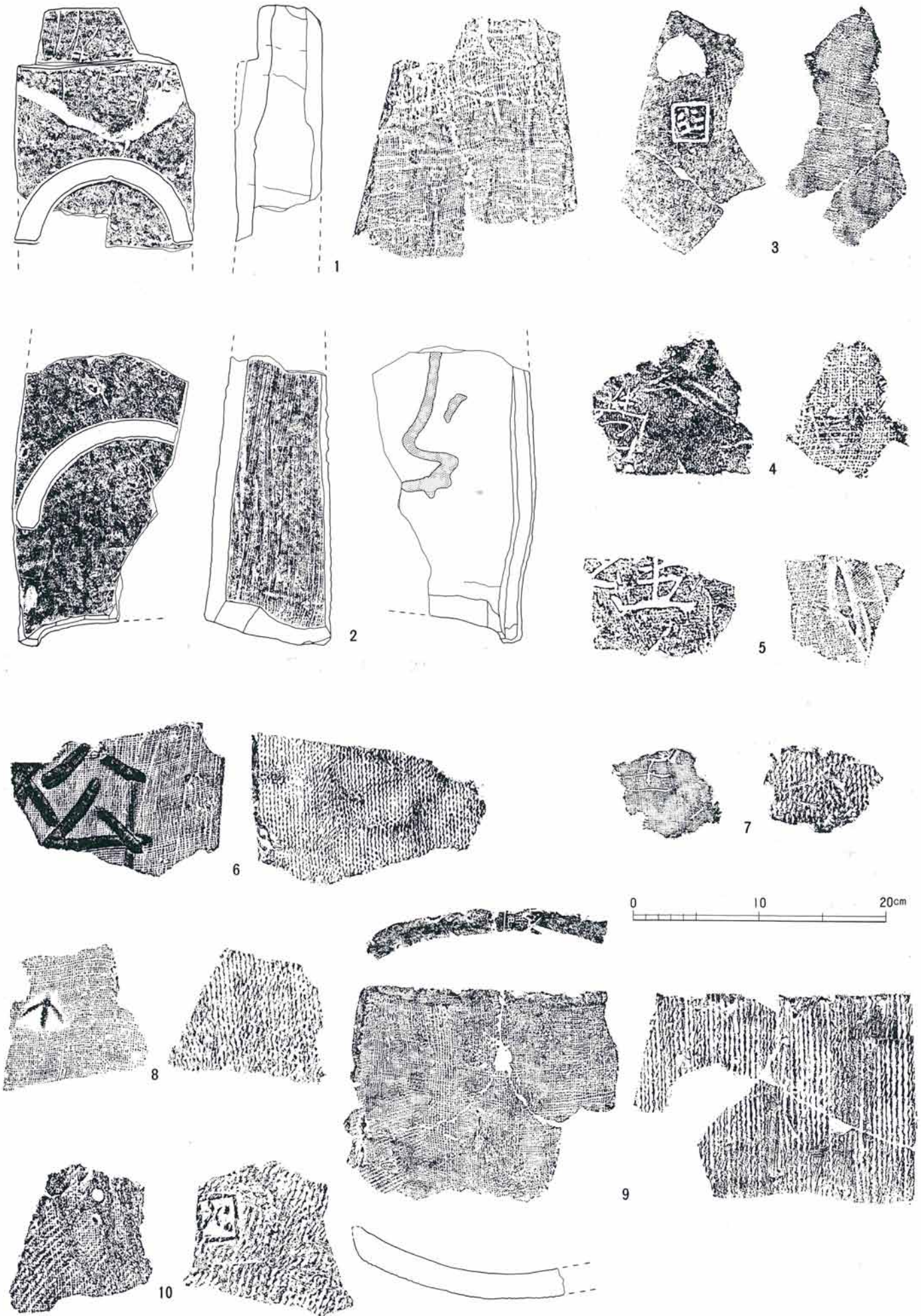
図面50 第29次調査 SD23溝跡 第4層出土遺物



図面51 第29次調査 表土出土遺物



図面52 第29次調査 表土出土遺物



図面53 第29次調査 表土出土遺物 (4・5縮尺 $\frac{1}{2}$)

版 圖



調査地全景(南から)



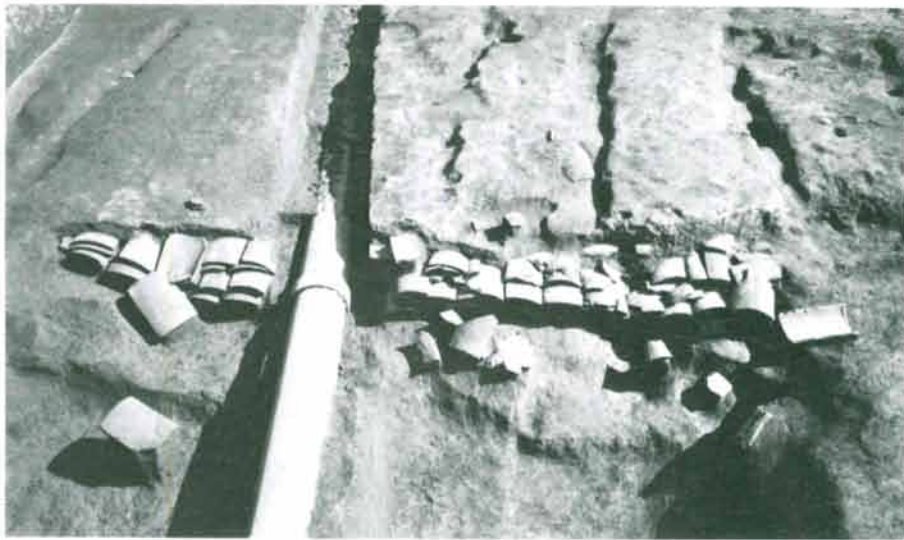
調査地全景(北から)



調査地全景（東から）



SD23 溝跡土層断面A～A'（南から）



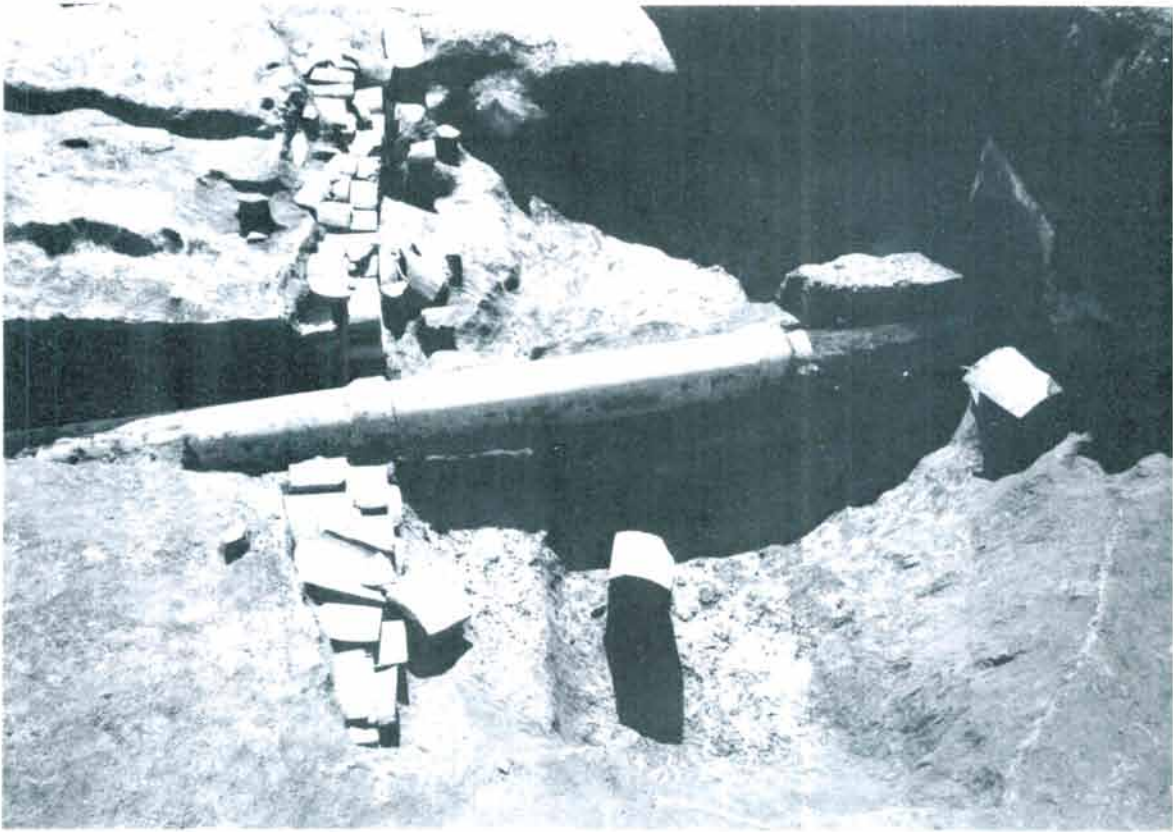
SB 39 掘立柱建物跡瓦積み部分（西から）



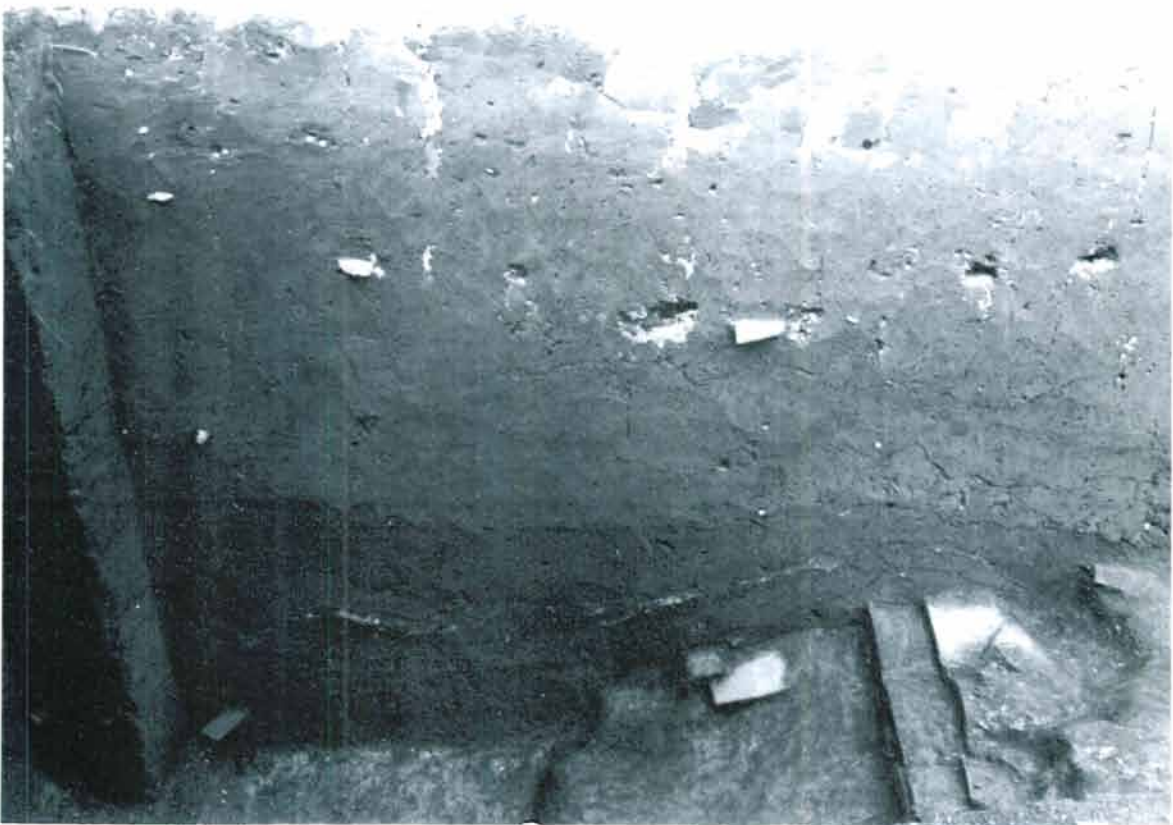
SB 39 掘立柱建物跡埋甕（東から）



SD 23 溝跡遺物出土状態（南から）



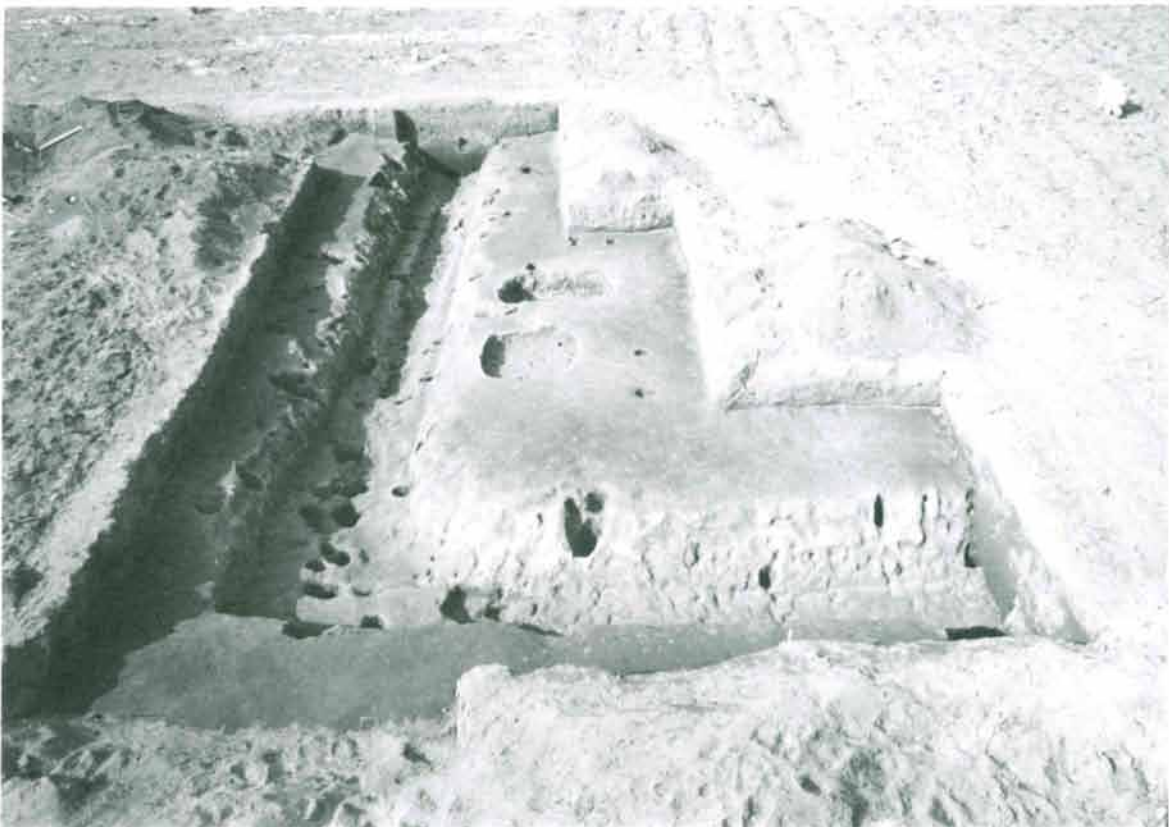
SK 163 土坑全景（北から）



SK 163 土坑土層断面D~D'（南から）



調査地遠景（南から）



SD 23 溝跡全景（南から）



SD 23 溝跡全景（北から）



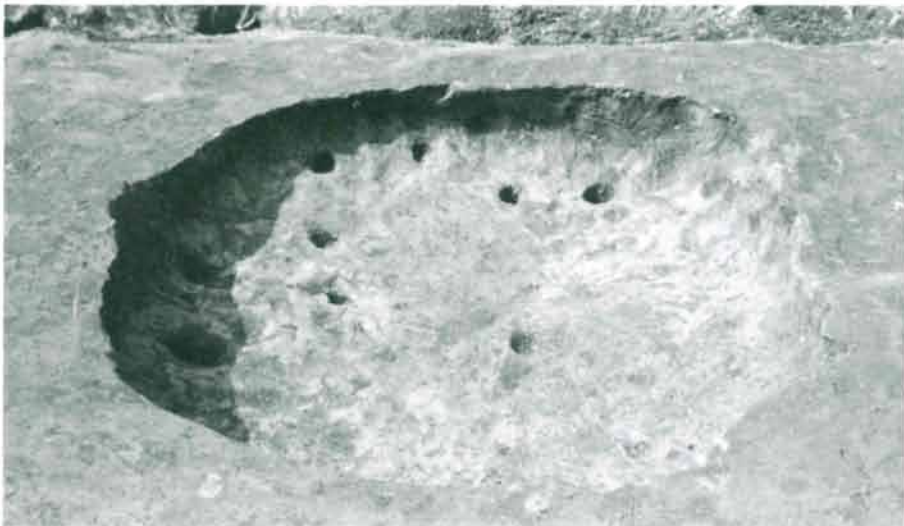
SD 23 溝跡全景（北東から）



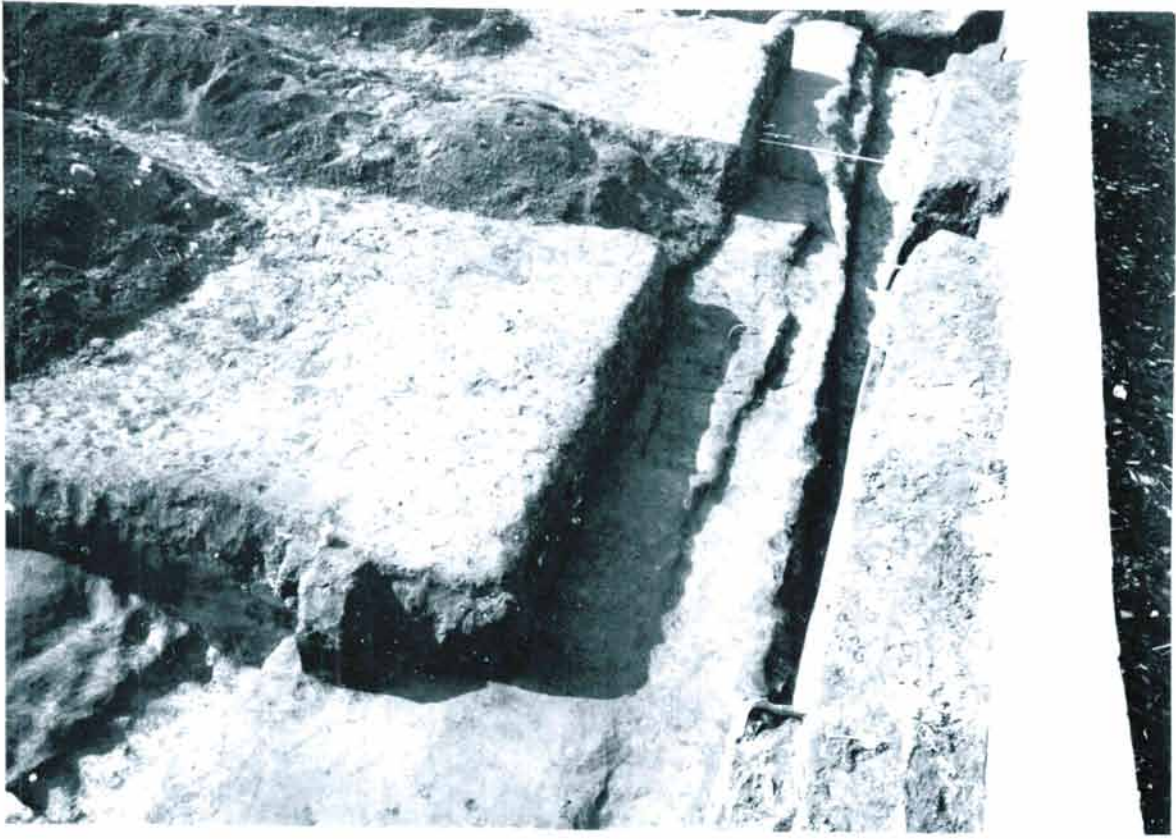
SD 23 溝跡土層断面A～A' (南から)



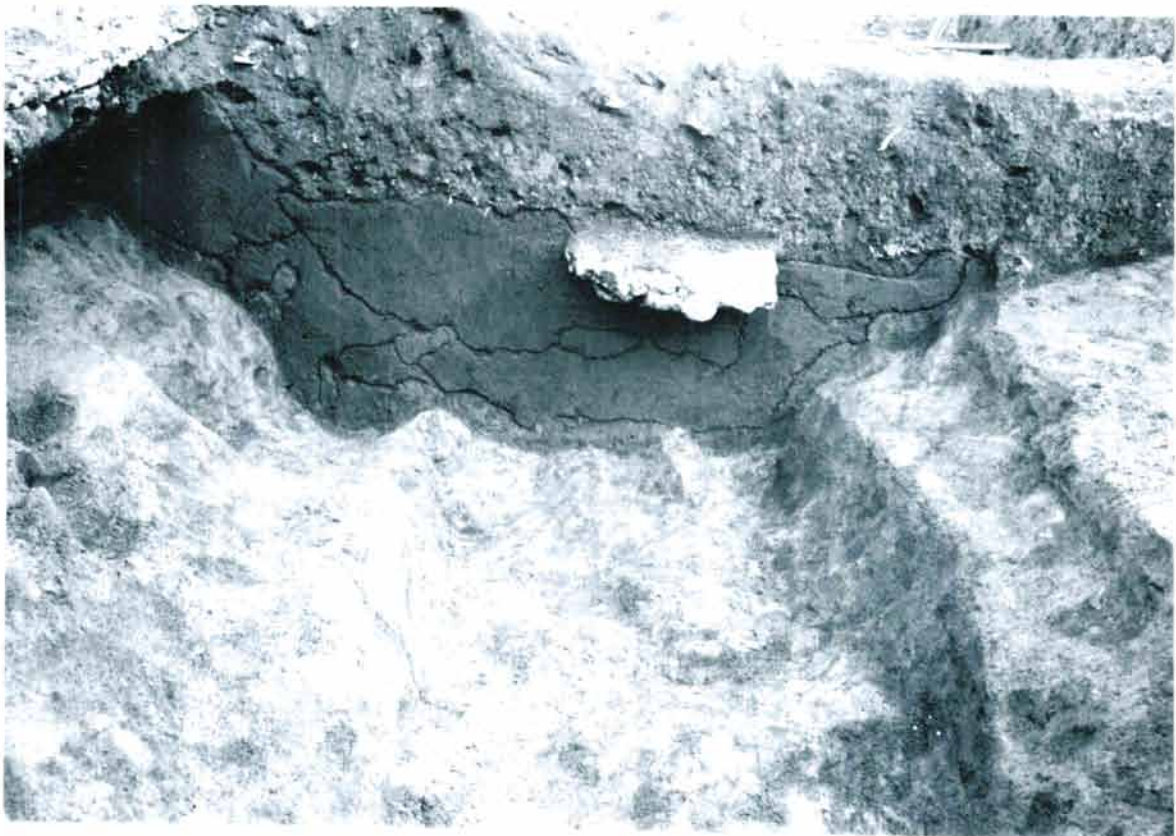
SD 23 溝跡土層断面B～B' (北から)



SK 166 土坑全景 (東から)



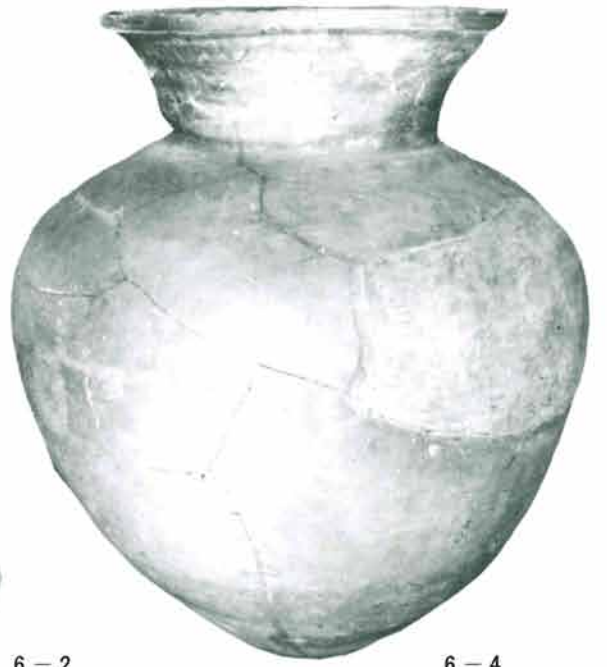
SD 17 溝跡全景（東から）



SD 17 溝跡土層断面A～A'（西から）



6-1



6-4



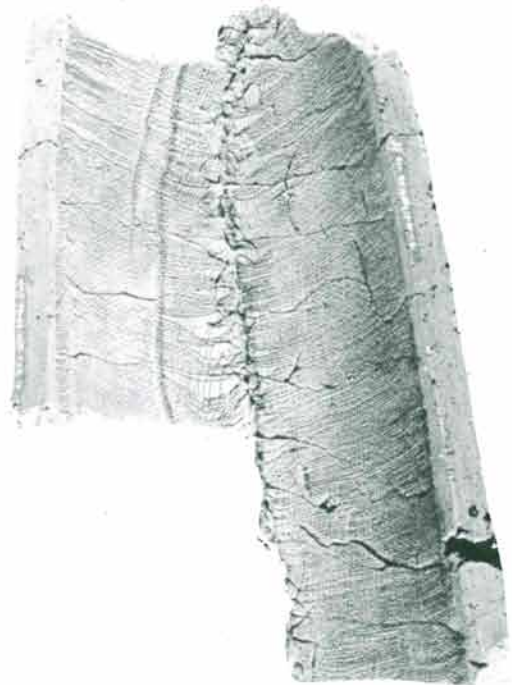
6-2

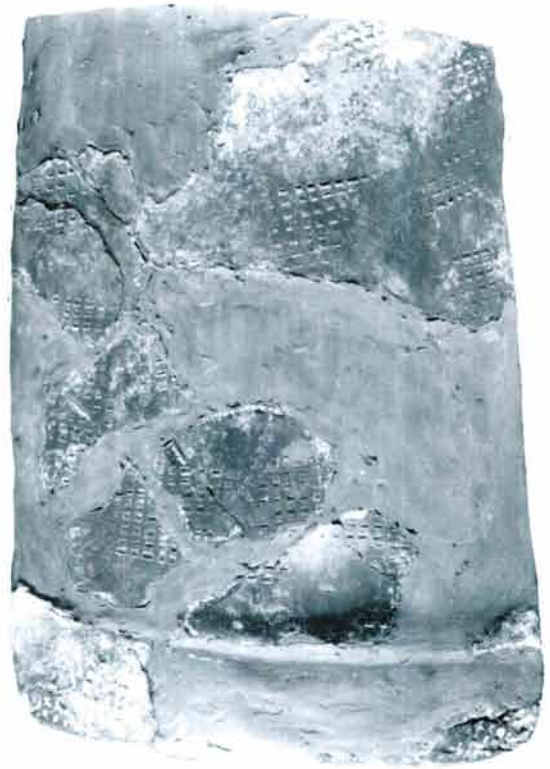


6-3

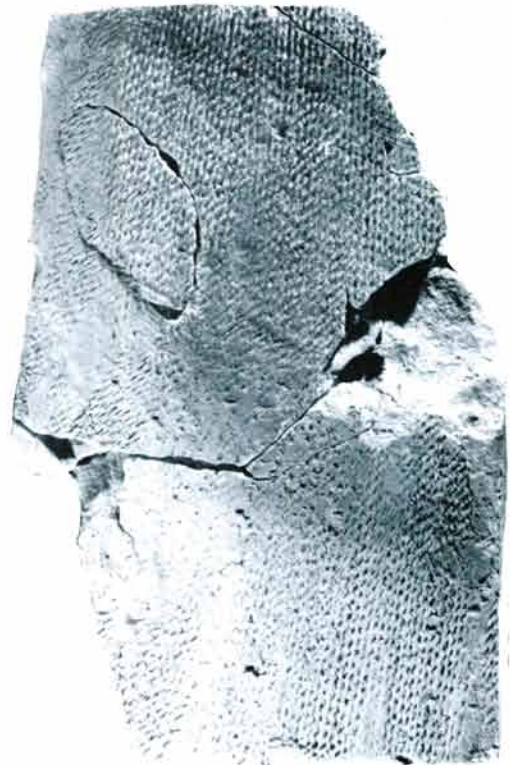


8-2

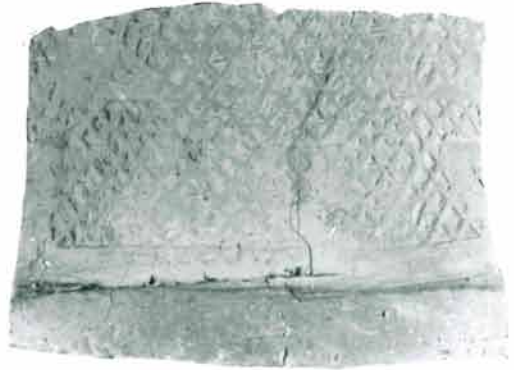
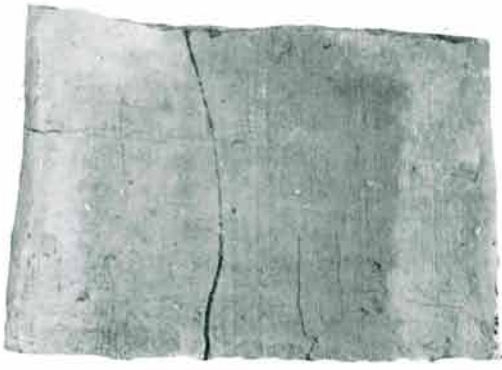




6-5



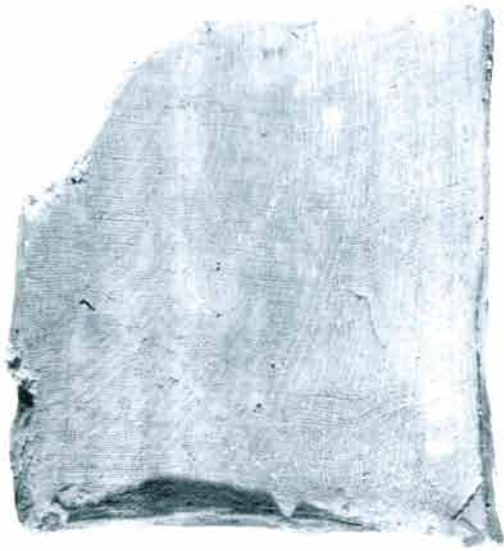
9-1



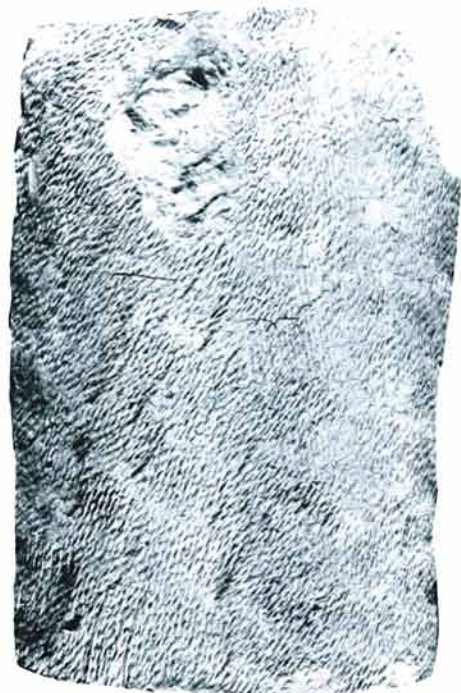
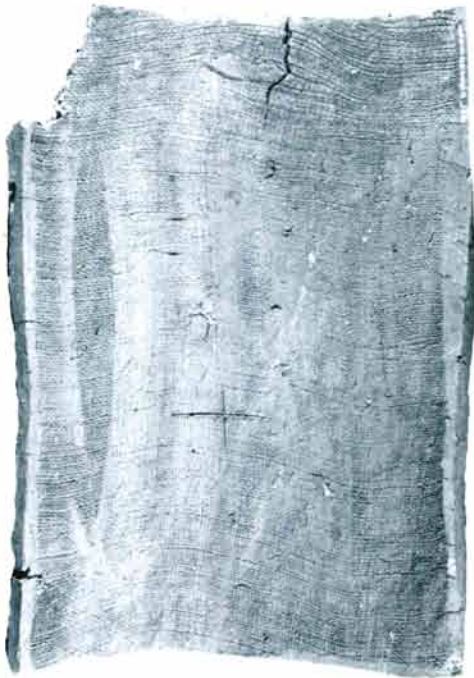
6-6



9-2



7-2



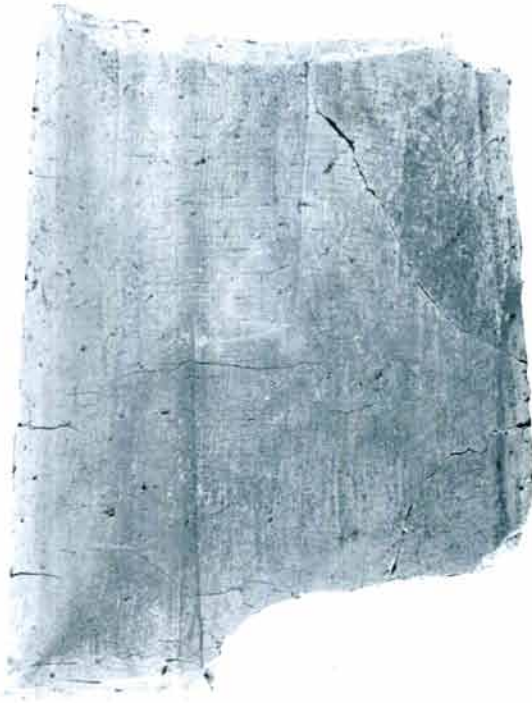
10-1



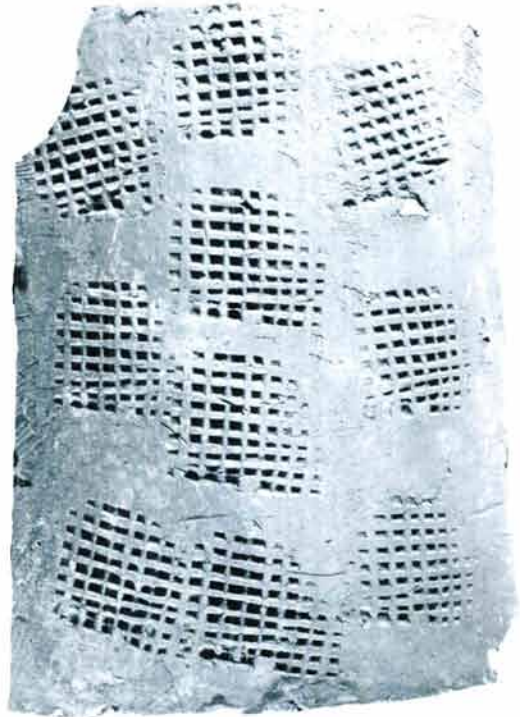
7-1



11-1



11-2



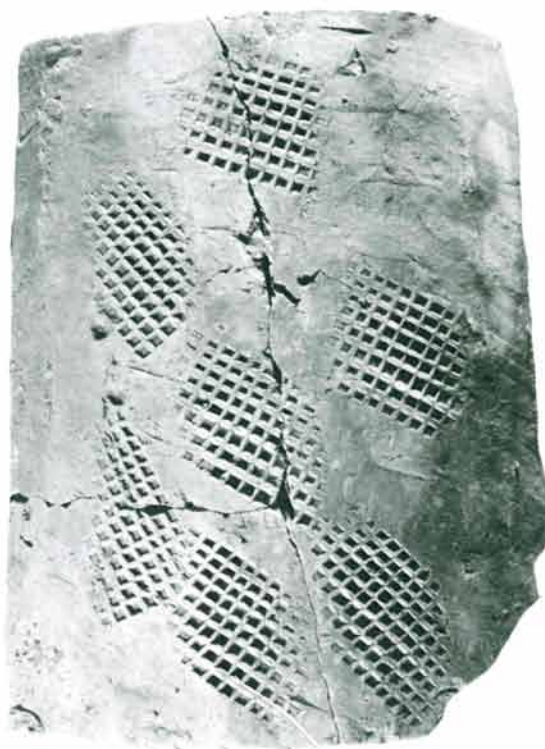
12-2



13-1



13-2





14-1



14-2



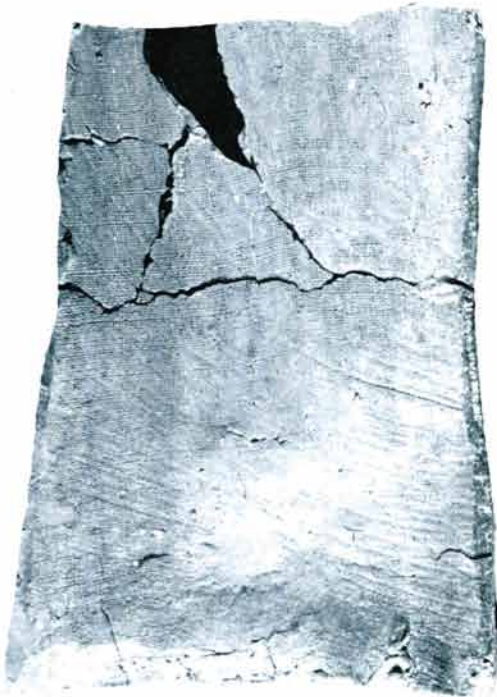
14-3



15-1



15-3



14-4





15-6



15-7



15-8



16-2



15-11

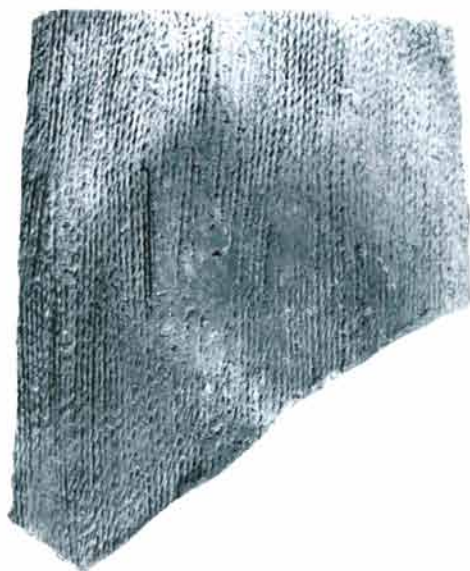




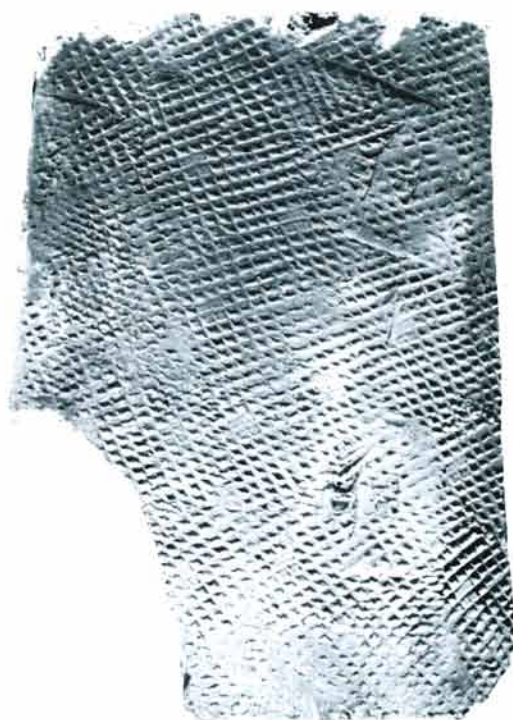
17-1

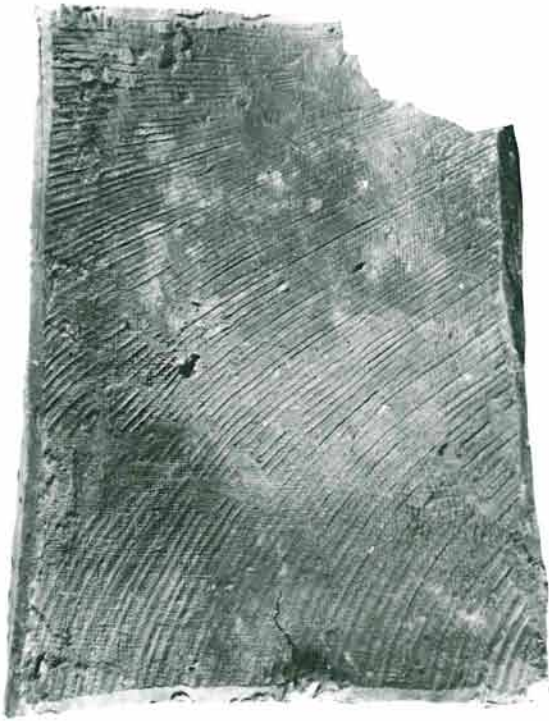


17-2



17-3





18-1



18-2





19-10



19-7



20-2



20-3



19-14



20-1



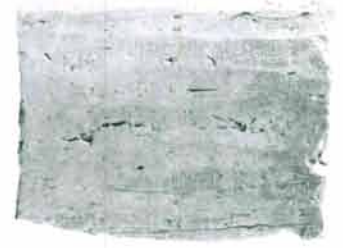
21-2



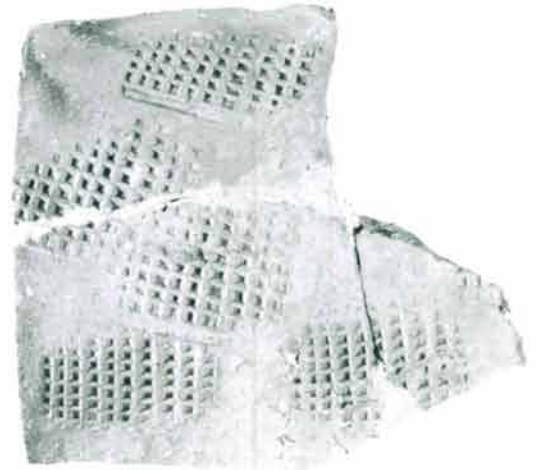
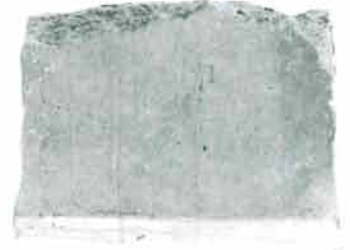
20-6



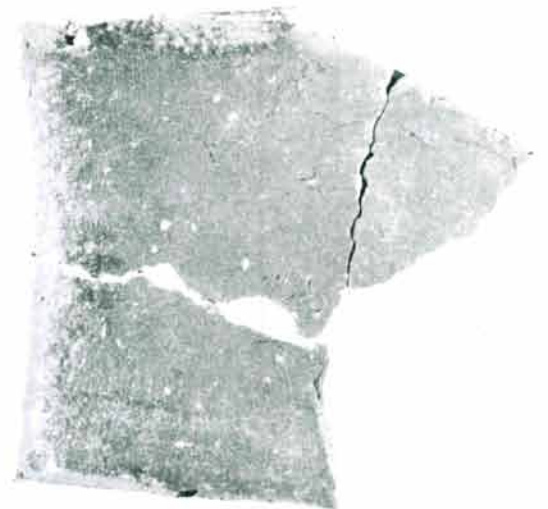
22-1



24-2



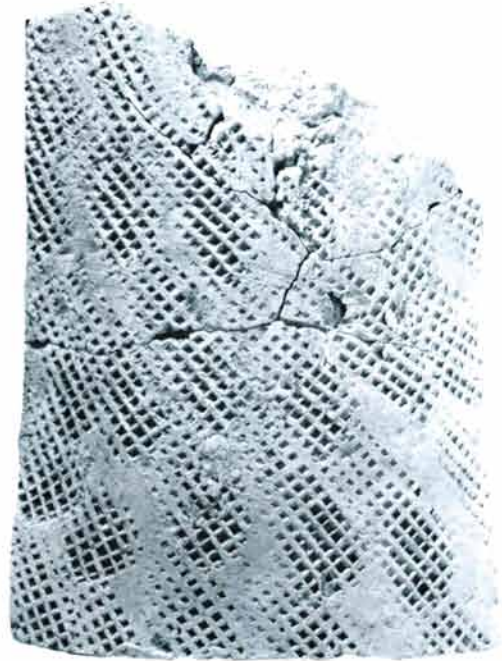
21-1



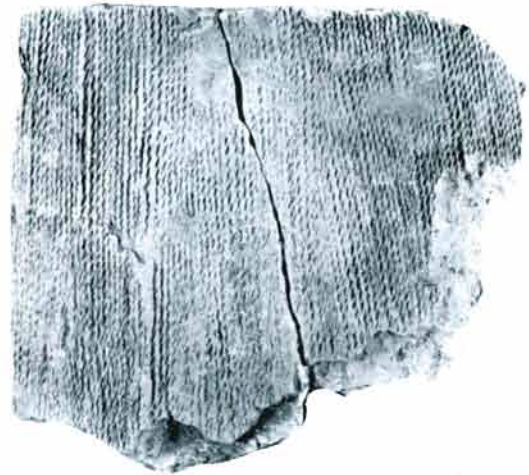
25-2



23-2



25-1

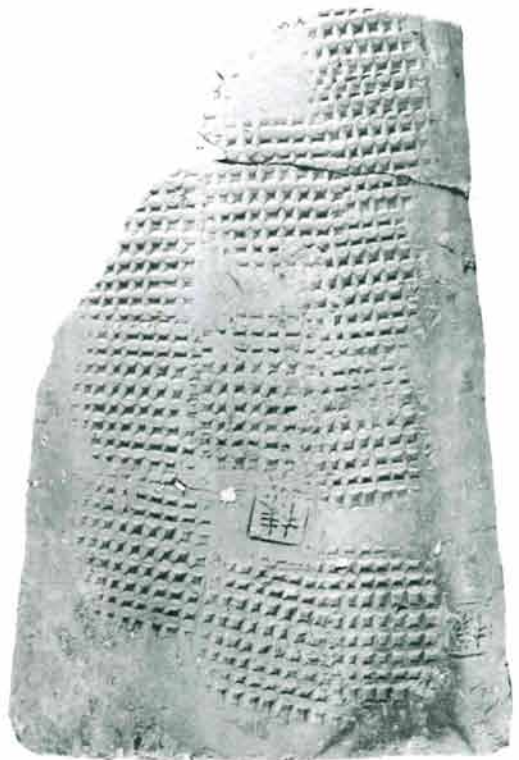


26-7

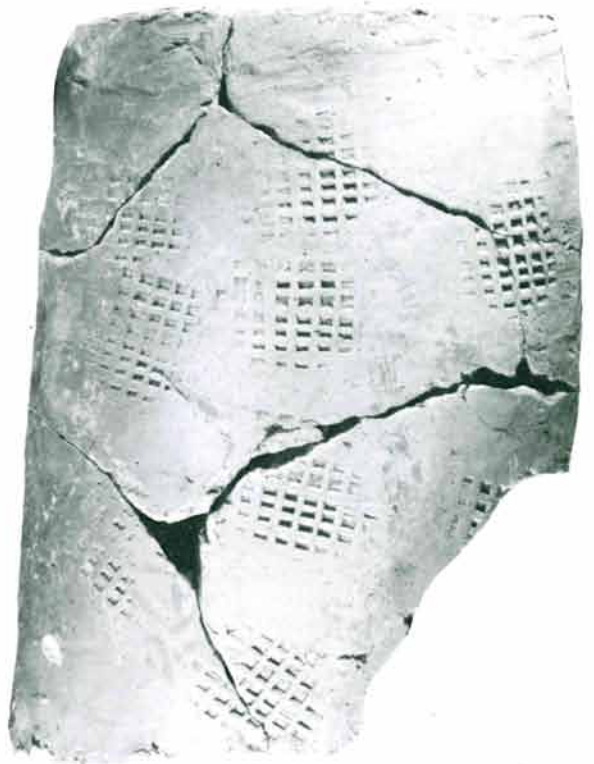




23-1



24-1





27-1



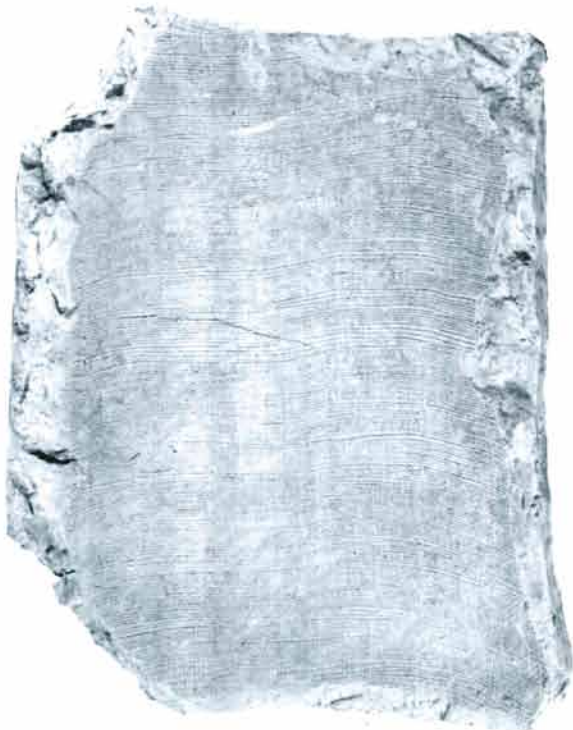
27-3



27-5



27-11

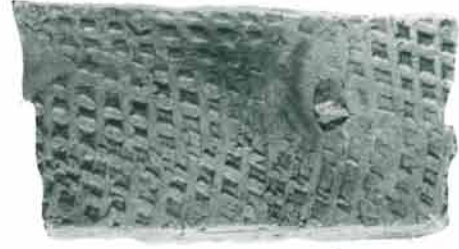


27-9

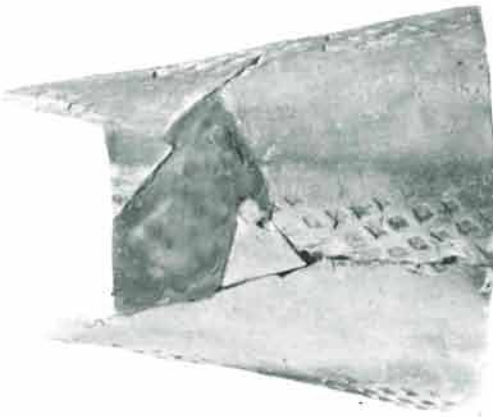
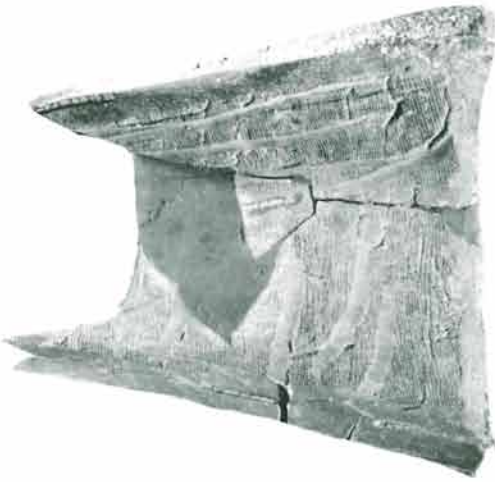
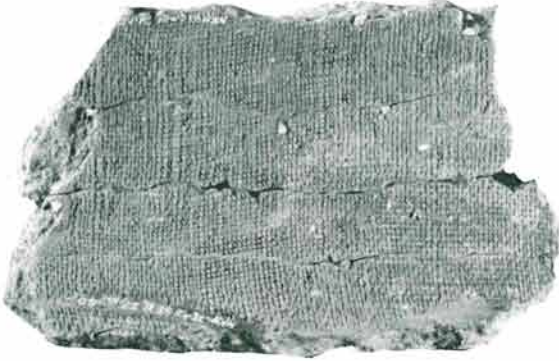




37-3



28-4

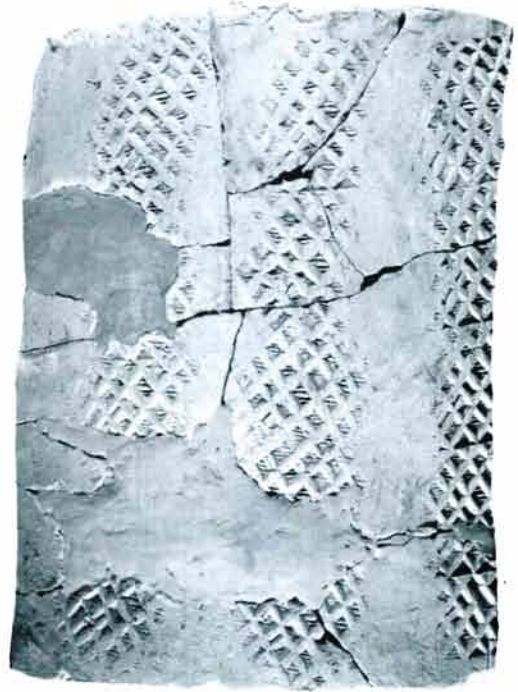


28-2

29-1



30-2

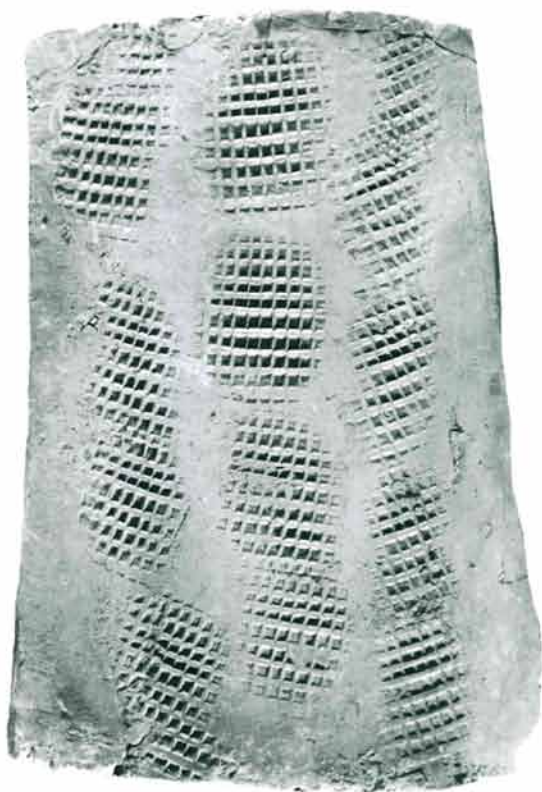


31-1



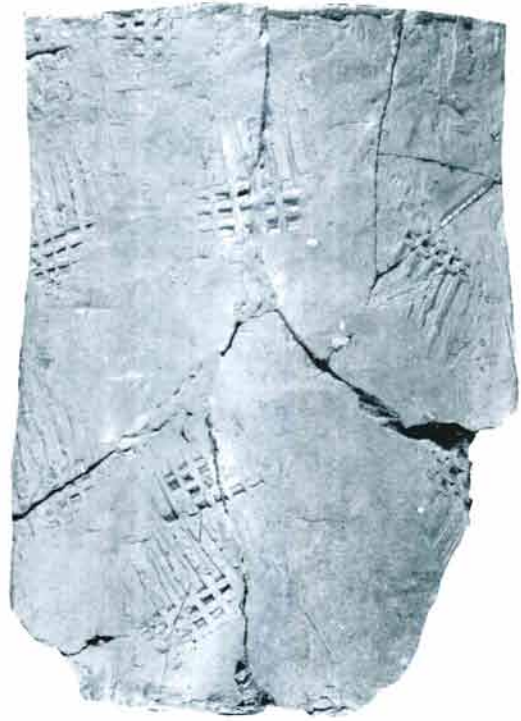


31-2

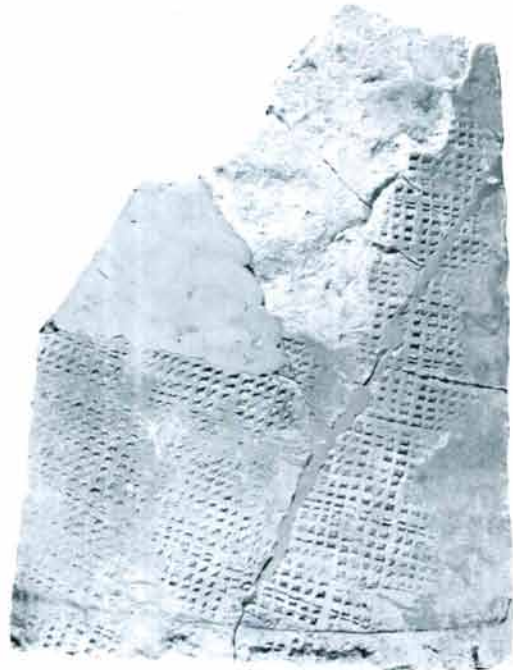


32-1





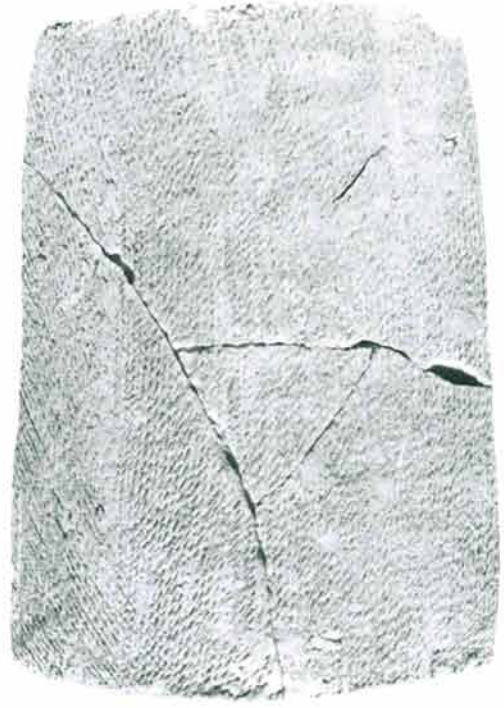
32-2



33-2



34-2



35-1

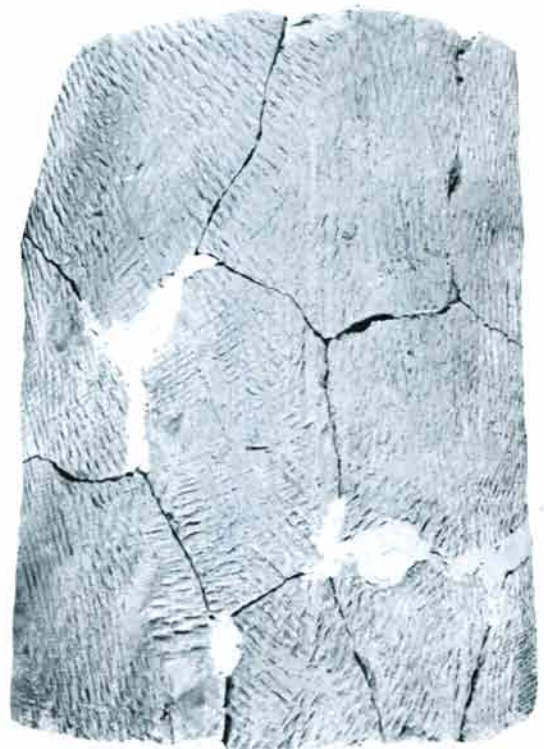




36-1



36-2





38-1



38-2



38-3



38-5



38-7



38-6



38-9



40-2



40-4



40-8



40-10



40-11



40-12



40-13



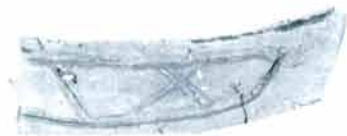
41-2



41-5



42-1



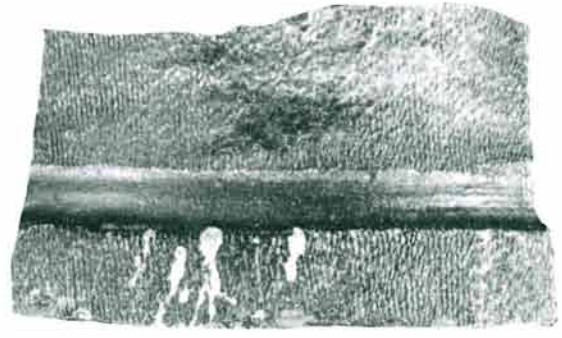
42-2



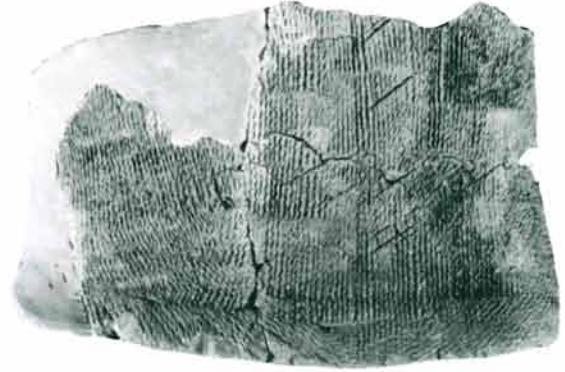
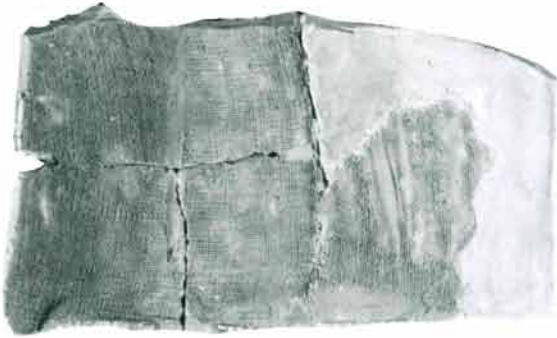
42-4



42-3



41-11



42-5



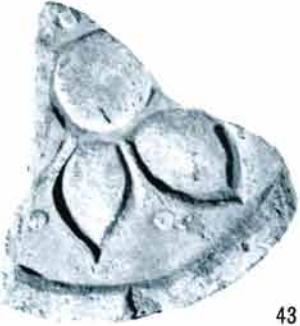
43-1



43-3



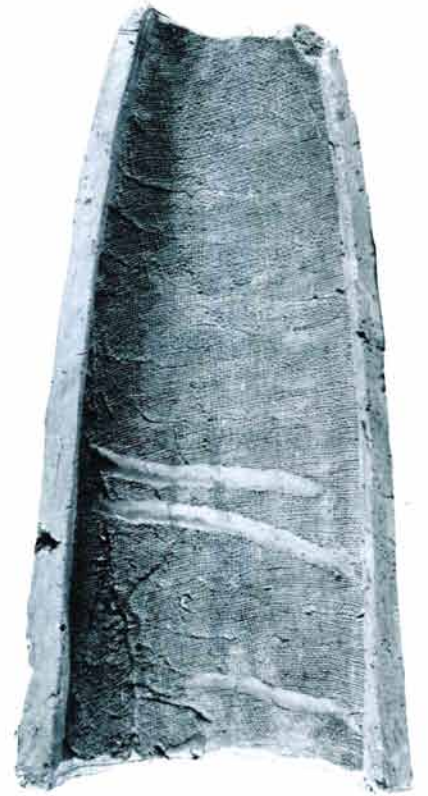
44-1



43-5



43-4



44-3



46-3



45-4



47-1





48-1



48-2



48-3



48-4



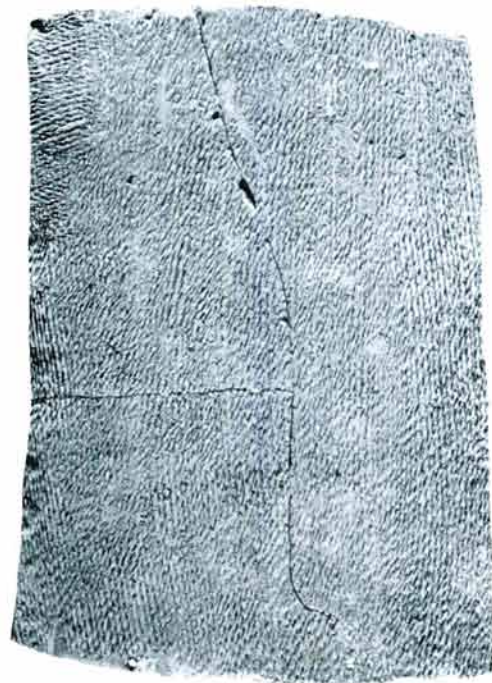
48-8



48-7



49-2

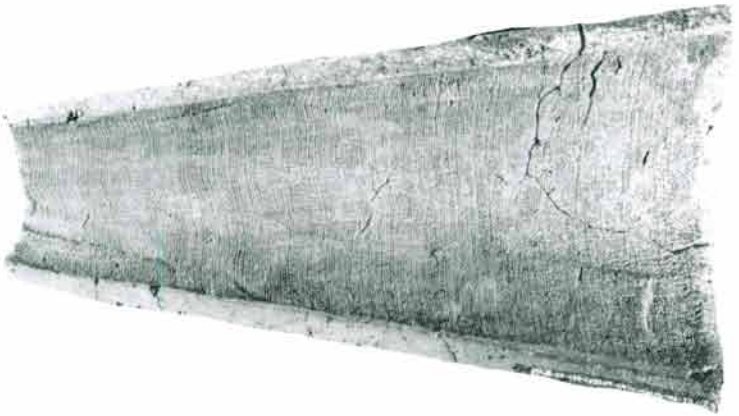




51-7



51-7



50-2



51-12



51-11



52-7



52-6



52-9



52-8



51-9



51-10



27-1



27-2



48-6



44-1



24-1



6-6



7-2 凹面



7-2 凸面



8-4



11-1



11-2



11-3



15-4



16-4



23-1 凸面



15-5



16-3



16-5



17-3



20-8



20-9



21-2 凸面



22-1



23-1 凹面



23-1 凸面



23-2



24-3



24-4



24-5



24-6



25-7



26-1



26-2



26-3



26-4 凹面



26-4 凹面



26-7



27-11



28-1



28-3



29-1



30-1



30-2



33-1



36-1



36-2



39-1



SB39



第II A層



第II A層



第III A層



SK163



第III A層



SK163



26-5 端面



13-1



15-11



8-3



9-2



12-2



13-2



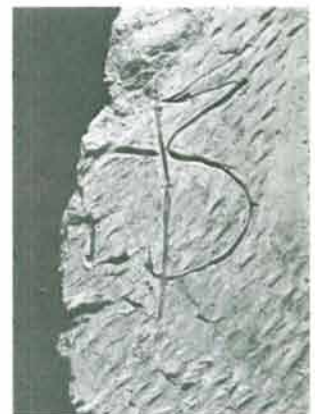
25-3



26-5 凹面



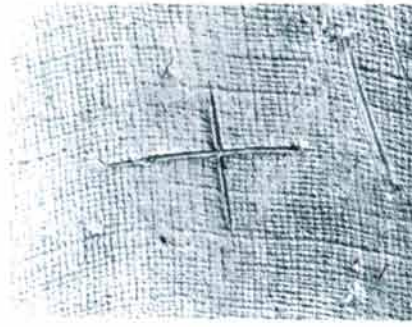
38-8



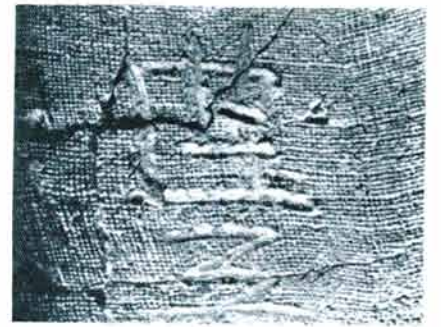
第III A層



9-1



10-1



21-1



21-2 凹面



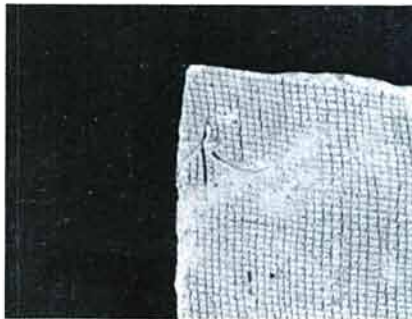
25-1



25-2



25-4



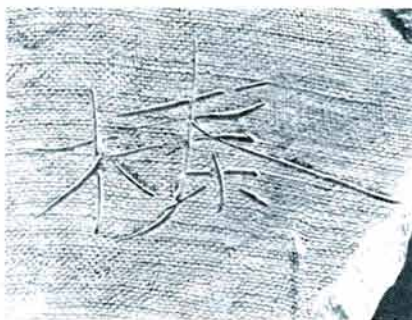
25-5



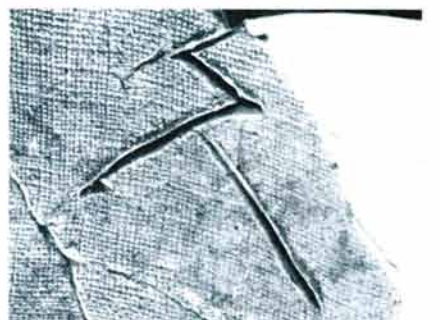
25-6



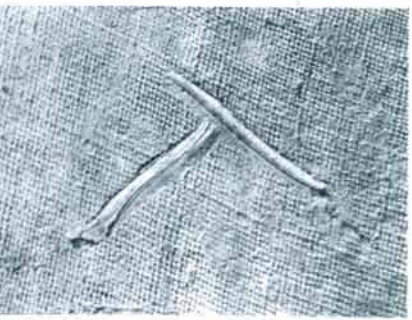
33-3



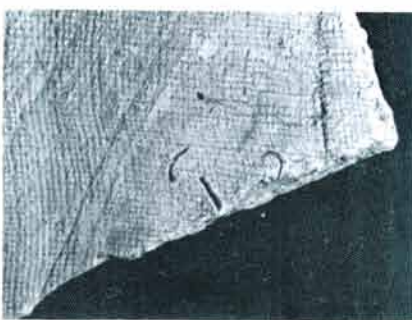
33-4



34-1



34-2



第II A層



第III A層



45-5



46-1



46-4



48-10



48-12



50-1



53-3



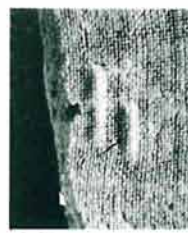
53-8



53-9



53-10



表土



表土



第1層



48-11



53-4



53-5



53-7



表土



43-6



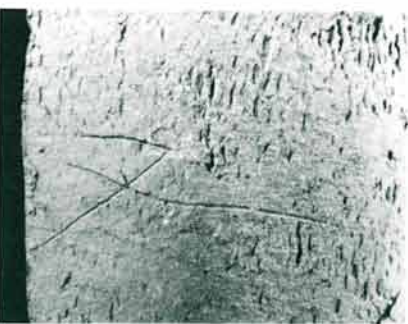
45-1



45-3



53-6



表土



50-2

武蔵国分寺遺跡調査会年報Ⅱ

昭和51～53年度 寺地・僧寺々城確認調査 第1分冊

昭和59年3月15日

編 著 武蔵国分寺遺跡調査団
© (団長 滝口 宏)
発 行 武蔵国分寺遺跡調査会
東京都国分寺市教育委員会
印 刷 信陽堂印刷株式会社

令和4年(2022)8月25日 デジタル版作成
個人情報削除